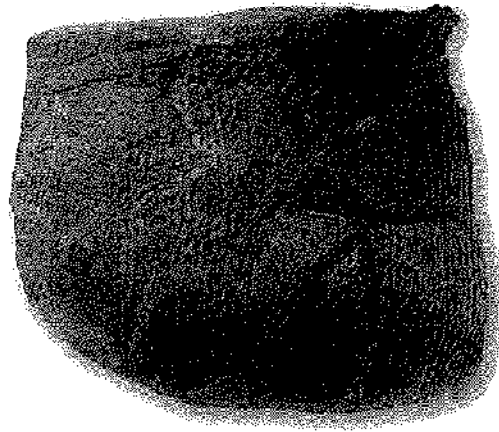


垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

農免農道整備事業垂水南2期区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

宮ノ前遺跡 重田遺跡



垂水市立図書館



110492089

2002年3月

鹿児島県垂水市教育委員会



宮ノ前遺跡遠景



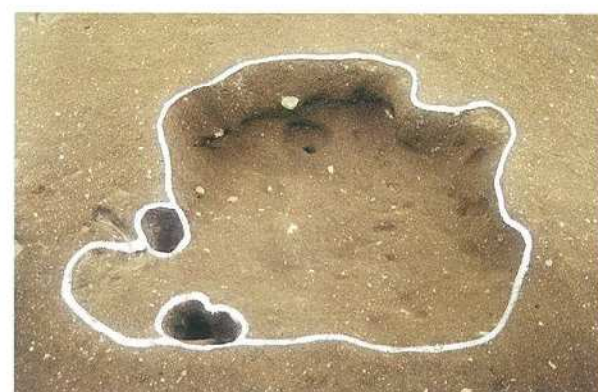
重田遺跡遠景



宮ノ前遺跡近景



14区南側壁面土層堆積状況（宮ノ前遺跡）



土坑1（宮ノ前遺跡）



軽石集石1（宮ノ前遺跡）



遺物の出土状況(1~4区)（宮ノ前遺跡）



遺物No.46, 60出土状況（宮ノ前遺跡）



作業風景（宮ノ前遺跡）



7区北側壁面土層堆積状況(重田遺跡)



土坑1 (重田遺跡)



土坑2 (重田遺跡)



磨石・石皿・石斧のセット出土状況 (重田遺跡)



遺物の出土状況(6区) (重田遺跡)



遺物No.9 出土状況 (重田遺跡)



遺物No.11 出土状況 (重田遺跡)



作業風景(重田遺跡)

序 文

大隅半島の北西部に位置する垂水市は、眼前に鹿児島湾の美しい海岸線を望み、背後には手つかずの自然が残る高隈の山々が連なっています。このように美しい自然に育まれた本市においては、昔から多くの人々が生活を営み、文化を育んでおり、多くの有形・無形の文化財が残されています。

本報告書は、宮ノ前遺跡と重田遺跡において、平成11年度・平成12年度の2ヵ年に渡って実施された、農免農道整備事業垂水南2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査を、国・県の補助事業として実施したものを記録としてまとめたものです。宮ノ前遺跡からは、縄文時代後期から古墳時代にかけての様々な遺構や遺物が、重田遺跡からは縄文時代前期後半から中期にかけての様々な遺構や遺物が出土しています。重田遺跡は、現時点では垂水市における最古の遺跡であります。このように重要な資料である本報告書が、市民をはじめ広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多大なご指導・ご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センター、各研究機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位に心から敬意を表します。

平成14年3月

垂水市教育委員会

教育長 川井田 稔

報告書抄録

ふりがな	みやのまえいせき・しげたいせき							
書名	宮ノ前遺跡・重田遺跡							
副書名	農免農道整備事業垂水南2期地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編集者名	羽生文彦・梶原 剛							
編集機関	垂水市教育委員会							
所在地	〒891-2125 鹿児島県垂水市旭町61-2 TEL 0994-32-0224							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮ノ前遺跡	鹿児島県 垂水市 新城 宮脇	462144	11-126	31° 26' 45"	130° 43' 55"	(平成11年度) 1999. 9. 21 ~1999. 10. 27 1999. 11. 29 ~2000. 1. 7 (平成12年度) 2000. 8. 23 ~2000. 10. 27	2,880	農免農道 整備事業 垂水南2 期地区
重田遺跡	鹿児島県 垂水市 新城 宮脇	462144	11-86	31° 26' 46"	130° 43' 56"	1995. 11. 29 ~1999. 12. 1	560	農免農道 整備事業 垂水南2 期地区
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
宮ノ前遺跡	散布地	縄文時代後期・ 晩期 弥生時代 古墳時代		土坑		縄文土器 弥生土器 成川式土器		
重田遺跡	散布地	縄文時代前期		土坑		縄文土器		

例 言

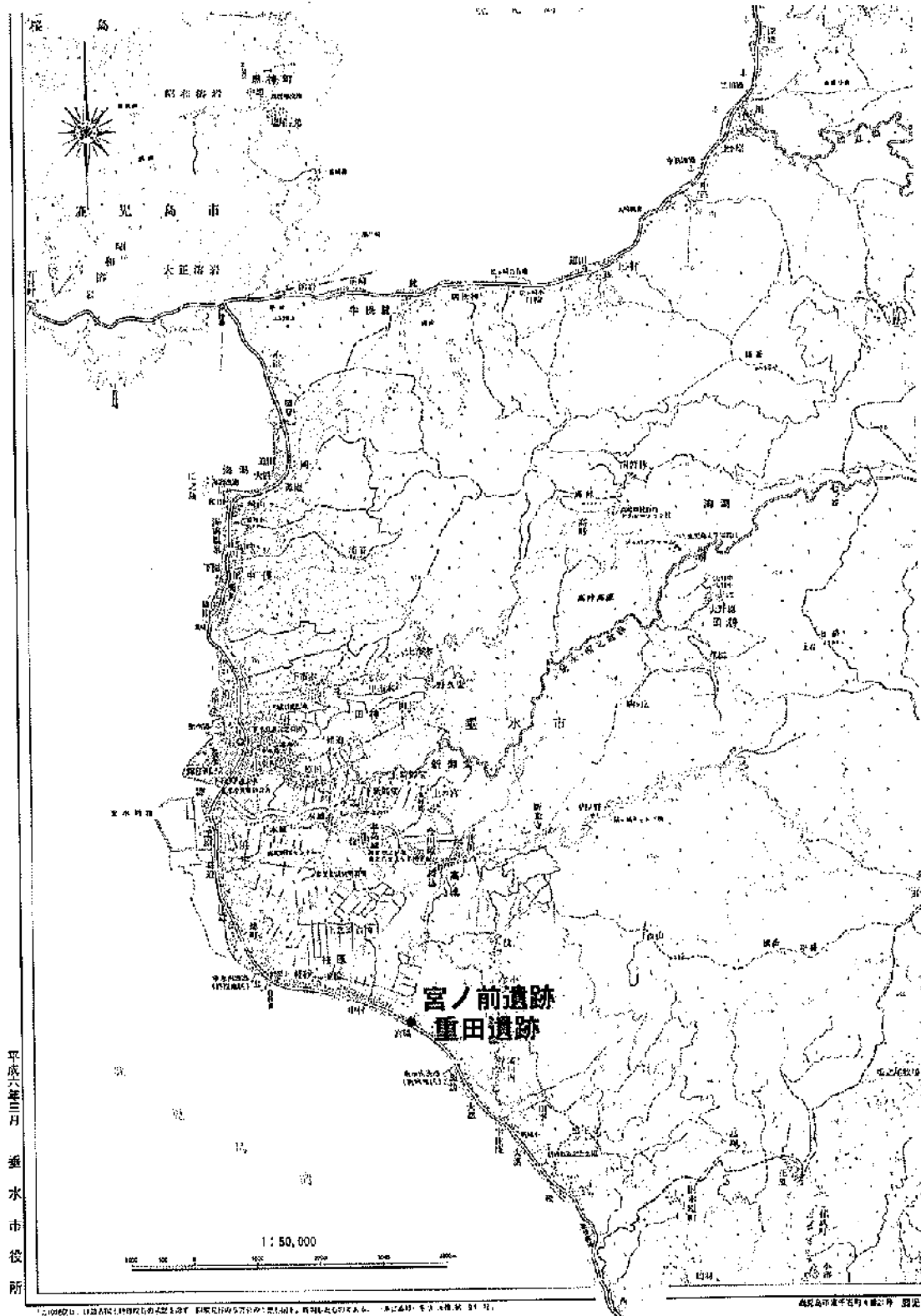
- 1 本報告書は、垂水市教育委員会が平成11年度・12年度に2カ年に渡って実施した、農免農道整備事業（垂水南2期地区）に伴う宮ノ前遺跡・重田遺跡の埋蔵文化財発掘調査についての調査報告書である。
- 2 事業対象区においては、平成6年度前畑遺跡と重田遺跡の一部で団体営ほ場整備（垂水市新城地区）に伴う確認調査が実施されているが、その際に、鹿児島県立埋蔵文化財センターの文化財研究員湯之前尚氏に発掘調査の協力を頂いた。また、確認調査にあたり、鹿児島県教育庁文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた（役職名等は全て平成6年度当時のものである）。また、平成7年度には宮ノ前遺跡と重田遺跡の一部で団体営土地改良総合整備事業（宮ノ前地区）に伴う確認調査が実施されており、その際に、鹿児島県立埋蔵文化財センターの文化財研究員湯之前尚氏に発掘調査の協力を頂いた。また、確認調査にあたり、鹿児島県教育庁文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた（役職名等は全て平成7年度当時のものである）。平成11年度及び平成12年度に実施された全面発掘調査においても、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた。平成13年度に実施された報告書作成事業では、鹿児島大学法文学部助教授本田道輝氏、同助教授渡辺芳郎氏、同大学総合研究博物館助教授橋本達也氏、同大学法文学部助手中村直子氏、金峰町教育委員会臨時職員相美伊久雄氏に出土遺物に関する指導・助言を頂き、出土した石器の石材に関して鹿児島大学総合研究博物館教授大木公彦氏に指導・助言を頂いた。また、報告書用の写真撮影に関して鹿児島県立埋蔵文化財センター文化財主事鶴田静彦氏、同文化財研究員横手浩二郎氏の指導・協力を頂いた他、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・助言を頂いた。（役職名等は全て平成13年度当時のものである）。
- 3 本書に用いたレベル数は絶対海拔高度である。
- 4 本書の遺物番号は通し番号を用い、図版中の番号も一致する。
- 5 発掘調査ならびに整理作業における出土遺構・遺物の測量・実測・製図・写真撮影等は羽生・大迫・梶原が行った。
- 6 本書の執筆担当は以下のとおりである。
第I章、第II章
垂水市教育委員会主事補 梶原 剛
第III章、第IV章、第V章
垂水市教育委員会文化財主事 羽生文彦
- 7 本書の編集は羽生・梶原が行った。
- 8 本遺跡の出土遺物は垂水市教育委員会が保管・展示するものである。

本文目次

序文	
例言	
目次	
第I章 調査の経緯	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	3
第II章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地形概説	6
第2節 地質概説	6
第3節 歴史概説及び周辺の遺跡	6
第III章 宮ノ前遺跡の発掘調査	10
第1節 調査の概要	10
第2節 層序	13
第3節 宮ノ前遺跡の遺構	16
第4節 包含層出土遺物	23
第V章 重田遺跡の発掘調査	39
第1節 調査の概要	39
第2節 層序	39
第3節 重田遺跡の遺構	42
第4節 包含層出土遺物	44
第VI章 まとめ	103
第1節 遺構及び遺構内出土の遺物について	103
第2節 包含層出土遺物について	104
あとがき	

挿図目次

付図 宮ノ前遺跡・重田遺跡の位置	
第1図 垂水の地質概略	6
第2図 周辺の遺跡	8
第3図 遺跡の範囲と調査対象区、及び周辺の地形	11
第4図 宮ノ前遺跡グリッド設定図	12
第5図 宮ノ前遺跡北側壁面土層堆積状況	14



付図 宮ノ前遺跡・重田遺跡の位置

第6図	宮ノ前遺跡南側壁面土層堆積状況	15
第7図	宮ノ前遺跡Ⅶ層上面の地形と遺構配置図	17
第8図	土坑1及び土坑内遺物出土状況	18
第9図	宮ノ前遺跡遺構内出土遺物実測図1 (Ⅰa-1類~Ⅰc類土器)	19
第10図	宮ノ前遺跡遺構内出土遺物実測図2 (Ⅱ類~Ⅳ類土器)	20
第11図	軽石集石1	21
第12図	宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況No.1 (1~11区, 平面図)	24
第13図	宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況No.2 (13~18区, 平面図)	24
第14図	宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況No.3 (21~29区, 平面図)	24
第15図	宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図1 (Ⅰ~Ⅳc-1②類土器)	27
第16図	宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図2 (Ⅳc-1②~ⅨA-2③類土器)	28
第17図	包含層出土遺物46, 60出土状況	30
第18図	宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図3 (ⅨA-2③~ⅨF類土器)	32
第19図	宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図4 (石器)	34
第20図	宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図5 (土師器・須恵器・磁器・陶器)	35
第21図	重田遺跡グリッド設定図	38
第22図	重田遺跡壁面土層堆積状況	39
第23図	土坑1及び土坑2	40
第24図	磨石・石皿・石斧のセット状遺構出土状況	41
第25図	重田遺跡遺構内出土遺物実測図	42
第26図	重田遺跡Ⅳ層上面の地形と遺構配置図	43
第27図	重田遺跡包含層遺物出土状況 (平面図)	45
第28図	包含層出土遺物9・11・12・13・15・80・164出土状況	46
第29図	重田遺跡包含層出土遺物実測図1 (土器Ⅰ類)	48
第30図	重田遺跡包含層出土遺物実測図2 (土器ⅡA・ⅢA類)	50
第31図	重田遺跡包含層出土遺物実測図3 (土器ⅡB-a-1-(1)類~ⅡB-a-2①-(1)類)	53
第32図	重田遺跡包含層出土遺物実測図4 (土器ⅡB-a-2①-(1)類~ⅡB-a-2①-(2)類)	57
第33図	重田遺跡包含層出土遺物実測図5 (土器ⅡB-a-2①-(2)類~ⅡB-a-4-(2)類)	59
第34図	重田遺跡包含層出土遺物実測図6 (土器ⅡB-a-4-(2)類~ⅡB-b-1-①類)	61
第35図	重田遺跡包含層出土遺物実測図7 (土器ⅡB-b-1-①類~ⅡB-b-2-①'類)	65
第36図	重田遺跡包含層出土遺物実測図8 (土器ⅡB-b-1-③類~ⅡB-c-2(1)類)	67
第37図	重田遺跡包含層出土遺物実測図9 (土器ⅡB-c-2(1)類~ⅢB-a-2'①類)	71
第38図	重田遺跡包含層出土遺物実測図10 (土器ⅢB-a-2'②類~ⅢB-a-3③類)	73
第39図	重田遺跡包含層出土遺物実測図11 (土器ⅢB-1①類)	75
第40図	重田遺跡包含層出土遺物実測図12 (土器ⅢB-1①類)	76
第41図	重田遺跡包含層出土遺物実測図13 (土器ⅢB-1①類)	77
第42図	重田遺跡包含層出土遺物実測図14 (土器ⅢB-1①類)	78

第43図	重田遺跡包含層出土遺物実測図15 (土器ⅢB-1①類~ⅢB-1②類)	79
第44図	重田遺跡包含層出土遺物実測図16 (土器ⅢB-1③類~ⅢB-2①類)	81
第45図	重田遺跡包含層出土遺物実測図17 (土器ⅢB-2①類)	83
第46図	重田遺跡包含層出土遺物実測図18 (土器ⅢB-2①類)	84
第47図	重田遺跡包含層出土遺物実測図19 (土器ⅢB-2①類)	85
第48図	重田遺跡包含層出土遺物実測図20 (土器ⅢB-2①類)	86
第49図	重田遺跡包含層出土遺物実測図21 (土器ⅢB-2①類)	87
第50図	重田遺跡包含層出土遺物実測図22 (土器ⅢB-2①類)	88
第51図	重田遺跡包含層出土遺物実測図23 (土器ⅢB-2①類)	89
第52図	重田遺跡包含層出土遺物実測図24 (土器ⅢB-2②類~ⅢB-3類)	91
第53図	重田遺跡包含層出土遺物実測図25 (ⅢB-4類)	92
第54図	重田遺跡包含層出土遺物実測図26 (石器)	102

表 目 次

付 表	報告書抄録	
第1表	周辺遺跡地名表	9
第2表	宮ノ前遺跡遺構内出土土器観察表	22
第3表	宮ノ前遺跡出土土器点数・重量表	23
第4表	宮ノ前遺跡包含層出土土器観察表	33
第5表	宮ノ前遺跡包含層出土石器観察表	36
第6表	宮ノ前遺跡出土土師器観察表	36
第7表	宮ノ前遺跡出土須恵器観察表	36
第8表	宮ノ前遺跡出土磁器観察表	36
第9表	宮ノ前遺跡出土陶器観察表	36
第10表	重田遺跡遺構内出土遺物観察表	41
第11表	重田遺跡包含層出土土器点数・重量表	44
第12表	重田遺跡包含層出土土器観察表(1)	93
第13表	重田遺跡包含層出土土器観察表(2)	94
第14表	重田遺跡包含層出土土器観察表(3)	95
第15表	重田遺跡包含層出土土器観察表(4)	96
第16表	重田遺跡包含層出土土器観察表(5)	97
第17表	重田遺跡包含層出土土器観察表(6)	98
第18表	重田遺跡包含層出土土器観察表(7)	99
第19表	重田遺跡包含層出土土器観察表(8)	100
第20表	重田遺跡包含層出土石器観察表	101

第21表	宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期土器分類表	104
第22表	宮ノ前遺跡出土の成川式土器分類表	105
第23表	重田遺跡出土深浦式系土器の属性相関表	110
第24表	重田遺跡出土無文土器の属性相関表	110

図版目次

巻頭図板 1

巻頭図板 2

巻頭図板 3

図板 1	宮ノ前遺跡土坑 1 内出土遺物(1)	113
	宮ノ前遺跡土坑 1 内出土遺物(2)	113
図板 2	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(1) I～VII類土器	114
	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(2) X類土器	114
図板 3	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(3) XI類土器	115
	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(4) XI類土器	115
図板 4	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(5) 石器	116
	宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(6) 青磁	116
図板 5	重田遺跡遺構内出土遺物(1) 磨製石斧・磨石	117
	重田遺跡遺構内出土遺物(2) 石皿	117
図板 6	重田遺跡遺物包含層出土遺物(1) I類土器	118
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(2) II A類土器	118
図板 7	重田遺跡遺物包含層出土遺物(3) III A類土器	119
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(4) III A類土器	119
図板 8	重田遺跡遺物包含層出土遺物(5) III A類土器	120
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(6) III A類土器	120
図板 9	重田遺跡遺物包含層出土遺物(7) III A類土器	121
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(8) III A類土器	121
図板10	重田遺跡遺物包含層出土遺物(9) II B-a類土器	122
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(10) II B-a類土器	122
図板11	重田遺跡遺物包含層出土遺物(11) II B-b類土器	123
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(12) II B-b類土器	123
図板12	重田遺跡遺物包含層出土遺物(13) II B-c類土器	124
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(14) II B-d類土器	124
図板13	重田遺跡遺物包含層出土遺物(15) III B-a類土器	125
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(16) III B-1類土器	125

図版14	重田遺跡遺物包含層出土遺物(17) III B-1類土器	126
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(18) III B-1類土器	126
図版15	重田遺跡遺物包含層出土遺物(19) III B-2類土器	127
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(20) III B-2類土器	127
図版16	重田遺跡遺物包含層出土遺物(21) III B-2類土器	128
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(22) III B-2類土器	128
図版17	重田遺跡遺物包含層出土遺物(23) III B-2, II B-3類土器	129
	重田遺跡遺物包含層出土遺物(24) III B-4類土器	129
図版18	重田遺跡遺物包含層出土遺物(25) 磨製石斧・磨石	130

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県農政部農地整備課（以下、県農政部）と、垂水市耕地課（以下、市耕地課）は、垂水市新城宮脇地区（旧 J R 大隈線鉄道跡地内）において、農免農道整備事業（垂水南 2 期地区）を計画し、事業区域内の埋蔵文化財の有無について垂水市教育委員会社会教育課（以下、市社会教育課）及び鹿児島県教育庁文化財課（以下、県文化財課）に照会した。

事業対象区域は以前、市耕地課が垂水市新城地区において団体営ほ場整備事業（垂水市新城地区）を計画した際、やはり事業区域内の埋蔵文化財の有無について市社会教育課及び県文化財課に照会がなされた経緯がある。このときは、照会を受けた鹿児島県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）と市社会教育課が平成 5 年 10 月に埋蔵文化財分布調査を行ったのだが、事業区域内に遺物散布地として、前畑遺跡と宮ノ前遺跡、及び重田遺跡の 3 遺跡が存在していることが判明した。

そこで、この分布調査の結果をもとに、市耕地課・県文化財課・市社会教育課は埋蔵文化財の保護と事業の調整を図るため協議を行い、平成 7 年に埋蔵文化財確認調査（以下、確認調査）を重田遺跡・前畑遺跡の一部で実施したのであるが、両遺跡ともに遺物包含層が確認され、重田遺跡・前畑遺跡がともに遺跡の包蔵地であることが判明した。

更に、分布調査・確認調査の結果をもとに再度三者で協議を行ったところ、事業着手前に宮ノ前遺跡と重田遺跡の一部で範囲確認調査を平成 7 年に実施することになり、その結果宮ノ前遺跡においても遺物包含層が確認され、宮ノ前遺跡も遺跡の包蔵地として確認された。

以上のような経緯で、事業対象区は遺跡の包蔵地として確認されていたため、県農政部、市耕地課、県文化財課、市社会教育課の 4 者で協議を行った結果、設計変更が不可能である約 3,440㎡（宮ノ前・重田遺跡）について、全面発掘調査を、平成 11 年度から平成 12 年度にかけての 2 ヶ年実施することになった。

平成 11 年度には、調査対象区 3,440㎡のうち、重田遺跡の全区域と宮ノ前遺跡の一部の区域（計 1,660㎡）についての調査を実施した。平成 12 年度には、宮ノ前遺跡の残り 1,280㎡についての調査を実施した。

この全面発掘調査の成果を記録保存するため、宮ノ前遺跡・重田遺跡発掘調査報告書として平成 13 年度に発行することになった。

第 2 節 調査の組織

調査の組織は以下のとおりである。

平成 11 年度発掘調査

事業主体者	鹿児島県農政部	鹿屋耕地事務所
調査主体	垂水市教育委員会	
調査責任者	"	教 育 長 川井田 稔
調査企画者	"	社 会 教 育 課 長 西 田 和 則

調査事務	〃	社会教育課長補佐	堀ノ内 俊 一
	〃	社会教育係長	立和田 義 一
調査担当者	〃	社会教育係文化財主事	羽 生 文 彦
	〃	社会教育係主事	大 迫 均

平成12年度発掘調査

事業主体者	鹿児島県農政部	鹿屋耕地事務所
調査主体者	垂水市教育委員会	
調査責任者	〃	教 育 長 川井田 稔
調査企画者	〃	社会教育課長 谷口敏徳
調査事務	〃	社会教育課長補佐兼文化会館係長 堀之内 俊 一
調査担当者	〃	文化会館係文化財主事 羽 生 文 彦
	〃	文化会館係主事 大 迫 均

平成13年度報告書作成事業

事業主体者	鹿児島県農政部	鹿屋耕地事務所
作成主体者	垂水市教育委員会	
作成責任者	〃	教 育 長 川井田 稔
作成企画者	〃	社会教育課長 谷口敏徳
作成事務	〃	社会教育課長補佐 高野 猛
	〃	社会教育課文化係長 迫 田 裕 司
作成担当者	〃	文化会館係文化財主事 羽 生 文 彦
	〃	文化会館係主事補 梶 原 剛

※ここにあげた職名等は全て当時のものである。

発掘調査作業員

岩元秀志・上山末廣・大迫哲夫・鍛冶屋正廣・鹿屋鳴尾・上園秀夫・黒岩 透・迫田俊秀・篠原 隆・永峯春則・西尾留吉・浜田満雄・堀内健三・堀添重治・馬渡達二・山村則昭・池田恵子・池田テル子・池田柳子・小出光子・枝元茂子・鍛冶屋みな子・川崎ひろ子・川尻理智子・川畑知恵子・神田ハル子・小谷チヅ子・田畑幸子・津曲京子・長友美恵子・西尾衣久美・西尾スエ子・榎山 栄・前田和江・前木場よし子・松元かずえ・松元スギ・宮迫かつよ・宮迫良子・安田道子・吉永二美

整理作業員

池田柳子・池田恵子・石躍光子・枝元茂子・寺迫美里・西尾衣久美・榎山 栄・堀之内百合子・前田和江・山崎辰子

第3節 調査の経過

発掘調査は、平成11年度から平成12年度にかけての2カ年に渡って実施した。平成11年度には、宮ノ前遺跡の発掘調査を、鹿土の関係等から平成11年9月21日から平成11年10月27日まで（全面調査1次：前半）と、平成11年11月29日から平成12年1月7日まで（全面調査1次：後半）の2時期にわけて実施し、重田遺跡の発掘調査を、平成11年10月19日から平成11年12月1日まで実施した。平成12年度には、宮ノ前遺跡の未調査区についての発掘調査を、平成12年8月23日から平成12年10月27日まで（全面調査2次）実施した。以後、平成14年3月まで報告書作成のための整理作業を実施した。

発掘調査の経過は以下の日誌抄のとおりである。

〔日誌抄〕

宮ノ前遺跡・重田遺跡

〔全面調査1次：平成11（1999）年9月21日～平成12（2000）年1月7日〕

- 平成11年9月21日（火） 宮ノ前遺跡発掘調査開始。調査環境の整備（作業道具の搬入、ベルトコンベアの据え付け、看板の据え付け）を行う。
- ～22日（水）
- 平成11年9月27日（月） 調査区内に任意にグリッド（6×4.5m）を1～11区まで設定し、掘り下げを開始する。地表面から数えて2番目の層（Ⅱ層（黒色土層））より近・現代の遺物に加え、磁器等の出土が若干見られる。
- ～10月1日（金）
- 平成11年10月4日（月） Ⅱ層の掘り下げ完了。
- ～8日（金）
- 平成11年10月12日（火） 1～11区でⅡ層の下層であるⅢ層（黄褐色土層）の掘り下げを開始する。
- ～15日（金）
- 平成11年10月18日（月） 1区～4区のⅢ層より縄文時代晩期～古墳時代にかけての遺物が出土する。出土状況の写真撮影・実測・取り上げ等を行う。7区より検出された土坑より土器が集中して出土する。5～11区のⅢ層出土遺物の写真撮影・実測及び取り上げ等を行う。宮ノ前遺跡の発掘調査と平行して、重田遺跡にベルトコンベア・発電機を移動し、重田遺跡の掘り下げも開始する。
- ～21日（木）
- 平成11年10月25日（月） 7区の土器集中部を完掘する。写真撮影・実測等を行う。
- ～28日（木） 7区土坑の実測。1区～11区までの発掘調査作業を完了する（27日）。鹿土の問題等もあり一時宮ノ前遺跡での発掘調査を中止する。（全面調査1次：前半の終了）
- 重田遺跡の調査区域内に、任意にグリッド（6m×4.5m）を1～8区まで設定。掘り下げを開始する。
- 平成11年11月1日（月） 地表面から数えて2番目の層（Ⅱ層（黒色土層））より、縄文時代前期の遺物が検出された。1～3区、4～8区の出土遺物の実測及び取り上げを行った。5区より比較的まとまった土器土器片が2個体分出土した

- ため、この土器の実測及び取り上げを行った。
- 平成11年11月8日(月) 重田遺跡3区～5区の出土遺物の、写真撮影・実測及び取り上げを行った。
～11日(木)
- 平成11年11月15日(月) 5～7区出土遺物の、写真撮影・実測及び取り上げを行った。6区より
～16日(火) 集中して5組の土器片が出土する。写真撮影・実測及び取り上げを行った。
- 平成11年11月22日(月) 全体的に掘り下げ、出土遺物の写真撮影・実測及び取り上げ等を行う。
～26日(金) 掘り下げが完了する。
- 平成11年11月29日(月) 重田遺跡の土層堆積状況・地形図の記録を行い、重田遺跡での作業を終了する(12月1日)。
宮ノ前遺跡での作業を再開する。新たに12区～18区のグリッド(6m×4m)を任意に設定し、掘り下げを開始する。
- 平成11年12月6日(月) 宮ノ前遺跡12区～18区のⅡ層の掘り下げを行った。
～7日(金)
- 平成11年12月13日(月) 宮ノ前遺跡12区～18区のⅡ層の掘り下げ、出土遺物の写真撮影・実測及び取り上げを行った。平行して、航空写真撮影、遺跡の遠景等の撮影を行う。
～17日(金)
- 平成11年12月20日(月) 12区～18区の掘り下げを行った。
～21日(火)
- 平成12年1月6日(木) 12区～18区の掘り下げ、出土遺物の写真撮影・実測及び取り上げを行った。壁面土層堆積状況・地形図の記録を行い、宮ノ前遺跡の発掘作業を終了した。(7日、全面調査1次：後半の終了)
～7日(金) これをもって、平成11年度の宮ノ前遺跡・重田遺跡発掘調査を終了とした。

〔全面調査2次：平成12年(2000)年8月23日～10月27日〕

- 平成12年8月23日(水) 発掘調査環境の整備(ベルトコンベアの設置、作業道具の運搬等)を行う。
～25日(金) 調査区域内に、任意にグリッド(4m×4m)を19～29区まで設定。掘り下げを開始する。地表面から数えて2番目の層(Ⅱ層(黒色土層))より検出された遺物の写真撮影・実測及び取り上げを行う。
- 平成12年8月28日(月) Ⅱ層の掘り下げを完了する。Ⅲ層の掘り下げを開始する。
～31日(木)
- 平成12年9月5日(火) 20～23区の掘り下げ、写真撮影・実測及び取り上げを行った。
～6日(水)
- 平成12年9月18日(月) 24～27区の掘り下げ、写真撮影・実測及び取り上げを行った。
～9月22日(金)
- 平成12年9月25日(月) 27～29区の掘り下げ、写真撮影・実測及び取り上げを行った。

～9月28日(木)

- 平成12年10月2日(月) 引き続き掘り下げを行う。その結果、遺物包含層が19～29区にかけて西方に傾斜して上昇しており、30区以西では包含層が策平を受け、残存していないことが判明した。
- 平成12年10月10日(火) 引き続き掘り下げを行う。30区以西に任意に確認トレンチを数本設定し、重機による試掘を試みるが、いずれも遺物包含層は確認されなかった。
～13日(金)
- 平成12年10月16日(月) 引き続き掘り下げ、出土遺物の写真撮影・実測及び取り上げを行った。
～20日(金)
- 平成12年10月23日(月) 壁面土層堆積状況・地形図の記録を行い、宮ノ前遺跡発掘作業を終了した。(27日)これをもって、平成12年度の宮ノ前遺跡発掘調査を終了とした。



平成11年度発掘調査作業員

第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地形概説

宮ノ前遺跡・重田遺跡は、垂水市街地の南東約5kmの地点（北緯31°26'45"、東経130°43'55"）に位置する。ここは、垂水市の南部であり、鹿屋市古江、花岡と接し、東は高隈連山を控え、西は鹿児島湾を経て薩摩半島を望むという立地である。

垂水市の地形は、大きく3地域に分けることができる。東方の高隈山地を中心とする山地、その麓から鹿児島湾近くまで緩傾斜をなして広がるいわゆるシラス台地、そして台地間や海岸線にある沖積平野の3つである。シラス台地は、高隈山地と接する部分が海拔約200mであるが、西方ほど次第に低くなり、市街地付近では高さ10数mの断崖を連ね海岸に望んでいる。遺跡の北上にある上野原台地では、東方から約1.5°の傾斜角をもって西方へ低く傾いている。

遺跡の位置するところは、台地と海岸線との間に存在する台地縁辺部の崩土の堆積による小微高地であり、標高は約10mである。今回の発掘調査対象区は、旧JR大隈線鉄道跡地内に位置し、遺跡の周辺は耕作地として利用されている。発掘調査以前の状況は、鉄道線路が取り外された後、無舗装の農道あるいは道路として、周辺の農耕者や通行者に利用されている、という状況であった。

第2節 地質概説

先述の第1節で分けた山地帯は、白亜系の四万十層群の高隈山帯（橋本，1926）に相当し、砂岩頁岩互層の高隈山層（太田・河内，1965）と牛根層（小川内・岩松，1986）の一部が第3紀中新生後期（14Ma）の高隈山花崗岩（柴田，1978）の貫入に伴い接触熱変成作用を受けホルンフェルス化している。

その山地から、浸食・運搬・堆積作用を受け扇状地状の垂水砂礫層を形成し、その上に旧期ローム層、大隈降下軽石層、妻屋火砕流堆積物・亀割坂角礫層・入戸火砕流堆積物・新期ローム層及びそれらの二次堆積物からなる、いわゆるシラス台地を構成している。

沖積層は砂や粘土、小石からなる。

第3節 歴史概説及び周辺の遺跡

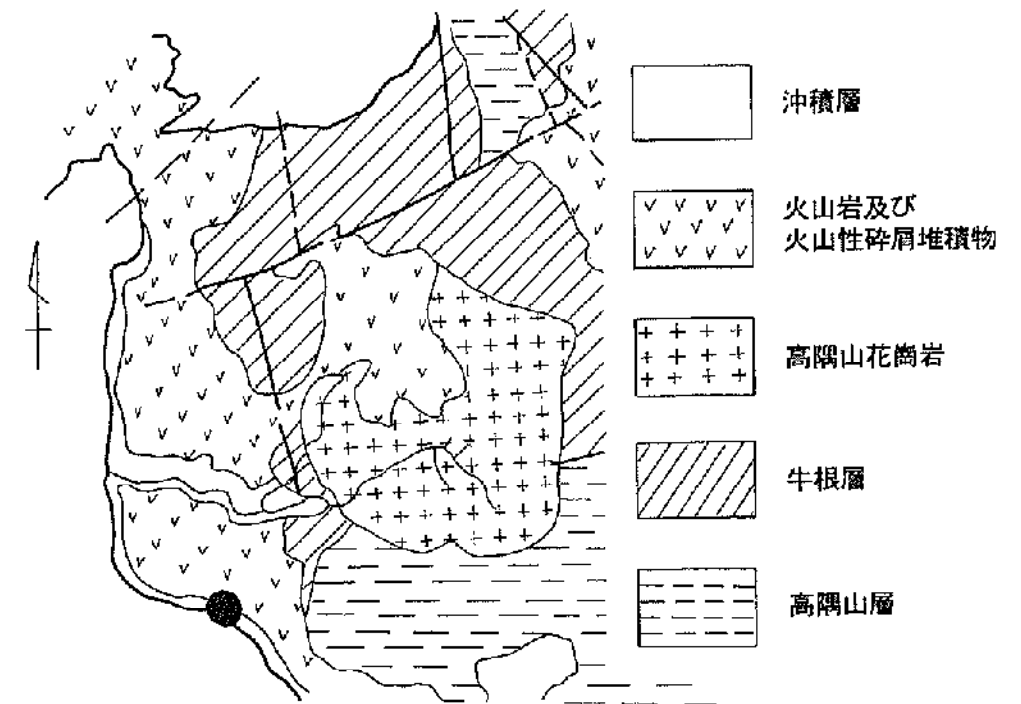
垂水市史によると、「過去において考古資料となる遺跡地は少なかった。」とある。しかし近年の鹿児島県教育委員会による広域分布調査や垂水市教育委員会が実施してきた発掘調査の結果、今回調査を行った地域周辺においても、第2図及び第2表にみられるように縄文～中世の城跡まで様々な遺跡が点在していることが分かってきた。その大部分は台地上と海岸線沿いの沖積平野に集中している。

遺跡周辺には、古代の人々の生活を示唆する伝承がいくつかあるので、以下若干そのことに触れておく。垂水市史によると、宮ノ前遺跡・重田遺跡の隣地である新城宮脇字白石には、玉照寺という寺があり、その境内に古墳が一基あったが（時期不明）、大正中ごろ耕地整理のため取り除かれたとある。また、やはり遺跡の隣地である新城宮脇字竹山の地主永田焼八氏、同字重吉の地主重吉虎市氏の畑地にはそれぞれ軽石の塚があったが（時期不明）、皆大正の中頃取り除かれたとある。

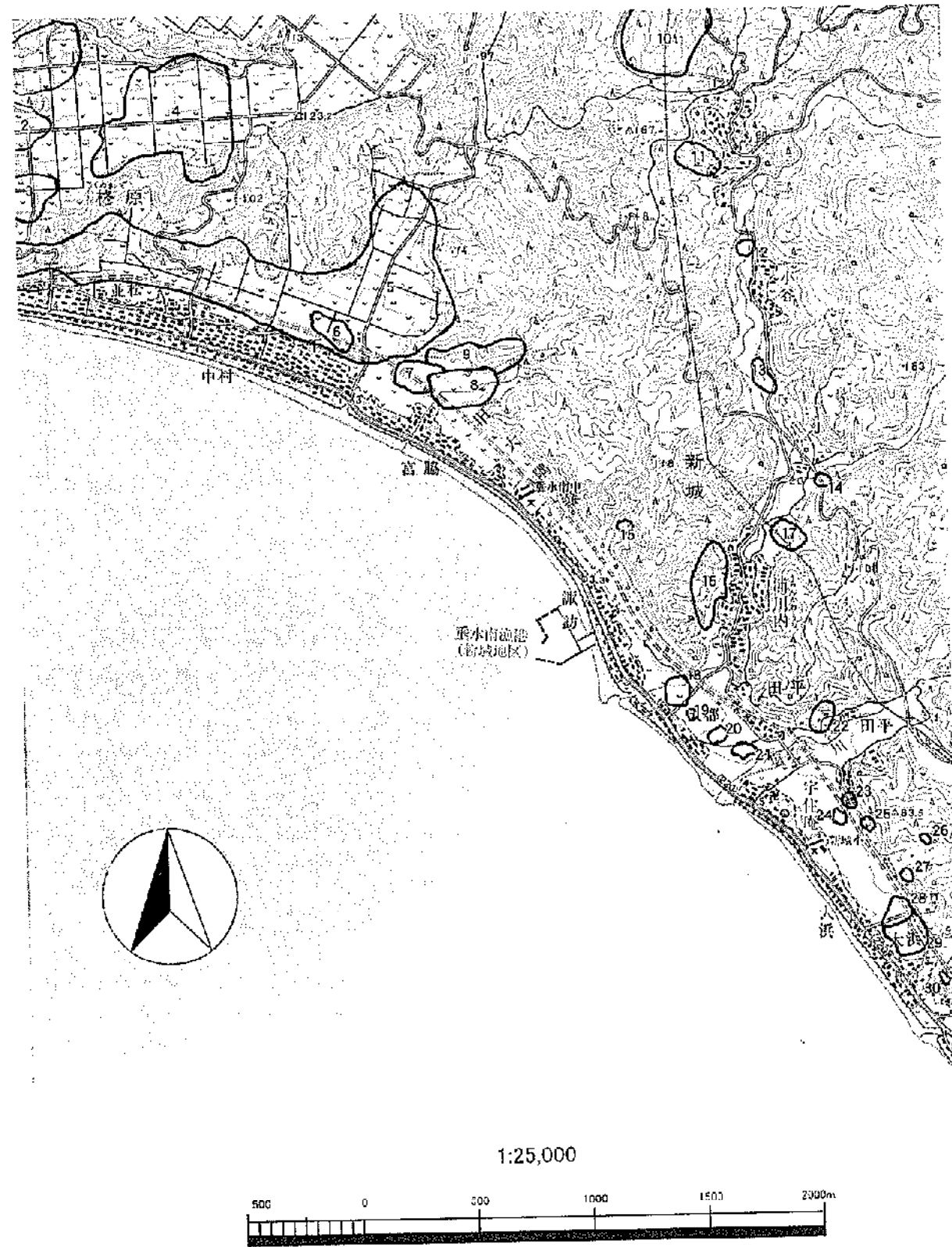
このように、宮ノ前遺跡・重田遺跡の周辺では、太古より人々の生活が営まれてきたことが知られている。

【参考文献】

- 太田良平 「5万分の1地質図幅『垂水』および同説明書」 1954 地質調査所
 橋本 勇 「九州南部における時代未詳層群の総括」
 (『九大教養地学研報 9 13-69』) 1962
 小川内良人ほか 「大隈半島四万十帯の地質構造」 (『鹿大地理学部紀要(地学・生物学)19』) 1986
 柴田 賢 「西日本外帯における第三紀花崗岩貫入の同時性」
 (『地調月報 29 551-554』) 1978
 KOBAYASHI et al 「Thickness and Grain-size Distribution of the Osumi pumice Fall Deposit from the Aira Caldera」
 (『Bull.Volcanol.Soc.Japan. 2 28 2 129-139』) 1983
 荒巻 重雄 「始良カルデラと入戸火砕流」 (『月刊 地球Vol. 52』) 1983
 垂水市教育委員会 「垂水市史 上巻」 1964
 垂水市教育委員会 「垂水市史料集(五) 垂水市の文化財」 1984
 垂水市教育委員会 「垂水市史料集(十一) 新城嶺」 1996



第1図 垂水の地質概略



第2図 周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	小堀内	垂水市終原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
2	一本松後	垂水市終原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
3	大迫	垂水市終原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
4	綾ヶ崎	垂水市終原	台地	古墳	成川式土器	H7農政
5	終原遺跡群	終原	低地	縄・古	貝塚	
6	終原貝塚	終原終原下	低地	縄	貝塚・人骨・獸骨・魚骨 種子・炭石・軽石製品(岩偶) 土器(指宿式・市来式・ 御領式・三万田式・納魯式・ 上加世田式・入佐式等) 石器・貝器・骨角器 成川式	H17個人住宅建設に伴う 確認調査及び農道整備に 伴う確認調査 H9, 10農免農道整備事 業に伴う全面調査 H12, 13国庫補助事業による 範囲確認調査
7	宮ノ前	新城宮脇	低地	縄(前・晩)・弥 古・歴	縄文土器片, 弥生土器片, 成川 式, 陶器片	H11, 12全面調査
8	重田	新城重田	低地	縄(前・晩)・弥 古	骨細式, 深溝式, 山ノ口式, 成川 式	H6, 7確認調査, H11全面調査
9	前畑	新城宮脇	低地	縄(晩)・古・歴	黒川式・成川式・土師器・須恵器	H6確認調査
10	横道	高城	台地	縄文(晩)・古・ 歴	黒川式, 成川式, 土師器, 鉄剣, 鉄鏃, 薩摩焼き	H6-グループ場工事中発見, H6-7 全面調査
11	西ヶ迫	殿西ヶ迫	台地	弥生	弥生式土器片	垂水市史
12	小谷	新城小谷	低地	古墳	成川式	H7確認調査(遺物包含層は確 認されなかった。)
13	大丸	新城小谷	低地	古墳	成川式, 須恵器	H8確認調査
14	宮龍	新城小谷	低地	古・歴	成川式	H9確認調査(遺物包含層は確 認されなかった。)
15	諏訪	新城諏訪下稲荷平	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史 昭和42年上田親明方畑 地
16	高松	新城蒲川内	低地	縄・歴	土器片	H3農政分布, H12確認調査
17	東堂	新城小谷	低地	古墳	成川式, 須恵器	H3農政分布, H7確認調査, H1 1一部確認調査
18	松崎	新城諏訪	低地	縄~古	土器片	H3農政分布
19	須崎	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布, H7確認調査(遺 物包含層は確認されなかった。)
20	横間下	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布, H7確認調査(遺 物包含層は確認されなかった。)
21	竹下	新城大都	低地	古墳	成川式	H3農政分布, H8確認調査(遺 物包含層は確認されなかった。)
22	梢木	新城田平	低地	古墳	成川式, 須恵器	H3農政分布, H8確認調査
23	崩尻	新城宇佐鹿	低地	古墳	成川式, 須恵器	H3農政分布, H8確認調査
24	中平田	新城宇佐鹿	低地	古墳	成川式	H3農政分布, H5確認調査(遺 物包含層は確認されなかった。)
25	田中川内字 田平宅地	新城田中川内田平	低地	弥生	弥生式土器片・壺	垂水市史・昭和30・45年 永谷シヅ子宅地 田平与茂八方
26	大浜	新城大浜山手字堀口	低地	弥生	弥生式土器片	垂水市史 昭和8年・24年・45年
27	新城農協	新城農協澱粉工場	低地	弥生	弥生式土器片・高城・皿 弥生式土器壺	垂水市史 昭和29年9月
28	小房迫前	新城大浜	低地	弥・古・歴	弥生土器・成川式	H5年度確認調査, H16全面調査
29	宮下	新城大浜	低地	縄(後・晩)・弥 古	西平式, 三万田式, 黒川式, 刻 目突帯文土器, 弥生土器, 成川 式, 石釜, 磨石, 碓石, 石皿, 石 鏝, 礫器, 楔形石器	H3農政分布, H5確認調査, H6 全面調査
30	田中川内 田平墓	田中川内字田平墓	低地	弥生	弥生式土器片・壺 高坏・土器破片	昭和41年 田平タメ・田平末吉墓穴 掘中発見

第三章 宮ノ前遺跡の発掘調査

第1節 発掘調査及び遺跡の概要

①発掘調査の概要

発掘調査は、平成11年度（全面調査1次）と平成12年度（全面調査2次）の2カ年に渡って実施した。

平成11年度は、廃土置場の関係等から、平成11年9月21日から平成11年10月27日まで（前半）と、平成11年11月29日から平成12年1月7日まで（後半）の2時期にわけて発掘調査を実施した。前半は、調査区内に、6m×4.5mのグリッドを1区から11区まで任意に設定して調査を行った。後半は、調査区内に、6m×4mのグリッドを12区から18区まで任意に設定して調査を行った。発掘調査区域は畑地に隣接しているため、近隣の農耕用車の交通が多く、発掘調査区域を横断する車もあったため、調査区域の一部については調査が実施できない区域もあった。

平成12年度は、平成11年度に未調査であった約1,660㎡についての発掘調査を、平成12年8月23日から平成12年10月27日まで実施した。調査区内に、4m×4mのグリッドを19区から30区まで任意に設定して調査を行った。遺物包含層は、遺跡の西方へ向けて傾斜して上昇しており、30区以西については策平を受けおり、残存していなかった。そのため、30区以西の発掘調査結果については、本書では割愛する。

②遺跡の概要

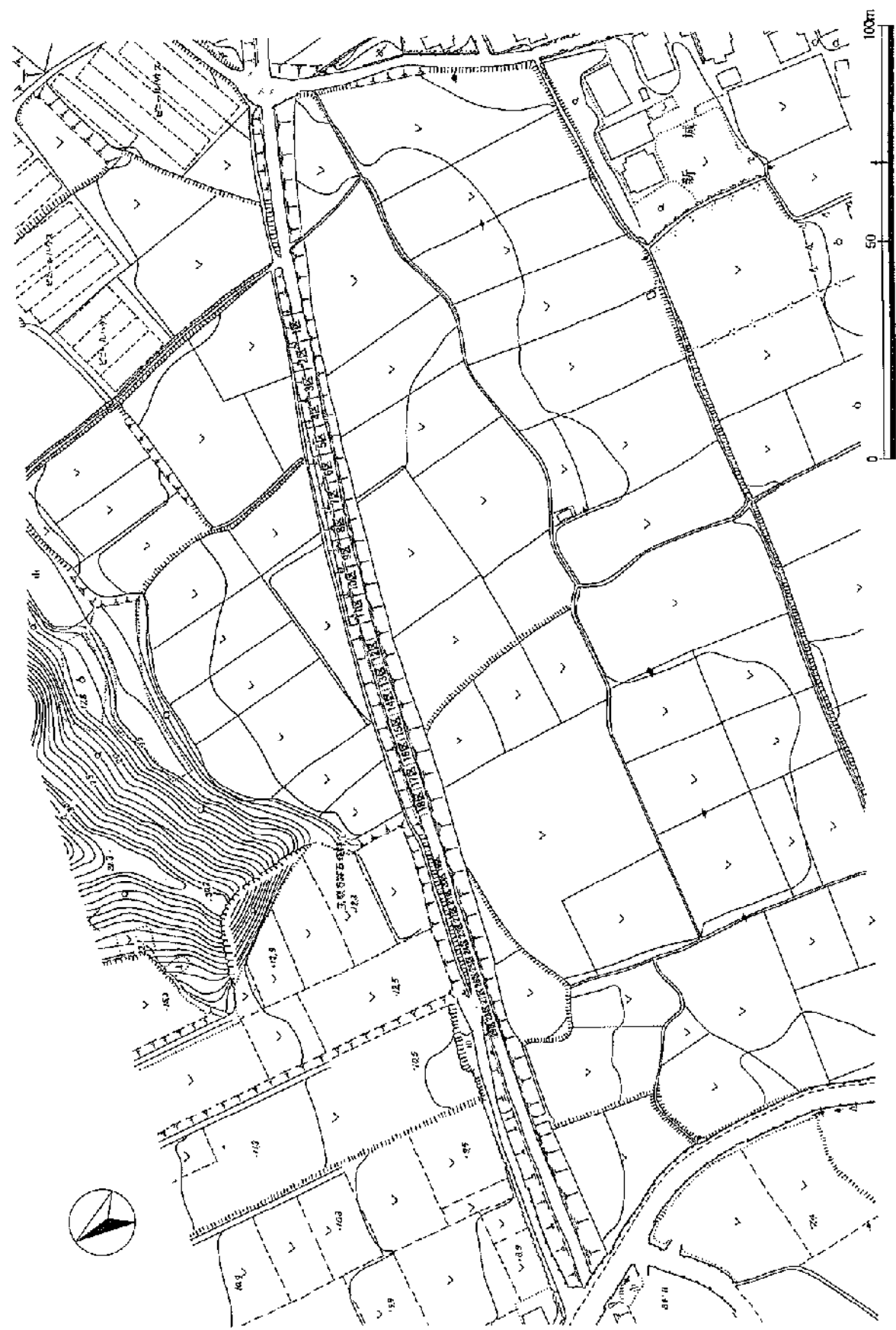
宮ノ前遺跡からは、地表より数えて第3番目の土層（Ⅲ層）から、遺物と遺構が検出された。このⅢ層は、2枚の土層に細分できるが、いずれの層からも、縄文時代後期から中世までの非常に長い期間に渡る時代の遺物が検出されており、時間的な前後関係はあまり判然としない。また、遺物の出土状況も、数が少なくまばらに点在して出土する、という状況であった。

検出された遺構は、竪穴状の土坑が1基と、集石状に出土した軽石（以下、軽石集石1と呼称する）が1基あるのみで、確とした遺構は検出されていない。この竪穴状の土坑は、若干いびつな方形のプランを有する土坑で、遺物の出土が少なくかつまばらな宮ノ前遺跡において、唯一集中してかつ大量に遺物の出土が見られた。遺物の大半は古墳時代の成川式土器が占める。軽石集石1は、加工されていない10cm大～30cm大の軽石が、1つの地点より57点出土したもので、時期は不明である。軽石には加工や焼けた痕跡はみられなかった。

遺物は、前述したとおり全体的に出土量が少なく、まばらに点在して出土している。出土層も、ほぼ単一の土層から、縄文時代後期から中世までの非常に長い期間にわたる時代の遺物が出土している、という状況であった。



第3図 遺跡の範囲と調査対象区、及び周辺の地形



第4図 宮ノ前遺跡グリッド設定図

第2節 層 序

場所により若干の相違はあるが、基本的には以下のとおりである。ただし、19区以西については、11～18区までと比して、土層が規則的には堆積されておらず、若干不規則な堆積状況を呈する。

- I a 層 鉄道（旧JR大隈線）造成時の盛土。シラス土を基本とし、様々な土を含む。数枚に分層が可能である。（19～22区のみ4枚に細分。）
- I b 層 暗褐色土層（細砂・1～2cm大の軽石を若干含む。堆積は一部に限られる。）
- I c 層 褐色土層（細砂・1～2cm大の軽石を若干含む。堆積は一部に限られる。）
- I d 層 暗褐色土層（細砂・1～2cm大の軽石を若干含む。堆積は一部に限られる。）

- II a 層 灰褐色土層（細砂・非常に硬質）
- II b 層 黒色土層（細砂・非常に硬質）
- II c 層 黒色土層（細砂・やや硬質で軽石を若干含む。）
- II d 層 黒色土層（細砂）
- II e 層 暗赤褐色土層（細砂）
- II f 層 灰褐色土層（細砂・非常に硬質で、堆積は一部に限られる。）
- II g 層 黒褐色土層（細砂・非常に硬質で、堆積は一部に限られる。）

- III a 層 褐色土層（細砂・縄文時代後期～中世の遺物包含層）
- III b 層 にぶい褐色土層（細砂・軽石を多く含む・縄文時代後期～中世の遺物包含層）

- IV a 層 褐色土層（細砂）
- IV b 層 褐色土層（細砂・軽石を多く含む。）

- V 層 褐色土層（粗砂）

- VI 層 褐灰色土層（粗砂・硬質で水分を多量に含む・堆積は21区以西に限られる）

- VII 層 火山性噴出物（2次的な要因による・堆積は22区以西に限られる）

第3節 宮ノ前遺跡の遺構

宮ノ前遺跡からは、確とした遺構は検出されず、以下の2つの遺構が検出されたのみである。

土坑1 (第8図)

①概要

7区より、縦約1.9m×横約2.6mの若干いびつな方形のプランを有する土坑が検出された。深さは約30cmである。埋土としてⅢb層が充填していた。土坑の周縁部の、土坑上面(掘り込みが始まる面)から下面(床面)にいたるゆるやかな土壁上に、直径約10cm、深さ約20cmの円形のプランを有するピット1基と、直径約10cm、深さ約30cmの円形のプランを有するピットが1基、直径約10cm、深さ約40cmの円形のプランを有するピットが1基検出されている。土坑内及びその周辺からは、焦土は検出されなかった。遺物の出土がきわめてまばらである宮ノ前遺跡において、この土坑からは比較的多量の遺物が密集して出土した。遺物は古墳時代の成川式土器片が大半を占める。

土坑が方形のプランを有すること、周縁部に柱穴状のピットを有することから、あるいは住居址であるとの想定も成り立ちそうではあるのだが、宮ノ前遺跡自体が第1節で記述したような状態であることから、住居址と考えるよりは、遺物が2次的に廃棄された場所と考えるほうが容易であろう。よって、遺構内遺物として成川式土器が検出されているが、土坑の形成時は古墳時代ではなく、それ以降と想定したい。

②出土遺物

土坑1から、大量の遺物が集中して出土した(第8図)。遺物の大半は成川式土器が占めるが、そのうち24点を図化した。図化したものは全て成川式土器である。器形によりⅠ類～Ⅳ類に分類し、その後残存部位等から更に細分可能なものは細分した。

土坑内出土遺物Ⅰa-1類(第9図1, 2)

遺構内出土遺物のうち、甕形土器をⅠ類とした。そのうちⅠa類は、口縁部が残存しているもので、Ⅰa-1類は、口縁部が外反するものである。

土坑内出土遺物Ⅰa-2類(第9図3)

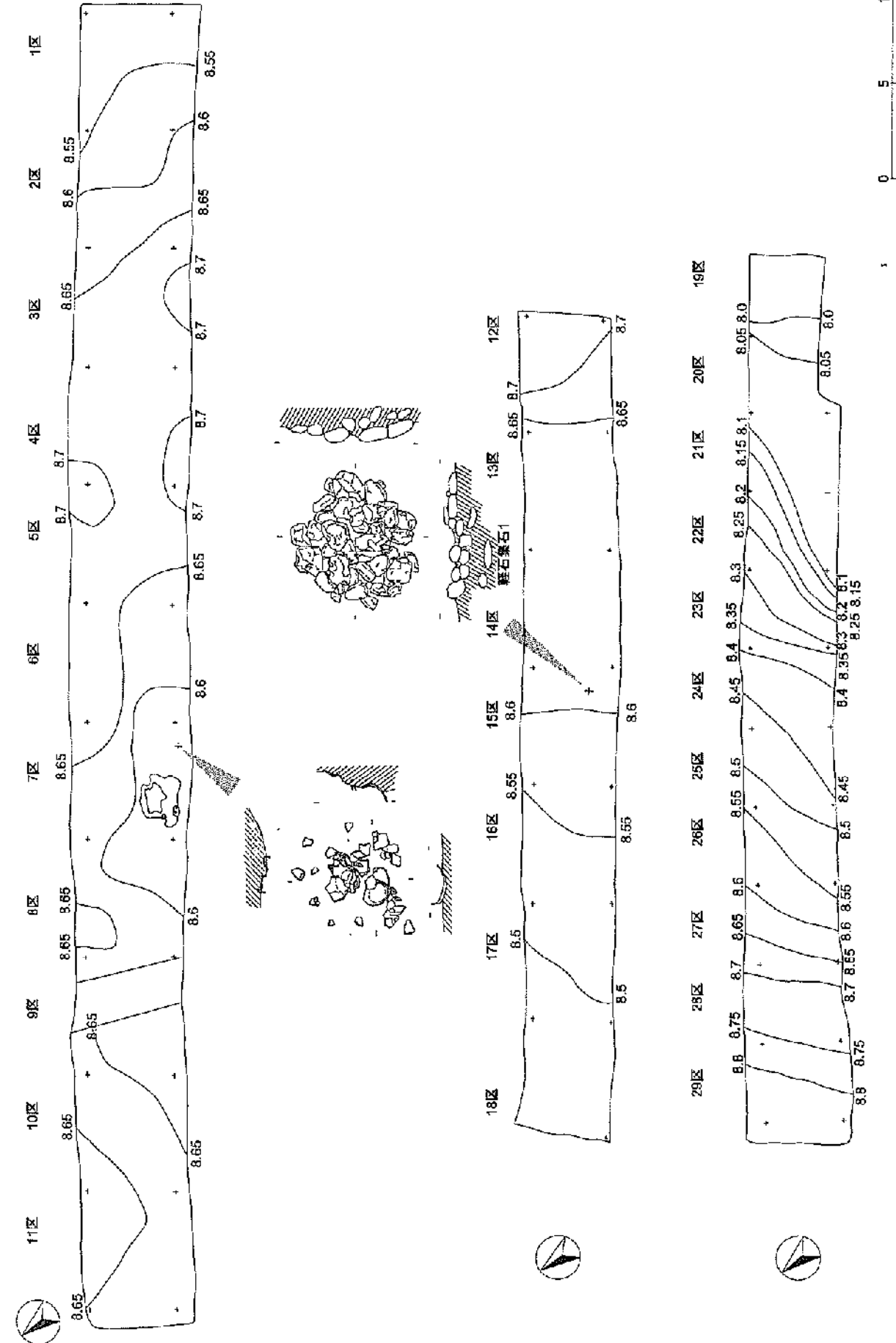
Ⅰa-2類は、ほぼ直立して立ち上がる口縁部を有するものである。

土坑内出土遺物Ⅰa-3①類(第9図4, 5)

甕形土器の口縁部付近が残存しているもののうち、口縁部が内湾するものをⅠa-3類とした。そのうち、Ⅰa-3①類は、断面が三角形の突帯を有するものである。4は、口縁部端から突帯まで間隔が短く、表面が粗く研磨されている。全体的に小さいもので、あるいは鉢形土器に分類される可能性がある。

土坑内出土遺物Ⅰa-3②類(第9図6, 7, 8)

Ⅰa-3②類は、断面が三角形の突帯に、指によるつまみ調整がなされたいわゆる絡状突帯を有するものである。8は、突帯の一部が、指により擦り上げられ、刻目状の外観を呈する。



第7図 宮ノ前遺跡Ⅶ層上面の地形と遺構配置図



第8図 土坑1及び土坑内遺物出土状況

土坑内出土遺物 I a-3 ③類 (第9図9~11)

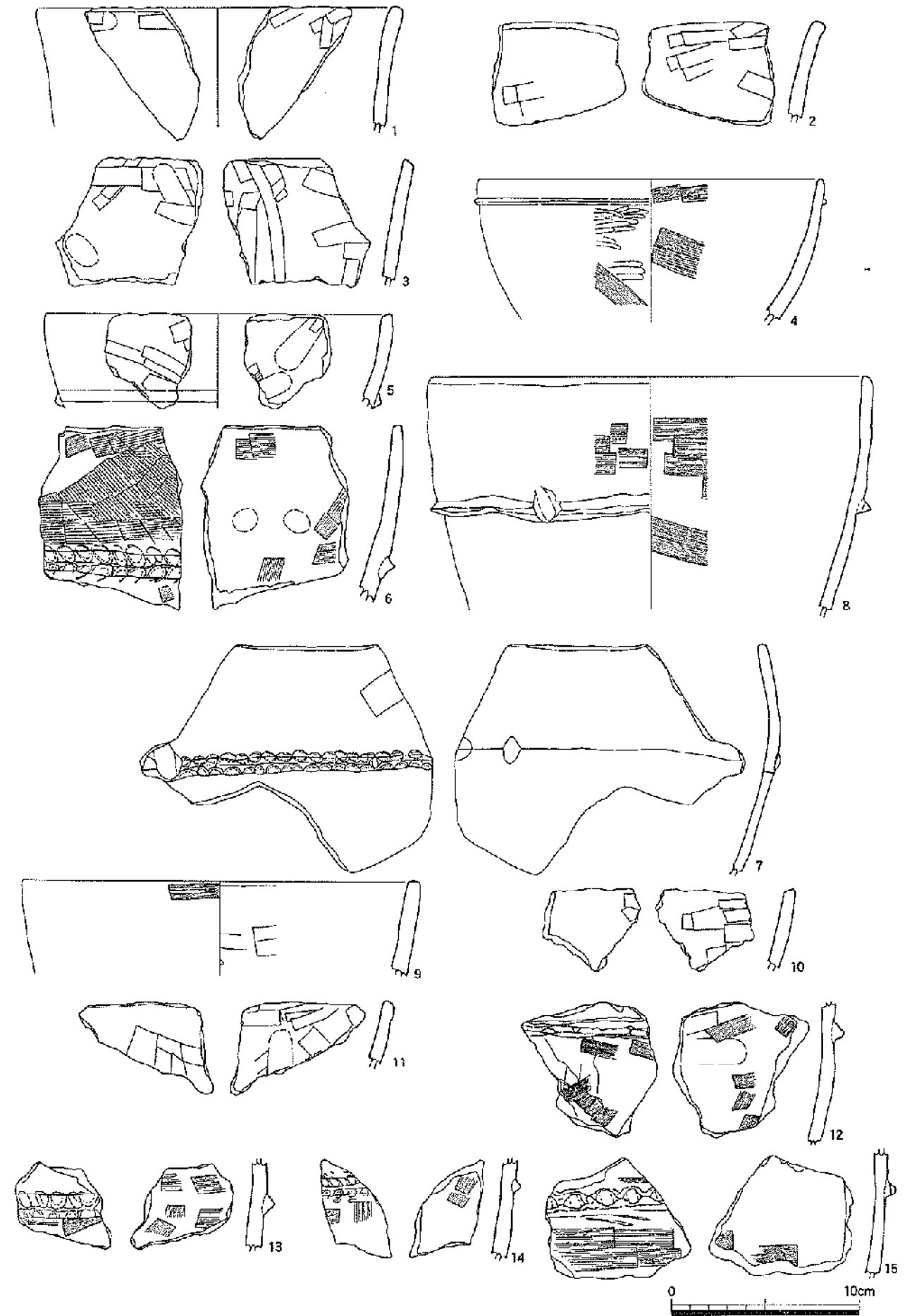
I a-3 類③は、内湾する口縁部を有するもののうち、口縁部付近のみが残存しており、突帯が残存しない、あるいは突帯を有しないものである。

土坑内出土遺物 I b-1 類 (第9図12)

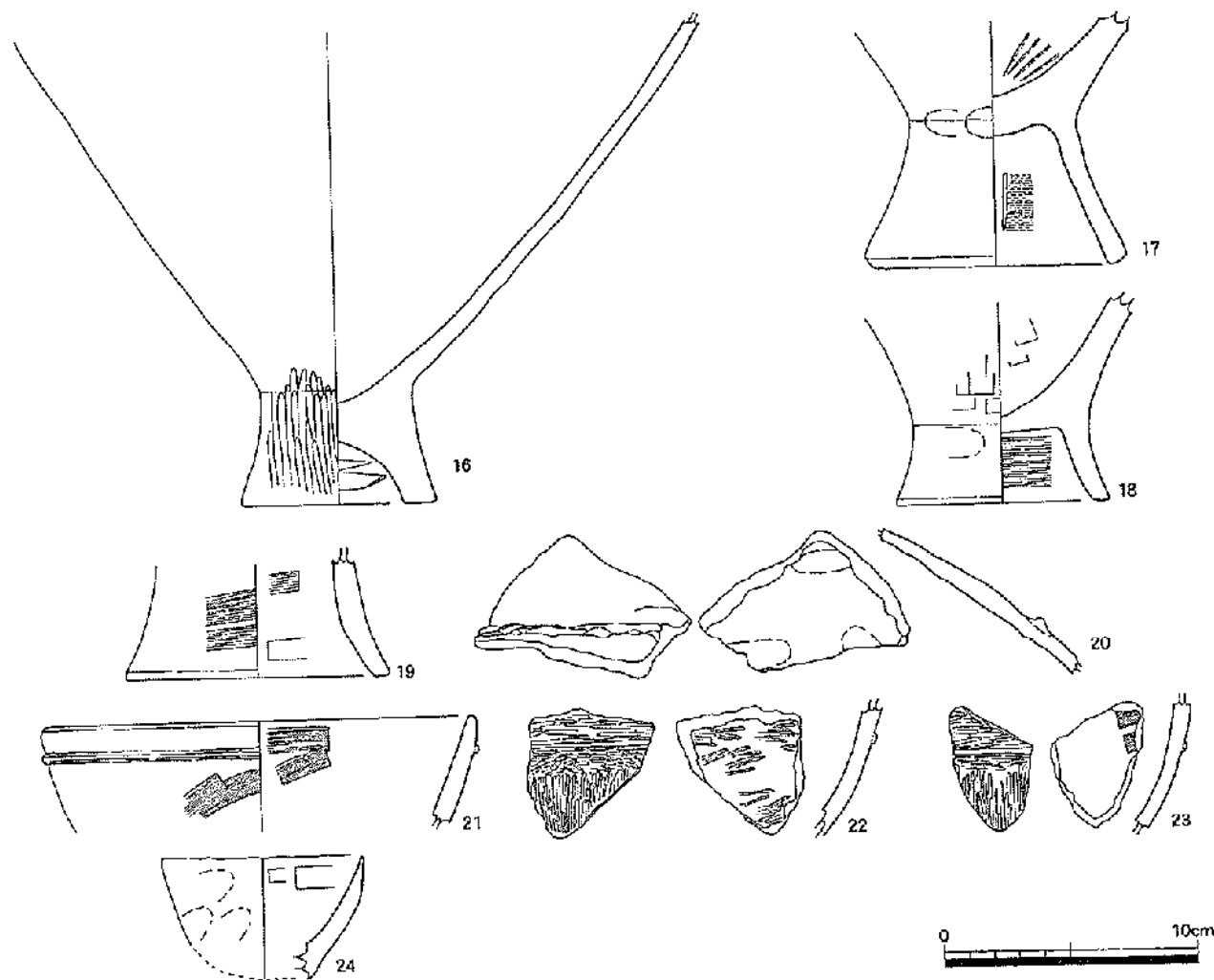
甕形土器のうち、胴部付近が残存しているものを I b 類とした。I b-1 類は、断面が若干いびつな台形の突帯を有するものである。

土坑内出土遺物 I b-2 類 (第9図13, 14)

I b-2 類は、断面が三角形の突帯に、指によるつまみ調整がなされたいわゆる絛状突帯を有するものである。



第9図 宮ノ前遺跡遺構内出土遺物実測図1 (Ia-1~Ic類土器)



第10図 宮ノ前遺跡構内出土遺物実測図（Ⅱ類～Ⅳ類土器）

土坑内出土遺物Ⅰb-3類（第9図15）

Ⅰb-2類は、断面が台形の突帯を有するものであるが、突帯の一部に指による刻みが施されているものである。

土坑内出土遺物Ⅰc類（第9図16～19）

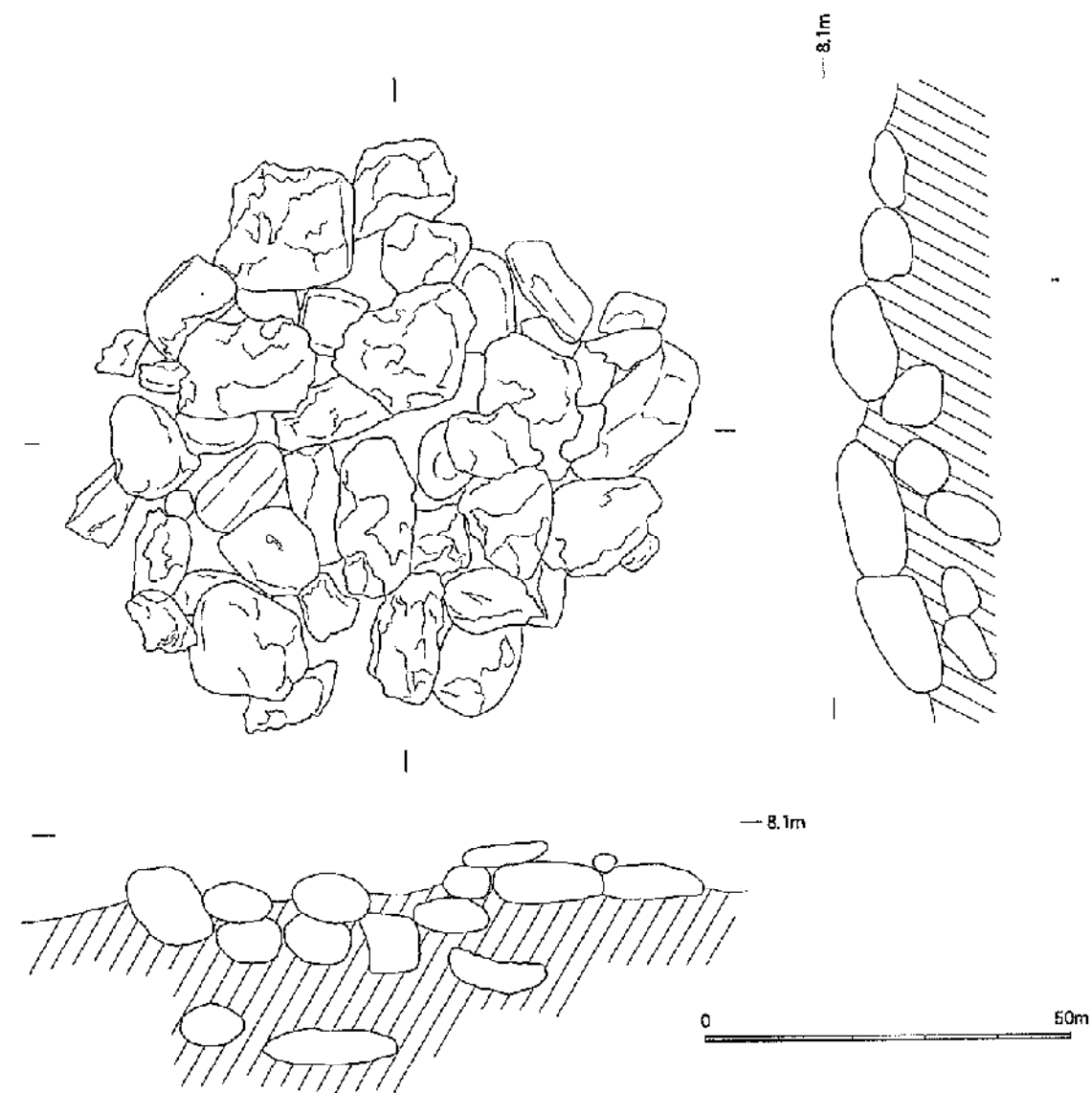
甕形土器のうち、低部付近が残存しているものをⅠc類とした。16は、短い脚台を有し、先端へ向けて直線的に開く。脚台内面の天井部は放物線を描く。17は、18は、先端へ向けてやや外反する脚台で、脚台内面に平坦な天井部を有する。19は、先端へ向けてやや外反する脚台である。

土坑内出土遺物Ⅱ類（第10図20）

壺形土器をⅡ類とした。20は同部で、断面が三角形で、指によるつまみ調整がなされた突帯を有するものである。

土坑内出土遺物Ⅲ類（第10図21～23）

高杯形土器をⅢ類とした。いずれも杯部である。21は、直線的に開く口縁部で、断面が台形の突帯を有する。器面は両面ともに丁寧に研磨されている。22、23類は、口縁部が欠損しているが、器面は両面ともに丁寧に研磨されており、断面が滴錐形の突帯を有するものである。接合はできなかったが、同一固体と考えられる。



第11図 軽石集石1

土坑内出土遺物Ⅳ類（第10図24）

ミニチュア土器をⅣ類とした。24は、器面が両面ともに指により調整されている、いわゆる手捏土器である。

軽石集石1（第11図）

15区より検出され、10cm大～20cm大の軽石57個により形成される。80cm×80cmの円形の範囲に軽石が集中する（厚さ約25cm）。この軽石は、いずれも加工の痕跡、焼けた痕跡は認められなかった。集石の周辺には、掘り込み等の痕跡は確認できなかった。出土層はⅢa層であるが、Ⅲa層は第2節で述べたように、縄文時代後期から中世にかけての遺物が出土しており、時期の特定は不可能である。加工前の軽石の貯蔵場所であったか、2次的に軽石が廃棄された痕跡であろうか。いずれにしても、あまり性格は判然としない。

第2表 宮ノ前遺跡遺構内出土土器観察表

※胎土のS・C・K・R・U・SiはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
 ※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

種別	遺物番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		焼成	径	備考
							内	外	内	外			
9	1	7	III	甕	口縁部	S・C・K	7.5R5/4にぶい橙	7.5YR3/1黒褐	ハケメ	ハケメ、指押さえ	良	20	
9	2	7	III	甕	口縁部	S・C・K	5YR4/8赤褐	5YR4/8赤褐	ハケメ	ハケメ	良		
9	3	7	III	甕	口縁部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	ハケメ	ハケメ、指押さえ	良		
9	4	7	III	甕	口縁部	S・C・K	7.5YR6/8橙	10YR6/4にぶい黄橙	ハケメ	ミガキ、ハケメ	良	20	
9	5	7	III	甕	口縁部	S・C・K	2.5YR5/8明赤褐	5YR5/6明赤褐	ハケメ、指押さえ	ハケメ	良	18	
9	6	7	III	甕	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	ハケメ、指押さえ	ハケメ	良		
9	7	7	III	甕	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6橙	10YR5/4	指押さえ	ハケメ	良		
9	8	7	III	甕	口縁部	S・C・K	7.5YR5/6明赤褐	7.5YR3/4暗褐	ハケメ	ハケメ	良	23	
9	9	7	III	甕	口縁部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	ハケメ	ハケメ	良		
9	10	7	III	甕	口縁部	S・C・K	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR5/8明赤褐	ハケメ	ハケメ	良		
9	11	7	III	甕	口縁部	S・C・K	2.5YR5/8明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	ハケメ、指ナデ	ハケメ	良		
9	12	7	III	甕	胴部	S・C・K	7.5YR3/3暗褐	5YR4/6赤褐	ハケメ、指ナデ	ハケメ	良		
10	13	7	III	甕	胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	10YR4/6褐	ハケメ	ハケメ	良		
10	14	7	III	甕	胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	7.5YR3/3暗褐	ハケメ	ハケメ	良		
10	15	7	III	甕	胴部	S・C・K	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/3	ハケメ	ハケメ	良		
10	16	7	III	甕	底部	S・C・K	10YR7/1灰白	7.5YR7/2明褐灰	ケズリ・ミガキ	ミガキ	良	7.8	
10	17	7	III	甕	底部	S・C・K	5YR3/4にぶい赤褐	5YR4/3にぶい赤褐	ハケメ	指押さえ	良	10.4	
10	18	7	III	甕	底部	S・C・K	7.5YR6/4にぶい橙	5YR5/6明赤褐	ハケメ、ナデ	ハケメ、指押さえ	良	8.4	
10	19	7	III	甕	底部	S・C・K	2.5YR7/2灰黄	2.5YR7/2灰黄	ハケメ	ハケメ	良	10.4	
10	20	7	III	壺	胴部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	10YR4/6褐	指押さえ	ナデ	良		
10	21	7	III	高杯	杯部	S・C・K	10YR5/3にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄橙	ハケメ、ミガキ	ハケメ、ミガキ	良	17	
10	22	7	III	高杯	杯部	S・C・K	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	ミガキ	ミガキ	良		
10	23	7	III	高杯	杯部	S・C・K	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	ハケメ、ミガキ	ミガキ	良		
10	24	7	III	ミニチュア		S・C・K	5YR5/6明赤褐	7.5YR7/4にぶい橙	ナデ、指押さえ	指押さえ	良	8	

第4節 包含層出土遺物

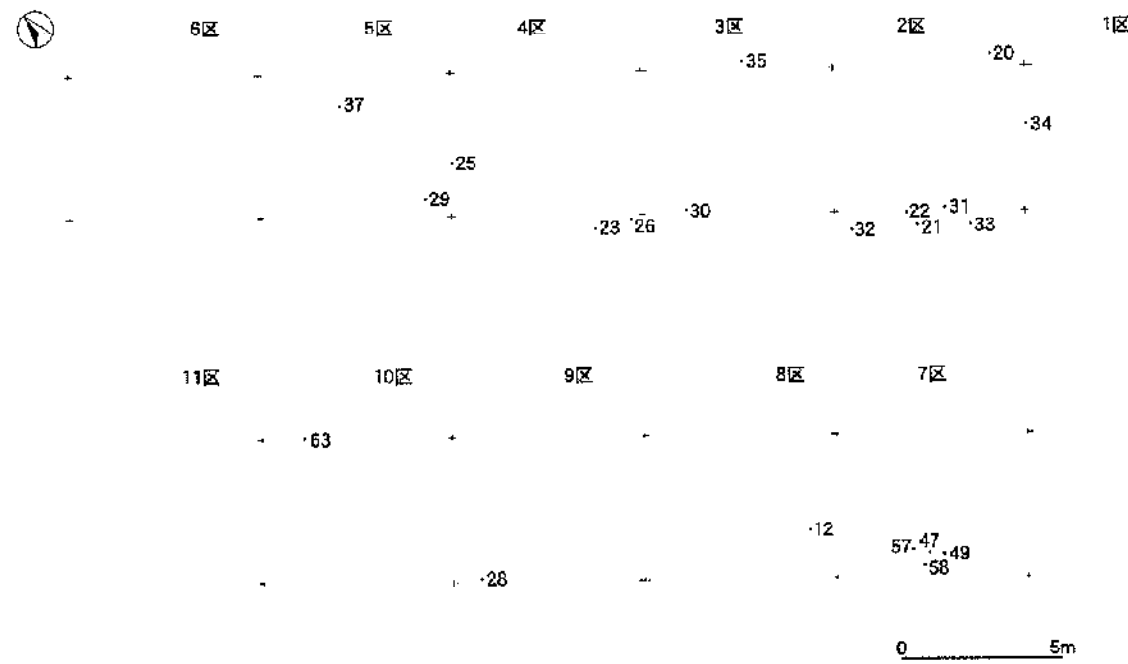
宮ノ前遺跡からは、第2節で記したように、III層から縄文時代後期から中世までの非常に長期間に渡る時代の遺物が検出された。

①土器

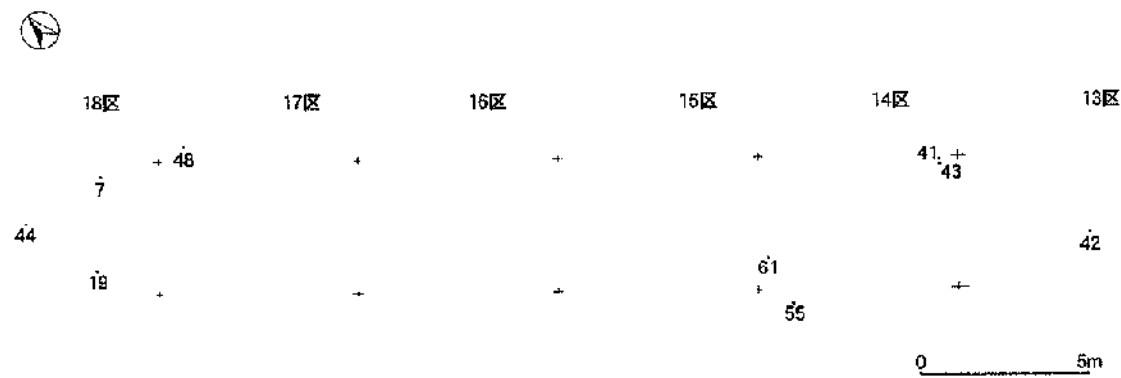
宮ノ前遺跡からは、III層から、縄文時代後期から中世までの非常に長い期間に渡る時代の遺物が検出されており、時間的な前後関係はあまり判然としない。また、遺物の出土状況も、数が少なくまばら点在して出土している、という状況であった。このため、層位によって時期差を捉えるのが困難であるので、出土した層位に関わらず形態や器種による分類に従って記述を行った。いずれも少片で、完形に復元可能なものはあまりなかったが、その特徴より時代と型式分類を試みた。明確な特徴が無く時代及び型式分類が困難な土器については、土器少片として一括して取り扱い、各地区ごとに点数と重量を測定するに留めた(第3表)。これらの土器については、口縁部・胴部(突帯を有するもの・それ以外のもの)・底部・歴史時代の焼き物小片という分類に留めた。

第3表 宮ノ前遺跡出土土器点数・重量表

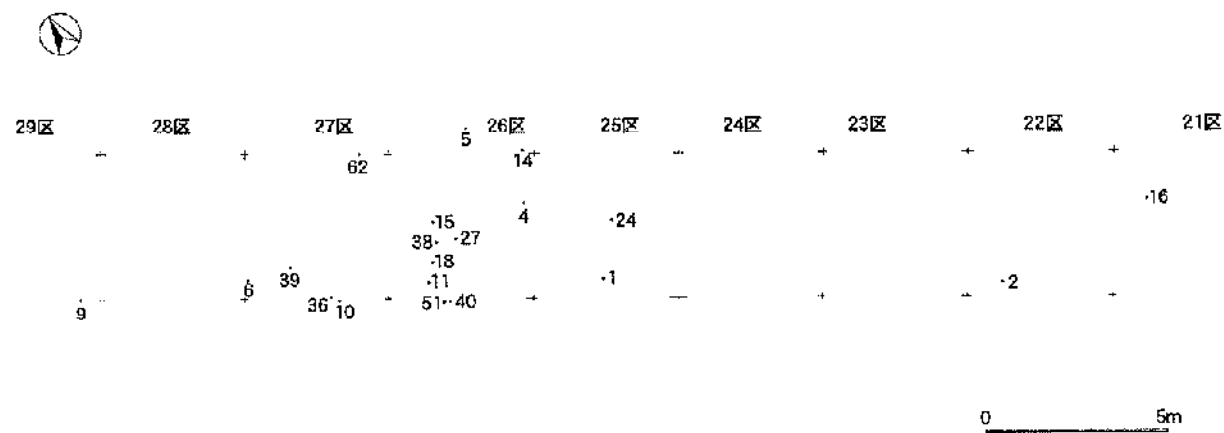
地区	口縁部		胴部				底部		歴史時代の焼き物小片	
			縄文土器		突帯を有するもの					
	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)	点数	重さ(g)
1							35	350		
2							44	935	2	50
3	2	50			7	100	36	590	2	100
4	4	90					42	990	4	170
5							13	205	3	60
6	2	35			2	40	20	340	4	55
7	25	142			16	68	249	1,928	11	55
8					5	40	42	480		11
9							7	60	3	100
10							27	310	2	30
11							11	160	1	30
13					2	20	9	110	2	100
14							33	770	1	40
15							15	275	2	60
16					1	10	6	75	7	140
17	2	10					21	220	3	50
18	1	15					16	260	2	60
21							11	230		
22							16	245		
23							17	140	6	110
24							14	395	1	50
25	1	20					39	710	1	45
26	1	270					10	190		
27	1	30					22	350	2	45
28					2	30	14	400		
29							20	390		
30							16	750		
一括	63	750			41	730	616	7,457	22	1,120



第12図 宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況(1~11区,平面図)



第13図 宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況No.2(13~18区,平面図)



第14図 宮ノ前遺跡包含層遺物出土状況No.3(21~29区,平面図)

1 縄文時代後期の土器(土器I~IV類 第15図1~第15図16)

土器表面に施された調整や、残存部分の形状から、縄文時代後期の土器と考えられるものを土器I~IV類とした。

I類(第15図1~3)

器面調整や器形から、縄文時代後期のいわゆる指宿式土器に分類されると考えられるものをI類とした。いずれも口縁部である。1はやや外反する口縁部で、器表面に工具による太い凹線が施文されている。2は外傾して開き、端部で内湾する口縁部で、2本の平行沈線と棒状工具による連点刺突文が施されている。3はほぼ真っ直ぐに立ち上がる口縁部で、口唇部には工具による斜方向の刻目が施されている。器表面は工具によるやや太い沈線文が施文されている。

II類(第15図4)

器面調整や器形から、縄文時代後期のいわゆる市来式土器に分類されると考えられるものをII類とした。4は市来式土器の口縁部で、端部が若干波状になっている。断面三角形に若干肥厚しており、器表面には沈線がくの字状に幾重にも施されている。

III類(第15図5,6)

無文の土器で、器形や器面調整から、縄文時代後期の土器と判断されるものをIII類とした。明確な型式分類は不明である。5は口縁部であるが、口縁部下位に段を有し、そこから大きく外反して開く。器表面は若干粗くナデ調整されている。6も口縁部であり、やや外反して開く。外面は研磨されているが、内面は研磨されていない。

IV類(第15図7~16)

土器の底部であるが、器形や器面調整から縄文時代後期の土器に分類されると考えられるものをIV類とした。残存部位が少ないことから、明確な型式分類はせず、縄文時代後期の土器という分類に留めた。市来式土器の系統と思われる。7~10はそれぞれ底面に組織痕を有する。7,9には貝殻腹縁による調整痕が観察できる。11~13は若干外に張り出す底部を有する。14は外に張り出さない底部で、胴部との境に不明瞭な稜線を有する。15も外に張り出さない底部であるが、他のものとして小型のものである。16は、若干残っている部分より、ゆるく胴部へむかって立ち上がることが想像される。

2 縄文時代晩期の土器(土器V~IX類 第15図17~29,第16図30~36)

土器表面に施された調整や、残存部分の形状から縄文時代晩期の土器と考えられるものを土器V・VI・VII・VIII類とした。いわゆる入佐式土器に分類されるとされるものをV類、いわゆる黒川式土器に分類されるとされるものをVI類、いわゆる松添式土器に分類されるとされるものをVII類、いわゆる組織痕土器と思われるものをVIII類とし、残存部位が少なく詳細不明のものについては、一括してIX類として取り扱った。いずれも、器形や胎土・器面調整といったそれぞれの特徴ごとに細分を試みた。

V A類(第15図17)

器面調整や器形から、縄文時代晩期前半に位置付けられるいわゆる入佐式土器に分類されると考えられるものをV類とした。その中で、粗製の深鉢形土器と思われるものをV A類とした。17は粗製の深鉢形土器の口縁部である。外開きに立ち上がり、外面に4条の沈線を施す。口縁部下

位に段を有し、頸部と明確な境を成す。器内外面に研磨痕が見られる。

VB①類 (第15図18)

入佐式土器の中で、粗製の浅鉢形土器もしくは鉢形土器と思われるものをVB類とした。VB①類は、やや外反する口縁部を有するものである。18は、器内外面ともにナデ調整が見られる。

VB②類 (第15図19, 20)

VB②類は、やや外傾して立ち上がる口縁部を有するものである。19は平坦ではなく若干波状ぎみな口縁部を有し、器内外面にあまり丁寧でないナデ調整が見られる。20は平坦な口縁部を有し、器外面にナデ調整と、やや粗雑な研磨痕が見られる。

VC①類 (第15図21)

精製の浅鉢形土器と思われるものをVC類とした。VC①類は、口縁部が大きく開き、さらに口唇部が屈曲して垂直方向に立ち上がるものである。屈曲部内面は、凹線状に若干窪む。屈曲部外面には段と明確な稜線を有する。口唇部に1条沈線を施す。器外面は研磨されている。

VB②類 (第15図22)

VB②類は、VB①類と同様大きく開く口縁部を有するが、口唇部の立ち上がりががないものである。器面は内外面ともに丁寧に研磨されている。

VI類 (第15図23)

器面調整や器形から、縄文時代晩期前半に位置付けられるいわゆる松添式土器に分類されると考えられるものをVI類とした。23は、大きく外傾して立ち上がる口縁部付近が残存しているものである。口縁部上端よりやや下がった位置に指頭大の凹線が廻る。器面調整は内外面ともに粗雑である。

VII A類 (第15図24)

器面調整や器形から、縄文時代晩期のいわゆる黒川式土器に分類されると考えられるものをVII類とした。その中で、粗製の深鉢形土器と思われるものをVII A類とした。24は、胴部付近が残存しているものである。胴部の途中に段を有する。下位より外傾して立ち上がるが、この段でくの字状に屈曲し、内傾して口縁部へと続く。器内外面に粗いナデ調整がなされている。

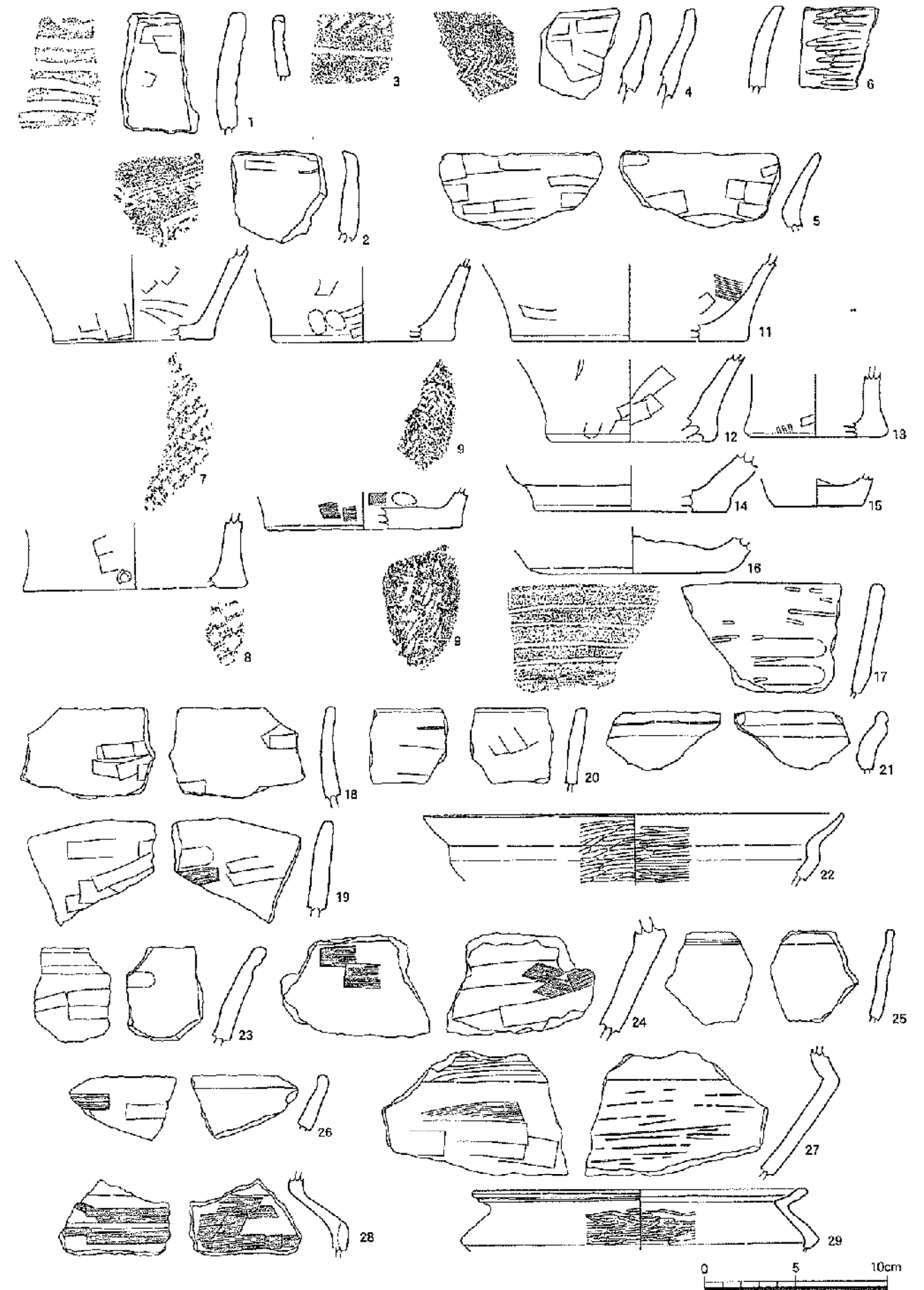
VII B-1類 (第15図25, 26)

黒川式土器の中で、粗製の浅鉢形土器に分類されると考えられるものをVII B類とした。VII B-1類は、口縁部付近が残存しているものである。

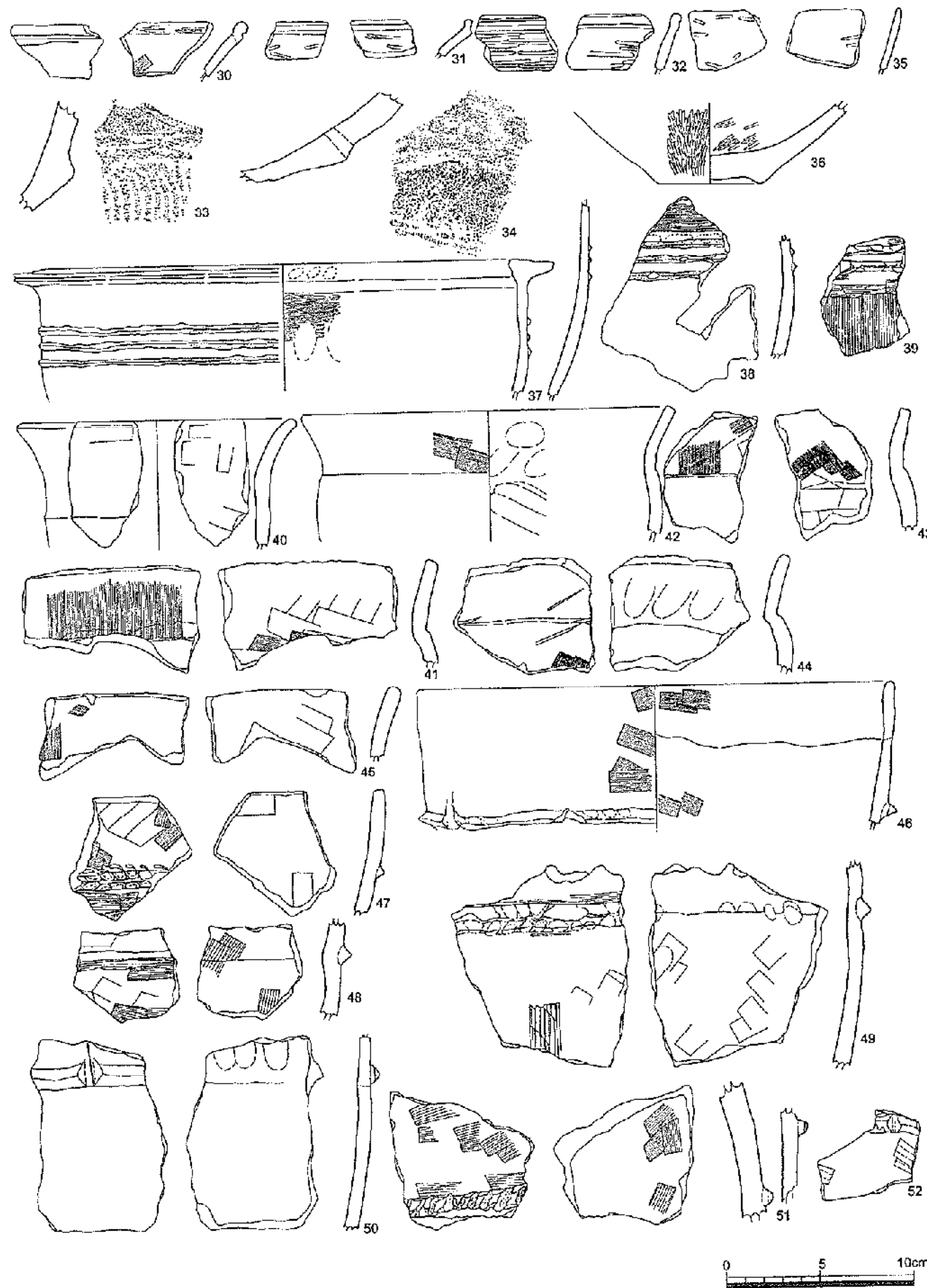
25は、口縁部が外傾して立ち上がり、さらに端部が垂直方向に若干屈曲して立ち上がるものである。屈曲部外面に、やや細い沈線状の凹線が廻り、屈曲部内面には明確な稜線を有する。26も、外傾して立ち上がる口縁部が、端部でさらに垂直方向に屈曲して立ち上がるが、屈曲部外面には沈線状の凹線は廻らない。屈曲部内面は、26と同様明確な稜線を有する。

VII B-2類 (第15図27, 28)

VII B-2類は、胴部付近が残存しているものである。いずれも、胴部の途中に段を有する。下位より外傾して立ち上がるが、この段でくの字状に屈曲し、内傾して口縁部へと続く。27は器内外面ともに粗いナデで調整が施されており、器内面には粗い研磨痕も観察できる。28は、胴部の段でくの字状に屈曲し、そろばん玉状に内傾して立ち上がる。さらに、上位でもう一度くの字に



第15図 宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図1 (I~VIC-1①類土器)



第16図 宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図2 (VIC-1②~XIA-2③類土器)

屈曲して、垂直方向に立ち上がる。器面調整は内外面ともに粗いナデ調整が施されている。

VIC-1①類 (第15図29)

黒川式土器の中で、精製の浅鉢形土器と思われるものをVIC類とした。その中で、VIC-1類は口縁部付近が残存しているものである。VIC-1①類は、そろばん玉状に屈曲する胴部に、くの字状に屈曲してやや外反ぎみに立ち上がる口縁部がつくものである。29は、口縁端部よりやや下位に、1条の沈線が廻る。胴径が口径を上回る。器面は内外面ともに丁寧に研磨されている。

VIC-1②類 (第16図30~32)

VIC-1②類は、口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部でさらに垂直方向に立ち上がるものである。30、31はいずれも口唇屈曲部外面に1条の沈線を有する。30は口唇端部がやや丸く仕上げられており、口唇屈曲部内面が凹線状にわずかに窪む。31は口唇部の屈曲の度合いが30よりも強く、口唇屈曲部内面に明確な稜線を有する。32は、30・31と比して口縁部があまり大きく開かず、口唇屈曲部外面の沈線も無い。口唇屈曲部内面は、29と同様凹線状にわずかに窪む。器面調整はいずれも内外面ともに丁寧に研磨されている。

VII類 (第16図33, 34)

縄文晩期の土器で、組織痕の残るものをVII類とした。

いずれも形態は不明であるが、外面にアングイン風の編み布を押し付けている。35、36ともに約6mm間隔の縦糸で編み込んだ編布を使用している。胴部から底部にかかる部分と思われる。

IX類 (第16図35, 36)

残存部位が少なく、型式分類が不可能なものについては、一括して土器IX類として取り扱った。縄文時代後期終末期から縄文時代晩期前葉のころの土器と思われるが、残存部位が限られているため、詳細は不明である。35は、やや内湾ぎみに立ち上がる口縁部である。器面が内外面ともに丁寧に研磨されている。36は、土器の底部である。器内外面ともに丁寧に研磨されている。

3 弥生時代の土器 (土器X類 第16図37~39)

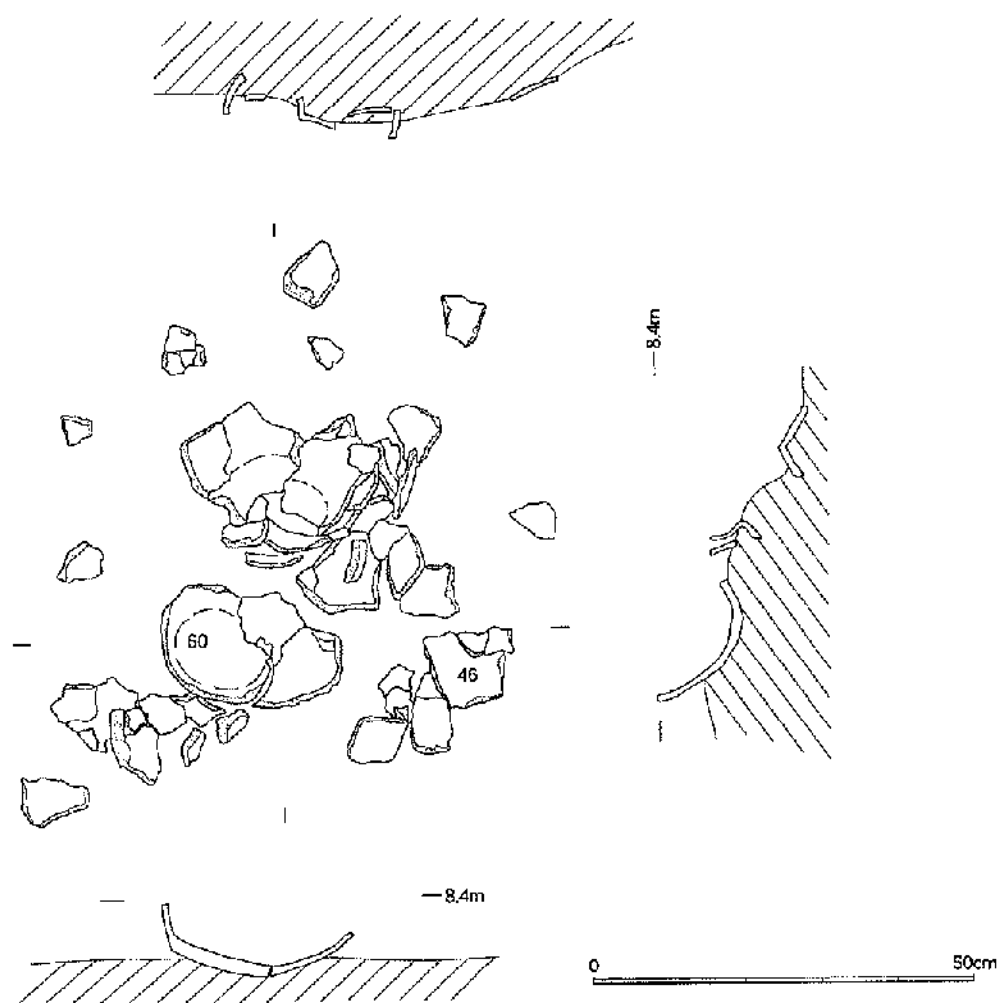
土器表面に施された調整や、残存部分の形状から弥生時代の土器と考えられるものを土器X類とした。宮ノ前遺跡出土の弥生土器のうち、3点を図化した。これらはすべて、弥生土器中期中葉のいわゆる入来Ⅱ式土器の範疇に分類されるものであると考えられる。器形はいずれも甕形土器で、そのうち口縁部付近が残存しているものをX-1類、胴部付近が残存しているものをX-2類とした。

X-1類 (第16図37)

X-1類は口縁部付近が残存しているものである。やや内湾して立ち上がる口縁部の上端外面に、断面が長台形状で凹線を有する突帯を貼り付け、上面を平坦にやや外下がりに仕上げている。肩部に三条の断面三角突帯が廻るが、これらの突帯は指によるつまみ調整がなされたいわゆる絡状突帯である。口縁部上面、器内面に指押さえが見られる。

X-2類 (第16図38, 39)

X-2類は胴部付近が残存しているものである。VII-1類と同様絡状突帯を有し、38は三条、39は二条の絡状突帯が残存している。



第17図 包含層出土遺物46,60出土状況

4 古墳時代の土器 (土器X I類 第16図40~52, 第17図53~63)

土器表面に施された調整や残存部分の形状から、弥生時代後期~古墳時代に位置付けられるいわゆる成川式土器と考えられるものを土器X I類とした。X I類は器形ごとに大別し、細分が可能なものについてはさらなる細分を試みた。

なお、7区より土器片が集中して出土した地点があるので、出土状況を付しておく(第17図)。これらの土器片のうち、2片を図化した(遺物番号46, 60)。

X I A-1 ①類 (第16図40~45)

甕形土器をX I A類とした。X I A-1類は口縁部で、外反する口縁部を有するものをX I A-1 ①類とした。40は口縁部と胴部の境に僅かに段を有し、先端にむかって外反する口縁部を有する。他のものとは口縁部と胴部の境の段がはっきりせず、口縁部の外反の度合いが顕著である。41は口縁部外面をハケメ状原体の工具で縦方向の擦過(いわゆるカキアゲ)を行うことによって胴部との境に段を有する。42・43・44は口縁部と胴部の境目に段を有し、この段を境にくの字状に外反して立ち上がる口縁部を有するが、いわゆるカキアゲは施されていない。45は口縁部先端付近が残存しているものである。

X I A-1 ②類 (第16図46, 47)

X I A-1 ②類は、若干内湾ぎみに立ち上がる口縁部を有するものである。いずれも、胴部に断面三角形の、指によるつまみ調整をなされたいわゆる絡状突帯を有する。46は、突帯の一部が、指により擦り上げられ、切断されている。47も絡状突帯を有するが、46と比して口縁端部から突帯までの間隔が狭い。

X I A-2 ①類 (第16図48)

胴部付近が残存しているものをX I A-2類とした。X I A-2 ①類は、断面三角形の突帯を有するものである。

X I A-2 ②類 (第16図49)

X I A-2 ②類は、胴部に断面三角形の、指によるつまみ調整をなされたいわゆる絡状突帯を有するものである。

X I A-2 ③類 (第16図50・51, 第17図53~55)

X I A-2 ③類は、胴部突帯に刻目を有するものである。50は、断面三角形の突帯の途中を、幅広原体の工具により擦り上げ刻目を施すものである。51は、断面台形の突帯に斜方向に細い刻目を工具により施すものである。刻目の一部に、組織痕が観察できる。灰白色で、胎土が他のものと若干異なる。52~54は、断面台形の突帯に、やや幅の広い刻目を施すものである。52は、突帯に工具を押し付けた後、左方向へ押し引いて刻目を施している。55は、断面三角形の突帯に、やや幅の広い刻目を施すものである。

X I A-3類 (第17図56)

底部付近が残存しているものをX I A-3類とした。56は脚台で、内面天井部に突起を有し、脚部は短く、先端へ向けて真っ直ぐに降りる。

X I B-1類 (第17図57)

成川式土器のうち、壺形土器をX I B類とした。その中で、胴部付近が残存しているものをX I B-1類とした。57は、比較的小型の壺で、器外面と器内面の一部が丁寧に研磨されている。頸部に断面三角形の突帯を有する。

X I B-2類 (第17図58, 59)

壺形土器のうち、底部付近が残存しているものをX I B-2類とした。58は、器外面に縦ヘラミガキが、器内面に縦ナデが観察できる。59は、内面にハケメ状原体を打ち込む際に生じると思われる痕跡が観察できる。

X I C類 (第17図60)

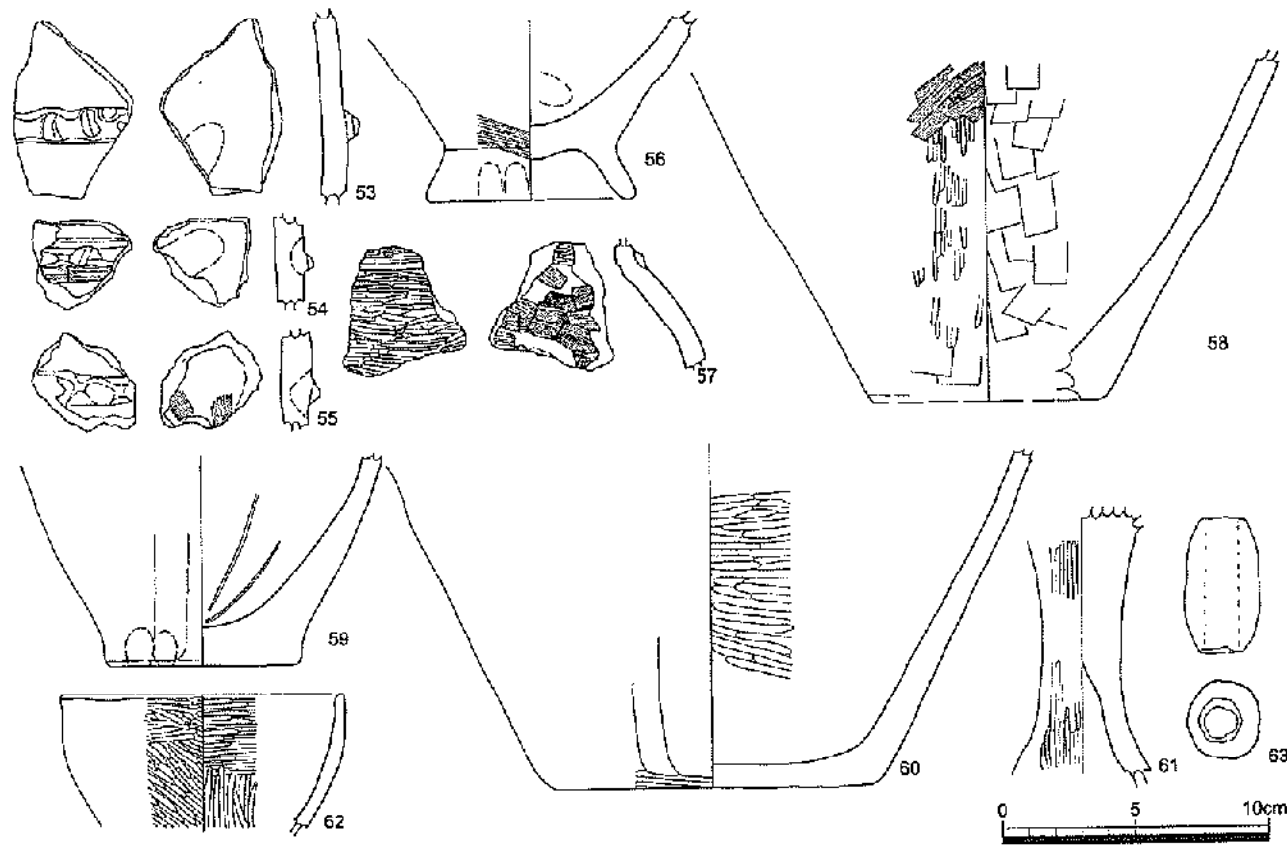
底部であるが、器形が不明なものをX I C類とした。大型の壺形土器または鉢形土器の底部であろうか。器内面の一部が、横方向に研磨されている。

X I D類 (第17図61)

成川式土器のうち、高杯形土器をX I D類とした。61は高杯の脚台で、器外面に赤色顔料が塗付されており、縦方向に丁寧に研磨されている。

X I E類 (第17図62)

成川式土器のうち、埴形土器をX I E類とした。62は埴の口縁部で、器面に赤色顔料が塗付さ



第18図 宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図3 (XI A-2③~XIF類土器)

れており、器内外面ともに丁寧に研磨されている。

XIF類 (第17図63)

XIF類は土錘である。直径2.8cm、高さ5cmの円柱形で、直径1.2cmの円孔を穿つ。

②石器 (第19図64~71)

宮ノ前遺跡からは、Ⅲ層から、縄文時代後期から中世までの非常に長い期間に渡る時代の遺物が検出されており、時間的な前後関係はあまり判然としない。また、遺物の出土状況も、数が少なくまばら点在して出土している、という状況であった。このため、層位によって時期差を捉えるのが困難であるので、石器も土器と同様器種による分類に従い記述を行った。8点を図化した。

剥離痕を持つ石器 (第19図64)

1点を図化した。何の石器であるかは判然としないが、図で下方とした部分に刃部調整痕と思われる剥離痕が認められる。石材は安山岩である。

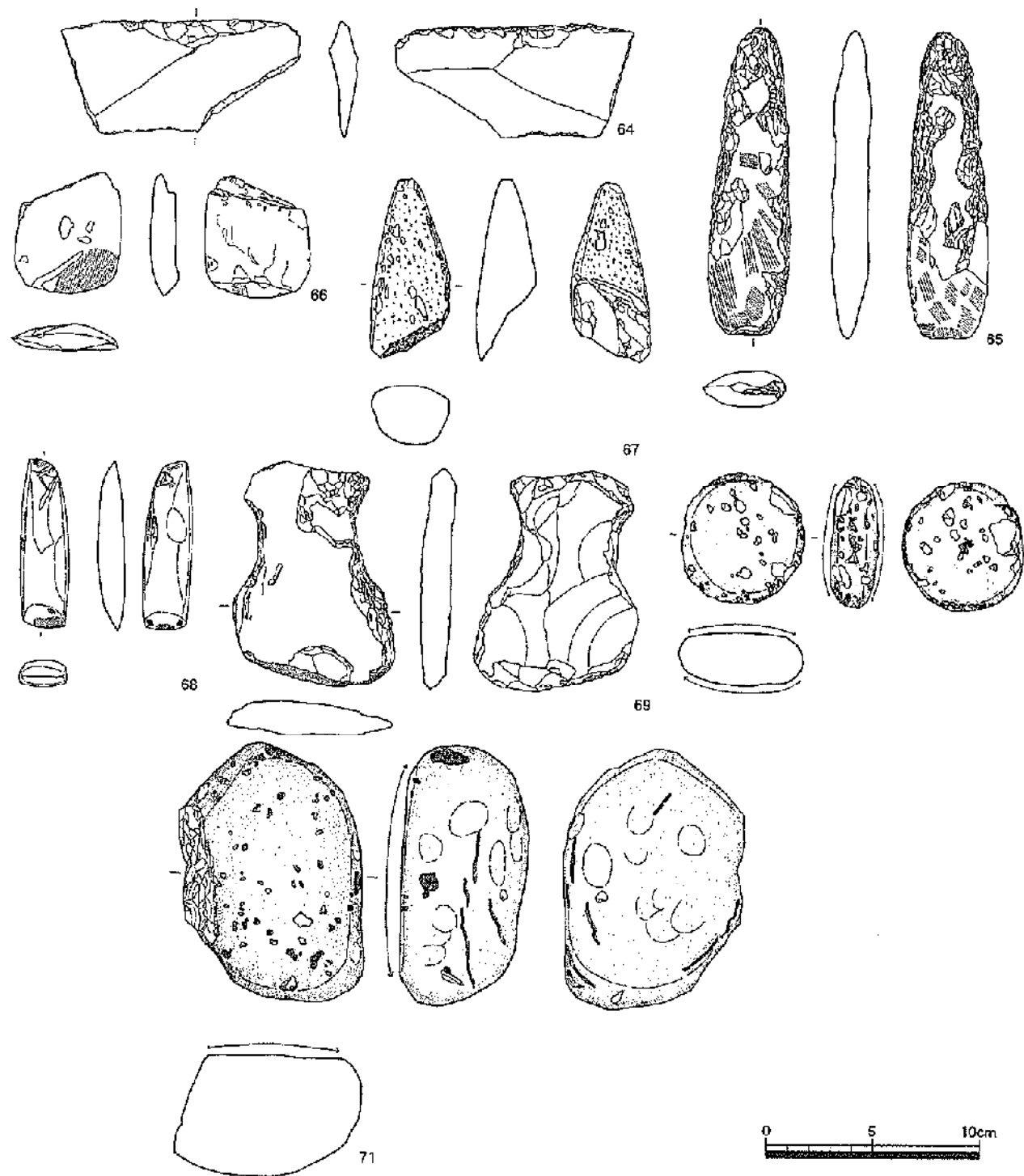
磨製石斧 (第19図65~68)

4点を図化した。65は泥岩からなる石斧であるが、磨滅・欠損が激しく、詳細な観察はできない。軸方向より若干斜方向に使用痕が残っている。66は磨製石斧の刃部である。石材は粘板岩で、軸方向とほぼ平行に使用痕が残っている。67は磨製石斧の柄部で、石材は安山岩であると思われる。表面は研磨され概ね丁寧に仕上げられている。68は小型の石斧で、軸の両端に刃部を有する。図の上方の刃部には、軸方向に対して斜方向に使用痕が残る。図の下方の刃部には、軸方向と平行に使用痕が残る。器面は研磨され概ね丁寧に仕上げられており、実際に握ってみると丁

第4表 宮ノ前遺跡包含層出土土器観察表

形胎土のS・C・K・U・SはそれぞれS=石英、C=長石、K=高岭石、U=雲母を指す。
 ※表中の色については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元後である。)

種別 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		底	備考
							内	外	内	外		
15	1	25	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR4/3に5Y赤褐	5YR2/3暗赤褐	ナデ	ナデ	良	
15	2	22	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/3に5Y赤褐	2.5YR6/4に5Y赤褐	ナデ、指押さえ	ナデ	良	
15	3	25	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR3/1黒褐	7.5YR4/3褐	ナデ	ナデ	良	
15	4	26	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に5Y赤褐	2.5YR5/6明赤褐	ナデ	ナデ	良	
15	5	26	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K・U	2.5YR4/1黄灰	10YR6/4に5Y赤褐	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	良	
15	6	27	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K・U	5.5YR5/6明赤褐	2.5YR3/2暗赤褐	ナデ	ミガキ	良	
15	7	25	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	10YR3/4暗赤	ナデ	ナデ	良	9 底面に粗織痕
15	8	26	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	5YR7/4に5Y赤褐	2.5YR7/6褐	ナデ、指ナデ	ナデ	良	12 底面に粗織痕
15	9	29	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR5/1赤灰	2.5YR6/3に5Y赤褐	ナデ、指ナデ	ナデ	良	10 底面に粗織痕
15	10	27	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	良	11 底面に粗織痕
15	11	26	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	210YR5/1褐灰	5YR6/6褐	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	良	13
15	12	8	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K・U	7.5YR8/3に5Y赤褐	2.5YR6/6褐	ナデ、指押さえ	ナデ、指押さえ	良	9
15	13	27	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR7/2明褐灰	2.5YR6/9褐	ナデ	ナデ	良	7
15	14	25	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR3/1黒褐	2.5YR5/4に5Y赤褐	ナデ	ナデ	良	10
15	15	26	Ⅲ	鉢	底部	S・C・K・U	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/8赤褐	ケズリ	ナデ	良	5
15	16	21	Ⅲ	深鉢	底部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR4/6赤褐	ケズリ	ナデ	良	10
15	17	18	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	2.5YR3/6暗赤褐	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	良	
15	18	2	Ⅲ	鉢	口縁部	S・C・K・U	7.5YR2/3暗赤褐	7.5YR4/2灰褐	ナデ	ナデ	良	
15	19	2	Ⅲ	鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に5Y赤褐	10YR3/1黒褐	ナデ	ナデ、指ナデ	良	
15	20	2	Ⅲ	鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/9褐	5YR2/2暗赤	ナデ	ナデ	良	
15	21	26	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/3に5Y赤褐	5YR3/0暗赤	ナデ	ナデ	良	
15	22	18	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR3/1暗赤灰	2.5YR3/4暗赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	23	4	Ⅲ	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6褐	5YR1/2灰褐	指ナデ	ナデ	良	
15	24	26	Ⅲ	深鉢	胴部	S・C・K・U	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	ナデ	ナデ	良	
15	25	4	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR5/4に5Y赤褐	ナデ	ナデ、指ナデ	良	
15	26	4	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6褐	5YR1/6褐	ナデ	ナデ	良	
15	27	25	Ⅲ	深鉢	胴部	S・C・K	10YR6/1褐灰	10YR4/1褐灰	ナデ	ナデ、ミガキ	良	
15	28	9	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K・U	7.5YR3/2黒褐	7.5YR4/4褐	ナデ	ナデ	良	
15	29	5	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR2/2暗赤褐	2.5YR2/2暗赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	30	3	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	10YR1/1暗灰	10YR3/2黒褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	31	2	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/3褐	5YR4/4に5Y赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	32	2	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/1黒褐	10YR3/2黒褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	33	2	Ⅲ	一	胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	10YR4/2灰黄褐	ナデ	ナデ	良	外面に粗織痕
15	34	2	Ⅲ	一	胴部	S・C・K	5YR4/8赤褐	7.5YR4/4褐	ナデ	ナデ	良	外面に粗織痕
15	35	3	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	10YR2/2暗赤褐	ミガキ	ミガキ	良	
15	36	27	Ⅲ	鉢	底部	S・C・K	2.5YR3/3暗赤褐	2.5YR3/6暗赤褐	ミガキ	ミガキ	良	6
15	37	5	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K・U	7.5YR7/4に5Y赤褐	7.5YR7/4に5Y赤褐	ナデ	ナデ、指押さえ	良	26
15	38	26	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K・U	5YR7/4に5Y赤褐	2.5YR6/4に5Y赤褐	ナデ、指押さえ	ナデ	良	
15	39	27	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K・U	5YR6/6褐	5YR4/9赤褐	ナデ	ナデ	良	
15	40	26	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/8黒褐	5YR7/6褐	ハケメ	ハケメ	良	15
15	41	14	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR6/6褐	ハケメ、指押さえ	ハケメ	良	
15	42	13	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR6/6褐	指押さえ、ナデ	ハケメ	良	
15	43	14	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR5/6明赤褐	7.5YR5/1灰褐	ハケメ	ハケメ	良	
15	44	18	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K・U	2.5YR2/1赤黒	2.5YR6/8褐	ハケメ、指押さえ	ハケメ	良	
15	45	14	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐	2.5YR6/6褐	ハケメ、指押さえ	ハケメ、指押さえ	良	
15	46	4	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/4褐	5YR4/8赤褐	ハケメ	ハケメ	良	
15	47	7	Ⅲ	浅鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR4/8赤褐	5YR3/3暗赤褐	ナデ	ナデ、指ナデ	良	
15	48	17	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR6/6褐	ハケメ	ハケメ	良	
15	49	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	7.5YR4/6褐	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	良	
15	50	—	—	一	胴部	S・C・K	10YR6/4に5Y赤褐	5YR5/4に5Y赤褐	指押さえ	ナデ	良	
15	51	26	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	10YR7/3に5Y赤褐	7.5YR7/1灰白	ハケメ	ハケメ、ナデ	良	突帯に施した刻目に粗織痕
15	52	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	10YR8/3黄褐	10YR5/3に5Y赤褐	ナデ	ハケメ	良	
15	53	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	10YR7/3に5Y赤褐	10YR6/4に5Y赤褐	指押さえ	ハケメ、ナデ	良	
15	54	—	—	一	胴部	S・C・K・U	10YR7/6明黄褐	10YR4/3に5Y赤褐	指ナデ	ハケメ	良	
15	55	14	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐	5YR4/4に5Y赤褐	ナデ	ナデ	良	
15	56	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	10YR6/4に5Y赤褐	5YR4/9赤褐	ハケメ、指押さえ	ハケメ、指押さえ	良	7.8
15	57	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	7.5YR6/6褐	7.5YR5/4に5Y赤褐	ミガキ、ハケメ	ミガキ	良	
15	58	7	Ⅲ	浅鉢	底部	S・C・K	10YR5/3に5Y赤褐	5YR7/6褐	ナデ	ミガキ、ハケメ	良	9
15	59	7	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	7.5YR5/4に5Y赤褐	10YR6/4に5Y赤褐	ハケメ	ナデ、指押さえ	良	7
15	60	7	Ⅲ	一	底部	S・C・K	7.5YR7/4に5Y赤褐	10YR7/4に5Y赤褐	ミガキ	ミガキ、ハケメ	良	8
15	61	14	Ⅲ	浅鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐	2.5YR4/8赤褐	ナデ	ミガキ	良	
15	62	27	Ⅲ	一	口縁部	S・C・K	2.5YR4/6赤褐	10YR3/4暗赤	ミガキ	ミガキ	良	10
15	63	10	Ⅲ	土鉢	—	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	ナデ	ナデ	良	2.9

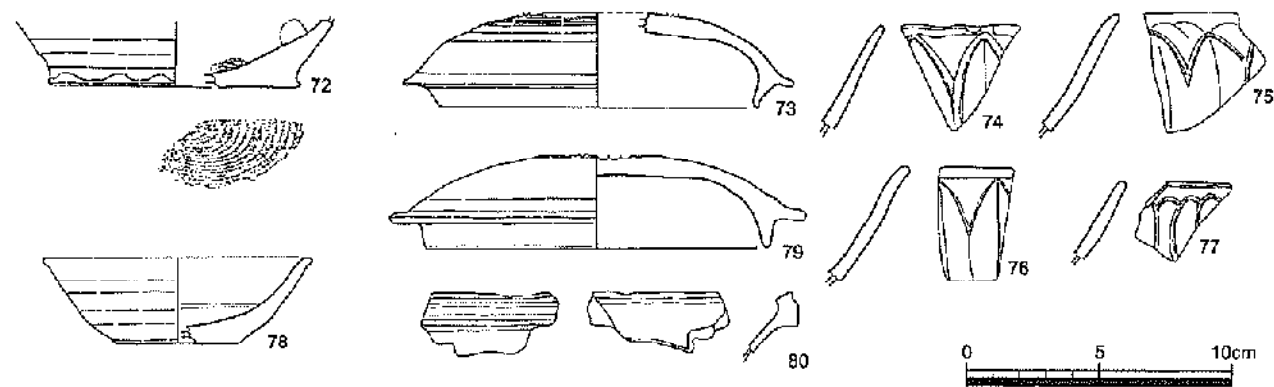


第19図 宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図4 (石器)

度指を当てたと思われる部分に、指頭大の窪みがある。石材は泥岩がホルンフェルス化してやや硬質になったものである。

打製石斧 (第19図69)

1点を図化した。形態的にはいわゆる扁平打製石斧で、有肩石斧と呼ばれるものである。石材は泥岩がホルンフェルス化したものと思われるが、非常に硬質であり、熱変性を受けている可能性がある。軸方向と平行に使用痕が残っている。他の部位と比較して、使用痕が残っている部位



第20図 宮ノ前遺跡包含層出土遺物実測図5 (土師器・須恵・磁器・陶器)

は激しく磨耗しており、使用頻度が極めて高かったものと思われる。

磨石 (第19図70)

1点を図化した。70は、全体的に磨られているが、側縁部に一部敲打痕が見られる。石材は安山岩である。

磨面を持つ石器 (第19図71)

71は、安山岩からなる石器で、図で表面とした部分に磨面を有する。側縁部、図で裏面とした部分に指頭大の窪みがある。

③土師器 (第20図72)

土師器も他の遺物と同様Ⅲ層からの出土である。72は碗の底部である。色調は外面・内面ともに浅黄褐色である。底径は9cmで、低部に回転糸切痕が残る。

④須恵器 (第20図73)

須恵器も他の遺物と同様Ⅲ層からの出土である。73は坏蓋で、つまみ～天井部を欠損している。肩部がやや張り、端部は叉状に分かれる。底部はやや下方に下がりぎみで、口唇部は若干内傾する。色調は内外面ともに灰色を呈する。

⑤磁器 (第20図74～78)

磁器も他の遺物と同様Ⅲ層からの出土である。74～76は竜泉窯系の青磁で、碗Ⅰ5類に分類されると考えられるものである。いずれも口縁部～胴部が残存しており、胴部には鑄蓮弁を施す。いずれもオリーブ灰色の磁胎に灰オリーブ色の釉が施されている。12世紀後半から13世紀前半にかけてのものと思われる。77は竜泉窯系の青磁で、碗Ⅲ2類に分類されると考えられる。口縁部～胴部が残存しており、胴部には鑄蓮弁を施すが、74～76と比して蓮弁文がやや簡略化したものと思われる。灰白色の磁胎にオリーブ灰色の釉が施されている。15世紀後半から16世紀前半にかけてのものと思われる。78は竜泉窯系の青磁と思われるものであるが、詳細は不明である。底径は4.5cmで、オリーブ灰色の磁胎に灰オリーブ色の釉が施されている。

⑥陶器 (第20図79, 80)

陶器も他の遺物と同様Ⅲ層からの出土である。79は、薩摩焼きで、18世紀から19世紀ごろの苗代川系のものと思われる。大ぶりの茶冢の蓋で、つまみを欠損している。肩部はあまり張らずゆるやかに端部へと移行する。端部は大きく叉状に分かれる深身の器形である。底部は水平に開き、

口唇部はほぼ垂直に下がる。器外面は灰色の釉薬が施されており、器内面は赤褐色を呈する。胎土は黒色である。80は肥前焼きの、すり鉢の口縁部と思われるが、詳細については不明である。口縁端部に2条の浅い沈線が廻る。器外面に黒褐色の釉薬が施されており、器内面は褐色を呈する。胎土はにぶい黄褐色である。

第5表 宮ノ前遺跡出土石器観察表

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
18	65	26	III	磨製石斧	泥岩	14.3	3.8	1.7	130	
18	66	26	III	磨製石斧	粘板岩	5.7	5.0	1.7	45	
18	67	24	III	磨製石斧	安山岩	6.5	3.5	2.6	70	
18	68	2	III	磨製石斧	泥岩がホルンフェルス化したもの	7.8	2.2	1.2	35	
18	69	2	III	打製石斧	泥岩がホルンフェルス化したもの	10.3	7.6	1.5	140	
18	70		III	磨石・敲石	安山岩	6.1	5.7	2.3	130	
18	71	15	III		安山岩	12.1	8.5	5.8	900	

第6表 宮ノ前遺跡出土土師器観察表

※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部位	色調			径	形態の特徴	備考
						内	外	胎土			
19	72	5	III	碗	底部	7.5YR7/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	9	底は回転糸切	

第7表 宮ノ前遺跡出土須恵器観察表

※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部位	色調			径	形態の特徴	備考
						内	外	胎土			
19	78	7	III	坏蓋	肩部～口縁部	7.5YR6/1灰	7.5YR6/1灰	7.5YR6/1灰	12		

第8表 宮ノ前遺跡出土磁器観察表

※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部位	色調			径	形態の特徴	備考
						内	外	胎土			
19	74	6	III	碗	口縁部	10Y6/2灰オリーブ	10Y6/2灰オリーブ	5GY7/1明オリーブ灰	—	胴部外面に縮蓮弁文	竜泉窯系I5類
19	75	6	III	碗	口縁部～胴部	10Y5/2灰オリーブ	10Y5/2灰オリーブ	5GY6/1オリーブ灰	—	胴部外面に縮蓮弁文	竜泉窯系I5類
19	76	8	III	碗	口縁部～胴部	7.5Y5/3灰オリーブ	7.5Y5/3灰オリーブ	5GY6/1オリーブ灰	—	胴部外面に縮蓮弁文	竜泉窯系I5類
19	77	16	III	碗	口縁部～胴部	5GY5/1オリーブ灰	5GY5/1オリーブ灰	10Y8/1灰白	—	胴部外面に縮蓮弁文	竜泉窯系III2類
19	78	7	III	小皿	底部	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	2.5GY7/1明オリーブ灰	4.5		

第9表 宮ノ前遺跡出土陶器観察表

※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	部位	色調			径	形態の特徴	備考
						内	外	胎土			
	79	28	III	蓋	天井部～口縁部	10Y4/4赤褐	7.5Y4/1灰	10Y2/2黒	13		磨製焼き、古代用系
	80	4	III	甕	口縁部	7.5Y4/3褐	7.5Y2/2黒褐	10Y6/3にぶい黄橙	—		肥前焼き?

第IV章 重田遺跡の発掘調査

第1節 発掘調査及び遺跡の概要

①発掘調査の概要

発掘調査は、平成11年10月19日から平成11年12月1日まで実施した。

調査区内に、6m×4.5mのグリッドを1区から8区まで任意に設定して調査を行った。9区以東については、廃土置場や、近隣の農耕用車の交通等の問題もあり、一部発掘調査が実施できない区域もあった。

②遺跡の概要

重田遺跡からは、地表より数えて第3番目の土層(III層)から、遺物と遺構が検出された。いずれも、縄文時代前期のものである。

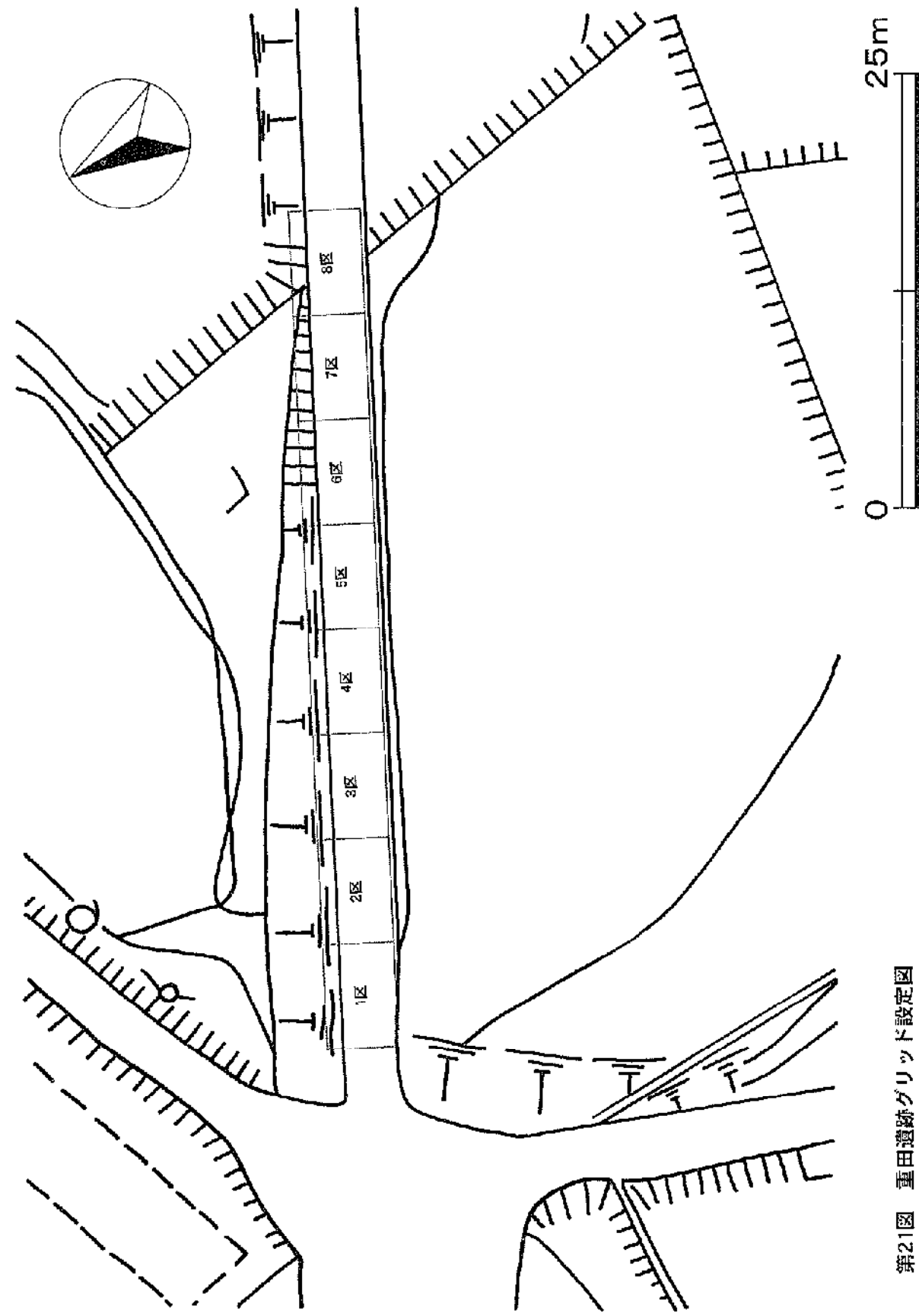
確とした遺構は検出されておらず、三角形のプランを有する土坑が1基と、長軸1m×短軸0.8mの楕円形の土坑が1基検出されたのみである。

遺物は、縄文時代前期のいわゆる深浦式系土器が大半を占め(他に若干曾畑式土器の出土が見られた)、中にはほぼ完形に近いものも含まれる。出土状況は、大量の土器片が足の踏み場のないうちほど出土する、という状況であった。

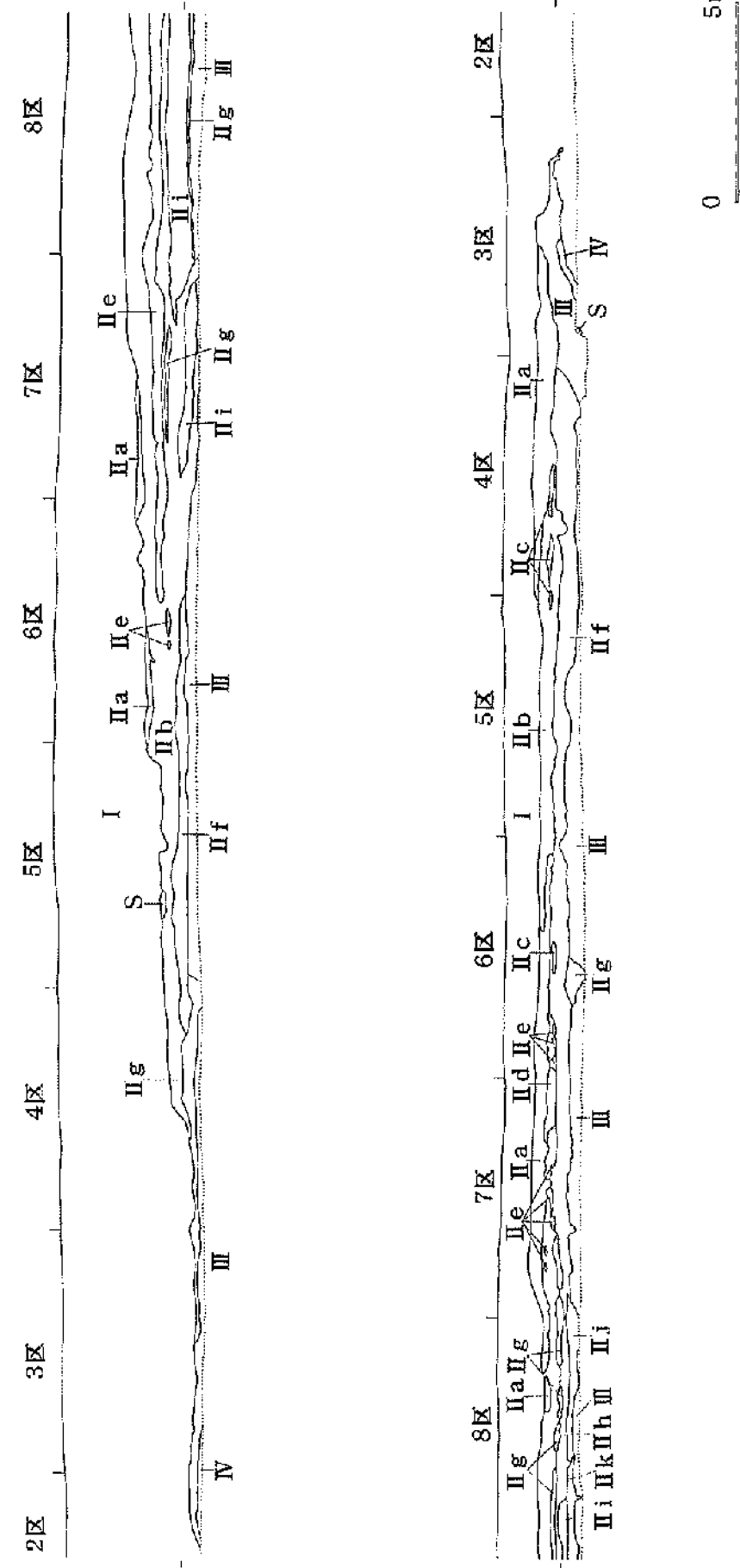
第2節 層 序

場所により若干の相違はあるが、基本的には以下のとおりである。

- I 層 鉄道(旧JR大隈線)造成時の盛土。シラス土を基本とし、様々な土を含む。
- II a 層 黒褐色土層(粗砂)
- II b 層 褐色土層(細砂・粘質)
- II c 層 にぶい黄褐色土層(細砂・粘質・軽石を多く含む・一部に堆積)
- II d 層 明黄褐色土層(シルト質砂・一部に堆積)
- II e 層 にぶい黄褐色土層(粗砂・一部に堆積)
- II f 層 褐色土層(細砂・粘質土)
- II g 層 褐色土層(細砂・軽石を多く含む・一部に堆積)
- II h 層 灰黄褐色土層(粗砂・一部に堆積)
- II i 層 にぶい黄褐色土層(シルト質砂・一部に堆積)
- II j 層 にぶい黄褐色土層(砂質土・一部に堆積)
- II k 層 褐灰色土層(粗砂・一部に堆積)
- III 層 灰褐色土層(細砂・縄文時代前期の遺物包含層)
- IV 層 褐色土層(細砂)



第21図 重田遺跡グリッド設定図



第22図 重田遺跡壁面土層堆積状況

第3節 重田遺跡の遺構及び遺構内出土の遺物について

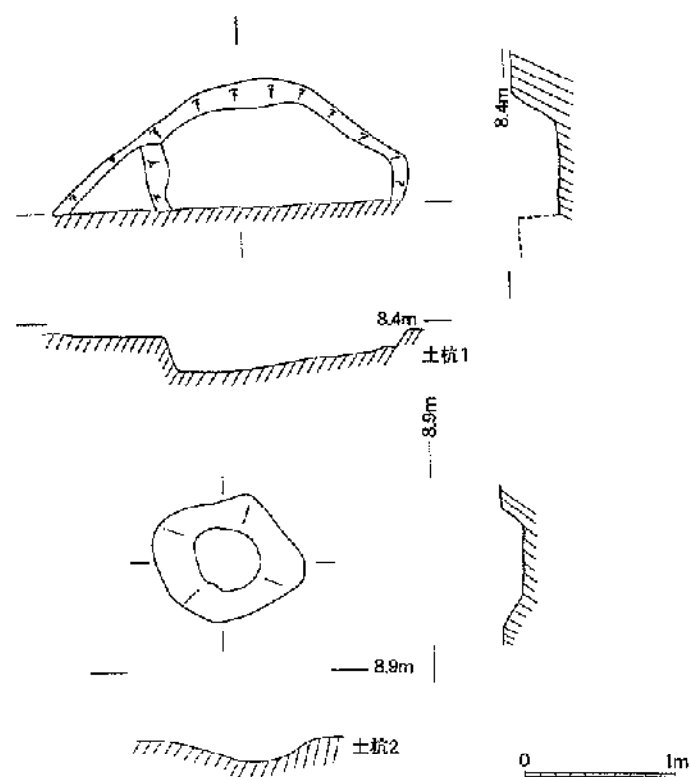
重田遺跡からは、以下の遺構が検出されたが、確とした遺構は特に検出されなかった。

土坑1 (第23図)

3区と4区の境目より、底辺約2.2m、高さ約0.8mのいびつな二等辺三角形のプランを有する土坑が検出された。もっとも、この土坑1は、調査区の南側壁面に接しているため正確なプランは不明である。床面は2段の階段状になっており、高い方の段が深さ約10cm、低い方の段が深さ約40cmであった。埋土としてⅢ層が充填していた。特に遺物の出土は見られなかったが、Ⅲ層を埋土とすることから、この土坑の形成時期も縄文時代前期と考えられる。

土坑2 (第23図)

5区より検出された。長軸約1m×短軸約0.8mの楕円形のプランを有する。深さは約15cmとあまり深くなく、断面は凸レンズ状を呈する。埋土としてⅢ層が充填していた。特に遺物の出土は見られなかったが、Ⅲ層を埋土とすることから、この土坑の形成時期も縄文時代前期と考えられる。



第23図 土坑1及び土坑2

磨石・石皿・石斧のセット状遺構 (第24図)

7区より、磨石・石皿・石斧がセット状に出土した。出土状況としては、石皿の上に磨石が置かれるように出土し、そのすぐ近辺より石斧が2点出土する、という状況であった。周辺には、特に掘り込み等は観察できなかった。詳細については不明であるが、遺構として取り扱った。出土層はⅢ層であり、縄文時代前期のものと思われる。以下、それぞれの石器について若干触れておく。

①磨石 (第25図1)

石皿の上に置かれるように出土した。器表面は全体的に丁寧に研磨されている。外面に一部敲打痕が見られる。石材は安山岩である。

②石皿 (第25図2)

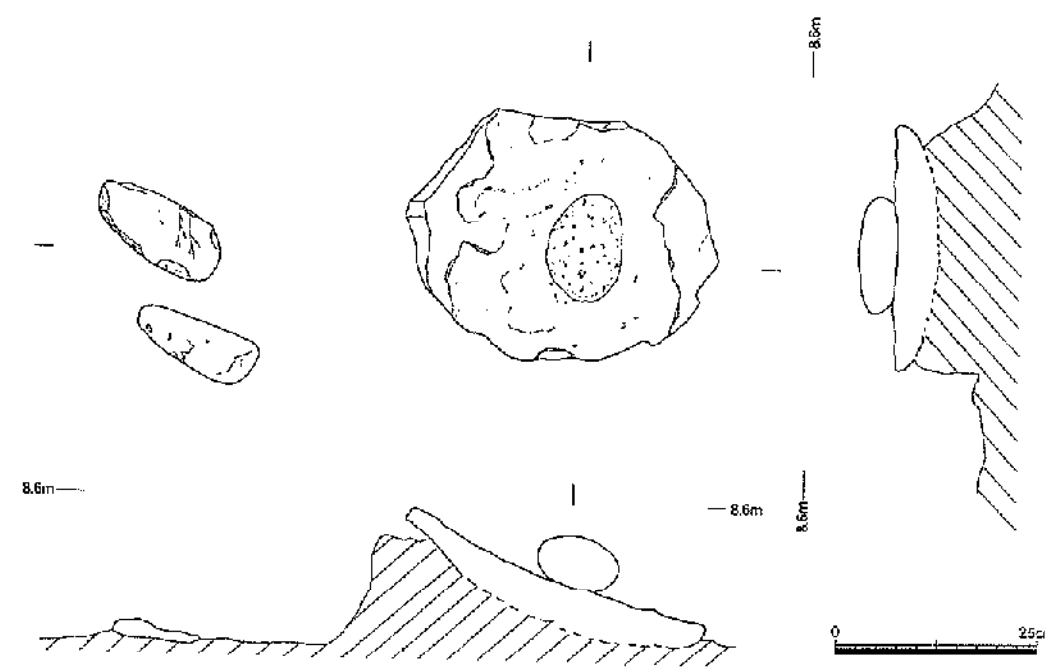
磨石の下から、石皿を置く台のように出土した。表面がごく僅かに窪む。石材は泥岩である。

③石斧 (第25図3, 4)

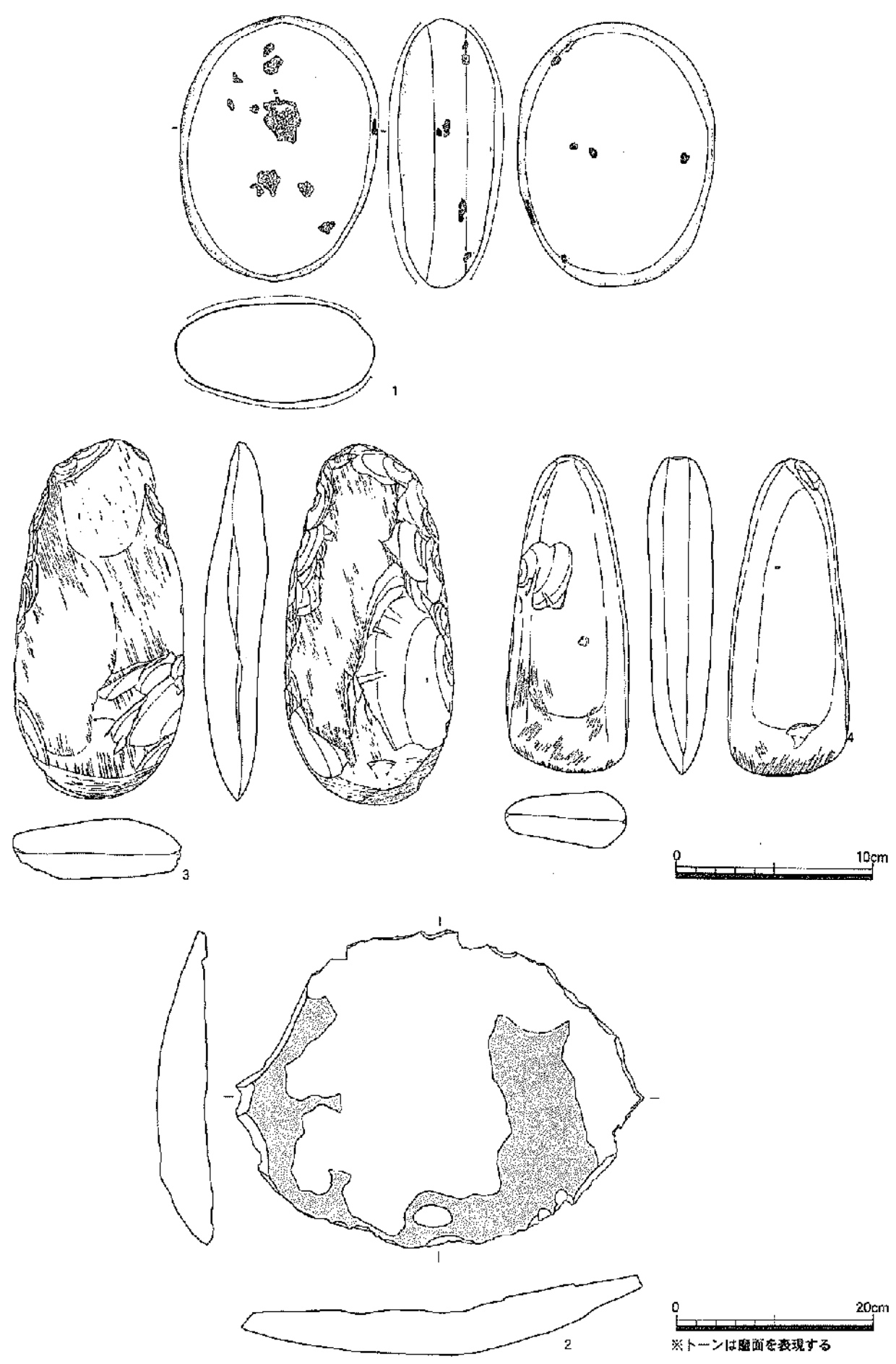
磨石・石皿に隣接して2点出土した。1点は側縁部の一部に研磨痕を有する局部磨製石斧である。軸方向とやや斜方向に使用痕が観察できる。石材はホルンフェルスである。もう1点は、刃部に、軸方向と平行・あるいは軸方向とやや斜方向に使用痕が観察できる。石材はホルンフェルスである。

第10表 重田遺跡遺構内出土遺物観察表

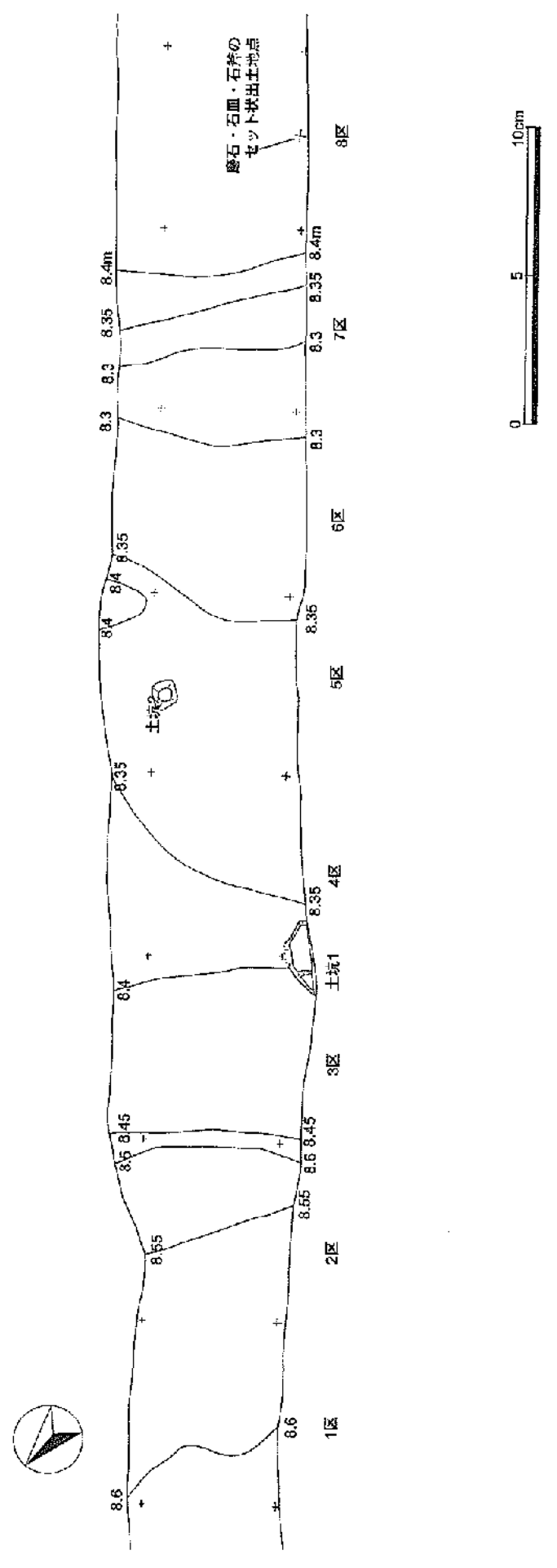
種別 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
25	1	7	Ⅲ	磨石	安山岩	13.6	10.0	5.0	990	
25	2	7	Ⅲ	石皿	泥岩	40.8	31.7	5.0	600	
25	3	7	Ⅲ	局部磨製石斧	ホルンフェルス	18.3	8.5	3.0	470	
25	4	7	Ⅲ	磨製石斧	ホルンフェルス	16.1	6.0	3.2	785	



第24図 磨石・石皿・石斧のセット状遺構出土状況



第25図 重田遺跡遺構内出土遺物実測図



第26図 重田遺跡IV層上面の地形と遺構配置図

第4節 包含層出土遺物

重田遺跡からは、第2節で記したように、Ⅲ層から縄文時代前期～中期初頭の遺物が検出された。

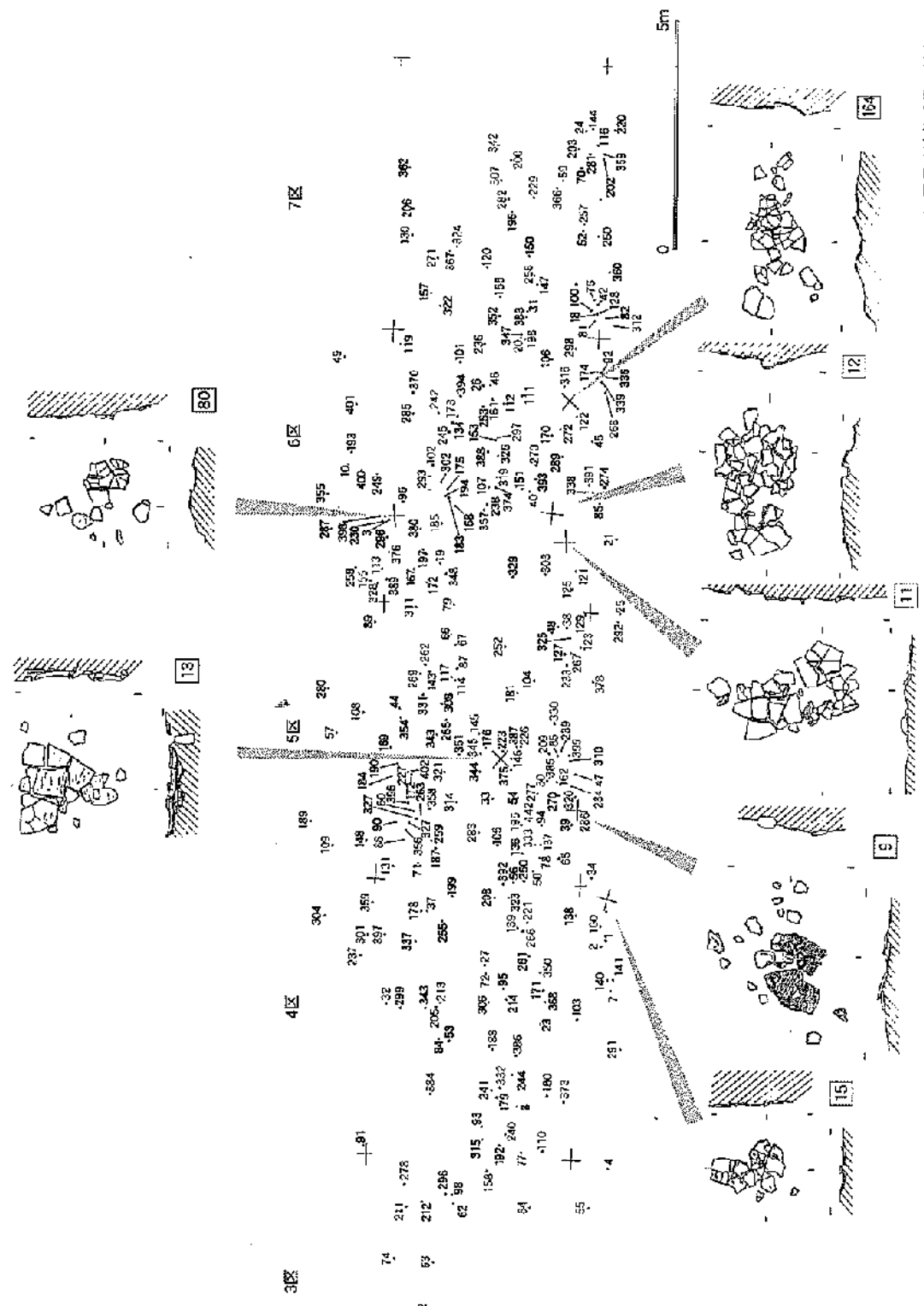
①土器

重田遺跡からは、Ⅲ層から、縄文時代前期～中期初頭の遺物が検出されている。出土した土器の型式は、縄文時代前期後半に位置付けられる曾畑式土器と、縄文時代中期初頭～前葉に位置付けられるいわゆる深浦式系土器、及び深浦式土器と同時期と考えられる無文土器の3型式に限られる。曾畑式土器については、出土数は限られており、本遺跡の出土遺物の大半を占めるのは深浦式系土器及び無文土器で、中にはほぼ完形に近いものも含まれる。深浦式土器については、現在型式概念が拡大しているため、本章では広義の「深浦式系土器」という呼称を用いることにする。また、深浦式系土器と併行関係にあると考えられる無文土器については確とした型式設定がされておらず、素文土器や条痕文土器等の呼称があるため、本章では便宜上「無文土器」と呼称することにする。出土状況は、大量の土器片が足の踏み場のないほど出土する、という状況であった（遺物包含層自体はあまり厚くない）。

以下、形態や器種による分類に従って記述を行っていく。このうち、出土遺物9・11・12・13・15・80・164については、土器片が比較的まとまって検出されていたので、出土状況を付しておく。小片で明確な特徴が無く、時代及び型式分類が困難な土器については、土器少片として一括して取り扱い、各地区ごとに点数と重量を測定するに留めた（第11表）。これらの土器については、曾畑式土器の口縁部、深浦式系土器の口縁部（貝殻連点文が施されているもの・貝殻刺突文が施されているもの・相交弧文が施されているもの）、無文土器の口縁部（貝殻条痕文が器外面に施されているもの・器内面に施されているもの・器内外面ともに施されているもの・全くの無文のもの）、曾畑式土器の胴部、深浦式土器の胴部（貝殻連点文が施されているもの・貝殻刺突文が施されているもの・相交弧文が施されているもの・突帯を有するもの）、無文土器の胴部（貝殻条痕文が器外面に施されているもの・器内面に施されているもの・器内外面ともに施されているもの・全くの無文のもの・補修孔を有するもの）、深浦式系土器あるいは無文土器の底部（貝殻条痕文が器内外面ともに施されているもの・全くの無文のもの）という分類に留めた。

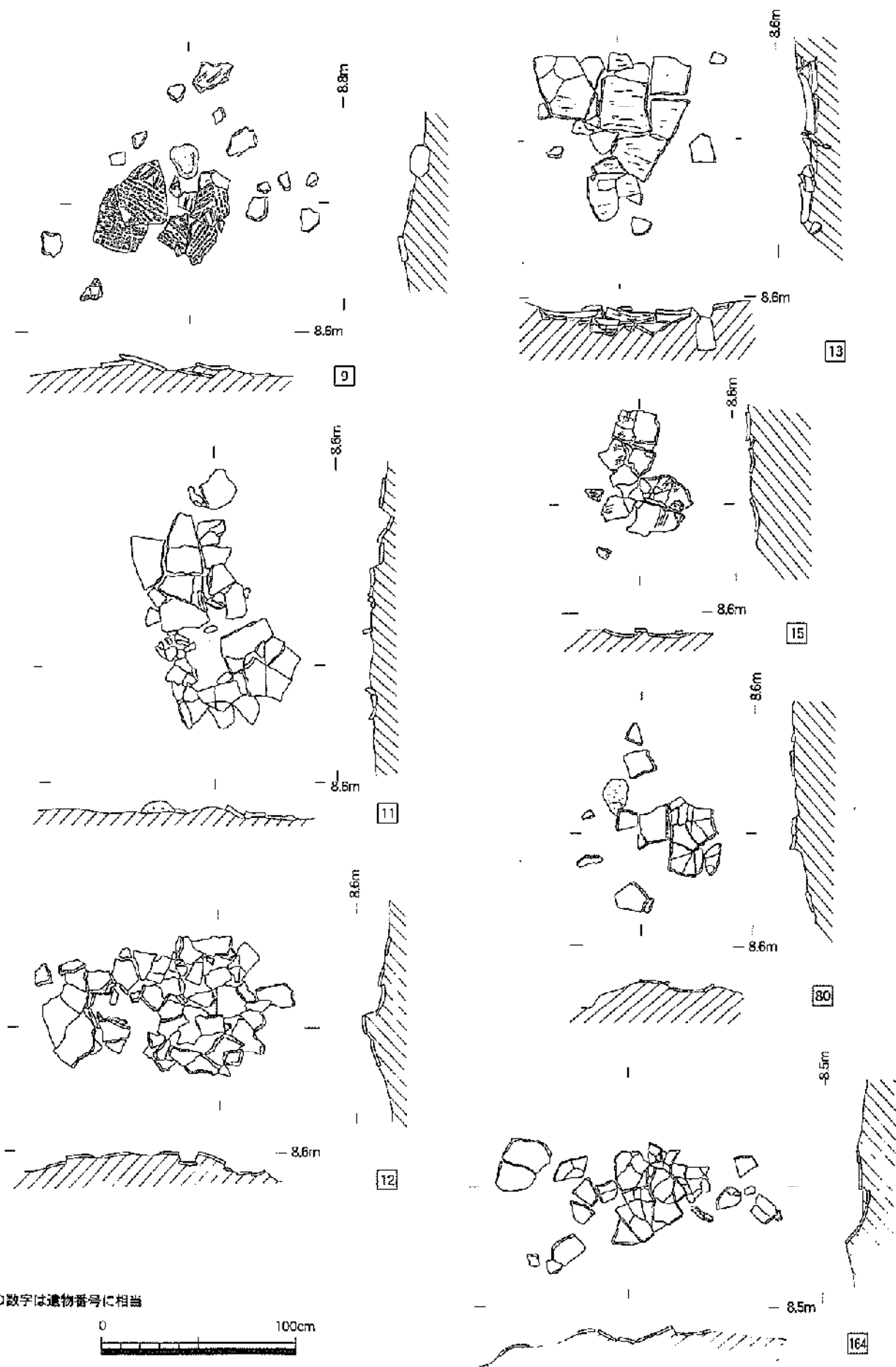
第11表 重田遺跡出土土器点数・重量表

地区	口縁部														胴部			
	曾畑式		深浦式系土器				無文土器				無文土器				補修孔			
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)		
1	2	60																
2																		
3	18	335	49	550	39	360			15	121	1,300	177	2,110	296	4,335	155	1,370	
4	23	280	131	1,895	10	170	4	80		199	2,985	365	4,020	338	7,410	843	7,270	
5	14	265	211	2,880	30	616	29	540		462	8,150	666	10,270	389	14,680	1,938	18,610	
6	27	450	206	2,765	21	365	18	385		289	4,435	563	8,070	670	15,150	1,362	12,630	
7	1	5	54	790	1	70	3	60		91	1,315	162	2,950	255	6,740	258	4,580	
8																		
16			20	165	2	30	1	30	1	40	30	180	62	650	94	1,880	128	740



※番号は遺物番号に対応

第27図 重田遺跡包含層遺物出土状況(平面図)



第28図 包含層出土遺物9・11・12・13・15・80・164出土状況

縄文時代前期の土器 (土器Ⅰ～Ⅳ類 第29図1～第53図402)

重田遺跡出土の土器は、縄文時代前期後半に位置付けられる曾畑式土器と考えられるものと、縄文時代中期初頭～前葉に位置付けられる深浦式系土器と考えられるもの、及び同時期と考えられる無文土器に限られる。これらは、同一包含層から出土しており、時間的な前後関係は不明であるため、形態や器種による分類に従って記述を行うことにする。曾畑式土器を土器Ⅰ類、深浦式系土器を土器Ⅱ類、深浦式系土器と同時期と考えられる無文土器をⅢ類と大別して、器形や胎土・器面調整といったそれぞれの特徴ごとに細分を試みた。

土器Ⅰ類 (第29図1～8)

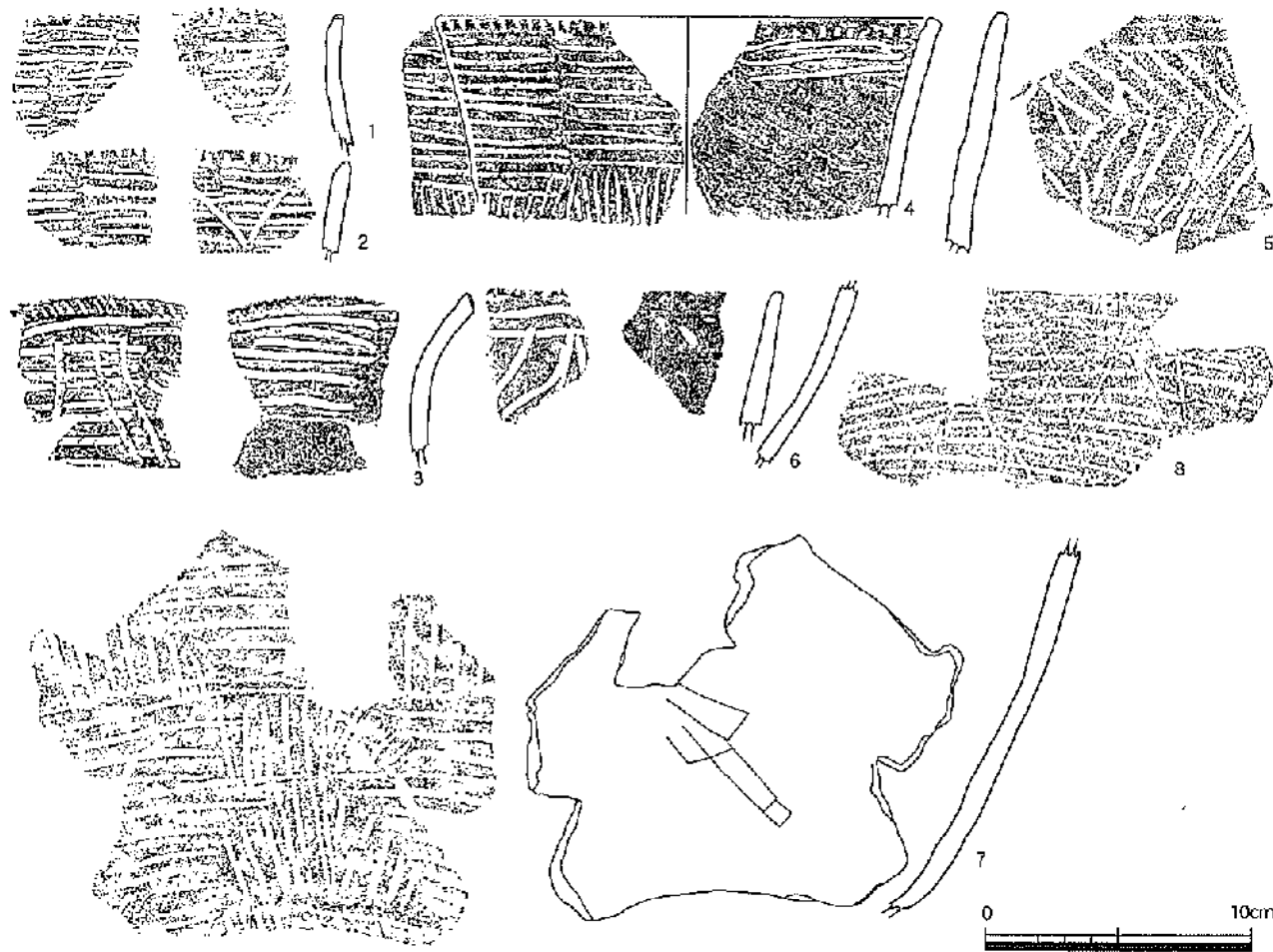
器面調整や器形から、縄文時代前期後半に位置付けられているいわゆる曾畑式土器に分類されると考えられるものをⅠ類とした。

Ⅰ-1 a類 (第39図1～4)

Ⅰ類の中で、口縁部付近が残存しているものをⅠ-1類とした。その中で、全体的に仕上げが丁寧で文様の確としたものをⅠ-1 a類とした。1は口縁部先端が弱く外反する器形である。口唇部には、細い原体の工具によると思われる細かい刻目が廻る。器外面に、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の短い沈線文を数条施す。横位に平行に数条施し、その上から斜方向の沈線文を、鋸歯状に施す。内面も外面と同様の文様構成である。2は外側に外傾する器形である。口唇部と口縁部内面上端に、細い原体の工具による細かい刻目が廻る。文様構成はⅠと類似する。口縁部外面に細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の短い沈線文を横方向に平行に数条施す。器内面も外面と同様短い沈線文が横位に並行に数条施され、その上から斜方向の沈線文を、鋸歯状に施す。3は先端が大きく外反する器形で、口唇部に、細い原体の工具によると思われる斜方向の細かい刻目が廻る。器外面の口縁部及び頸部には、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を横方向に平行に数条施し、その上から同様の沈線文を縦方向から斜方向に数条施している。口縁部内面に、同様の沈線文を、横位に平行に数条施す。4は外側に大きく外傾する器形である。口唇部と口縁部内面上端に、細い原体の工具によると思われる細かい刻目が廻る。口縁部外面には細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を横方向に平行に数条施す。その下位の頸部は文様体が口縁部のものとは異なり、沈線文を縦位に数条施すものとなっている。口縁部内面には、上端に刺突連点文が廻り、その下位に器外面と同様の沈線文を横位に数条施す。器内外面ともに、丁寧なナデ調整が施されているが、特に内面は丁寧にナデられており、ヘラミガキ状の外観を呈する。

Ⅰ-1 b類 (第29図5・6)

Ⅰ-1 b類は、Ⅰ-1 a類と比して全体的に仕上がりが粗雑なものである。胎土もⅠ-1 a類とは異なる。5は、外側に外傾する器形である。口唇部に、細い原体の工具によると思われる斜方向の刻目が廻るが、Ⅰ-1 a類のそれのように規則正しくはなく、深さも浅い。口縁部外面には、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を数条施す。口縁部文様体を区画するように横位の沈線文を文様体上位に1条、文様体下位に1条それぞれ施す。文様体中には、斜方向の沈線文を、羽状に幾重にも施す。他に、縦位や斜方向の沈線文も若干施文されている。器内面には特に施文は見られない。6は外側に外傾する器形である。口唇部に細い原体の工具ま



第29図 重田遺跡包含層出土遺物実測図1(土器Ⅰ類)

たは爪によると思われる細かい刻目が廻るが、5と同様-1a類のそのように規則正しくはなく、数も少ない。口縁部外面に、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を数条施す。口縁部上端に2条横位に施し、その上から斜方向に、曲線的な沈線文を数条施す。器内面には特に施文は見られない。

Ⅰ-2類(第29図7, 8)

曾畑式土器と思われるもののうち、胴部付近が残存しているものをⅠ-2類とした。7は、胴部から底部付近まで残存しているものである。器外面に、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を数条施す。沈線文は横位、縦位、斜方向に幾何学的に全体的に施文されている。

器内面はやや粗くナデ調整されているが、施文は見られない。8も7と同様胴部から底部にいたる部位と思われる。器外面に、細い棒状の原体と思われる工具で、やや太い凹線状の沈線文を数条施す。横位に数条並行に施し、その上から斜方向の沈線文を、X字状に数条施す。器内面はやや粗くナデ調整されているが、施文は見られない。

土器Ⅱ・Ⅲ類(第30図9~第53図402)

器面調整や器形から、いわゆる深浦式系土器に分類されることが考えられるものをⅡ類、深浦式系土器と併行関係にあると考えられる無文土器をⅢ類とした。

本遺跡出土の資料は、ある程度の復元が可能なのが含まれており、それらが比較的大型のもの

のであるので、単純に比較的大型のものをⅡA及びⅢA類とし、比較的小型のもの及び小片のものをⅡB類及びⅢB類と大別して、さらに器形や胎土・器面調整といったそれぞれの特徴ごとに細分を試みた。なお、この大型、小型の分類は紙面レイアウト上の都合による便宜的な分類であり、特に土器型式分類に基づくものではないことを断っておく。以下、それぞれについて記述を行っていく。

土器ⅡA類(第30図9)

深浦式系土器と思われるもののうち、ある程度の復元が可能で、復元すると大型になるものをⅡA類とした。本報告書作成に関しては、相美伊久雄の研究を参考としたが(相美, 2000)、文様や器形に関する用語等は、相模の研究・用語を参考・引用として、以下記述を行っていくことにする。9は、口縁部が大きく外反し、口縁部下位で締まる器形のものである。口縁端部の一部に突起を有し、波状を呈する。口縁部上端付近に、棒状の原体と思われる工具で、刺突連点文を6条廻らす。その下位の、口縁部下位から底部付近にかけて広範囲に渡って、2枚貝の貝殻腹縁の「往復反転削り手法」により施文される貝殻連点文が横位に展開する。貝殻連点文の横端部には、貝殻腹縁による刺突文(貝殻刺突文)が縦位に施されており、文様帯が区画されている。器面調整は、器外面に貝殻腹縁による条痕調整が見られるが、一部をナデ消している。器内面も同様に貝殻腹縁による条痕調整が顕著に見られる。こちらはナデ調整をおこなっておらず、条痕調整がそのまま残る。

土器ⅢA類(第30図10~17)

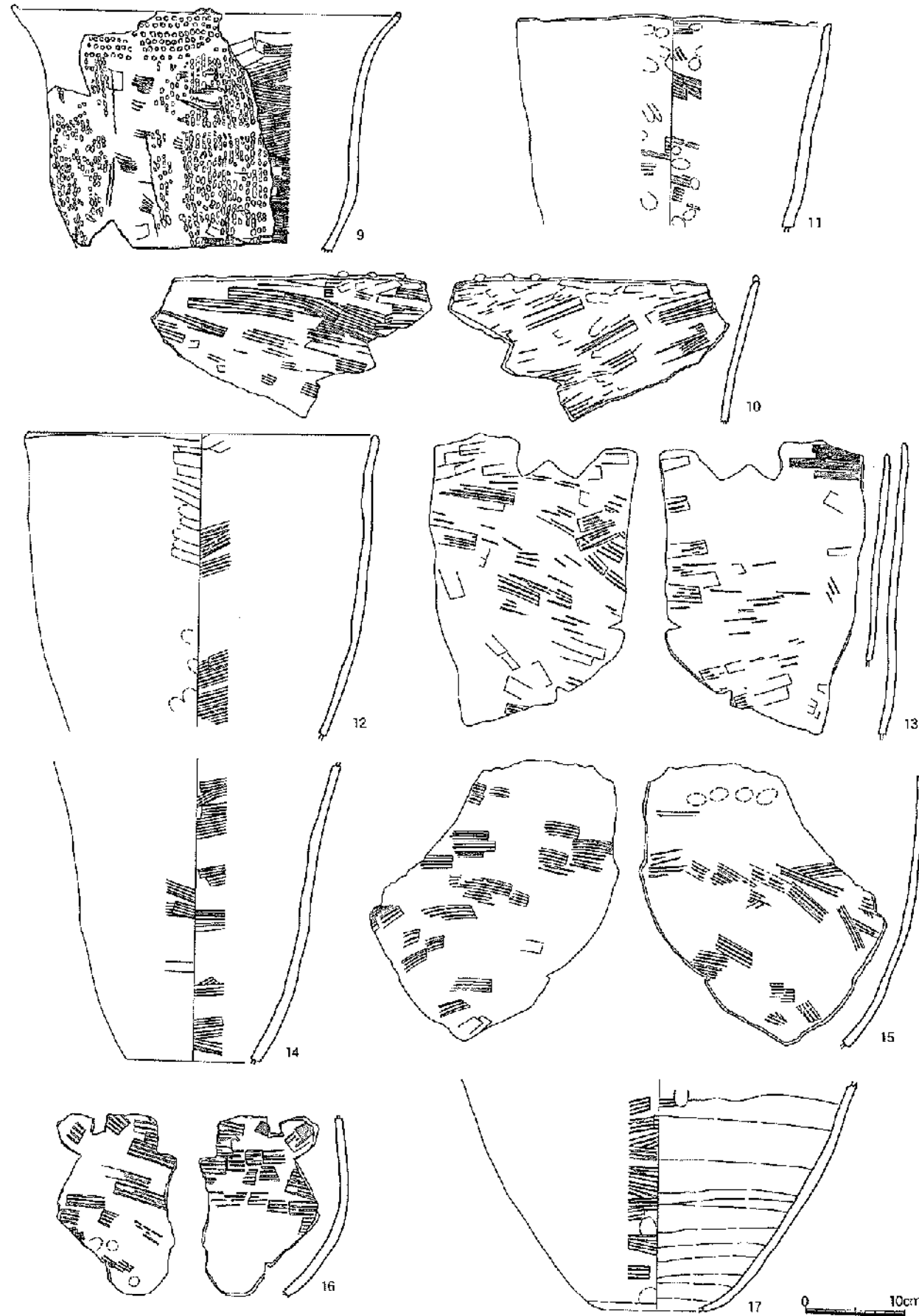
深浦式土器と併行関係にあると考えられる無文土器のうち、ある程度の復元が可能で、復元すると大型になるものをⅢA類とした。

ⅢA-1a類(第30図10)

ⅢA類のうち、口縁部が残存しているものをⅢA-1類とした。ⅢA-1類は、口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へいたる器形を有するものである。さらに、ⅢA-1類のうち、口唇部に豆状の小突起を有するものをⅢA-1a類、有しないものをⅢA-1b類とした。10は、外反する口縁部である。口唇部に豆状の小突起を3つ有する。口縁部は若干波状ぎみになっており、豆状小突起のある部分が波頂部になる。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。

ⅢA-1b類(第30図11~13)

ⅢA-1b類は、ⅢA-1類のうち、豆状の小突起を有しないものである。11の器面調整は、外面を貝殻腹縁による条痕調整しており、その後ナデ調整を行って条痕を消している。内面も同様に貝殻腹縁による条痕調整しており、その後ナデ調整を行っているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が残っている。口縁部は平坦ではなく、わずかに山形状である。12の器面調整は、外面を貝殻腹縁による条痕調整しており、その後ナデ調整を行っているが、一部条痕調整が残っている。内面も同様に貝殻腹縁による条痕調整しており、その後ナデ調整を行っているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が顕著に残っている。口縁部は平坦ではなく、わずかに山形状である。13の器面調整は、外面を貝殻腹縁による条痕調整しているが、その後ナデ調整を



第30図 重田遺跡包含層出土遺物実測図2 (土器ⅡAⅢA類)

行っておらず、条痕が顕著に残っている。内面も同様で、全体的に貝殻腹縁による条痕調整をナデ消していないが、口縁部付近にナデ調整が見られる。口縁部は平坦ではなく、山形状である。

ⅢA-2類 (第30図14)

口縁部は残存していないが、胴部から底部にかけての部位が残存しているものをⅢA-2類とした。14は、残存部位から、丸みを帯びた底部から胴部が外傾ややしてまっすぐに立ち上がり、外反する口縁部へと続く器形を有すると思われる。器外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕をナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が一部残っている。これに対して、器内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、ナデ消していない。

ⅢA-3類 (第30図15, 16)

胴部から丸みを帯びた底部へと続く部位が残存しているものをⅢA-3類とした。15は、器外面を貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕を一部ナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が一部残っている。これに対して、器内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、ナデ消していない。16は、器外面を貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕を一部ナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が一部残っている。器内面も同様に、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕をナデ消しているが、条痕調整が一部残っている。

ⅢA-4類 (第30図17)

底部付近が残存しているものをⅢA-4類とした。17は、器外面を貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕を一部ナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が顕著に残っている。器内面も同様に、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕をナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消しておらず、条痕調整が顕著に残っている。

土器ⅡB類 (第31図18～第37図133)

小片のもの、あるいは復元した大きさが比較的小型になるものを、一括してⅡB類として取り扱った。

ⅡB-a-1-(1)類 (第31図18, 19)

ⅡB類のうち、文様が貝殻連点文を主体とするものをⅡB-a類とした。ここでいう貝殻連点文とは、「二枚貝の貝殻腹縁の往復反転削り手法」により施文がなされたものである。

ⅡB-a類の中で、口縁部から胴部までの部位が残存しており、器形が予想できるものをⅡB-a-1類とした。胴部から口縁部がまっすぐに立ち上がる器形である。さらに、内外面ともに貝殻連点文が施文されているものをⅡB-a-1-(1)類とした。

18は、大きく山形に波状する口縁を有するものである。文様は、器面の内外面ともに貝殻連点文を施す。外面は、横位に展開する貝殻連点文を施す。口縁部付近に施文されるが、その下位には無文の部位があり、さらにその下位には施文される部位がある。このように、文様帯と無文の部位は区画されている。縦位の文様は見られない。口縁部付近の文様帯は、全体的に横位に施されるが、一部弧状に施文される部位もあり、この部位は相交弧文状の外観を呈する。器内面は、口縁端部に横位の貝殻連点文が廻る他に、縦位にも貝殻条痕文が施されている。この縦位の貝殻連点文は、下位まで続く。器面調整は、外面に貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕を一部ナデ消しているが、条痕が一部残っている。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後

条痕をナデ消している。19の文様は、器外面に横位に展開する貝殻連点文を施す。18と同様施文される部位と無文の部位が区画されており、縦位の文様は見られない。器内面は、口縁部付近に横位に貝殻条痕文を施す。器面調整は、外面に貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後条痕をナデ消しているが、条痕が一部残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整の後、条痕をナデ消しており、条痕はほとんど残らない。

II B-a-1-(2)類 (第31図20)

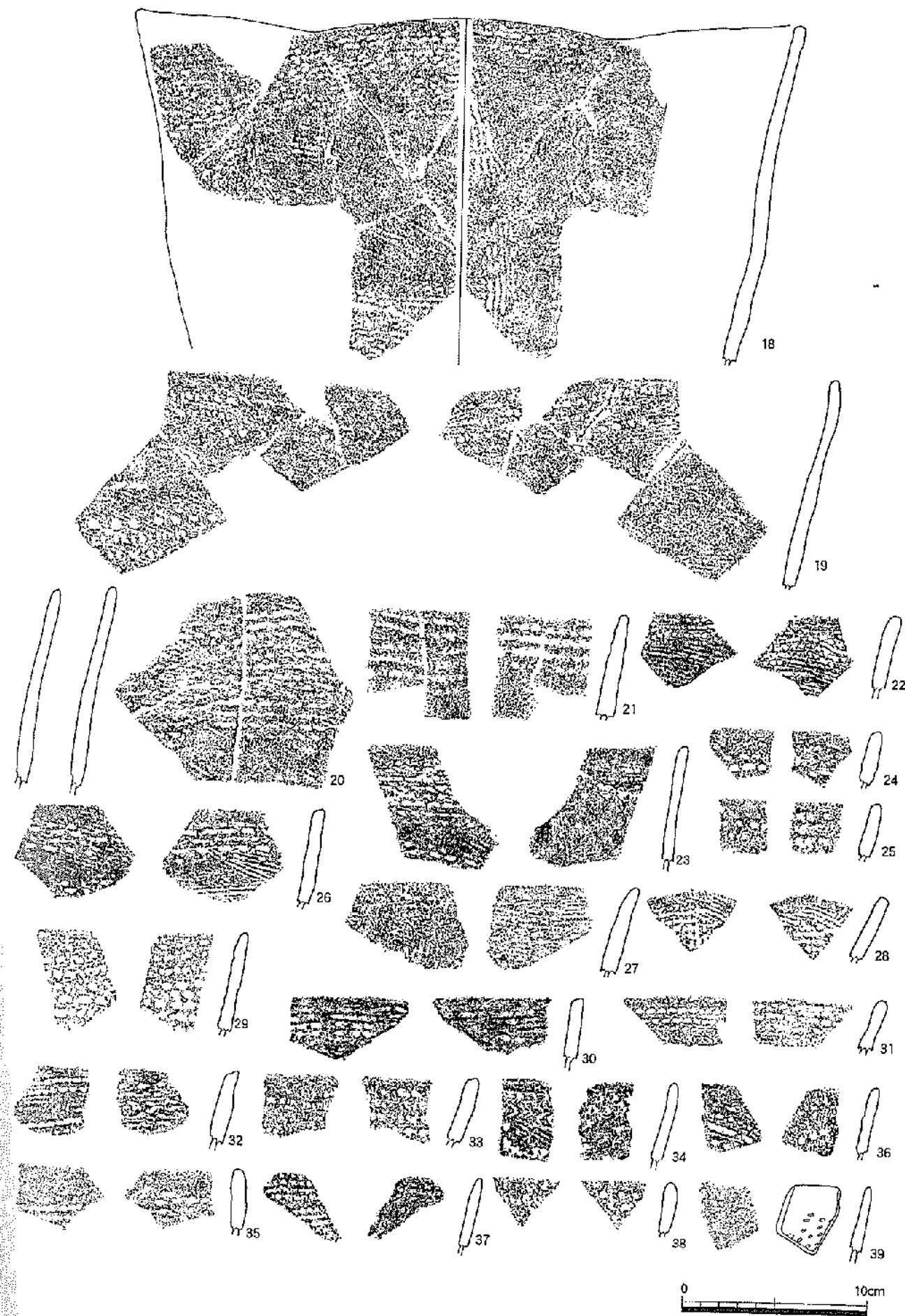
II B-a-1類の中で、貝殻連点文が器外面のみに施文されているものをII B-a-1-(2)類とした。20は、胴部から口縁部がまっすぐ立ち上がる器形である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、磨耗が激しいため判然としないが、器内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。

II B-a-2①-(1)類 (第31図21～第32図40)

II B-a類の中で、口縁部付近が残存しているものをII B-a-2類とした。さらに、胴部からまっすぐ立ち上がり、口縁部が外傾または直立する器形を有すると思われるものをII B-a-2①類、口縁部が外反する器形を有すると思われるものをII B-a-2②類とした。ただし、II B-a-2類は残存部位が限られているため、外反する口縁部であっても、先端しか残存していない場合はII B-a-2①類にグループングしてしまった可能性もある。

さらに、文様により細分した。内外面ともに貝殻連点文が施文されているものをII B-a-2①-(1)類とした。

21は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。22は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。文様帯の幅は狭い。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。外面は、ナデ消しは行っていない。内面もほとんどナデ消していないが、口縁端部にナデ調整が見られる。23は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としないが、器外面には僅かに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。24・25はいずれも小片である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。26は、直立する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、外面は磨耗が激しく、判然としないが、僅かに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整が見られる。ナデ消しは行っていない。27は、やや外傾して開く口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、外面は磨耗が激しく、判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整が見られる。口縁端部の条痕調整はナデ消している。28は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。文様帯の幅は狭い。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。外面は、ナデ消しは行っていない。内面もほとんどナデ消していないが、口縁端部にナデ調整が見られる。特徴が22と類似しており、同一固体であると思われる。29は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。30は、直立する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整



第31図 重田遺跡包含層出土遺物実測図3 (土器II B-a-1-(1)類～II B-a-2①-(1)類)

は、外面は磨耗が激しく、判然としないが、僅かに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。内面は、磨耗が激しく、判然としない。31は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに丁寧なナデ調整が見られる。32は、外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としないが、両面に僅かにナデ調整が見られる。33は、やや外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。34は、直立する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としないが、外面には貝殻腹縁による条痕調整が見られる。35は、直立する口縁部である。文様は、器内外面ともに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しいため判然としないが、内外面ともにナデ調整が観察できる。36～39は、いずれも小片で、直立もしくは若干外傾する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。40は、直立する口縁部である。文様は、器内外面ともに貝殻連点文を横位に施す。ただし磨耗が激しく内面はやっとならぬと判断できる程度である。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。

Ⅱ B-a-2 ①-(1)'類 (第32図41, 42)

Ⅱ B-a-2 ①-(1)類の中で、口唇部に刻目が施されているものを、Ⅱ B-i a-2 ①-(1)'類とした。

41は、外傾して若干開く口縁部である。文様は、器外面に貝殻連点文を横位に施す。内面にも同様に貝殻連点文を横位に施す。器面調整は、外面は残存部位が少なく磨耗が激しいため、判然としないが、一部ナデ調整が認められる。内面も同様に磨耗が激しく判然としないが、ナデ調整が認められる。42は、外傾して開く口縁部である。文様は、器外面に貝殻連点文を横位に施す。内面にも同様に貝殻連点文を横位に施すが、一部施文されていない部位がある。しかし、整然とはしておらず、区画されているような印象は受けない。器面調整は、外面は残存部位が少なく磨耗が激しいため不明である。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消している。

Ⅱ B-a-2 ①-(1)"類 (第32図43)

Ⅱ B-a-2 ①-(1)類の中で、貝殻連点文が横位に施文されているのに加え、縦位の貝殻連点文も施されているものを、Ⅱ B-a-2 ①-(1)"類とした。43は、直立する口縁部である。文様は、器外面は貝殻連点文を縦位に施し、その後横位に貝殻連点文を施す。内面は、横位に貝殻連点文を施すが、一部施文されていない部位があり、文様帯として区画されているような印象を受ける。文様帯の幅は狭い。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整が見られる。内外面ともに、ナデ消しはほとんど行っていないが、口縁端部にナデ調整が見られる。文様・調整・器壁の厚さ等の特徴がⅡ B-a-2 ①-(1)類の遺物25, 26と類似しており、同一固体であると思われる。

Ⅱ B-a-2 ①-(2)類 (第32図44～74)

Ⅱ B-a-2 ①類のうち、貝殻連点文が器外面のみに施文されているものをⅡ B-a-2 ①-(2)類とした。

44は、若干外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナ

デ消しているが、条痕が一部残る。45は外傾する口縁部である。比較的小型である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。貝殻連点文を施す部位と、無文の部位があり、文様帯として区画されている。器面調整は、外面は磨耗が激しいため、判然としない。内面も同様に磨耗が激しいが、貝殻腹縁による条痕調整が施されている。ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。46は、外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。文様帯の幅は狭く、文様帯と無文の部位が区画されている。器面調整は、器内外面ともに磨耗が激しいため判然としないが、外面に、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが条痕が顕著に残っているのが認められる。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が一部残っているのが認められる。47は、直立する口縁部である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が一部残る。内面も同様に、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残る。48は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。文様帯の幅は狭いが、文様帯と無文の部位が区画されている。器面調整は、器内外面ともに磨耗が激しいため判然としないが、内外面ともに、ナデ調整が観察できる。49は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消している。50は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は残存部位が少ないため判然としない。内面も、磨耗が激しいため判然としないが、ナデ調整が観察できる。51は、直立する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、器内外面ともに磨耗が激しいため判然としない。52は、外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。口縁端部には施さず、若干下がった位置に施文する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が一部残る。53は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、器内外面ともに残存部位が少なく磨耗が激しいため判然としないが、外面はナデ調整が観察できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が一部残る。54は、外傾する口縁部である。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。55は、直立する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としないが、ナデ調整が観察できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。56は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。57は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。58は、直立する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面も、磨耗が激しいため判然

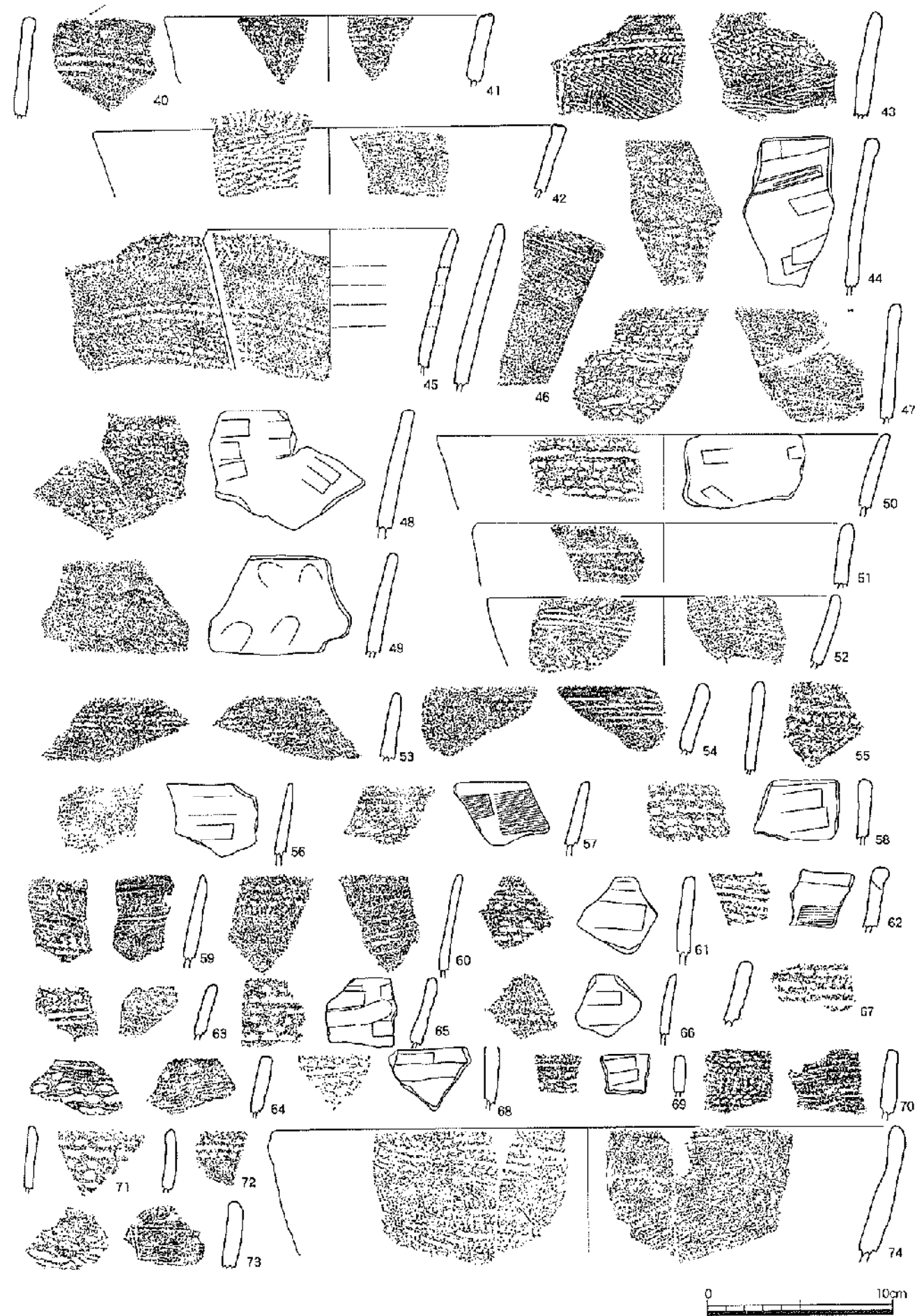
としないが、貝殻腹縁による条痕と、ナデ調整が観察できる。59は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。60は、やや外傾する口縁部である。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。61～72は、いずれも小片である。いずれも文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。61～67は、いずれもやや外傾する口縁部である。61～64は、外面の器面調整は、いずれも貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面は、61～63は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。64は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。65、66は、外面の器面調整は、磨耗が激しいため判然としないが、内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。67は、器内外面ともに磨耗が激しく、器面調整は判然としない。68～72は、直立する口縁部である。文様は、いずれも器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、68は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。69は、磨耗が激しいため判然としないが、内外面ともにナデ調整が観察できる。70は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面も磨耗が激しいが、条痕調整が観察できる。71、72は内外面ともに磨耗が激しいため、判然としない。

73、74は色調等から胎土が他のものとは異なると思われるものである。いずれも、文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。73は、赤褐色を呈する口縁部で、若干外傾する器形である。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。74は、褐灰色を呈する口縁部で、やや外傾する器形である。施文される部位と無文の部位があり、文様帯として区画されている。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。

II B-a-2 ①-(2)'類 (第33図75～78)

II B-a-2 ①-(2)類のうち、口唇部に小さな豆状の突起がつくものをII B-a-2 ①-(2)'類とした。

75は、口唇部に豆状の小突起を3つ有する。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としないが、ナデ調整が観察できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。76は、口唇部に豆状の小突起を3つ有するが、磨耗が激しいため輪郭は判然としない。文様は、器外面のみに、横位の貝殻連点文を相交弧文状に施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は残る。77は、口唇部に豆状の小突起を1つ有する。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を、相交弧文状に施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としないが、辛うじてナデ調整が観察できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その



第32図 重田遺跡包含層出土遺物実測図4 (土器II B-a-2①-(1)類～II B-a-2①-(2)類)

後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。78は、口唇部に豆状の小突起を1つ有するが、磨耗が激しいため輪郭は判然としない。文様は、器外面のみに横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は残る。

II B-a-2②類 (第33図79)

II B-a-2類の中で、口縁部が外反する器形のもをII B-a-2②類とした。79は、貝殻連点文を器内外面に横位に施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面も磨耗が激しいため判然としないが、辛うじてナデ調整が確認できる。

II B-a-3類 (第33図80)

II B-a類の中で、頸部から胴部にかけての部位が残存しており、器形が予想できるものをII B-a-3類とした。口縁部を欠損しているが、胴部がまっすぐ立ち上がり、そのまま外傾もしくは直立する口縁部へ至る器形のものと思われる。80の文様は、外面に貝殻連点文を横位に施し、その後斜方向及び縦位にも施す。文様が施文されている部位と無文の部位があり、文様帯として区画されているが、あまり整然としていない。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕は一部残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。

II B-a-4-(1)類 (第33図81, 82)

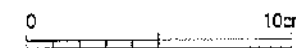
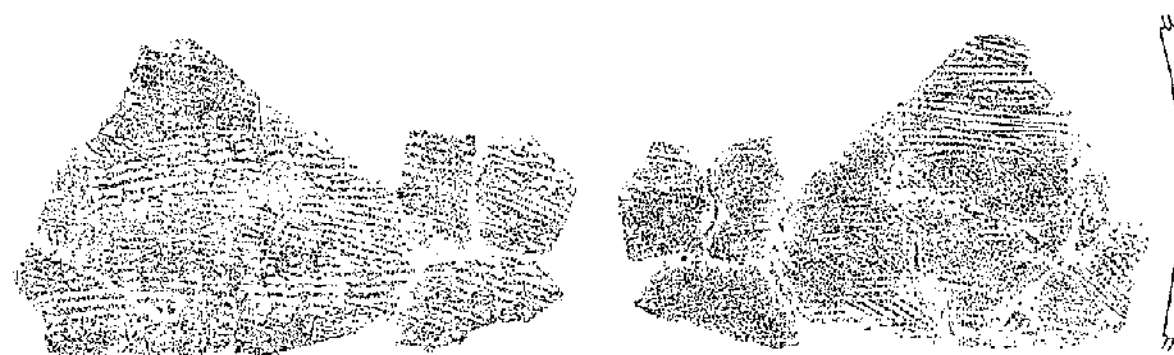
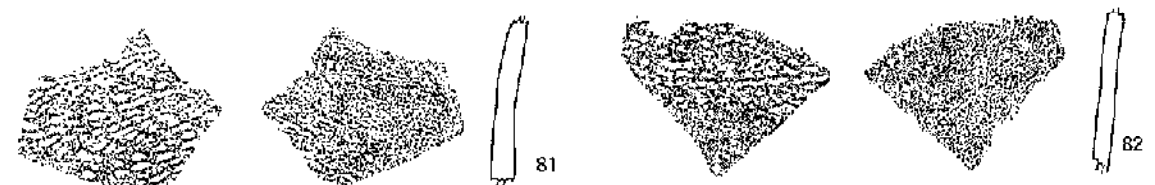
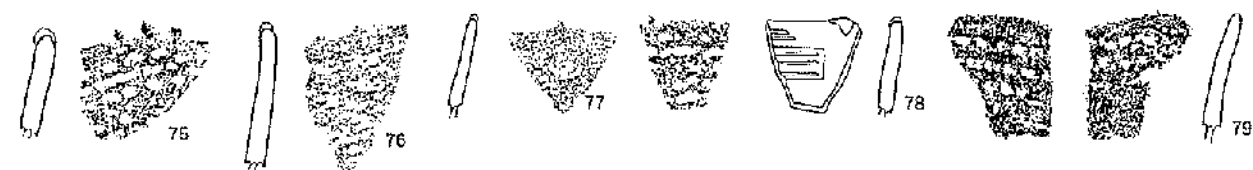
II B-a類の中で、胴部付近が残存しているものをII B-a-4類とした。II B-a-4類は、いずれも残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。その中で、貝殻連点文が器内外面ともに施文されているものをII B-a-4-(1)類とした。

81は、器外面に、相交弧文状に横位に貝殻連点文を施す。内面には、縦位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としないが、ナデ調整が観察できる。内面も磨耗が激しいため判然としないが貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消している。82は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。内面には、縦位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面は、磨耗が激しいため判然としない。

II B-a-4-(2)類 (第33図83～第34図90)

II B-a-4類の中で、貝殻連点文が外面のみに施文されているものをII B-a-4-(2)類とした。

83は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。84は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。一部相交弧文状を呈する。文様が施文される部位と無文の部位があり、文様帯として区画されている。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しを行っておらず、条痕は顕著に残る。内面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しを行っておらず、条痕は顕著に残る。85は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。施文部位は限られており、文様帯として区画されている。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しいため判然としないが、辛



第33図 重田遺跡包含層出土遺物実測図5 (土器II B-a-2①-(2)類～II B-a-4-(2)類)

うじてナデ調整が観察できる。86は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕は残る。87は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しいため判然としないが、内面に条痕調整が観察できる。88は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。一部相交弧文状を呈する。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面も磨耗が激しいため判然としないが、貝殻腹縁による条痕調整が観察できる。89は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。文様が施文される部位と無文の部位があり、文様帯として区画されている。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面は磨耗が激しいため判然としないが、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消していると思われる。90は、器外面に、横位に貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しいため判然としない。内面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。

ⅡB-a-4-(2)類 (第34図91)

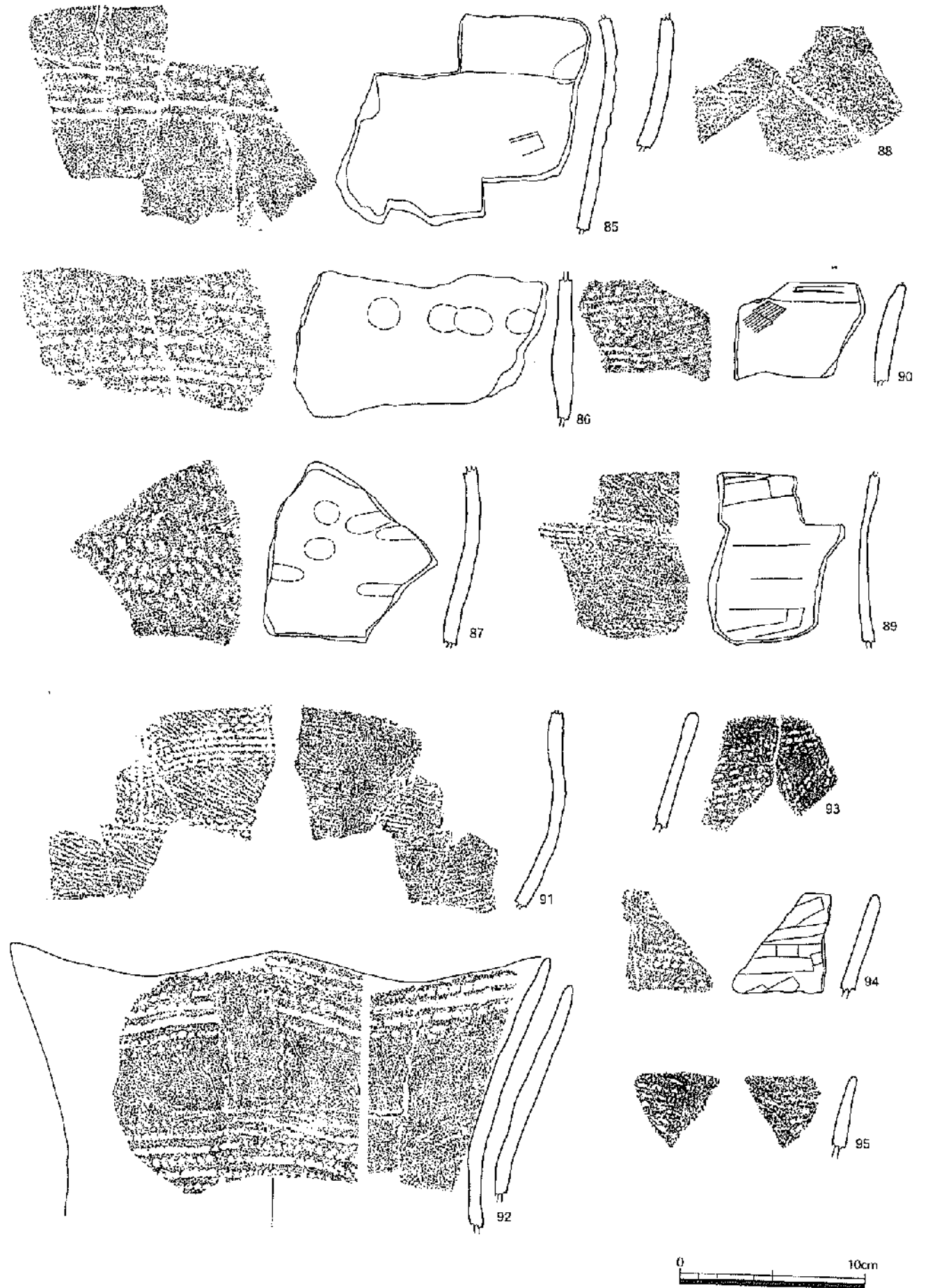
ⅡB-a-4-(2)類の中で、横位に展開する貝殻連点文に加えて、貝殻連点文を縦位に施すものをⅡB-a-4-(2)類とした。91は、器外面に、縦位に貝殻連点文を施し、その後横位に貝殻連点文を施す。施文部位と無文の部位があり、文様帯として区画されているが、文様帯の内部に縦位の文用があり、さらに文様帯を区画している。器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しを行ってならず、条痕が顕著に残る。

ⅡB-b-1-①類 (第34図92～第35図96)

ⅡB類のうち、二枚貝の貝殻腹縁で刺突することで文様を施す「貝殻刺突文」が見られるものをⅡB-b類とした。この貝殻刺突文は、主文様要素として施文されるのではなく、貝殻連点文を主文様要素とし、従文様要素として施文されている(ⅡB-b-1-⑤類、ⅡB-b-2-③類、ⅡB-b-2-④類を除く)。

ⅡB-b類の中で、口縁部が残存しているものをⅡB-b-1類とした。さらに、器外面の文様構成により、細分した。貝殻刺突文が、縦位に施文されているものをⅡB-b-1-①類、貝殻連点文による文様帯間に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文するものをⅡB-b-1-②類、その他特に施文に規則性が見られないものをⅡB-b-1-③類とした。また、貝殻刺突文が施文してある部位が、僅かしか残存しておらず、詳細が不明なものをⅡB-b-1-④類、文様要素が貝殻刺突文のみのものをⅡB-b-1-⑤類とした。

92は、大きく口縁部が外傾し、下位で締まる器形である。口縁部は山形に波状する。文様は、器内外面ともに施文する。外面は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施すが、その下位には無文の部位があり、さらにその下位に横位に展開する貝殻連点文を施す。このように、92には口縁部文様帯と、その下位の文様帯の2つが文様帯として区画されている。口縁部文様帯は、途中で一部途切れているが、この文様帯の切れ目に貝殻刺突文を施し、縦に区画している。施文順序は、横位に貝殻連点文を施した後、縦位に貝殻刺突文を施している。口縁部文様帯は途中で途切れているが、口縁端部は途切れることなく貝殻連点文が廻る。拓本には上手く現れなかったが、その部分と、下位の文様帯の上端にも、貝殻刺突文が施されている。内面は、口縁端部に、横位



第34図 重田遺跡包含層出土遺物実測図6 (土器ⅡB-a-4-(2)類～ⅡB-b-1-①類)

に展開する貝殻連点文が施され、文様帯を成しているが、その文様帯の下端に、貝殻刺突文が施されている。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しており、条痕はほとんど残らない。93は、外傾する口縁部である。口縁端部に、やや斜方向に展開する横位の貝殻連点文を施し文様帯を成すが、その下端に貝殻刺突文を施すことで文様帯の区画を明瞭にしている。また、これとは別に、横位に展開する幅の広い貝殻連点文を施し、文様帯を成す。この文様帯と先の文様帯は、縦位の貝殻刺突文によって区画される。更に、これらの文様帯間の、無文の部分に、鋸歯状に貝殻連点文を施す。内面は無文である。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく、判然としない。94は、小片で残存部位が少ないが、この分類とした。外傾する口縁部である。文様は、外面にのみ施す。外面の文様は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施すが、この貝殻連点文は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。施文順序は、磨耗が激しく不明である。器面調整は、外面は磨耗が激しく不明である。内面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕はほとんど残らない。95は、小片で磨耗が激しいが、縦位の貝殻刺突文が認められ、この分類とした。やや外傾する口縁部である。文様は、内外面ともに施す。外面は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、この文様帯は途中で一部途切れる。この途切れる部分に縦位の貝殻刺突文を施し、文様帯の区画を明瞭なものにしている。内面は磨耗が激しいが、口縁端部より若干下がった位置に貝殻連点文が観察できる。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく判然としない。96は、大きく口縁部が外傾し、下位で締まる器形である。口縁部は山形に波状する。文様は、外面にのみ施す。外面の文様は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。施文順序は、縦位に貝殻刺突文を施した後、横位に貝殻連点文を施している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。

II B-b-1-①'類 (第35図97~99)

II B-b-1-①'類のうち、口唇部に小さな豆状の突起がつくものをII B-b-1-①'類とした。97は、器内外面に文様を施す。外面の文様は、口縁端部に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。また、文様帯の下端にも貝殻刺突文を施し、文様帯の区画をより明瞭なものにしている。内面の文様は、口縁端部に横位に展開する貝殻連点文を施す。文様帯の幅は狭い。口唇部、縦位の貝殻刺突文の上位に、豆状小突起を1つ有する。また、この右隣に、口唇部がやや突出しており、小突起を意識したものと思われる。施文順序は、横位に貝殻連点文を施した後、縦位及び文様帯下端に貝殻刺突文を施している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕はほとんど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施した後その後ナデ消しているが、外面よりはやや粗いナデ調整で、条痕がやや残っている。98は、僅かに内湾する口縁部である。器外面に文様を施す。外面の文様は、口縁部下位に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画され

ている。また、口唇部小突起の下位にも横位の貝殻刺突文を施している。口唇部に豆状の突起を有するが、他と比して突起が大きく輪郭が明瞭である。残存部位が少なかつたためこの分類としたが、平口縁の一部が突起する波状口縁の一部である可能性もある。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕は残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕は残る。99は、直立する口縁部である。器内外面に文様を施す。外面の文様は、口縁部下位に横位に展開する貝殻連点文を施すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。また、縦位の貝殻刺突文の左隣に、斜方向の貝殻刺突文が施されている。内面の文様は、口縁端部に横位に展開する貝殻連点文を施す。口唇部の小突起は、輪郭は不明瞭で、やや突出している程度である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は磨耗が激しく、詳細は不明である。

II B-b-1-②類 (第35図100, 101)

貝殻連点文による文様帯間に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文するものをII B-b-1-②類とした。100は、口縁部から胸部へかけての部位が残存している。口縁部が若干外傾し、そのまま胸部へ至る器形である。文様は口縁部内外面に施す。外面は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その下位の無文の部位に、鋸歯状に貝殻刺突文を施す。更に、間隔を空けて下位に斜方向の貝殻刺突文も施されている。内面は、口縁端部に幅が狭い貝殻連点文を、横位に廻らす。その下位に、縦位の貝殻連点文を施すが、この貝殻連点文は下位まで施されている。器面調整は、内外面ともに、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は殆ど残っている。101は、外傾する口縁部である。外面に文様を施す。外面は、口縁部に横位の貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その下位の無文の部分に鋸歯状に貝殻刺突文を施す。貝殻刺突文は2条並行に施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧にではなく条痕が残る。

II B-b-1-③類 (第36図102)

II B-b-1類の中で、貝殻刺突文に特に規則性がみられないものをII B-b-1-③類とした。102は、内外面に文様を施す。外面は、口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成す。その下位に無文の部位があり、さらにその下位に、横位に展開する貝殻連点文を、幅広く施し文様帯を成す。下位の文様帯の一部は、相交弧文状を呈する。上位の文様帯の下端に貝殻刺突文が観察できるが、貝殻刺突文が残存している部位はごく一部に限られるので、詳細は不明である。内面は、口縁部下位に、横位に展開する貝殻連点文が廻るが、あまり幅は広くない。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕は顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施す。ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。

II B-b-1-④類 (第35図103)

II B-b-1類の中で、貝殻刺突文が施文してある部位が僅かしか残存しておらず、詳細が不明なものをII B-b-1-④類とした。103は、直立する口縁部である。外面に文様を施す。口縁部に横位に展開する貝殻連点文を施すが、連点文の間隔が広く、3条の連点文が廻るような外観を

呈する。その下位に、貝殻刺突文を施す。器面調整は、内外面ともに、貝殻腹縁による条痕調整を施す。その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。

ⅡB-b-1-⑤類 (第35図104)

ⅡB-b-1-⑤類は、文様要素が貝殻刺突文のみに限られるものである。ただし、この分類とした104は小片であり、土器全体の様相については不明である。

104は若干内湾する口縁部である。口縁端部に小さな豆状の小突起を2つ有する。文様は外面に限られる。外面の文様は、貝殻刺突文を縦位と、鋸歯状に施す。器面調整は、外面は磨耗が激しく不明である。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施す。その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。

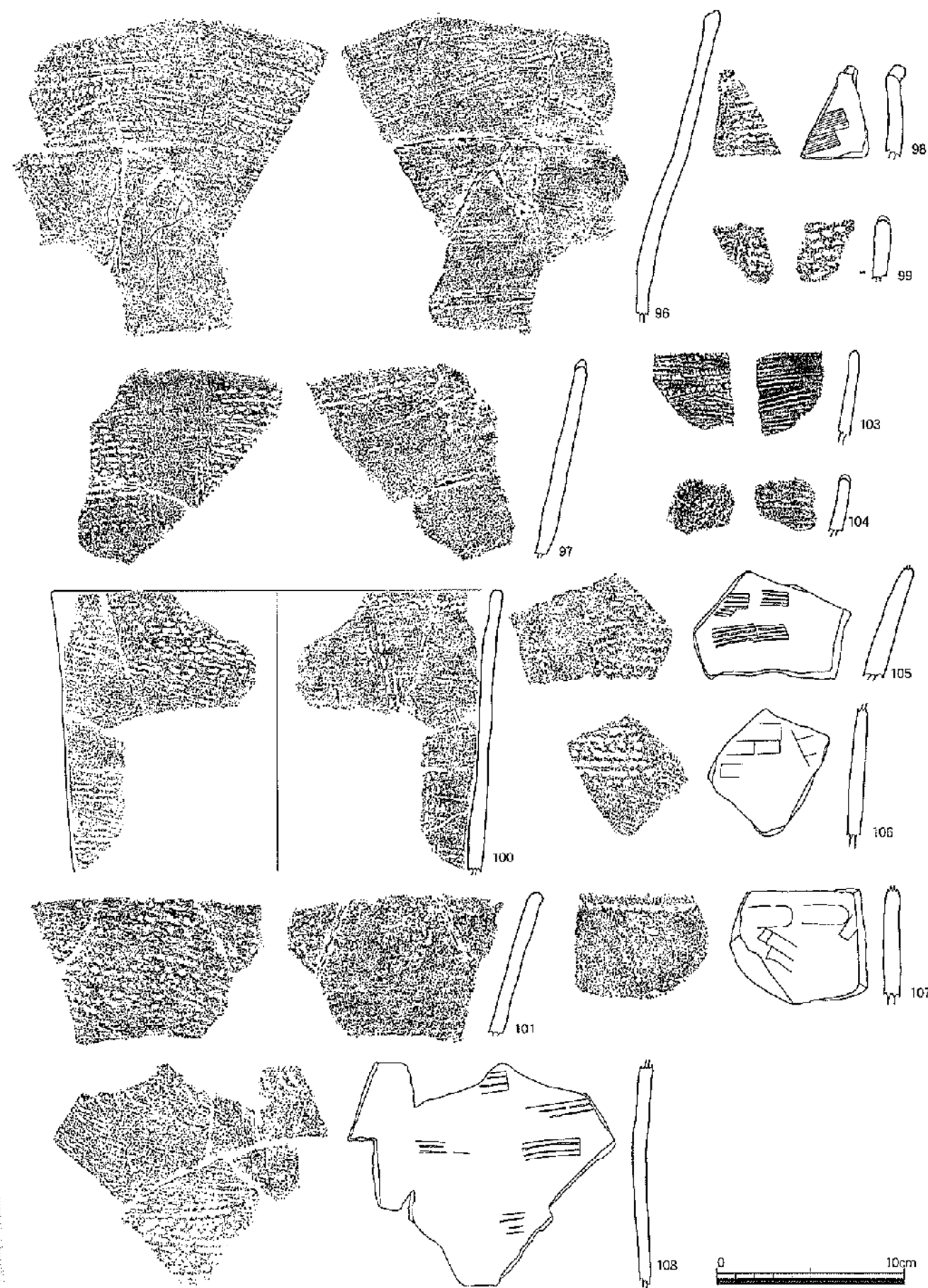
ⅡB-b-2-①類 (第35図105~107)

ⅡB-b類の中で、胴部付近が残存しているものをⅡB-b-2類とした。ⅡB-b-2類は、いずれも残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。さらに、器外面の文様構成により、細分した。貝殻刺突文を、縦位に施文するものをⅡB-b-1-①類、貝殻連点文による文様帯間に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文するものをⅡB-b-1-②類とした。残存部位が限られており、貝殻刺突文しか施文されていないものをⅡB-b-1-③類と、貝殻刺突文を主文様要素とするものをⅡB-b-2-④類とした。

105は、文様は外面に限られる。外面に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。器面調整は、外面は磨耗が激しく判然としない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が残っている。106は、文様は外面に限られる。外面の文様は、横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れている。この文様帯に隣節して、縦位の貝殻刺突文が施文されている。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、一部条痕が残る。107は、文様は外面に限られる。外面の文様は、横位に展開する貝殻連点文を施し、その下位に縦位の貝殻刺突文を施す。さらに、その下位に横位の貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

ⅡB-b-2-①'類 (第35図108)

縦位の貝殻刺突文に加え、文様帯間に貝殻刺突文を鋸歯状に施文するものを、ⅡB-b-2-①'類とした。108は、文様は外面に限られる。外面の文様は、上位に横位に展開する貝殻連点文を施し、その下位に、2条並行の貝殻刺突文を、鋸歯状に施文する。さらに、その下位に横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成すが、その文様帯は途中で一部途切れ、貝殻刺突文により縦に区画されている。また、下位の文様帯の上端には、貝殻刺突文を横位に施すことで、文様帯をより明確に区画している。文様は外面のみに限られ、内面は無文である。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施している。その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部にナデ消しているが、あまり丁寧にナデ消してなく条痕が残る。



第35図 重田遺跡包含層出土遺物実測図7 (土器ⅡB-b-1-①類~ⅡB-b-2-①'類)

ⅡB-b-2-②類 (第36図109, 110)

貝殻連点文による文様帯間に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文するものをⅡB-b-2-②類とした。

109は、文様は外面に限られる。外面の文様は、横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成す。その下位に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文する。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後にナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後にナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残る。110も、文様は外面に限られる。外面の文様は、横位に展開する貝殻連点文を施し、文様帯を成す。その下位に、貝殻刺突文を鋸歯状に施文する。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後にナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残る。内面は、磨耗が激しく判然としない。

ⅡB-b-2-③類 (第36図111, 112)

残存部位が限られており、貝殻刺突文しか施文されていないものをⅡB-b-2-③類とした。

111は、内外面ともに施文されている。外面は、貝殻刺突文が斜方向に施文されえており、内面に、横位に展開する貝殻連点文を施す。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が僅かに残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が僅かに残る。112は、文様は外面に限られる。外面の文様は、若干斜方向に貝殻刺突文を施す。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。

ⅡB-b-2-④類 (第36図113)

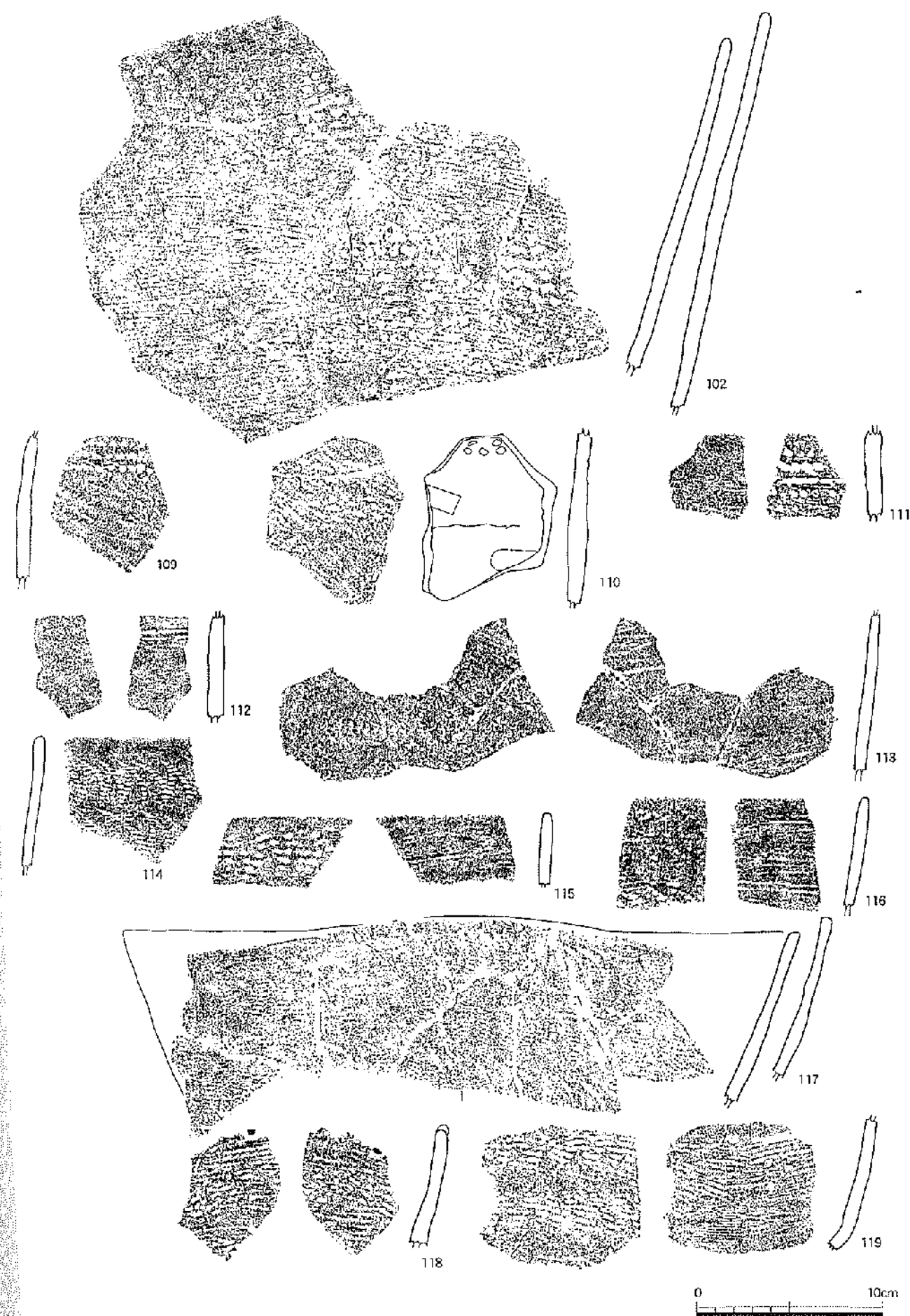
貝殻刺突文を主文様要素とすると考えられるものをⅡB-b-2-④類とした。113は、文様は外面に限られる。外面の文様は、全面的に貝殻刺突文を施すが、相交弧文状を呈する。器面調整は、外面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消すが、あまり丁寧でなく、条痕が残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消すが、あまり丁寧でなく、条痕が残る。

ⅡB-c-1 ①類 (第 図114~116)

ⅡB類のうち、二枚貝の貝殻腹縁を施文具として、「往復反転手法」で押圧することにより施文される「相交弧文」が見られるものを、ⅡB-c類とした。

ⅡB-c類の中で、口縁部が残存しているものをⅡB-c-1類とした。さらに、口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へいたる器形を有すると思われるものをⅡB-c-1 ①類、口縁部が外傾し、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅡB-c-1 ②類とした。また、口縁部が直立もしくは直立に近い形をもち、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅡB-c-1 ③類とした。

114は、ほぼ直立する口縁部である。施文は外面に限られる。外面の文様は、口縁端部より若干下がった位置に、相交弧文が二重に廻る。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。115は直立する口縁部である。外面



第36図 重田遺跡包含層出土遺物実測図8 (土器ⅡB-b-1-③類~ⅡB-c-2-(1)類)

の文様は、口縁端部に、相交弧文を施す。器面調整は、外面は磨耗が激しく判然としないが、一部ナデ調整が観察できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。116は、若干外傾する口縁部である。施文は外面に限られる。外面の文様は、口縁端部に不明瞭な相交弧文が廻り、その下位にやや明瞭な相交弧文が廻る。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。

Ⅱ B-c-1 ②類 (第36図117)

Ⅱ B-c-1 類のうち、口縁部が外傾し、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅡ B-c-1 ②類とした。117は、大きく外傾する口縁部である。口縁部は大きく山形に波状する。施文は外面に限られる。外面の文様は、外面に全体的に相交弧文を施すが、全体的に文様が不規則で、雑多な印象を受ける。相交弧文自体も不明瞭である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

Ⅱ B-c-1 ③類 (第36図118)

Ⅱ B-c-1 類のうち、口縁部が直立もしくは直立に近い形をもち、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅡ B-c-1 ③類とした。118は、口唇部に豆状の小突起を3つ有する。口縁部は若干波状ぎみで、この小突起の部分が波頂部になる。施文は内外面に施されている。内外面ともに相交弧文が施されているが、外面の相交弧文が不明瞭であるのに対して、内面の相交弧文は明瞭である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、顕著に条痕が残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、顕著に条痕が残る。

Ⅱ B-c-2 (1)類 (第36図119～第37図～127)

Ⅱ B-c 類の中で、胴部付近が残存しているものをⅡ B-c-2 類とした。その中で、文様要素が相交弧文のみに限られるものをⅡ B-c-2 (1)類、相交弧文に加えて貝殻刺突文も見られるものをⅡ B-c-2 (2)類とした。

いずれも施文は外面に限られる。119は、胴部から底部付近にかけての部位が残存している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施す。その後ナデ消は行っておらず、条痕が顕著に残る。120～127は、残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。120の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施す。その後ナデ消は行っておらず、条痕が顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施した後、ナデ消は行っておらず、条痕が顕著に残る。121の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。122の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり

丁寧ではなく一部条痕が残る。123の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。124の器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく判然としないが、内面にナデ調整が確認できる。125の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。126の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。127の器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく判然としない。

Ⅱ B-c-2 (2)類 (第37図128, 129)

Ⅱ B-c-2 類の中で、相交弧文に加えて貝殻刺突文も見られるものをⅡ B-c-2 (2)類とした。いずれも施文は外面に限られる。

いずれも残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。128の外面の文様は、鋸歯状に貝殻刺突文を施すが、図で上とした方に相交弧文が観察できる。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。129の外面の文様は、図で下とした方に相交弧文を施し、その上位に貝殻刺突文を斜方向に、2条並行に施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。

Ⅱ B-d-(1)①類 (第37図130)

Ⅱ B 類の中で、突帯を有するものをⅡ B-d 類とした。その中で、突帯の他に文様を有するものをⅡ B-d-(1)類とした。Ⅱ B-d-(1)①類は口縁部である。

130は、若干外傾する口縁端部である。口縁端～口唇部にかけて、縦位の突帯を有する。3条残存している。文様帯は内外面に施文される。外面の文様は、突帯を挟んで対称ではなく、非対称である。突帯の右位の文様は、口縁端部に工具による刺突文を廻らし、その下位に6条の沈線を横位に施す。さらに、その下位に工具による刺突文を2条廻らし、その下位に沈線が1条確認できる。突帯の左位の文様は、口縁端部は欠損していて不明であるが、残存部位の上位に3条の沈線が施されている。その下位に2条の工具による刺突文を廻らしている。さらに、その下位に2条沈線が確認できる。内面の文様は、口縁端部、突帯付近にのみ施文されている。工具による刺突文が3条施されている。刺突文が施文されている部分の左端と下端には沈線が施され、文様帯を区画している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残っている。

Ⅱ B-d-(1)②類 (第37図131)

Ⅱ B-d-(1)②類は、胴部付近が残存しているものである。131は、残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。横

位の突帯を有する。1条残存している。突帯の下位に、沈線を施す。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、ただ単なる調整痕ではなく、規則性があるような印象を受ける。内面は、磨耗が激しく詳細は不明である。

ⅡB-d-(2)類 (第37図132, 133)

ⅡB-d類の中で、突帯のみで、他に文様のないものをⅡB-d-(2)類とした。いずれも胴部片で、残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。

132は、図で上とした方に横位の突帯を有する。1条残存している。無文の部分を含んでその下位に縦位の突帯を、斜方向に有する。突帯の間隔は狭く、6条残存している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施している。その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。133は、横位の突帯を有する。2条残存している。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕は顕著に残る。

土器ⅢB類 (第37図134～第53図402)

深浦式系土器と併行関係にあると考えられる無文土器のうち、小片あるいは比較的小型のものをⅢB類とした。

ⅢB-a-1類 (第37図134)

ⅢB類の中で、特徴的なものを一括してⅢB-a類として取り扱った。ⅢB-a-1類は、口唇部に豆状の小突起を有するものである。134は、外傾する口縁部である。口唇部に、豆状の小突起を2つ有する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消ししているが、条痕が若干残っている。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

ⅢB-a-2①類 (第37図135, 136)

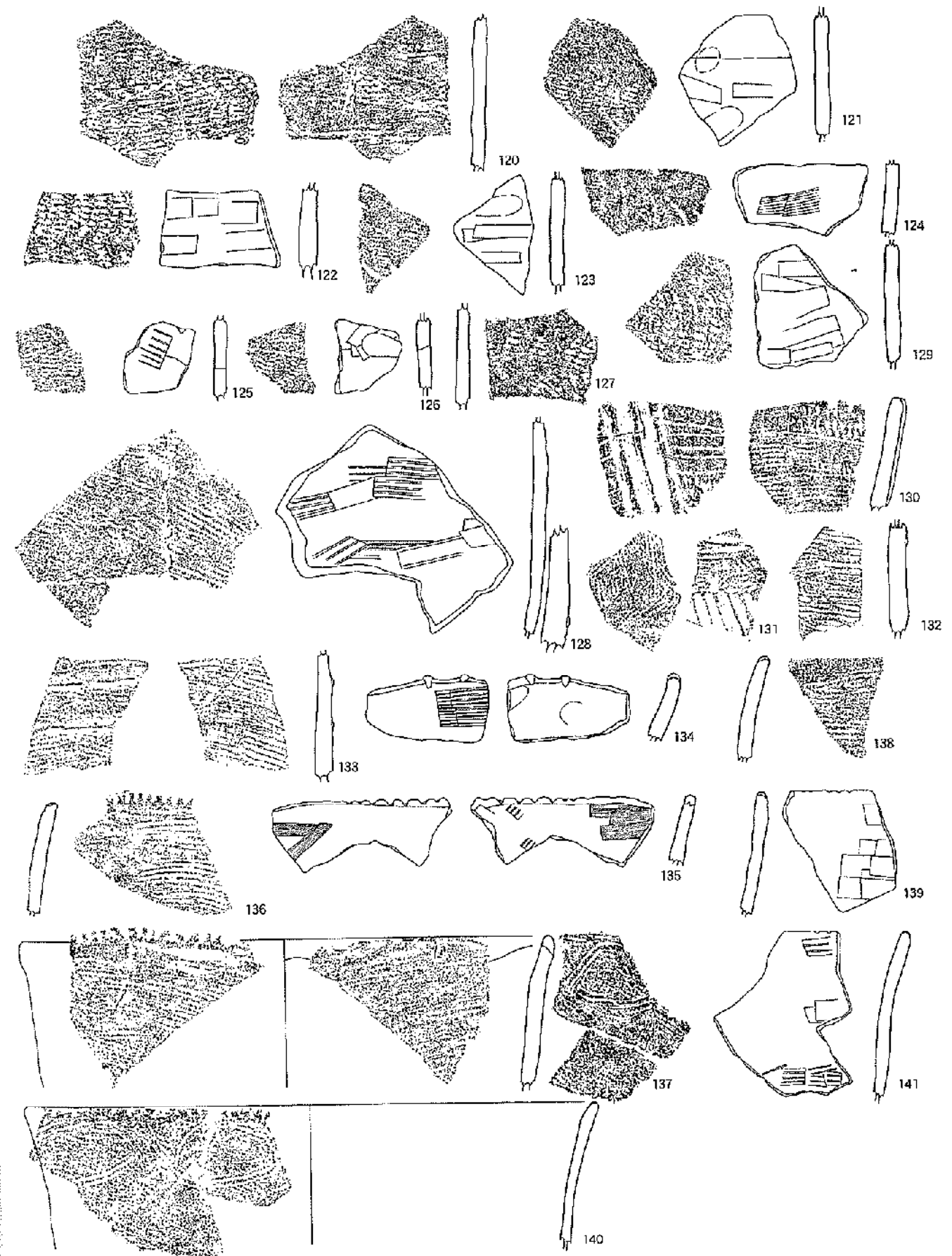
口唇部に刻みを有するものを、ⅢB-a-2類とした。ⅢB-a-2①類は、口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へ至る器形を有すると思われるものである。

135は、外傾する口縁部である。口唇部に、工具によると思われる刻目が廻る。刻目の深さは一定ではなく、雑然としている。器面調整は、内外面ともに磨耗が激しく判然としないが、外面、内面にそれぞれ貝殻腹縁による条痕調整が確認できる。136は、やや外傾する口縁部である。口唇部に、工具によると思われる刻目が廻る。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。

ⅢB-a-2②類 (第37図137, 138)

ⅢB-a-2②類は、口縁部が外反する器形である。

137は、口唇部に工具によると思われる刻目が廻る。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施す。その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。138は、口唇部に刻目



第37図 重田遺跡包含層出土遺物実測図9 (土器ⅡB-c-2-(1)類～ⅡB-a-2'①類)

を施すが、磨耗が激しく、詳細は不明である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、条痕が顕著に残る。内面は磨耗が激しく判然としない。

ⅢB-a-2③類 (第37図139)

ⅢB-a-2③類は、口縁部が直立で、口縁部下位で縮まる器形を有すると思われるものである。139は、口唇部に、工具によると思われる刻目が廻るが、刻目の深さは一定ではなく、雑然としている。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。内面は、磨耗が激しく判然としない。

ⅢB-a-2'①類 (第37図140・141)

ⅢB-a-2類の中で、器外面に貝殻腹縁による条痕調整を施した後、さらに、規則性のある条痕を施し、文様を意識していると思われるものをⅢB-a-2'類とした。その中で、ⅢB-a-2'①類は、口縁部が外反する器形である。

140は、口唇部に、貝殻腹縁によると思われる刻目が廻る。磨耗が激しく判然としないが、ほぼ一定の間隔で施されているようである。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。さらにその後、口縁部に楕円形に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。141は、140に特徴が類似しており、同一固体であると思われる。口縁部外面に、楕円形の貝殻条痕を施す。

ⅢB-a-2'②類 (第38図142~144)

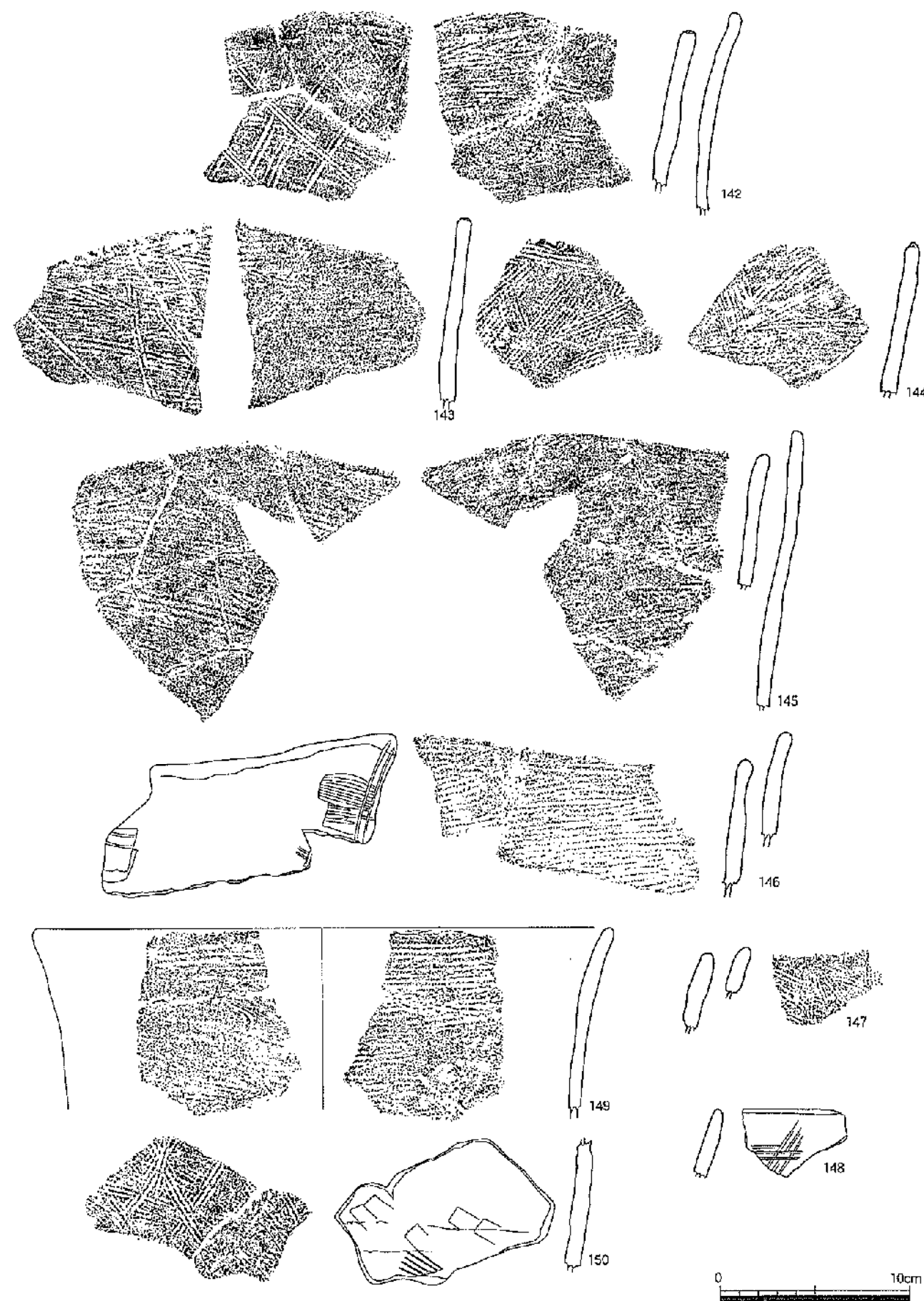
ⅢB-a-2'②類は、口縁部が直立もしくは外傾し、そのまま胴部へいたる器形と思われるものである。

142は、口唇部に、刻目が廻るが、間隔・施文場所ともにまばらで、雑然としている。口縁部は山形に波状する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、さらにその後、貝殻腹縁による条痕を、格子状に施している。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。143は、口唇部に、工具によると思われる刻目が、斜方向に施される。刻目の間隔・深さは一定ではない。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、さらにその後、不整然とした格子状に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。144は、口唇部に、貝殻腹縁によると思われる刻目が、斜方向に施される。間隔は一定ではない。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後、口縁部に横位に条痕を施し、その下位に格子状及び斜方向に条痕を施す。内面も同様の調整を施すが、外面と比して雑多である。

ⅢB-a-3①類 (第38図145~148)

ⅢB-a類の中で、器外面に貝殻腹縁による条痕調整を施した後、さらに、規則性のある条痕を施し、文様を意識していると思われるものをⅢB-a-3類とした。ⅢB-a-3①類は、口縁部が直立もしくは外傾し、そのまま胴部へいたる器形を有すると思われるものである。

145は、口縁部が山形に波状する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っていない。さらにその後、縦位に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による



第38図 重田遺跡包含層出土遺物実測図10 (土器ⅢB-a-2'①類~ⅢB-a-3③類)

条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。146は、口縁部が山形に波状する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消す。さらにその後、斜方向に弧状に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。147は、残存部位が限られているが、口縁部が山形に波状すると思われる。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消す。さらにその後、斜方向及び縦位の貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後口縁部を一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残る。148の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しているが、さらにその後、斜方向に貝殻条痕を施し、その後横位に交差して貝殻条痕を施す。内面は、磨耗が激しく判然としない。

ⅢB-a-3 ②類 (第38図149)

ⅢB-a-3 ②類は、ⅢB-a-3 類の中で、口縁部が外反する器形である。149の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消す。さらにその後、縦位に波状に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。

ⅢB-a-3 ③類 (第38図150)

ⅢB-a-3 ③類は、ⅢB-a-3 類の中で、胴部付近が残存しているものである。150の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、さらにその後格子状に貝殻条痕を施す。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残る。

ⅢB-1 ①類 (第39図151～第43図172)

無文の土器のうち、口縁部から胴部付近が残存しており、器形が予想できるものをⅢB-1 類とした。さらに、その中で口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へいたる器形を有すると思われるものを、ⅢB-1 ①類とした。

151～153は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。内面の器面調整も同様である。

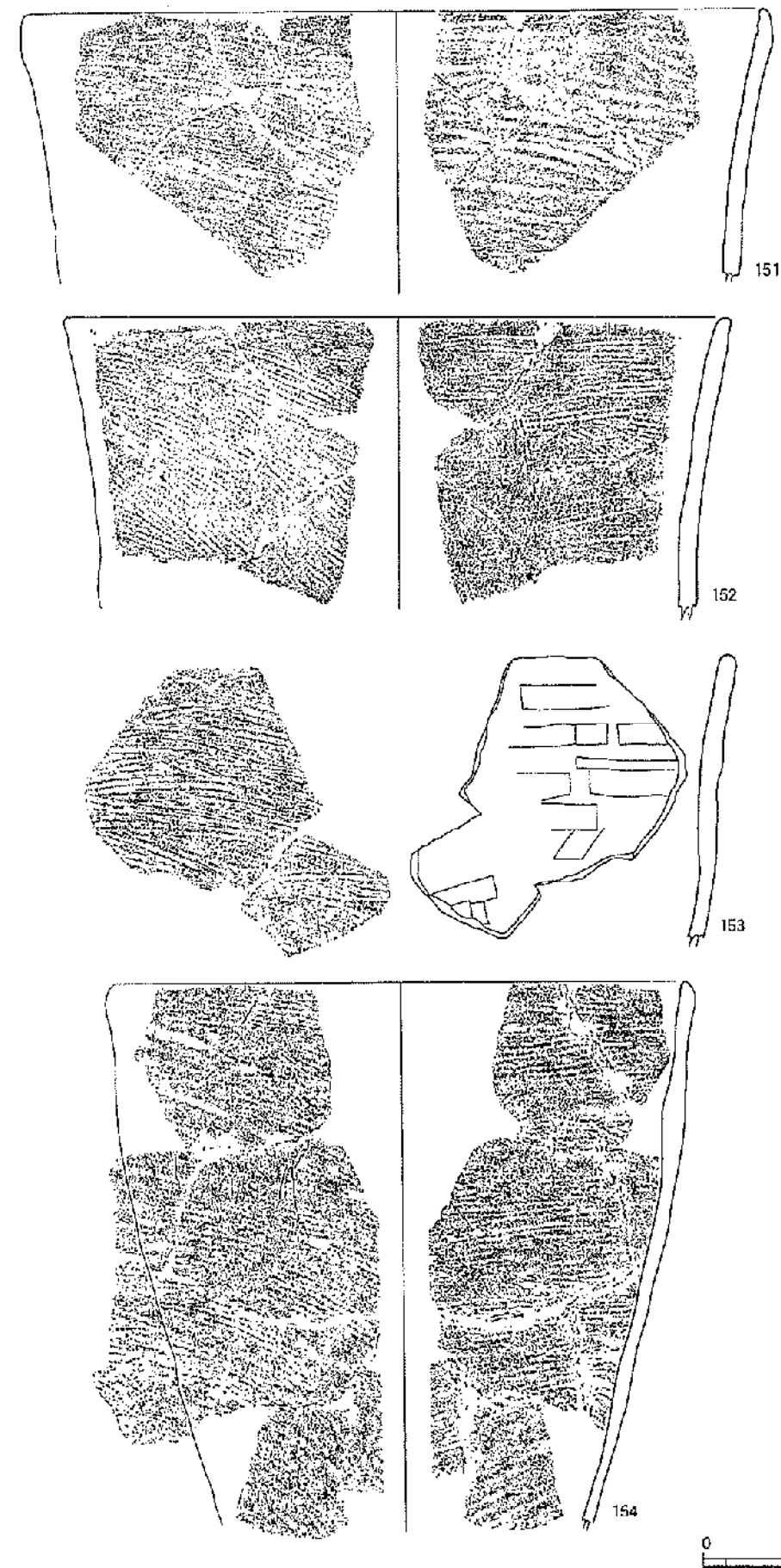
154～160は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。内面の調整も同様であるが、外面と比して若干粗い印象を受ける。157は若干波状する口縁部を有する。

161～171は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく一部条痕が残るものである。内面調整も、大半は同様であるが、161、170・171は異なる。161は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。170・171は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。163、167は若干波状する口縁部を有する。

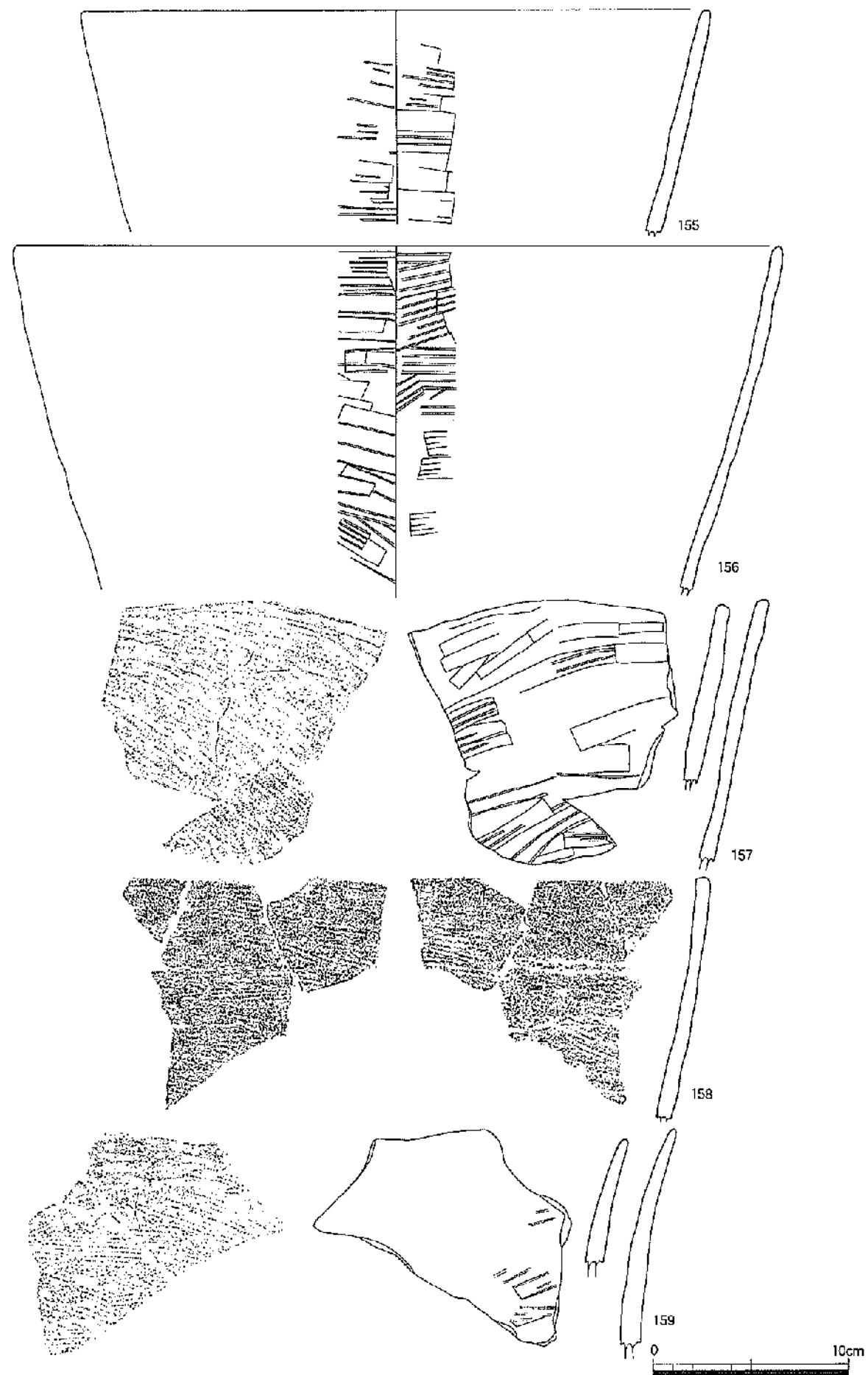
172は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。内面も同様である。

ⅢB-1 ②類 (第43図173・174)

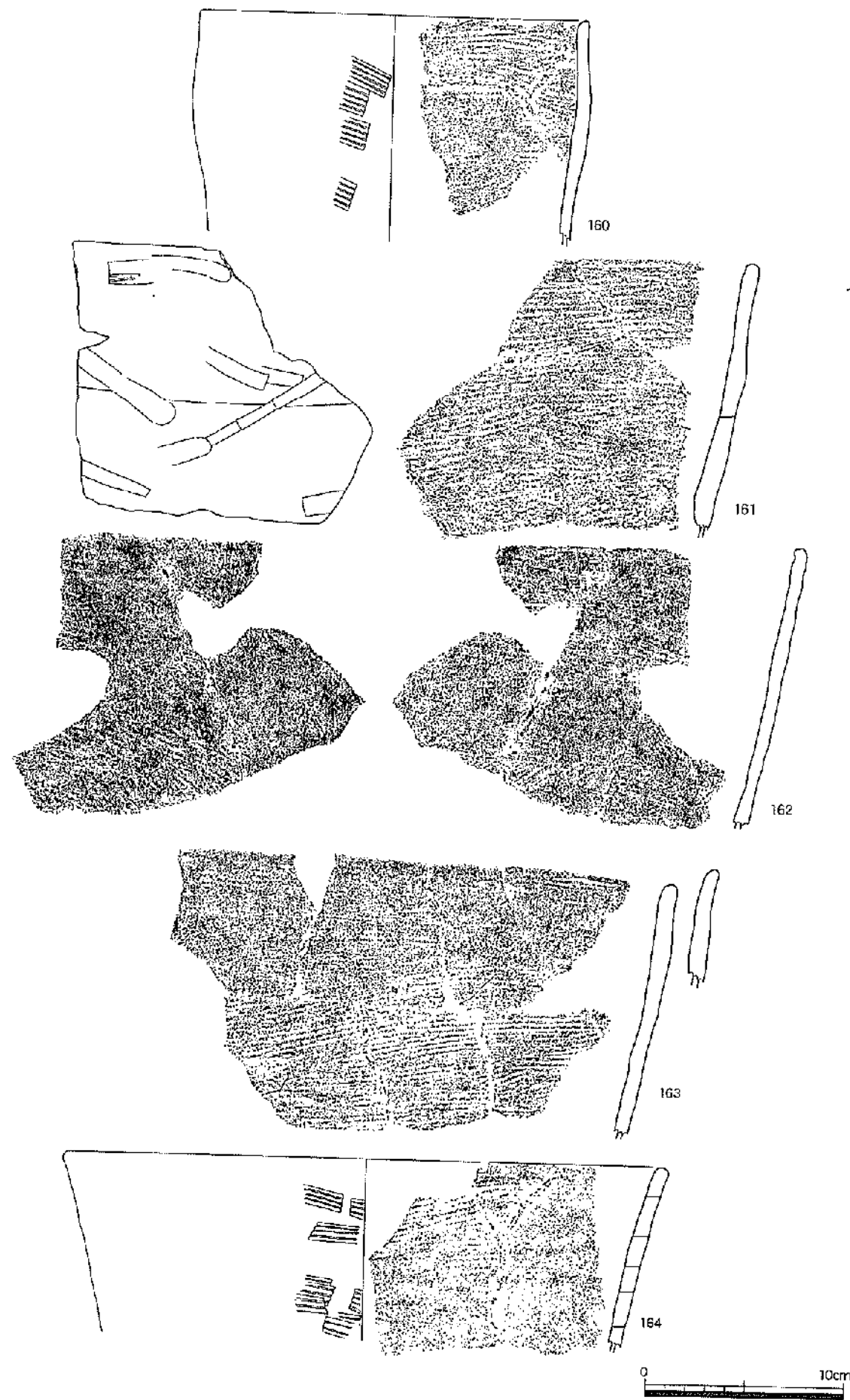
ⅢB-1 類の中で、口縁部が外傾大きくし、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅢB-1 ②類とした。



第39図 重田遺跡包含層出土遺物実測図11 (土器ⅢB-1①類)



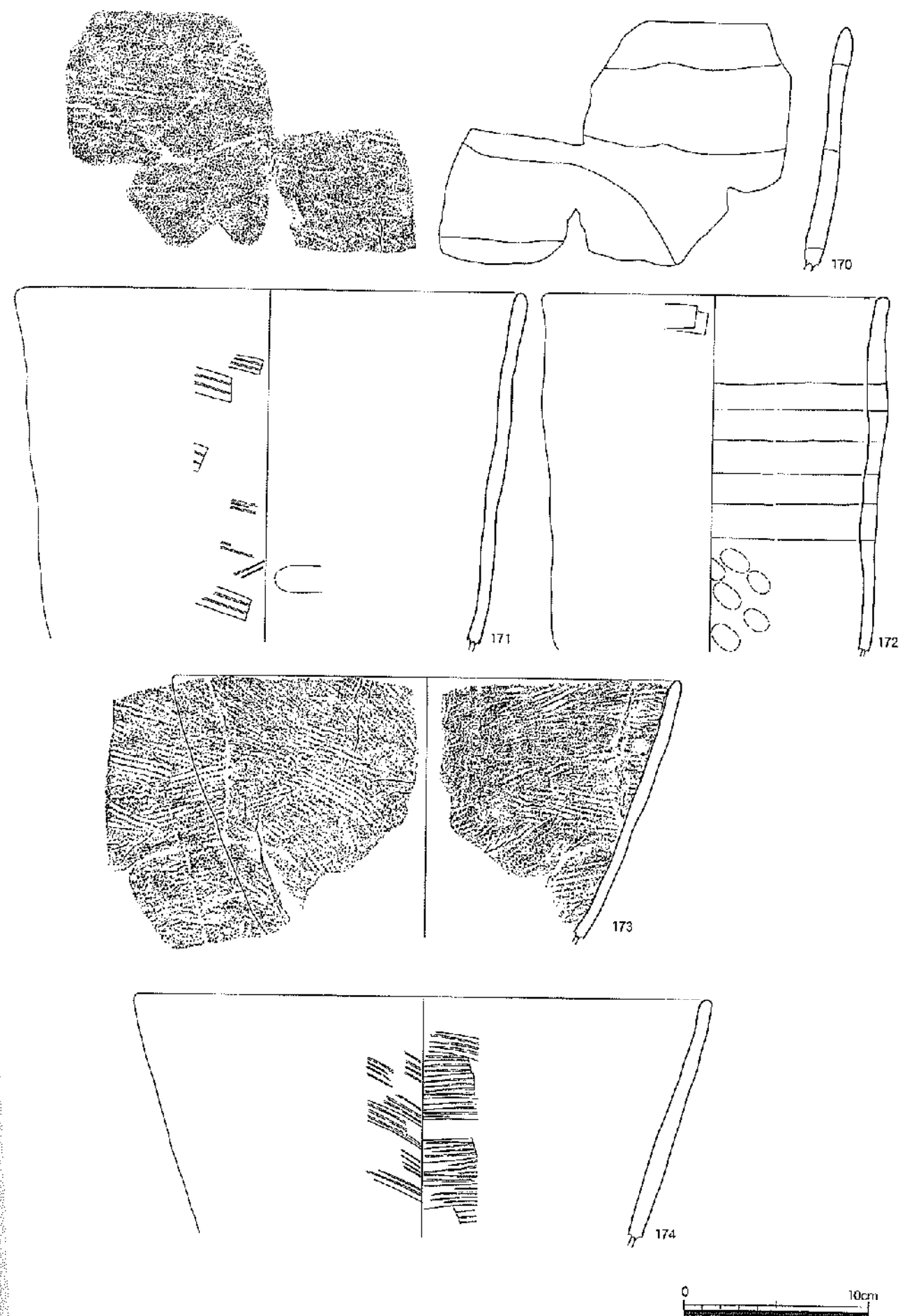
第40图 重田遺跡包含層出土遺物実測図12 (土器ⅢB-1①類)



第41图 重田遺跡包含層出土遺物実測図13 (土器ⅢB-1①類)



第42図 重田遺跡包含層出土遺物実測図14 (土器ⅢB-1①類)



第43図 重田遺跡包含層出土遺物実測図15 (土器ⅢB-1①類~ⅢB-1②類)

173の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。内面も同様である。174の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が残る。内面も同様で、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。

ⅢB-1 ③類 (第44図175・176)

ⅢB-1類の中で、口縁部が直立もしくは直立に近い形態を持ち、口縁部下位で締まる器形を有すると思われるものをⅢB-1 ③類とした。

175の器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施しているが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。176の外面の器面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。内面は、磨耗が激しく判然としないが、条痕調整が確認できる。

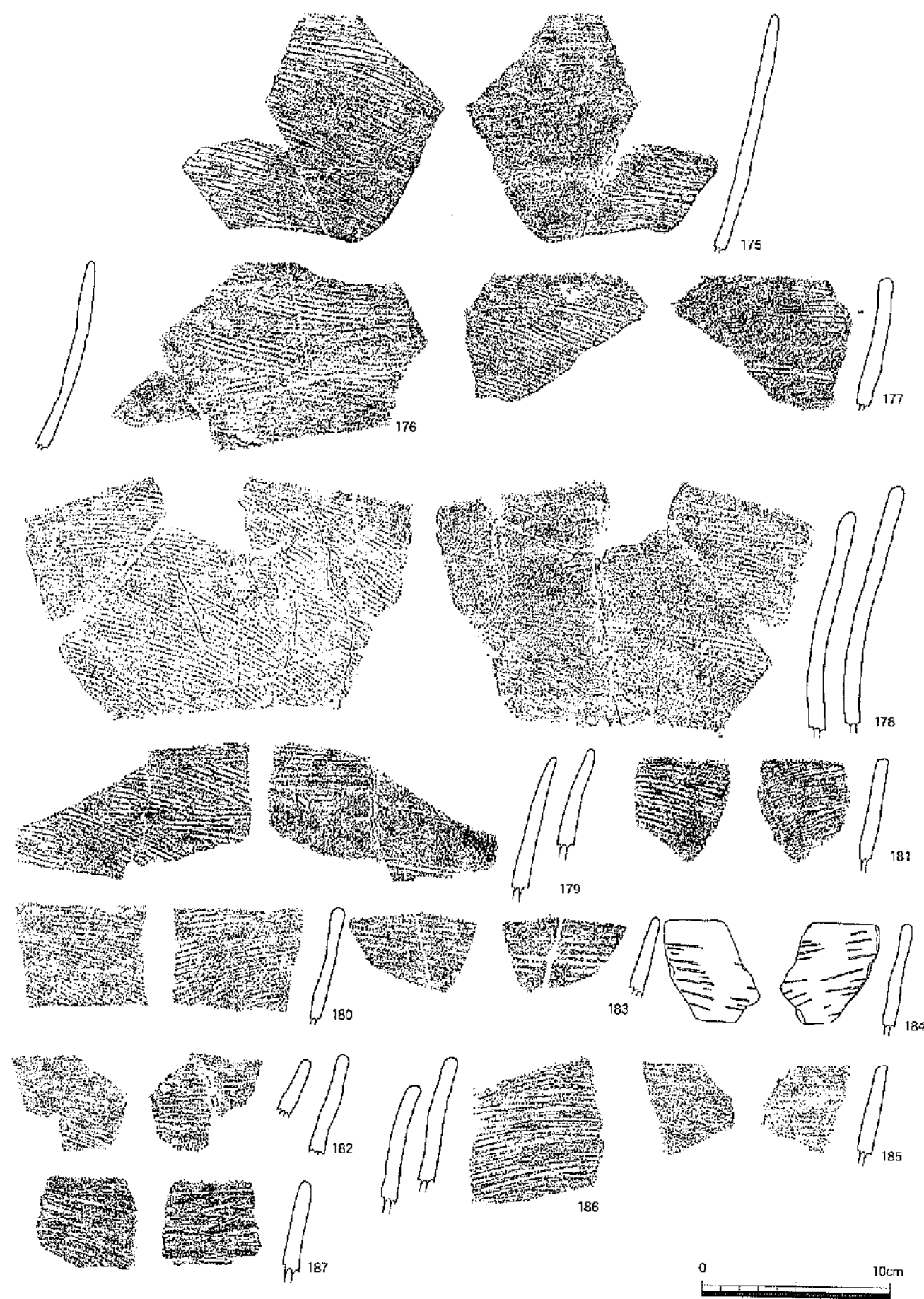
ⅢB-2 ①類 (第44図177～第51図359)

無文の土器のうち、口縁部付近が残存しているものをⅢB-2類とした。さらに、その中で、口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へいたる器形を有すると思われるものを、ⅢB-2 ①類とした。ただし、ⅢB-2類は残存部位が限られているため、他の器形のもをこの分類としてしまった可能性もある。

177～191は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。177～187は、内面調整が、外面と同様に貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。177・178・182・186は若干波状する口縁部を有する。187は、赤褐色を呈し、胎土が他のものと異なると思われる。188・189は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。188は磨耗が激しいが、この調整だと思われる。190・191は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残るものである。

192～217は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。192～202は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。193・195・198は若干波状する口縁部を有する。201は赤色を、202は赤褐色をそれぞれ呈し、胎土が他と異なると思われる。203～209は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。204・205は若干波状する口縁部を有する。210～214は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。214は、口縁部を若干肥大させている。215～217は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。

218～278は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。218～230は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。220・221は若干波状する口縁部を



第44図 重田遺跡包含層出土遺物実測図16 (土器ⅢB-1③類～ⅢB-2①類)

有する。231~245は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。231・242は若干波状する口縁部を有する。245は明赤褐色を呈し、胎土が他と異なると思われる。246~266は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。267~278は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。

279~359は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。280~287は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものである。207は若干波状する口縁部を有する。288~301は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。288は、補修孔を有する。299は若干波状する口縁部を有する。302~327は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。322は、口縁部に粘土を貼り付け、若干肥厚させている。328~359は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。329~331・333・335・337・344・357は、若干波状する口縁部を有する。359は、赤色を呈し、胎土が他と異なると思われる。

ⅢB-2②類 (第52図360~364)

ⅢB-2類の中で、口縁部が外反する器形を有すると思われるものをⅢB-2②類とした。

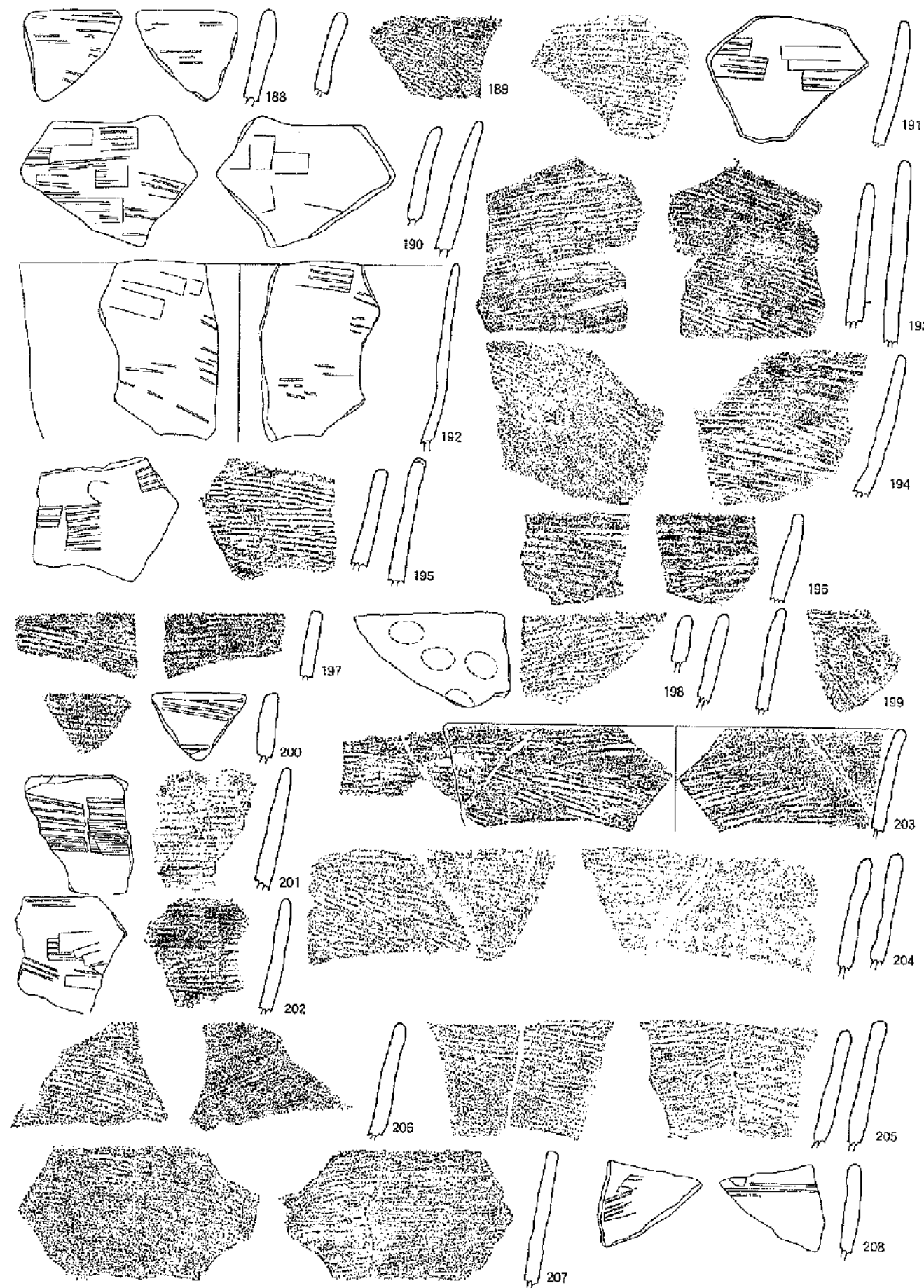
360は、補修孔を有する。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。361・362の器面調整は、外面はいずれも貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残る。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。363の器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残る。364の器面調整は、内外面ともに貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

ⅢB-2③類 (第52図365~379)

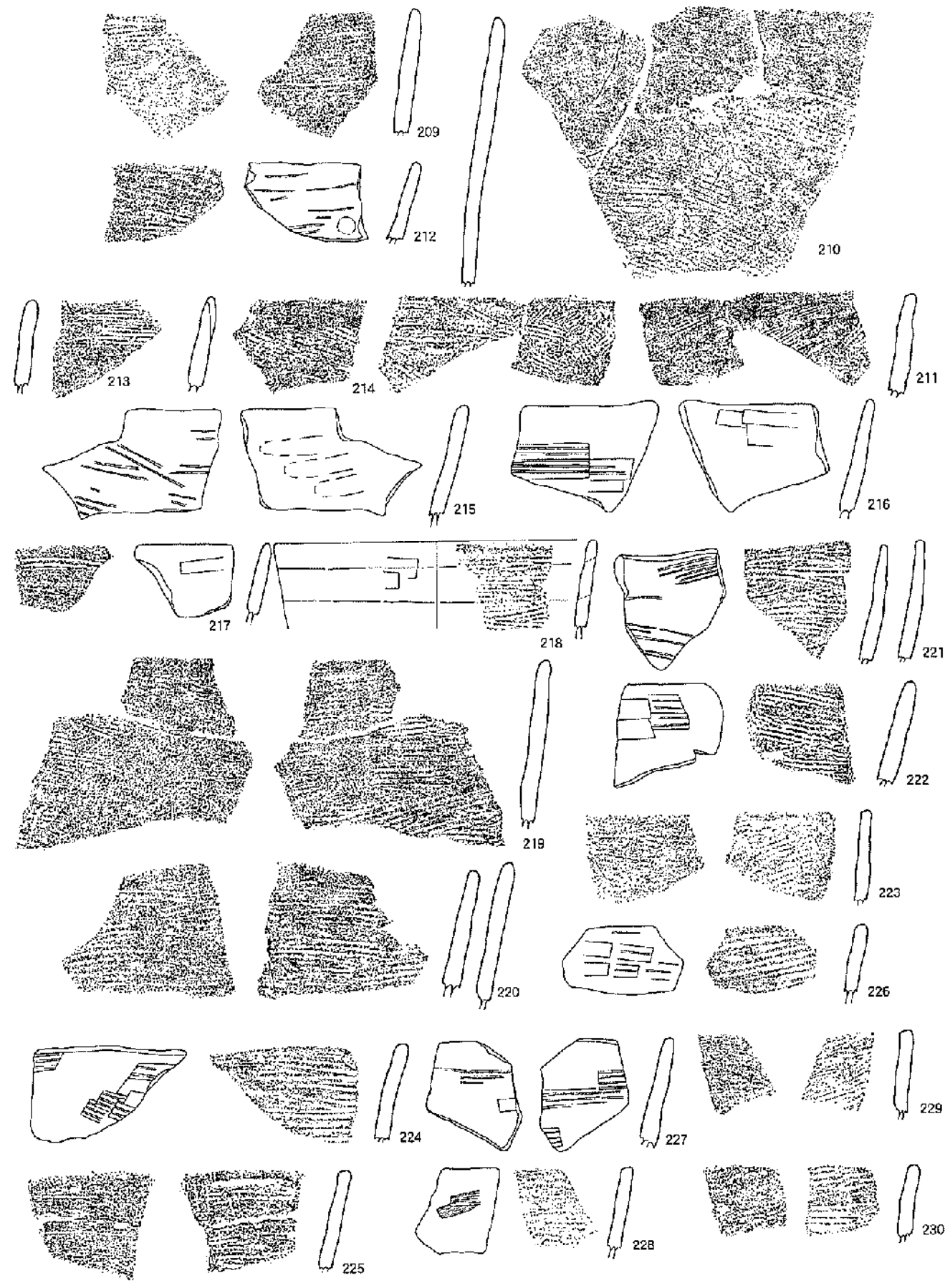
ⅢB-2類の中で、口縁部が内湾する器形を有すると思われるものをⅢB-2③類とした。

365~369は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧ではなく条痕が顕著に残るものである。365の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。366・367は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っている。368・369は、内面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

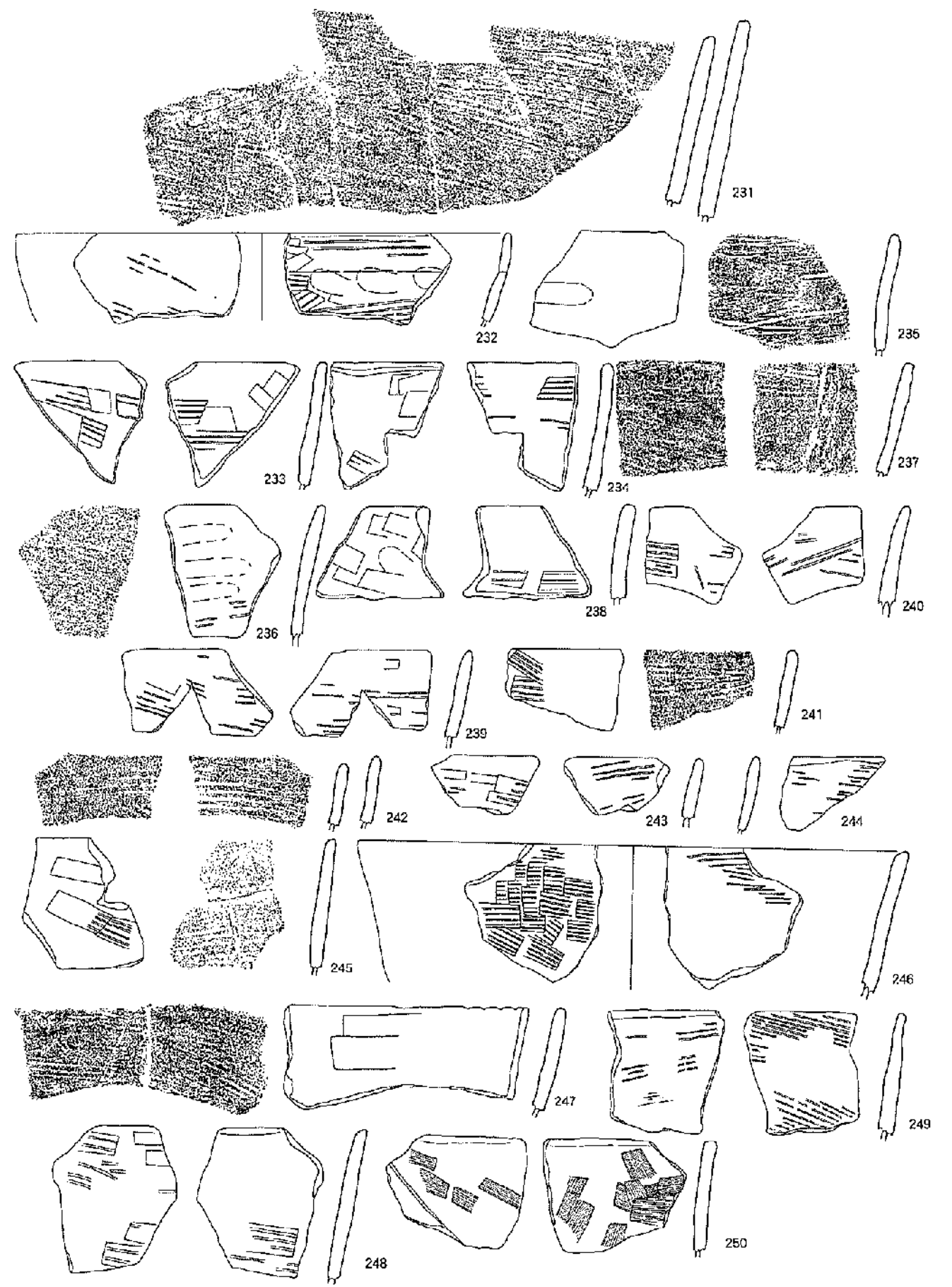
370~372は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。370の内面調整は、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残る。371, 372の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。



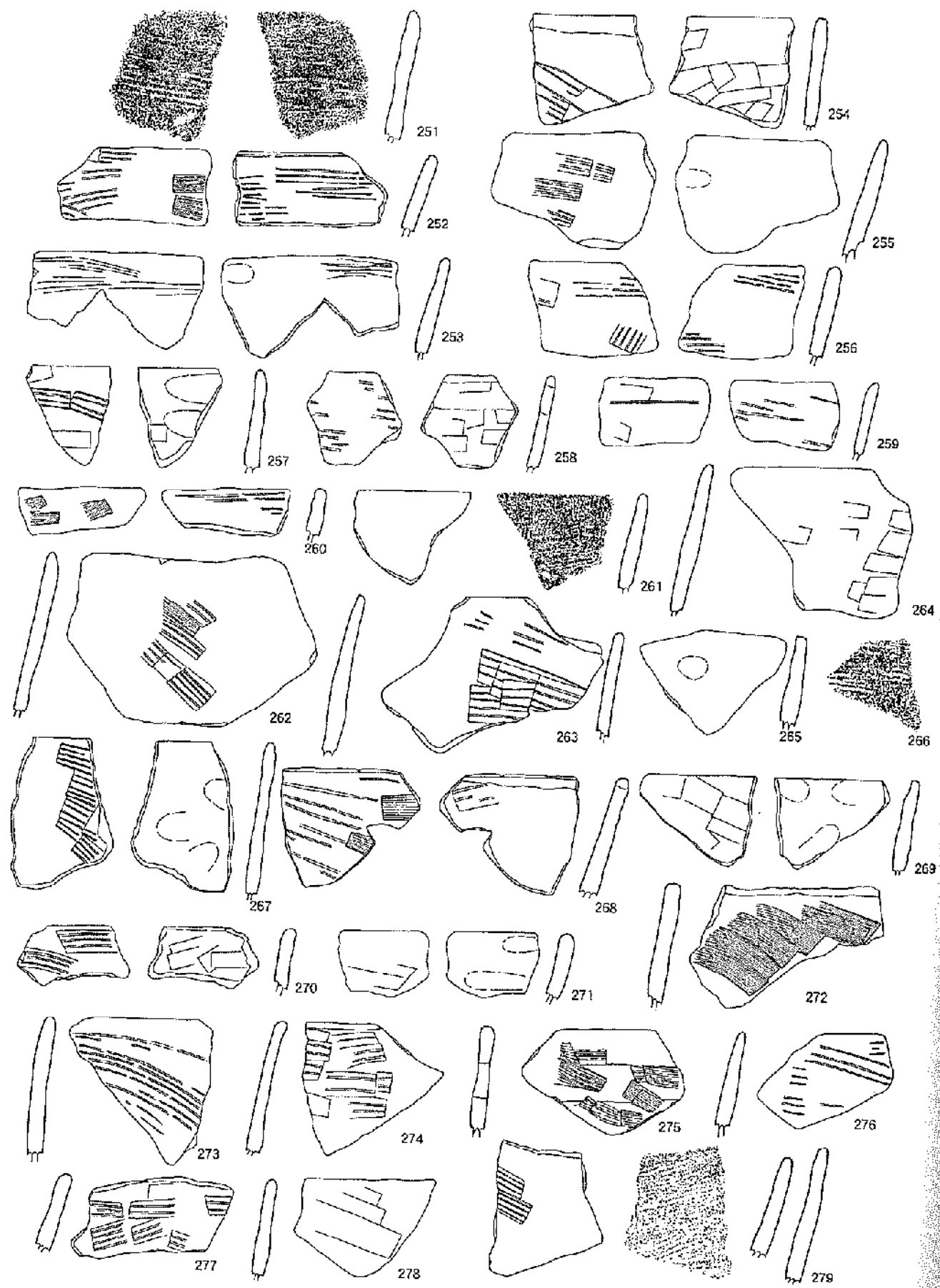
第45図 重田遺跡包含層出土遺物実測図17 (土器ⅢB-2①類)



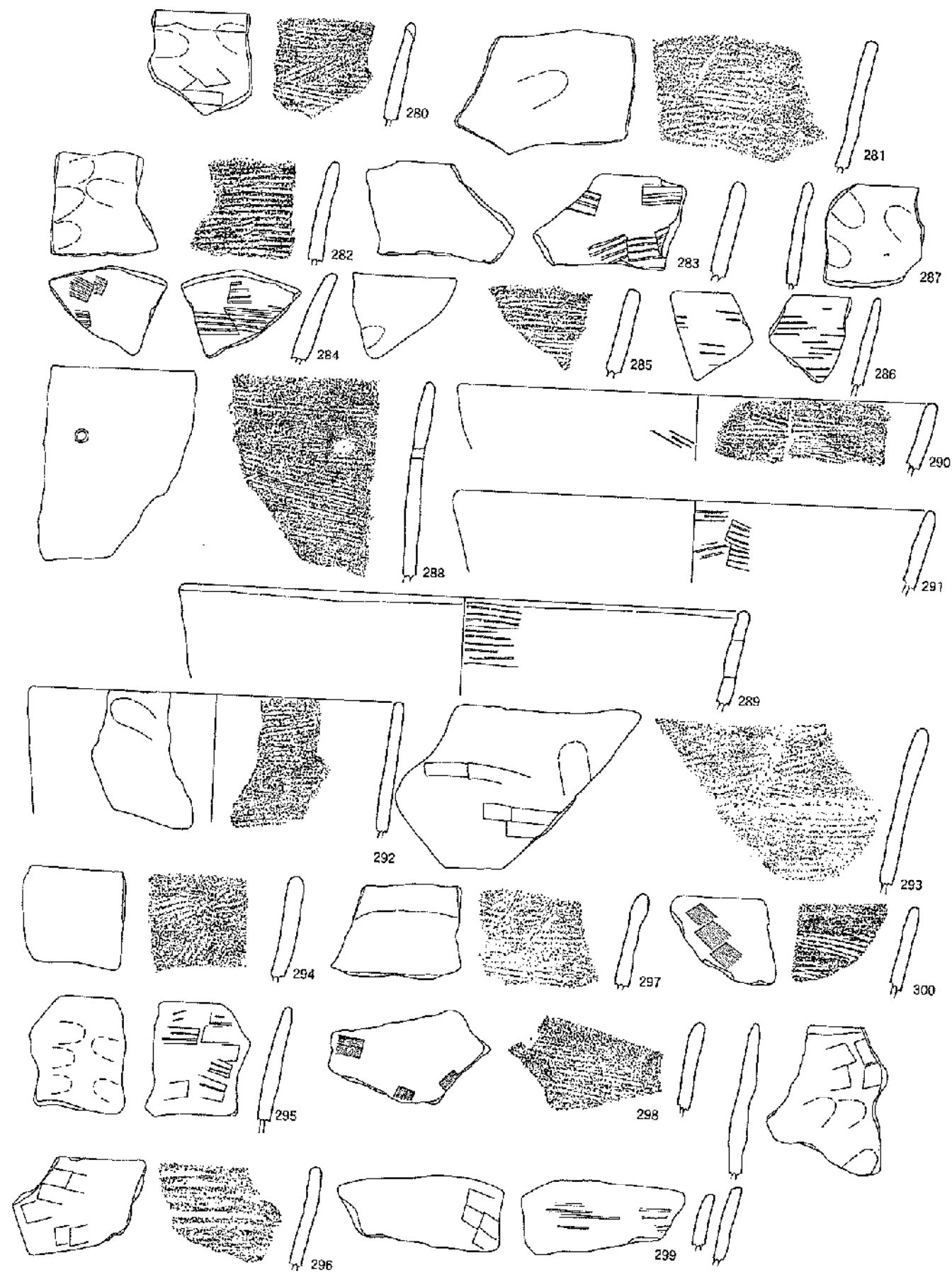
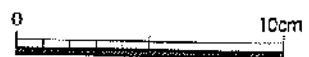
第46図 重田遺跡包含層出土遺物実測図18 (土器ⅢB-2①類)



第47図 重田遺跡包含層出土遺物実測図19 (土器ⅢB-2①類)

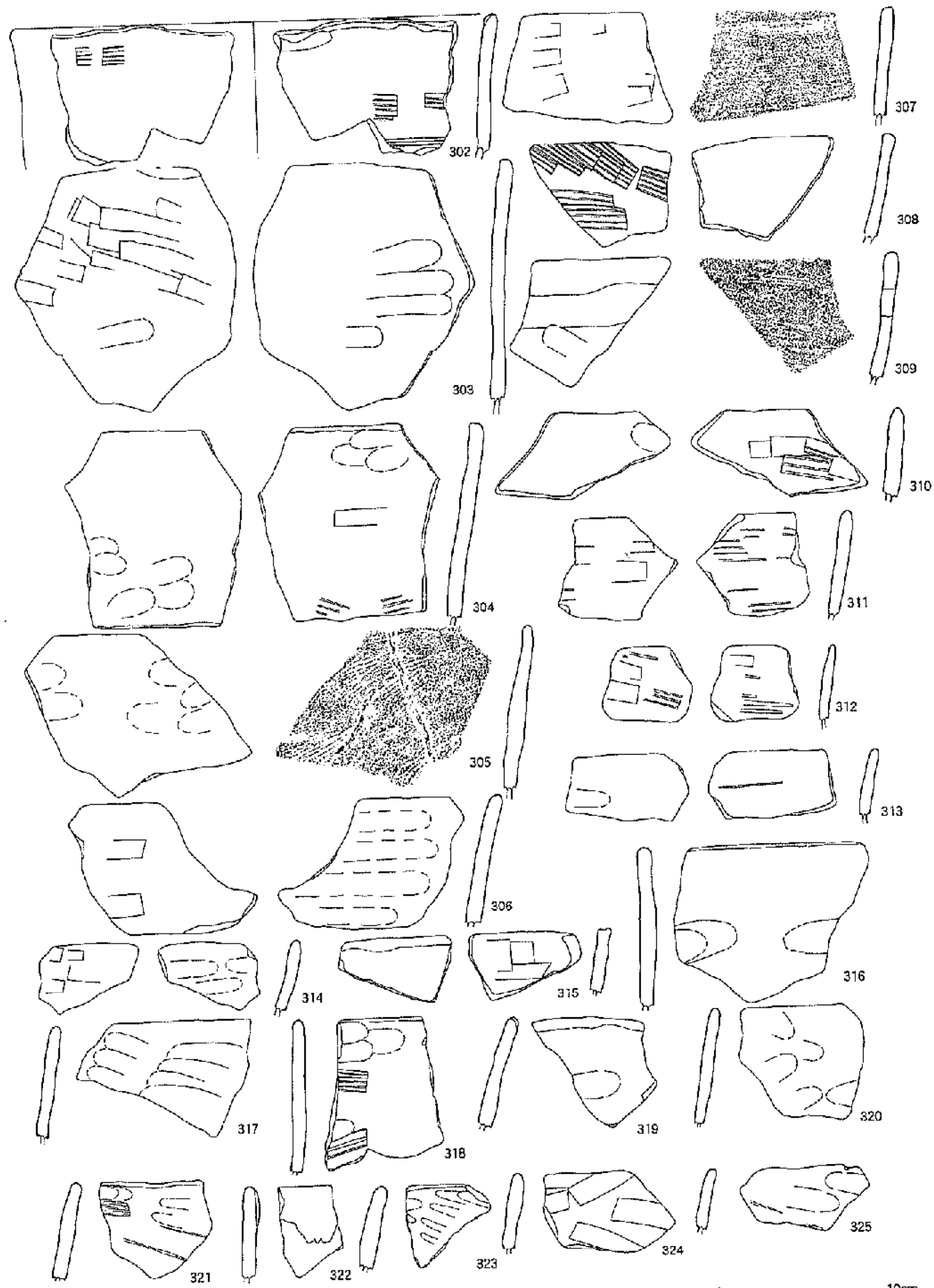


第48図 重田遺跡包含層出土遺物実測図20 (土器ⅢB-2①類)



第49図 重田遺跡包含層出土遺物実測図21 (土器ⅢB-2①類)





第50図 重田遺跡包含層出土遺物実測図22 (土器ⅢB-2①類)



第51図 重田遺跡包含層出土遺物実測図23 (土器ⅢB-2①類)

373~379は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。373の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。374の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残る。375~379の内面調整は、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

ⅢB-3類 (第52図380~383)

無文の土器のうち、胴部付近が残存しているものをⅢB-3類とした。

380は、頸部から底部付近にかけての部位が残存している。胴部がまっすぐ立ち上がり、口縁部へと開く器形であるが、口縁部が欠損しているため、詳細については不明である。器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っている。381~382は、いずれも残存部位が限られているため、傾き及び土器の上下については不明であり、図面は実測の便宜上の傾き及び上下である。381・382は胴部付近が残存しているものである。381は磨耗が激しいが、器面調整は、外面は貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものと思われる。内面も同様であると思われる。382の器面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。383は底部に近い部位と思われる。器面調整は、外面は磨耗が激しく判然としないが、貝殻条痕が確認できる。内面は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。

ⅢB-4類 (第53図384~402)

無文の土器のうち、底部付近が残存しているものをⅢB-4類とした。

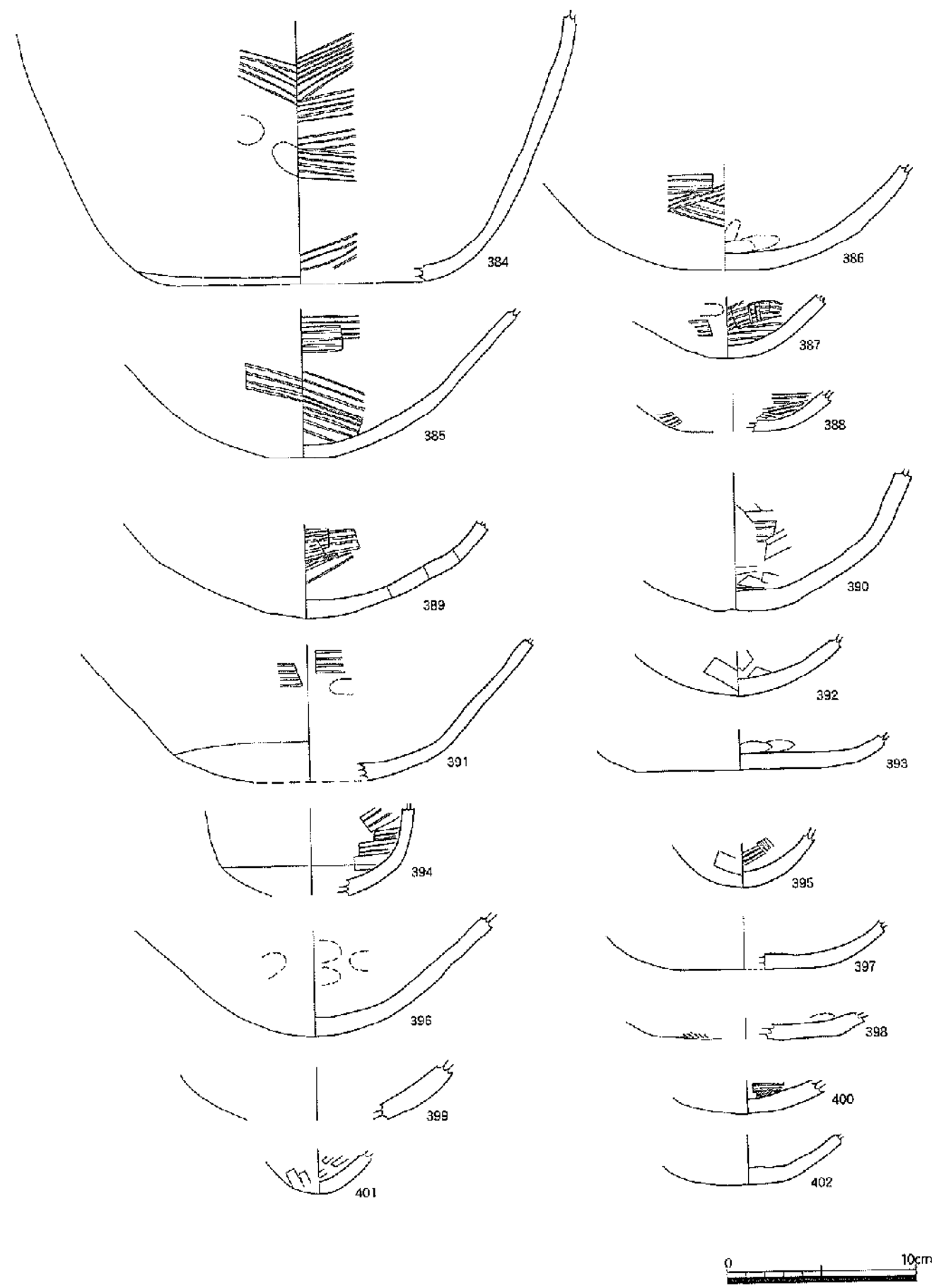
384~386は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧に条痕が顕著に残るものである。384・385の内面の調整は、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後一部ナデ消しているが、あまり丁寧に条痕が顕著に残る。386の内面の調整は、磨耗が激しく判然としないが、やはり外面と同様、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残るものと思われる。

387~393は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っているものである。387・388の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施すが、その後ナデ消しは行っておらず、条痕が顕著に残る。いずれも小片である。389~392の内面調整は、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っている。393は、殆ど平底に近いが、若干丸みを帯びる。内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。

394~402は、外面の器面調整が、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らないものである。394・395の内面調整は、貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後ナデ消しているが、条痕が残っている。396~402の内面調整は、外面と同様貝殻腹縁による条痕調整を施し、その後丁寧にナデ消しており、条痕は殆ど残らない。397・398は、殆ど平底に近いが、若干丸みを帯びる。



第52図 重田遺跡包含層出土遺物実測図24 (土器ⅢB-2②類~ⅢB-3類)



第53図 重田遺跡包含層出土遺物実測図25 (土器III-B-4類)

第12表 重田遺跡包含層出土土器観察表(1)

※胎土のS・C・K・R・UはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
 ※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

断面図 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色相		表面状態		完成	径	備考
						内	外	内	外			
29	1	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い黄	7.5YR4/2灰褐色	ナデ	ナデ	良	
29	2	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/4	7.5YR3/2暗褐色	ナデ	ナデ	良	
29	3	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR3/5暗褐色	5YR1/4灰褐色	ナデ	ナデ	良	
29	4	2	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR7/4暗	2.5YR4/2灰赤	ナデ	ナデ	良	19
29	5	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/2灰褐色	7.5YR5/2灰褐色	ナデ	ナデ	良	
29	6	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い黄	5YR1/2灰褐色	ナデ	ナデ	良	
29	7	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR4/1暗灰	10YR6/3に赤い黄褐色	ナデ	ナデ	良	
29	8	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	2.5YR2/1赤黒	2.5YR4/2赤褐色	ナデ	ナデ	良	
30	9	5	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐色	7.5YR6/2灰褐色	条痕	条痕・ナデ	良	39
30	10	6	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	7.5YR7/6	7.5YR7/3に赤い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
30	11	6	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	2.5YR7/6	2.5YR7/8	条痕・ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	良	35
30	12	6	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	5YR7/6	2.5YR6/6	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ・指押さえ	良	38
30	13	5	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	5YR6/1灰	5YR6/2灰褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
30	14	6	III	深鉢	胴部～底部	S・C・K	5YR6/4に赤い黄	5YR6/4に赤い黄	条痕	条痕・ナデ	良	31, 2
30	15	4	III	深鉢	胴部～底部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐色	10YR6/4に赤い黄褐色	条痕・指押さえ	条痕・ナデ	良	
30	16	5	III	深鉢	胴部～底部	S・C・K	5YR6/3に赤い赤褐色	5YR5/3に赤い赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
30	17	5	III	深鉢	底部	S・C・K	10YR6/3浅黄褐色	10YR7/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ・指押さえ	良	10
31	18	7	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐色	7.5YR6/4に赤い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	36 具底面点文
31	19	6	III	深鉢	口縁～胴部	S・C・K	7.5YR6/6	5YR6/6	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	具底面点文
31	20	6	III	深鉢	口縁部～胴部	S・C・K	5YR7/6	5YR6/6	条痕	条痕	良	具底面点文
31	21	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐色	7.5YR6/4に赤い黄			良	具底面点文
31	22	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6	7.5YR6/6	条痕・ナデ	条痕	良	具底面点文
31	23	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐色	7.5YR7/4に赤い黄		条痕	良	具底面点文
31	24	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	7.5YR6/3に赤い黄褐色			良	具底面点文
31	25	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR7/8	2.5YR7/8			良	具底面点文
31	26	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄	7.5YR6/3に赤い黄	条痕	条痕	良	具底面点文
31	27	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄	7.5YR7/3に赤い黄	条痕・ナデ		良	具底面点文
31	28	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6	7.5YR6/6	条痕・ナデ	条痕	良	具底面点文
31	29	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄	7.5YR5/4に赤い黄			良	具底面点文
31	30	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/3	5YR6/6明赤褐色	条痕		良	具底面点文
31	31	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い黄	7.5YR6/4に赤い黄	ナデ	ナデ	良	具底面点文
31	32	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄	7.5YR7/4に赤い黄	ナデ	ナデ	良	具底面点文
31	33	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR2/8	2.5YR2/8			良	具底面点文
31	34	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6	7.5YR6/6		条痕	良	具底面点文
31	35	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR4/1暗灰	5YR7/4に赤い黄	ナデ	ナデ	良	具底面点文
31	36	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6	5YR6/6			良	具底面点文
31	37	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6	7.5YR4/3			良	具底面点文
31	38	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6	5YR6/6			良	具底面点文
31	39	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6	7.5YR4/4			良	具底面点文
32	40	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/1暗灰	7.5YR6/4に赤い黄			良	具底面点文
32	41	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6	5YR6/6	ナデ	ナデ	良	17 具底面点文
32	42	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR1/1暗灰	5YR5/3に赤い赤褐色	ナデ	ナデ	良	25 具底面点文
32	43		III	深鉢	口縁部	S・C・K・U	7.5YR4/1暗灰	7.5YR6/4に赤い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	具底面点文
32	44	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6	5YR6/6	条痕・ナデ		良	具底面点文
32	45	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/3に赤い黄	5YR4/1暗灰	条痕		良	14 具底面点文
32	46	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄	7.5YR7/4に赤い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	具底面点文
32	47	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/3に赤い黄褐色	5YR7/6	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	具底面点文
32	48	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K・U	5YR6/6明赤褐色	5YR7/8	ナデ	ナデ	良	具底面点文
32	49	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K・U	10YR6/3に赤い黄褐色	5YR7/6	条痕・ナデ		良	具底面点文
32	50	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K・U	7.5YR7/4に赤い黄	7.5YR6/4に赤い黄	ナデ		良	21 具底面点文
32	51	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6	7.5YR7/6			良	20 具底面点文

第13表 重田遺跡包含層出土土器観察表(2)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

種別 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		径	備考		
						内	外	内	外				
32	52	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	19	具底面点文
32	53	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	ナデ	良		具底面点文
32	54	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/3に赤い赤褐色	2.5YR7/8褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	55	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	56	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐色	2.5YR5/6明赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	57	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	58	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐色	7.5YR7/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	59	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い黄褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	60	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K・U	7.5YR4/1黒灰	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	61	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	15	具底面点文
32	62	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	63	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐色	7.5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	64	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/3に赤い黄褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	65	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ・指押さえ		良		具底面点文
32	66	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/4に赤い黄褐色	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	67	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/6明赤褐色	5YR6/6褐色			良		具底面点文
32	68	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	69	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4	5YR7/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	70	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	7.5YR6/3に赤い黄褐色	条痕		良		具底面点文
32	71	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/3に赤い黄褐色	5YR7/3に赤い黄褐色			良		具底面点文
32	72	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い黄褐色	5YR7/6褐色			良		具底面点文
32	73	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/6明赤褐色	2.5YR4/8赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	74	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/1黒褐色	10YR4/1黒灰	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	34	具底面点文
32	75		III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	76	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/1に赤い黄褐色	2.5YR5/6明赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	77	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/2灰白	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	ナデ	良	7.8	具底面点文
32	78	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	7.5YR7/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	79	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い黄褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	ナデ		良		具底面点文
32	80	6	III	深鉢	胴部~胴部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	81	7	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	82	7	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR3/2黒褐色	5YR6/6褐色			良		具底面点文
32	83	7	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	84	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	条痕	条痕	良		具底面点文
32	85	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	2.5YR5/4に赤い赤褐色	2.5YR5/4に赤い赤褐色	ナデ・指押さえ	ナデ	良		具底面点文
32	86	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐色	5YR6/2灰褐色	条痕・ナデ・指押さえ		良		具底面点文
32	87	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	7.5YR5/2灰褐色	条痕・指押さえ・指ナデ		良		具底面点文
32	88	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR3/1黒褐色	5YR6/8褐色	条痕	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	89	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
32	90	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR4/3褐色	7.5YR4/3褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文
32	91	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐色	5YR4/3に赤い赤褐色	条痕	条痕	良		具底面点文
32	92	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR6/6褐色	5YR5/4に赤い赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	29	具底面点文+具底面点文
32	93	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い黄褐色	7.5YR6/4に赤い黄褐色			良		具底面点文+具底面点文
32	94	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/3に赤い黄褐色	5YR7/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文+具底面点文
32	95	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	7.5YR7/4に赤い黄褐色	条痕	条痕	良		具底面点文+具底面点文
32	96	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐色	7.5YR7/4に赤い黄褐色	条痕	条痕	良		具底面点文+具底面点文
32	97		III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
32	98	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6褐色	7.5YR7/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
32	99	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文+具底面点文
32	100	7	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	2.5YR3/1明赤灰	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕	条痕	良	24	具底面点文+具底面点文
32	101	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
32	102	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐色	5YR6/6褐色	条痕	条痕・ナデ	良		具底面点文

第14表 重田遺跡包含層出土土器観察表(3)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

種別 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		径	備考		
						内	外	内	外				
35	103	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR4/2灰褐色	5YR6/6褐色	条痕	条痕	良		具底面点文+具底面点文
35	104	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕		良		具底面点文
35	105	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR6/6褐色	7.5YR6/6褐色	条痕・ナデ		良		具底面点文+具底面点文
35	106	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR6/4に赤い黄褐色	10YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
35	107	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	2.5YR6/4に赤い黄褐色	2.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
35	108	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕	良		具底面点文+具底面点文
35	109	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR3/1黒褐色	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
35	110	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文+具底面点文
35	111	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/1黒灰	5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
35	112	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR7/4に赤い黄褐色	2.5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
35	113	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
35	114	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		具底面点文
35	115	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/1黒灰	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	116	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐色	2.5YR7/8褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	117	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/2明赤灰	7.5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	36	相交弧文
35	118	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR4/6赤褐色	5YR3/3に赤い赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	119	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/3に赤い黄褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	条痕	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	120	7	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐色	5YR6/6褐色	条痕	条痕	良		相交弧文
35	121	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR6/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	122	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	123	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	124	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐色	5YR4/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ		良		相交弧文
35	125	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐色	5YR5/3に赤い赤褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	126	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良		相交弧文
35	127	5	III	深鉢	胴部	S・C・K	2.5YR6/6褐色	2.5YR6/4に赤い赤褐色			良		相交弧文
35	128	7	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR4/2灰褐色	5YR4/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文+具底面点文
35	129	6	III	深鉢	胴部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い黄褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文+具底面点文
35	130	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐色	5YR2/2黒褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		相交弧文+具底面点文
35	131	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR2/1赤褐色	2.5YR4/4に赤い赤褐色	条痕	条痕	良		相交弧文+具底面点文
35	132		III	深鉢	胴部	S・C・K	2.5YR7/4赤褐色	7.5YR5/2灰褐色	条痕	条痕	良		相交弧文
35	133	4	III	深鉢	胴部	S・C・K	5YR6/6褐色	7.5YR5/3に赤い黄褐色	条痕	条痕	良		相交弧文
35	134	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐色	10YR3/2黒褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		口唇部に具底面点文
35	135	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐色	10YR4/2灰黄褐色	条痕	条痕	良		口唇部に具底面点文
35	136	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い赤褐色	5YR4/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		口唇部に具底面点文
35	137	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6褐色	2.5YR7/6褐色	条痕	条痕	良	29	口唇部に具底面点文
35	138	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6褐色	5YR5/6明赤褐色	条痕	条痕	良		口唇部に具底面点文
35	139	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/4に赤い黄褐色	5YR6/6褐色	条痕・ナデ		良		口唇部に具底面点文
35	140	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い黄褐色	7.5YR6/3に赤い黄褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	30	口唇部に具底面点文
35	141	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い黄褐色	2.5YR7/6褐色	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		口唇部に具底面点文
35	142	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐色	5YR6/4に赤い黄褐色	条痕	条痕・ナデ	良		口唇部に具底面点文
35	143	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐色	5YR6/8褐色	条痕	条痕	良		口唇部に具底面点文
35	144	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐色	10YR5/3に赤い黄褐色	条痕	条痕	良		口唇部に具底面点文
35	145	5											

第15表 重田遺跡包含層出土土器観察表(4)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
 ※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

種別 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		焼成	備考	
						内	外	内	外			
39	151	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR5/6明赤褐	5YR3/1黒褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	25
40	155	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR9/4淺黄褐	7.5YR7/4に赤い点	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	32
40	156	7	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR6/6橙	2.5YR5/6明赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	39
40	157	7	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR5/6橙	5YR5/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
40	158	3	II	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	10YR7/3に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
40	159	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い黄褐	7.5YR5/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
41	160	4	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR5/3に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	19
41	161	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR5/2暗赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	
41	162	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR4/2灰褐	5YR4/3に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
41	163	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
41	164	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	31
42	165	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	30
42	166	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐	7.5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
42	167	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	5YR5/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
42	168	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
42	169	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
43	170	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
43	171	4	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	5YR5/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
43	172	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	5YR6/4に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
43	173	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い黄褐	7.5YR5/4に赤い黄褐	条痕	条痕	良	27
43	174	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	31
44	175	6	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	2.5YR7/8橙	2.5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕	良	
44	176	5	III	深鉢	口縁部~胴部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
44	177	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕	良	
44	178	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR3/2暗赤褐	5YR7/6橙	条痕	条痕	良	
44	179	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕	良	
44	180	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕	良	
44	181	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	7.5YR7/6橙	条痕	条痕	良	
44	182	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR3/4暗赤褐	2.5YR3/4暗赤褐	条痕	条痕	良	
44	183	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR5/6明赤褐	条痕	条痕	良	
44	184	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR4/6赤褐	条痕	条痕	良	
44	185	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
44	186	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕	良	
44	187	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR3/2黒褐	5YR5/6明赤褐	条痕	条痕	良	
45	188	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐	7.5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕	良	
45	189	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR5/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕	良	
45	190	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	5YR5/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕	良	
45	191	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い黄褐	7.5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕	良	
45	192	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	5YR4/3に赤い赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	23.6
45	193	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐	2.5YR4/1赤灰	条痕	条痕・ナデ	良	
45	194	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3淺黄褐	2.5YR8/3淺黄	条痕	条痕・ナデ	良	
45	195	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕	条痕・ナデ	良	
45	196	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐	5YR7/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	197	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	198	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR5/4に赤い赤褐	2.5YR5/4に赤い赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	199	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR3/2暗赤褐	5YR5/4に赤い赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	200	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/3に赤い黄褐	5YR7/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	201	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/4暗赤	10YR4/6赤	条痕	条痕・ナデ	良	
45	202	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR3/2暗赤褐	2.5YR4/9赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	
45	203	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い黄褐	7.5YR6/3に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
45	204	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	2.5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		

第16表 重田遺跡包含層出土土器観察表(5)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
 ※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

種別 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		焼成	備考	
						内	外	内	外			
45	205	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
45	206	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
45	207	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/2黒褐	10YR4/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
45	208	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR4/2灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	209	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	210	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	211	3	II	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/4に赤い黄褐	5YR5/6明赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	212	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/1暗灰	2.5YR2/2暗赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	213	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/4に赤い黄褐	10YR7/2に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	214	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	215	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	216	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	217	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/8橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
46	218	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/1黒褐	10YR5/2灰黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	219	3	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	16
46	220	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い赤褐	2.5YR6/4暗赤	条痕	条痕・ナデ	良	
46	221	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕	条痕・ナデ	良	
46	222	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/6橙	5YR7/6橙	条痕	条痕・ナデ	良		
46	223	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/3に赤い赤褐	2.5YR7/4に赤い赤褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	224	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	225	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐	7.5YR7/3に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	226	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	2.5YR4/2暗赤	条痕	条痕・ナデ	良	
46	227	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/3に赤い黄褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	228	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/2灰褐	5YR6/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	229	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR4/2灰褐	5YR7/4に赤い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
46	230	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/1暗灰	5YR7/6橙	条痕	条痕・ナデ	良	
47	231	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い赤褐	5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	232	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	233	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い黄褐	5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	26	
47	234	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	7.5YR5/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	235	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	236	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR7/8橙	5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	237	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐	7.5YR6/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	238	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い赤褐	5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	239	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/8橙	7.5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	240	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	10YR5/3に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	241	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/3に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	242	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	243	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/6橙	2.5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	244	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	245	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	246	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い黄褐	7.5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	247	1	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/4淺黄褐	10YR6/3に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	29
47	248	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	249	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い黄褐	7.5YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
47	250	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/2灰褐	5YR5/3に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
48	251	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/3に赤い赤褐	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
48	252	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/2灰褐	10YR6/3に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
48	253	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	5YR5/2灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
48	254	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い黄褐					

第17表 重田遺跡包含層出土土器観察表(6)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

神田遺跡 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		完成	径	備考
						内	外	内	外			
48 250	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 257	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR6/6橙	条痕・ナデ・指ナデ	条痕・ナデ	良		
48 258	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/4黄褐	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 260	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 260	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	7.5YR6/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 261	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/6黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 262	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 263	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 264	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 265	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/1褐灰	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 266	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/3に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 267	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/9黄褐	5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 268	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR5/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 269	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 270	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い橙	10YR5/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 271	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR8/4黄褐	2.5YR7/3に赤い橙	条痕・ナデ・指ナデ	条痕・ナデ	良		
48 272	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	7.5YR7/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 273	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 274	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い橙	7.5YR5/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 275	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 276	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	7.5YR8/5黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 277	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 278	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
48 279	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 280	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 281	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ・指ナデ	良		
49 282	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 283	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 284	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR7/5橙	5YR7/5に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良			
49 285	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/4黄褐	5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 286	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い赤褐	5YR4/2灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 287	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い橙	7.5YR8/4黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 288	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		補修孔
49 289	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	30.5	
49 290	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	25.6	
49 291	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	26	
49 292	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	5YR7/3に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	19	
49 293	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 294	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い橙	2.5YR5/9黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 295	1	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/1灰	5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 296	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 297	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR8/5黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 298	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い橙	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 299	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 300	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/2灰黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
49 301	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い橙	2.5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 302	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/1褐灰	5YR6/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	26	
50 303	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 304	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 305	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 306	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/5黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		

第18表 重田遺跡包含層出土土器観察表(7)

※胎土のS・C・K・R・U・SはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

神田遺跡 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面調整		完成	径	備考
						内	外	内	外			
50 307	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い橙	7.5YR5/2灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 308	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 309	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR7/9赤赤褐	5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 310	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 311	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/6明赤褐	10YR5/9赤	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 312	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	7.5YR6/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 313	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良			
50 314	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/1褐灰	7.5YR5/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 315	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 316	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/1褐灰	7.5YR6/5黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ・指ナデ	良		
50 317	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に赤い橙	4.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 318	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR5/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ・指ナデ	良		
50 319	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 320	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 321	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR4/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 322	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に赤い橙	7.5YR5/11に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 323	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/2灰褐	2.5YR4/6赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 324	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/1褐灰	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
50 325	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/4に赤い赤褐	5YR6/4に赤い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 326	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 327	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/1褐灰	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 328	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/4に赤い橙	5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 329	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/4に赤い橙	7.5YR5/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 330	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐	7.5YR7/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 331	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	7.5YR5/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 332	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR6/6橙	7.5YR5/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 333	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR5/2灰黄褐	7.5YR6/5黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 334	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 335	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 336	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/5橙	5YR6/5橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 337	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/2明赤褐	5YR8/3黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 338	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い橙	7.5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 339	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に赤い黄褐	5YR6/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 340	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	2.5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 341	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/2灰赤	2.5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 342	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	10YR5/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 343	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 344	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/1褐灰	7.5YR6/3に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 345	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 346	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/2灰黄褐	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 347	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	2.5YR7/8橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 348	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 349	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 350	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 351	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6橙	7.5YR6/4に赤い橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 352	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR8/3黄褐	7.5YR8/6黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 353	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に赤い橙	7.5YR7/6橙	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 354	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/2明赤褐	7.5YR7/2明赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ・指ナデ	良		
51 355	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/3に赤い黄褐	10YR7/4に赤い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良		
51 356	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	1						

第19表 重田遺跡包含層出土土器観察表(8)

※胎土のS・C・K・R・U・SiはそれぞれS=石英, C=長石, K=角閃石, R=小石, U=雲母を指す。
※表中の径については、口縁部なら口径を、底部なら底径をさす。(大半が破片であるため、復元径である。)

所出 番号	出土区	層	器種	部位	胎土	色調		器面観察		胎成	径	備考
						内	外	内	外			
51	358	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/3に多い黄緑	7.5YR6/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
51	359	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/2暗赤褐	10YR5/8赤	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	360	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR4/2灰褐	7.5YR5/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕	良	
52	361	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に多い黄	7.5YR6/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	362	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR3/2黒褐	10YR5/3に多い黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	363	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に多い黄	5YR4/6赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	364	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/3に多い黄	5YR4/4灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	365	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に多い黄	7.5YR6/4に多い黄	条痕	条痕	良	
52	366	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	8YR6/4に多い黄	5YR3/2暗赤褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良	
52	367	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	2.5YR6/2灰赤	5YR6/3褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良	
52	368	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	8YR7/6褐	8YR6/6褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	369	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/3に多い赤褐	7.5YR4/2灰褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	370		III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に多い黄	7.5YR7/2明灰	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	371	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/8褐	7.5YR6/5褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良	
52	372	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR7/8褐	2.5YR7/6褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	373	4	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR7/3に多い黄緑	7.5YR6/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	374	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/3に多い黄	7.5YR6/3に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	375	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	376	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/4に多い黄	7.5YR6/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	377	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	5YR5/3に多い赤褐	5YR5/4に多い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	378	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に多い黄	5YR5/3に多い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	379	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/6褐	7.5YR7/6褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	380	6	III	深鉢	口縁部	S・C・K	10YR6/3に多い黄緑	5YR5/3に多い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
52	381	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR6/2灰褐	2.5YR7/4灰赤褐	条痕	条痕	良	
52	382	5	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR7/4に多い黄	10YR5/3に多い黄褐	条痕	条痕・ナデ	良	
52	383	7	III	深鉢	口縁部	S・C・K	7.5YR5/4に多い黄	7.5YR6/4に多い黄	条痕	条痕	良	
53	384	4	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR7/6褐	7.5YR6/3に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ・指押さえ	良	14
53	385	5	III	深鉢	底部	S・C・K	5YR6/3に多い黄	5YR6/3に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	4
53	386	4	III	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR7/3暗赤褐	5YR5/4に多い赤褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良	5
53	387	5	III	深鉢	底部	S・C・K	8YR6/6褐	5YR6/6褐	条痕	条痕・ナデ	良	2
53	388	6	III	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR6/6褐	7.5YR3/2黒褐	条痕	条痕・ナデ	良	5
53	389	6	III	深鉢	底部	S・C・K	5YR5/4に多い赤褐	5YR6/3に多い赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	1
53	390	6	III	深鉢	底部	S・C・K	5YR7/6褐	5YR7/6褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	4
53	391	6	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR7/4に多い黄	7.5YR7/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	6
53	392	5	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR7/3に多い黄	7.5YR6/3に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	2
53	393	6	III	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR7/6褐	2.5YR7/8褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ	良	10
53	394	6	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR6/3に多い黄	2.5YR5/2灰赤	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	4
53	395	5	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR6/4に多い黄	7.5YR6/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	3
53	396	5	III	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR7/6褐	2.5YR6/6褐	条痕・ナデ・指押さえ	条痕・ナデ・指押さえ	良	2
53	397	4	III	深鉢	底部	S・C・K	5YR6/6褐	7.5YR7/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	8
53	398	6	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR4/2灰褐	2.5YR5/3暗赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	4
53	399	5	III	深鉢	底部	S・C・K	8YR6/2灰褐	5YR7/4に多い黄	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	
53	400	6	III	深鉢	底部	S・C・K	10YR4/1暗赤	10YR5/2灰黄褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	2
53	401	6	III	深鉢	底部	S・C・K	7.5YR7/3に多い黄	5YR7/6褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	2
53	402		III	深鉢	底部	S・C・K	2.5YR3/5暗赤褐	2.5YR4/6赤褐	条痕・ナデ	条痕・ナデ	良	4

②石器 (第54図403~407)

Ⅲ層から、石器が十数点出土した。Ⅲ層出土の土器が、縄文時代前期に限られていることから、石器もほぼ同時期のものとして考えられる。以下、器種による分類に従い記述を行う。8点を図化した。

磨製石斧 (第54図403~405)

欠損品も含めて4点出土したが、うち3点を図化した。403は、軸の両端に刃部を有する。破損後の、二次的加工の痕跡であろうか。軸方向と平行、あるいは軸方向よりやや斜方向に使用痕が観察できる。石材は頁岩である。404は砂岩製の磨製石斧である。基部に成型時のものと思われる叩痕が観察できる。405はホルンフェルス製の石斧である。刃部に軸方向と平行に使用痕が観察できる。

磨・敲石 (第54図406・407)

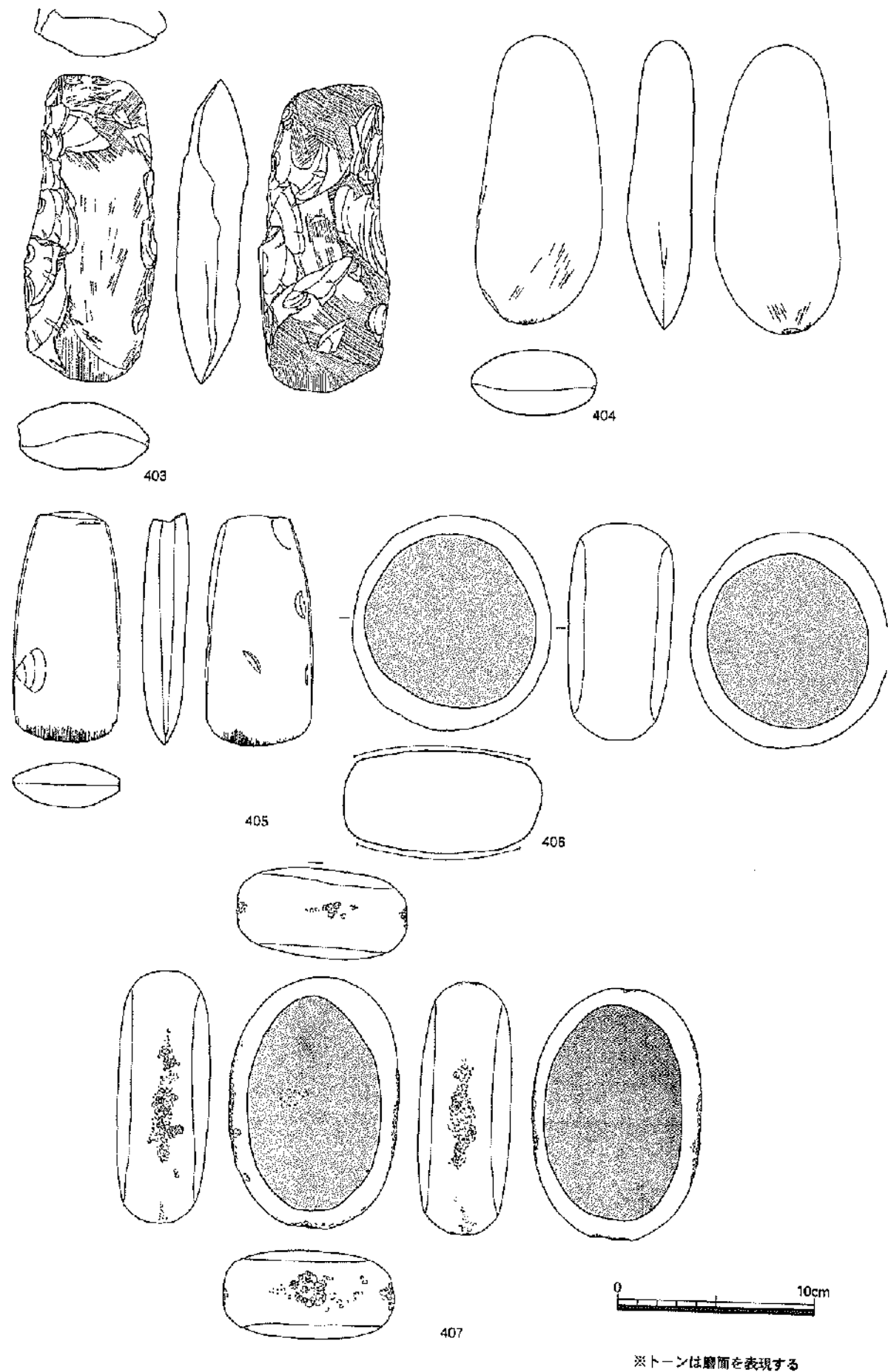
欠損品も含めて8点出土したが、うち2点を図化した。406は安山岩製の磨石である。表面に傷跡・欠損痕が観察できるが、成型時・使用時の敲打痕ではなく、二次的な要因によるものと思われる。407は、器表面(両面)に磨面を有する。側面に敲打痕を有する。石材は砂岩である。

第20表 重田遺跡遺物包含層出土石器観察表

押図 番号	遺物 番号	出土区	層	器種	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
54	404	3	III	磨製石斧	砂岩	14.8	6.4	3.4	450	
54	405	6	III	磨製石斧	ホルンフェルス	11.8	5.6	2.4	230	
54	406	5	III	磨石	安山岩	11.0	10.7	5.3	910	
54	407	5	III	磨石	砂岩	12.9	8.7	4.6	800	

(第四章 引用・参考文献)

相美伊久雄 2000 「深浦式系土器の再検討」 『人類史研究』第12号



第54図 重田遺跡包含層出土遺物実測図26 (石器)

第V章 まとめ

第1節 遺構及び遺構内出土の遺物について

①宮ノ前遺跡

宮ノ前遺跡の概要は、以下のようにまとめられる。まず、第一に、全体的に遺物の出土が少なくかつまばらに点在して出土している、ということである。次に、ほぼ単一の遺物包含層中から、縄文時代後期から中世にかけての遺物が出土している、ということである。そういった状況下で、確とした遺構は検出されておらず、遺構として判断されたのは土坑1と軽石集石1のみであった。

土坑1は、7区より検出されたもので、縦約1.9m×横約2.6mの方形状のプランを有し、深さは約30cmである。方形の周縁部に直径10cm大の円柱状のピットを3基有し、Ⅲb層が埋土として充填している。この土坑からは、遺物量が少ない宮ノ前遺跡において、比較的多量の成川式土器片が、密集して検出された。土坑が方形のプランを有すること、周縁部に柱穴状のピットを有することから、住居址であるとの想定も成り立ちそうではあるが、宮ノ前遺跡自体が前述したような状態であることから、住居址と考えるよりは、遺物が2次的に廃棄された場所と考えるほうが容易であろう。よって、遺構内遺物として成川式土器が検出されているが、土坑の形成時は古墳時代ではなく、それ以降と想定したい。

軽石集石1は、15区より検出されたもので、10cm大～20cm大の軽石57個により形成される。この軽石は、いずれも加工の痕跡、焼けた痕跡等は確認できなかった。出土層はⅢa層であるが、時期の特定は不可能である。可能性としては、加工前の軽石の貯蔵場所か、2次的に軽石が廃棄された痕跡であろうか。

いずれも、明確な性格は判然とせず、今後の研究を待ちたい。

②重田遺跡

重田遺跡は、Ⅲ層から縄文時代前期の遺物が大量に出土し、足の踏み場もない状況であった。そのような状況であったので、遺構の検出も期待されたのだが、確とした遺構は検出できず、2つの土坑(土坑1、土坑2)と、磨石・石皿・石斧がセット状に検出されたのみであった。

土坑1は、3区と4区の境目より検出された土坑で、底辺縦約2.2m、高さ約0.8mのいびつな三角形のプランを有する(調査区の南側壁面に接しているため、正確なプランは不明)。床面が2段の階段状になっており、高い方の段が深さ約10cm、低い方の段が深さ約40cmである。特に遺物の出土はみられなかったが、Ⅲ層を埋土とすることから、この土坑の形成時期も縄文時代前期と考えられる。

土坑2は、5区より検出された土坑で、長軸約1m×短軸約0.8mの楕円形のプランを有する。深さは約15cmとあまり深くなく、断面は凸レンズ状を呈する。特に遺物の出土はみられなかったが、Ⅲ層を埋土とすることから、この土坑の形成時期も縄文時代前期と考えられる。

7区より、磨石・石皿・石斧がセット状に出土した。出土状況としては、石皿の上に磨石が置かれるように出土し、そのすぐ近辺より石斧が2点出土する、という状況であった。周辺には、特に掘り込み等は観察できなかった。出土層はⅢ層であり、縄文時代前期のものと思われる。詳

細については不明だが、重田遺跡を残した人々の、何らかの精神活動を感じさせる遺構と見えよう。

いずれも明確な性格は判然とせず、今後の研究を待ちたい。

第2節 包含層出土遺物について

①宮ノ前遺跡

縄文土器

I～IV類土器はいずれも縄文時代後期に位置付けられる土器である。I類土器は指宿式土器と思われるものである。II類は市来式土器と思われるものである。III類は明確な型式分類は不明であるが、縄文時代後期の土器と思われるもので、無文のものである。IV類は、縄文時代後期の土器と思われるもので、底部付近が残存しているものを一括してこの分類として取り扱った。残存部位が少なかったため明確な型式分類は避けたが、市来式土器あるいはその系統の土器と思われる。

V～IX類土器はいずれも縄文時代晩期に位置付けられる土器である。V類土器はいわゆる入佐式土器と考えられるもので、VI類土器はいわゆる黒川式土器と考えられるものである。入佐式土器及び黒川式土器については、今回報告書を作成するにあたって、堂込秀人が入佐式土器と黒川式土器の細分について行った研究（堂込，1997）を参考とするところが大きかった。堂込の分類に従い、宮ノ前遺跡出土の入佐式土器及び黒川式土器を分類すると、第21表のような結果になる。

（宮ノ前遺跡出土のものは小片が多く、分類が困難なものもあったが、最も属性が近いと考えられるものに分類した。）しかし、この表からは、宮ノ前遺跡の縄文時代晩期の土器は、時期も器種も様々な種類のものが出土しているということが判明するのみで、そこから何か特徴的な事象を抽出するのは困難である。なお、本遺跡出土の入佐式土器及び黒川式土器の粗製土器と精製土器の組成比率は、土器片が周辺で数もごく僅かであることから、取えて行っていない。

また、いわゆる松添式と思われる土器を土器VI類としたが、1点のみの出土である。その他に、縄文時代晩期の土器と思われるもので、組織痕を有するものを土器VII類、残存部位が少ないために詳細不明なものを土器IX類として取り扱った。土器VIII類は2点の出土であったが、いずれも形態は不明で、外面にアングイン風の縞み布を押圧している。土器IX類は、縄文晩期土器の口縁部及び底部である。いずれも、縄文時代後期終末期から縄文時代晩期前葉のころの土器と思われるが、残存部位が少ないため、詳細は不明である。

第21表 宮ノ前遺跡出土の縄文時代晩期土器分類表

粗製深鉢形土器						粗製浅鉢形土器				精製浅鉢形土器							
A	B	C	D	E	F	A	B	C	D	A	B	C	D	E	F	G	H
○	×	×	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×	×	×	○	×	×

弥生土器

本遺跡から出土した弥生土器は、土器X類として取り扱った。これは中園聡が弥生時代中期中葉に位置付けたいわゆる入来II式土器の範疇に含まれるものと思われる（中園，1997）。県内出土のものでは鹿児島県上福元町北麓遺跡出土のものと形状が類似している。いずれも指によるつま

み調整がなされたいわゆる絡状突帯を有するものである。

古墳時代の土器

古墳時代のいわゆる成川式土器と思われるものは、土器XI類として取り扱った。器種構成は、甕・壺・高杯・埴である（器種ごとの組成比率は、土器片が周辺で数もごく僅かであることから、取えて行っていない）。本報告書の執筆に際しては中村直子の研究を参考にするとところが大きかったが（中村，1987）、中村の分類に従って本遺跡出土のものを分類すると、第22表のようなことになる（宮ノ前遺跡出土の成川式土器は小片が多く、最も属性が近いと思われるものに分類した。また、壺については、残存部位が限られていたため、分類は行わなかった）。この表からは、宮ノ前遺跡の成川式土器は、時期も器種も様々な種類のものが出土しているということが判明するのみで、そこから何か特徴的な事象を抽出するのは困難である。

第22表 宮ノ前遺跡出土の成川式土器分類表

壺							
1型式	2型式	3型式	4型式	5型式	6型式	7型式	8型式
				○	○		○

高杯				埴		
1型式	2型式	3型式	4型式	1型式	2型式	3型式
			○			○

石器

石器は出土数が少ない。出土品を器種ごとに見ると、石斧・磨石などが出土しているがバリエーションはあまり豊かではない。これらの石器はIII層から出土しているが、III層からは前述のとおり縄文時代後期～中世の遺物が出土しており、明確な時期設定は困難である。注目される遺物として、遺物68が挙げられる。これは小型の磨製石斧であるが、軸の両端に刃部を有する形態である。

宮ノ前遺跡出土石器の石材については、鹿児島大学総合研究博物館教授大木公彦氏に助言を得た。それによると、いずれの石材も垂水市周辺で採取可能なもので、遠隔地から流入したのではない、とのことであったが、遺物71（磨り面を持つ石器）の石材である安山岩のみ垂水市内では採取不可能であり、垂水市よりやや遠方の鹿屋市と大根占町との境付近で採取した可能性が高い、とのことであった。

小 結

宮ノ前遺跡から、縄文時代後期から中世にかけての極めて長い期間にわたる遺物が出土したが、それらはほぼ単一の遺物包含層中からの出土であった。また、全体的に遺物の出土が少なくかつまばらに点在して出土しており、遺構も確としたものは検出されていない。このような状況に加え、遺跡の立地は、台地と海岸線との間に存在する台地縁辺部の崩土の堆積による小微高地という立地である。これらのことから想定すると、本遺跡の遺物は台地上方より流入したものである可能性が高いと言えるだろう。

②重田遺跡

土器

重田遺跡出土の土器は、縄文時代前期後半に位置付けられる曾畑式土器と考えられるものと、縄文時代中期初頭～前葉に位置付けられる深浦式系土器と考えられるもの、深浦式系土器と併行関係にあると考えられるものの3型式に限られる。いずれの土器型式も、同一包含層から出土しており、時間的な前後関係は不明であった。

土器Ⅰ類

器面調整や器形から、いわゆる曾畑式土器に分類されると考えられるものをⅠ類としたが、本遺跡出土の土器に占める割合は、数%に満たない。曾畑式土器については、その祖型や細別についてこれまで様々な研究がなされているが、今回報告書を作成するに際しては、中村憲の研究を参考とするところが大きかった(中村, 1994)。中村の分類に従えば、本遺跡出土の曾畑式土器は2つの種類に分類できる。

I-1 a類としたものは、残存部位が少なかったが、短沈線文が数条横位・鋸歯状に施文されているもの(1, 2)があることや、内面に刺突連点文を施すもの(4)があることや、全体的な仕上がりがI-1 b類としたものより丁寧であること等から、中村が曾畑Ⅱ式土器としたものに分類されると考えられる。

I-1 b類及びI-2類としたものは、全体的な仕上がりの粗雑さや、口縁部文様体に刺突連点文や短沈線文等がみられないこと等から、中村が曾畑Ⅲ式土器としたものに分類されると考えられる。

以上のように、本遺跡出土の曾畑式土器は2つの型式に細分が可能であるが、いずれも同一包含層中からの出土であり、本遺跡全体の遺物に占める割合は数%に満たない状況である。よって、これらの資料から曾畑式土器にかかる新たな考察を試みることは避け、あくまでも資料提示という形に留めておきたい。

土器Ⅱ・Ⅲ類

器面調整や器形から、いわゆる深浦式系土器に分類されると考えられるものをⅡ類とし、深浦式系土器と併行関係にあると思われる無文土器をⅢ類とした。本遺跡出土遺物の大半を占めるもので、点数も膨大なものであった。

深浦式土器は、住谷正節氏・小林久雄氏が鹿兒島県枕崎市西鹿籠深浦遺跡から発見された土器を標識として型式設定した土器であり(住谷・小林, 1940)、その後河口貞徳氏、畑光博氏、池田朋生氏、相模伊久雄氏(以下敬称略)らにより研究されている。深浦式土器は当初縄文前期後半に位置付けられていたが、船元・里木式土器との関係から縄文中期に位置付ける見解が示されており(柴畑, 1997・池田, 1998)、本報告書でもその見解に従うことにする。

深浦式土器については、現在では、型式概念が拡大されており、このことは、東和幸氏(以下敬称略)が「現在一般的に使われている深浦式土器という名称はだいぶ範囲が広がっていて、竊式土器と曾畑式土器以外の縄文前期土器を深浦式と呼んでいるようである」と指摘したことにも強く表れている(東, 1990)。そこで、本報告書では深浦式土器という呼称を用いず、相模の「狭義の曾畑式(地域ごとに変容していく段階の以前の曾畑式)と春日式との間に位置付けられ

る土器群から竊式(池田, 1995)を除いた全て」を「深浦式系土器」とする概念(相模, 2000)に従い、「深浦式系土器」という呼称を使用することにする。また、深浦式系土器と共伴して出土する無文土器については、これまで詳細な研究・型式設定はなされていないが、東や相模は無文土器と深浦式系土器の併行関係を想定しており(東, 1990・相模, 1998)、本報告書でもその見解に従い、無文土器を深浦式系土器と併行関係にあると捉えることにした。なお、この無文土器の呼称については、東は「素文土器」と呼称し(東, 1990)、相模は「条痕文土器」と呼称している(相模, 2000)。このように統一された型式名が無い場合、本報告書では便宜上「無文土器」と呼称することにする。

今回報告書を作成するに際しては、前述した相模の研究(相模, 2000)を参考とするところが大きかった。相模は深浦式系土器の分類・編年作業を行うにあたって、器形や文様要素等いくつかの属性を設定している。本章でもそれらの属性ごとに注目し、重田遺跡出土の深浦式系土器の分析を進めていくことにする。なお、深浦式系土器の文様や器形に関する用語等は、相模の研究・用語を参考・引用した。

以下、相模が挙げた属性ごとに、重田遺跡出土の深浦式系土器の分析を行ってみる。まず、器形に注目してみると、相模は、深浦式系土器の器形として、次の5類を設定している。すなわち、口縁部が外傾もしくは直立し、そのまま胴部へいたるもの(1類)、口縁部が外反するもの(2類)、口縁部が外傾し、口縁部下位で締まる器形のもの(3類)、口縁部が直立もしくは直立に近い形態をもち、口縁部下位で締まるもの(4類)、口縁部が内湾するもの(5類)の5類である。重田遺跡出土の有文の深浦式系土器は、1類、2類、3類、4類の4種類の器形が確認された。このうち、最も数が多いものは1類で、2類、3類、4類はいずれも僅か数点の出土である(図化したものの点数を挙げると、1類が72点、2類が1点、3類が5点、4類が2点である)。相模は、1→2→3→4→5という変遷を想定しており、この見解に従うと重田遺跡出土のものは深浦式系土器の中でも古段階のものが多いと言える。

次に、口縁部の形態に注目する。相模は深浦式系土器の口縁部形態について、平口口縁以外に、次の2つの形態があると指摘する。すなわち、波状口縁(α類)と山形突起(β類)である。重田遺跡出土の深浦式系土器は、この2つに加え、平口あるいは若干波状ぎみの口縁部の一部に、豆状の小突起が付く形態がある。図化したもののうち、α類は8点、β類は8点、豆状の小突起が付く形態は8点確認されており、少量ではあるが無視出来るほど微量な出土量ではない。よって、この形態をγ類とし、重田遺跡出土の深浦式系土器の一形態であると認識したい。

次に、外面文様に注目する。相模は、深浦式系土器の文様要素について、二枚貝の貝殻腹縁の「往復反転削り手法」により施文される「貝殻連点文」、二枚貝の貝殻腹縁で刺突することにより施文される「貝殻刺突文」、二枚貝の貝殻腹縁の「往復反転手法」により施文される「相交弧文」、突帯による「突帯文」、ヘラ状の工具で施文する「沈線文」、棒状もしくは竹管状の施文具で刺突することにより施文する「刺突文」等の要素を挙げている。このうち、重田遺跡出土の深浦式系土器は、「貝殻連点文」を主文様要素とするもの、「貝殻刺突文」が施されているもの(大半は従文様要素として用いられるが、主文様要素として用いられているらしいものも数点出土した)、「相交弧文」を主文様要素とするもの、「突帯文」を主文様要素とするものの4つの文様要

素が見られた。図化したものの点数を挙げると、貝殻連点文を主文様要素とするものが75点、貝殻刺突文が施されているものが22点、相交弧文を主文様要素とするもの、突帯文を主文様要素とするものが4点となり、貝殻連点文を主文様要素とするものが圧倒的に多く、突帯文を主文様要素とするものは少ない、という結果になった。(無図化の土器小片を加えると、貝殻連点文を主文様要素とするものが808点、貝殻刺突文が施されているものが133点、相交弧文が施されているものが79点、突帯文を主文様要素とするものが6点となり、やはり貝殻連点文を主文様要素とするものが圧倒的に多く、突帯文を主文様要素とするものは少ないという結果は変わらない。もっとも、これらは小片であるので、点数を提示するに留める。) 相模は、深浦式系土器の主文様要素が貝殻連点文から突帯文へ変化すること、貝殻連点文は消失していく文様要素であることを想定しているが、これらのことと重田遺跡出土の深浦式系土器の文様要素を考え合わせると、ここからも、重田遺跡出土の深浦式系土器は古段階のものが多いという結論が導き出せる。

また、相交弧文については、他の深浦式系土器出土遺跡でも、その出土数が少ないが、そのことは重田遺跡にも該当すると言えよう。他に注目されるのは、相模が「実際にはほとんど見られない」とした貝殻刺突文が微量とは言えない量出土していること、その中には貝殻刺突文を主文様要素としているらしい土器も数点含まれるということなどであろう。

また、文様要素の展開に注目すると、大半が横位に展開するが、縦位にも展開するものは少ない。相模は文様要素の展開について、「横位のみ展開」→「縦位の展開が見られる」と想定しているが、このことも、重田遺跡出土の深浦式系土器は古段階のものが多いということを指し示していると言えよう。

次に、外面文様の従文様要素に注目してみる。相模は、従文様要素として、以下の9つを提示している。すなわち、従文様要素がないもの(a類)、沈線文(b類)、相交弧文(c類)、沈線文+相交弧文(d類)、刺突文(e類)、貝殻刺突文(f類)、貝殻連点文(g類)、沈線文+貝殻連点文(h類)、貝殻刺突文+貝殻連点文(i類)、沈線文+貝殻刺突文(j類)の9つである。重田遺跡出土のものには、a類とf類が観察された(図化したものの点数を挙げると、a類が75点、f類が14点である)。つまり、重田遺跡出土の深浦式系土器は、従文様要素がなく主文様要素だけで文様が構成されるものが多く、従文様要素も限られていると言える。

次に、口縁部の内面文様要素に注目してみる。相模は口縁部内部文様要素について、以下の3類を提示している。すなわち、貝殻連点文が施されているもの(i類)、相交弧文が施されているもの(ii類)、無文のもの(iii類)の3類である。重田遺跡出土の深浦式系土器は、iii類が多く、次いでii類、わずかにi類が出土した(図化したものの点数を挙げると、i類が33点、ii類が1点、iii類が47点である)。相模は口縁部内面文様要素について、(i・ii)→iiiという変遷、つまり口縁部内面文様の無文化を想定しているが、重田遺跡出土の深浦式系土器の口縁部内面文様要素をみる限りでは、このことと関連付けられそうな結果は導き出されない。ただ個々の遺物には、遺物100のように、縦位の貝殻連点文が下位まで施されているものがある等、注目されるものがある。

次に、外面調整に注目する。相模は、深浦式系土器の外面調整について以下の3類を提示している。すなわち、丁寧なナデ調整もしくはケズリ調整が行われており、貝殻条痕がみられないもの

(X類)、条痕調整の後、ナデ調整を行わず、貝殻条痕が明瞭にのこっているもの(Y類)、条痕調整の後、ナデ調整を行うが、貝殻条痕が残るもの(Z類)の3類である。重田遺跡出土のものは、いずれも確認されている(図化したものの点数を挙げると、X類が22点、Y類が8点、Z類が20点となるが、重田遺跡出土のものは表面が磨耗していて調整が不明瞭なものが多く、点数を挙げるに留める)。

以上、重田遺跡出土の深浦式系土器について特徴を述べた。これらについては、第23表に属性間の相関表をまとめてあるので、参照されたい。

次に、無文土器について特徴を述べる。無文土器について、重田遺跡の最大の特徴は、その出土数の多さである。深浦式系土器と無文土器の比率は、図化したもので1:2となる(深浦式系土器117点、無文土器227点)。これに図化していない小片もあわせると深浦式系土器1,026点、無文土器11,071点で深浦式系土器:無文土器の比率は約1:11となるが、小片のことなので、点数を挙げるに留める。他の深浦式系土器出土遺跡では、これほど無文土器の出土は多くないようである。

次に、器形に注目してみる。無文土器は、先述した深浦式系土器の1類~5類の器形が全て出土している。図化したものの点数を挙げると、1類が216点、2類が10点、3類が2点、4類が2点、5類が15点となり、やはり無文土器も1類が一番多いという結果になった。深浦式系土器に共伴する無文の土器については、詳細な型式概念及び編年等はこれまで詳細に研究されていない。もし仮に、無文土器の型式変化が深浦式系土器の型式変化に則したものであれば、無文土器のものも古段階のものが多いと言えるが、この点については今後の研究を待たねばならない。

次に、口縁部形態に注目してみる。重田遺跡出土の無文土器の口縁部は、先述した深浦式系土器の口縁部β類に加え、豆状の小突起が付く形態(γ類)も僅かに見られる(図化したものの点数を挙げると、β類35点、γ類2点である)が、α類は確認できなかった。

次に、器面調整に注目してみる。図化したものの点数を挙げると、外面は、先述した深浦式系土器の器面調整X類が89点、Y類が71点、Z類が86点見られる。同様に内面調整についても点数を挙げると、X類が61点、Y類が109点、Z類が68点となる。もっとも、重田遺跡出土のものは表面が磨耗して調整が不明瞭なものも多く、ここは点数を挙げるに留めておく。

無文土器については、深浦式系土器と同様属性間の相関表を第24表にまとめてあるので、参照されたい。また、無文土器の中には、口唇部に刻みを有するもの、外面調整である貝殻条痕文が文様を意識していると思われるものなど特徴的なものも数点出土している。

以上のことから、重田遺跡出土の深浦式系土器及び無文土器について、いくつか特徴をまとめてみる。まず、深浦式系土器については、①器形、文様構成、文様の展開といった諸要素から判断して、深浦式系土器の古段階のものが多いと言える②口縁部形態に、相模が提示した2形態以外に、豆状の小突起を有する形態が見られる③遺物100のように、口縁部内面の文様が下位まで続くものや、遺物130のように突帯文を挟んで非対称に展開する文様を有するもの等、特徴的なものが数点存在する、といったことが挙げられるであろう。特徴①について補足すると、重田遺跡出土の深浦式系土器は、器形及び外面文様から判断して、相模が深浦式系土器を3型式に分類したうち古段階であるI型式、すなわち日本山式と設定したものの範疇に含まれるものが多い。

このことは、重田遺跡の時期決定について、有力な特定材料であると言えよう。また、②・③などは、重田遺跡出土の深浦式系土器の特色を指し示す一要素と言えるであろう。しかしながら、伴土器が少なく、深浦式系土器の出自や後続する土器についての考察は成し得なかった。

次に、無文土器について述べると、①出土数が大量である②器形としては、深浦式系土器の器形1に相当する器形のものが多い③口縁部形態に、深浦式系土器と同様豆状小突起が付くものがあるなどの特徴が挙げられる。この無文土器については、これまで詳細な研究がなされておらず、その型式設定等解決すべき問題が多いのだが、これだけの資料がありながら、本報告書では資料提示に留まり、考察を加えるには至らなかったのが遺憾である。今後の研究が必要な土器型式である。

第23表 重田遺跡出土深浦式系土器の属性相関表

	器形	外面従文線要素					口縁部内面文線要素										口縁部形態			外面調整									
		1	2	3	4	5	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	i	ii	iii	α	β	γ	X	Y	Z				
外面文線	A1	61					61																						
	B1	3		1			12																						
	C1																												
	A2	8		4	1		2																						
	B2																												
	C2																												
	D1																												
	D2																												
	D3																												
	D4																												
D5																													
E2																													

器形	外面従文線要素										口縁部内面文線要素			口縁部形態			外面調整		
	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	i	ii	iii	α	β	γ	X	Y	Z
1	61	1									28		13	4	3	5	17	1	16
2	1										1			2	3		3	2	
3	1										2		3	1	1		2		2
4	1																		
5											1	1		2		2			

外面従文線要素	口縁部内面文線要素			口縁部形態			外面調整		
	i	ii	iii	α	β	γ	X	Y	Z
a	25	1	41	5	5	5	17	4	17
b									
c									
d									
e									
f	9		12	3	2	3	6	5	6
g									
h									
i									
j									

口縁部内面文線要素	口縁部形態			外面調整					
	i	ii	iii	α	β	γ	X	Y	Z
a	5	4	2	6	3	?			
b									
c									
d									
e									
f	3	3	5	15	4	11			
g									
h									
i									
j									

第24表 重田遺跡出土無文土器の属性相関表

器形	外面調整			内面調整			口縁部形態		
	X	Y	Z	X	Y	Z	α	β	γ
1	80	55	78	52	98	59	31		2
2	1	6	5	3	5	3	1		
3		3	2		2	3	3		
4	1	2	1		2				
5	7	5		6	2	3			

石器

石器は出土数が少ない。バリエーションも貧相で、器種ごとにみると石斧・磨石に限られという状況であった。土器の年代が縄文時代前期に限られること、同一包含層からの出土であることから、石器の年代も縄文時代前期と想定したい。

小 結

重田遺跡出土の土器は、曾畑式土器と深浦式系土器、深浦式系土器と併行関係にあると考えられる無文土器の3型式に限られる。伴する土器が少ないことから、深浦式系土器の出自や後続する土器についての考察は困難であるが、資料数が多くバリエーションも豊かであることから、本遺跡は深浦式系土器の研究するには重要な遺跡であると言える。また、深浦式系土器と併行関係にあると考えられる無文土器も数多く出土しており、その資料性は高い。遺跡としては、明確な遺構を欠くものの、個々の遺物は非常に資料性の高いものが多く、今後の研究が期待される遺跡といえよう。残念ながら、筆者の勉強不足・表現の不適切さや説明不足のため、貴重な資料について十分にまとめきれているとはいえず、力不足の感は否めない。御指摘・御批判・御教示をいただければ幸いである。

【参考・引用文献】

堂達秀人 1997 「南九州縄文晩期土器の再検討—入佐式と黒川式の細分—」『鹿児島考古』第31号

河川貞徳, 出口 浩 1971 「南九州弥生式土器の再編年」『鹿児島考古』第5号

河川貞徳 1981 「新南九州弥生式土器集成」『鹿児島考古』第15号

中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第9号

中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』6:57-56

木田道輝 1997 「南部九州における脚合付壺の底部形成について」『人類史研究』第9号

中村 愿 1994 「曾畑式土器」『縄文時代の研究』3 縄文土器 I

山崎純男, 島津義昭 1994 「九州の土器」『縄文時代の研究』4 縄文土器 II

相美伊久雄 2000 「深浦式系土器の再検討」『人類史研究』第12号

金峰町教育委員会 1998 「金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)上水流遺跡」

枕崎市教育委員会 1990 「枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)鞍谷遺跡」

志布志町教育委員会 1979 「野久尾遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」

鹿児島県教育委員会 1980 「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(12)石峰遺跡」

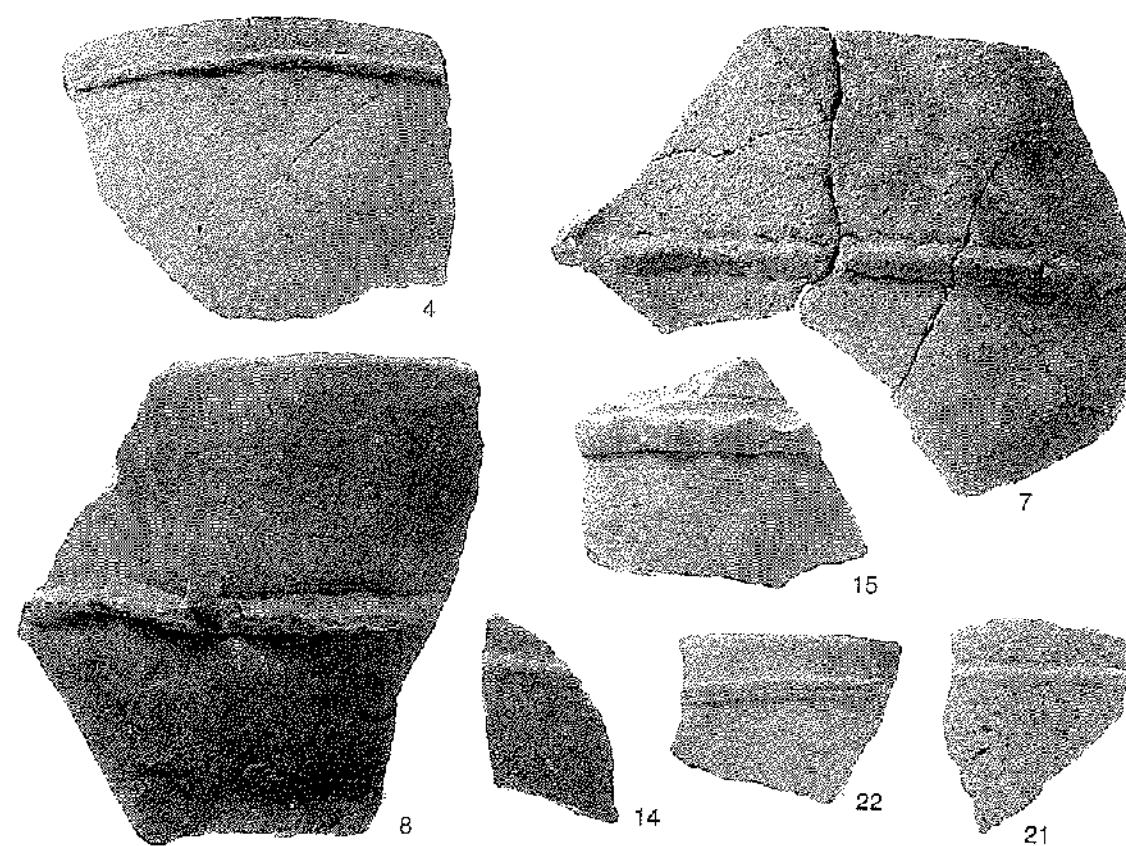
鹿児島市教育委員会 1996 「鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(21)北麓遺跡」

垂水市教育委員会 2001 「垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(5)宮下遺跡・小房迫前遺跡」

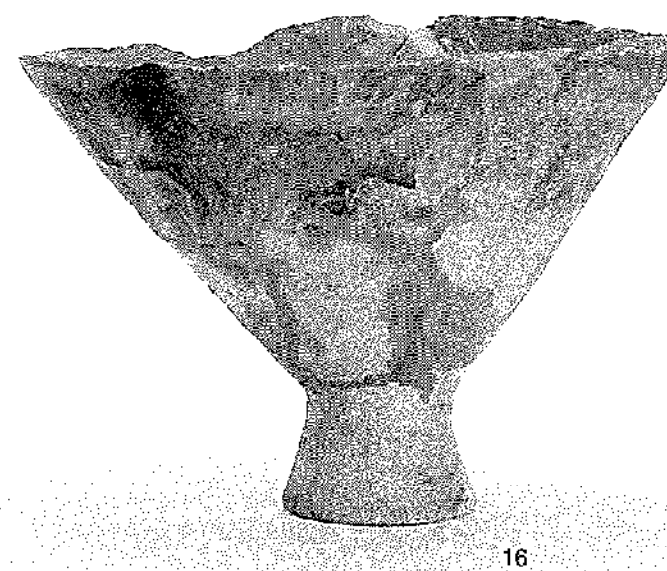
垂水市教育委員会 1974 「垂水市史 上巻」

垂水市教育委員会 1996 「垂水市史料集(十)新城編」

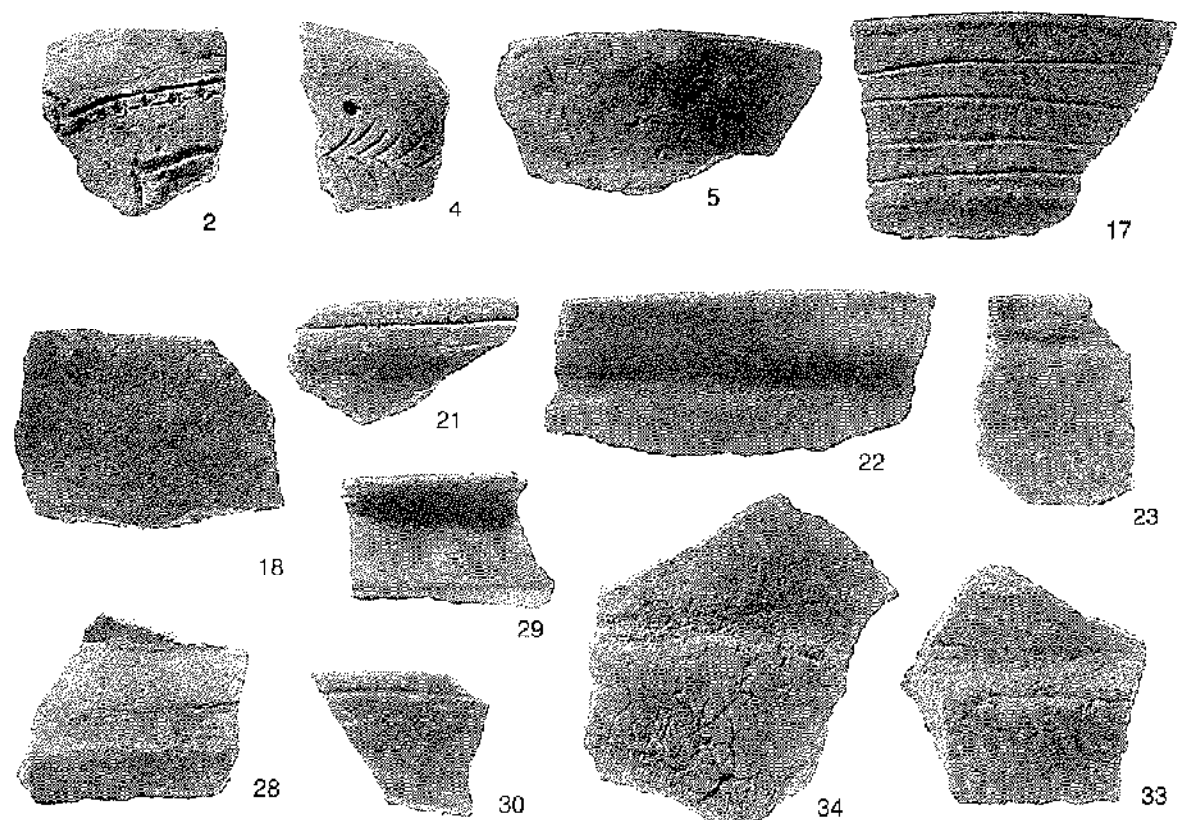
版 圖



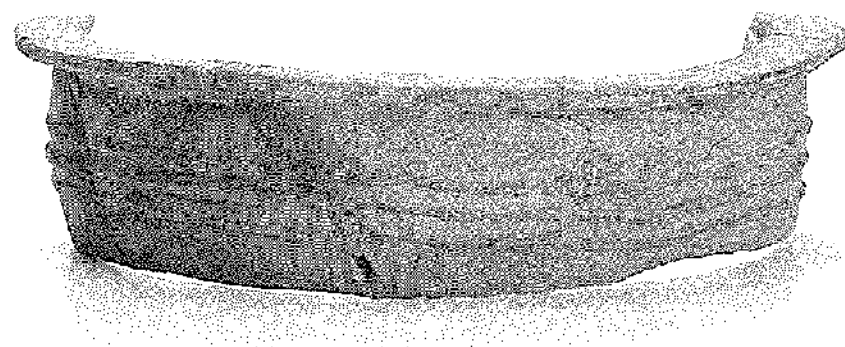
宮ノ前遺跡土坑1内出土遺物(1)



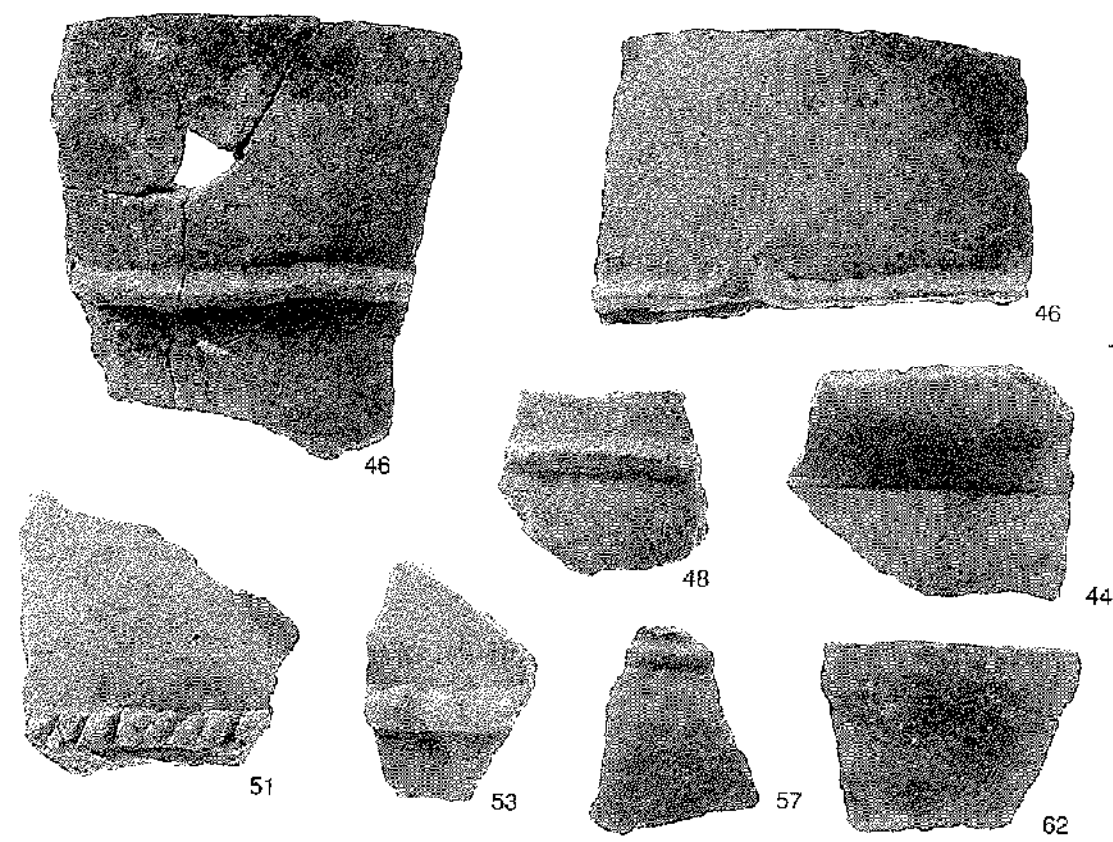
宮ノ前遺跡土坑1内出土遺物(2)



宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(1) I~VIII類土器



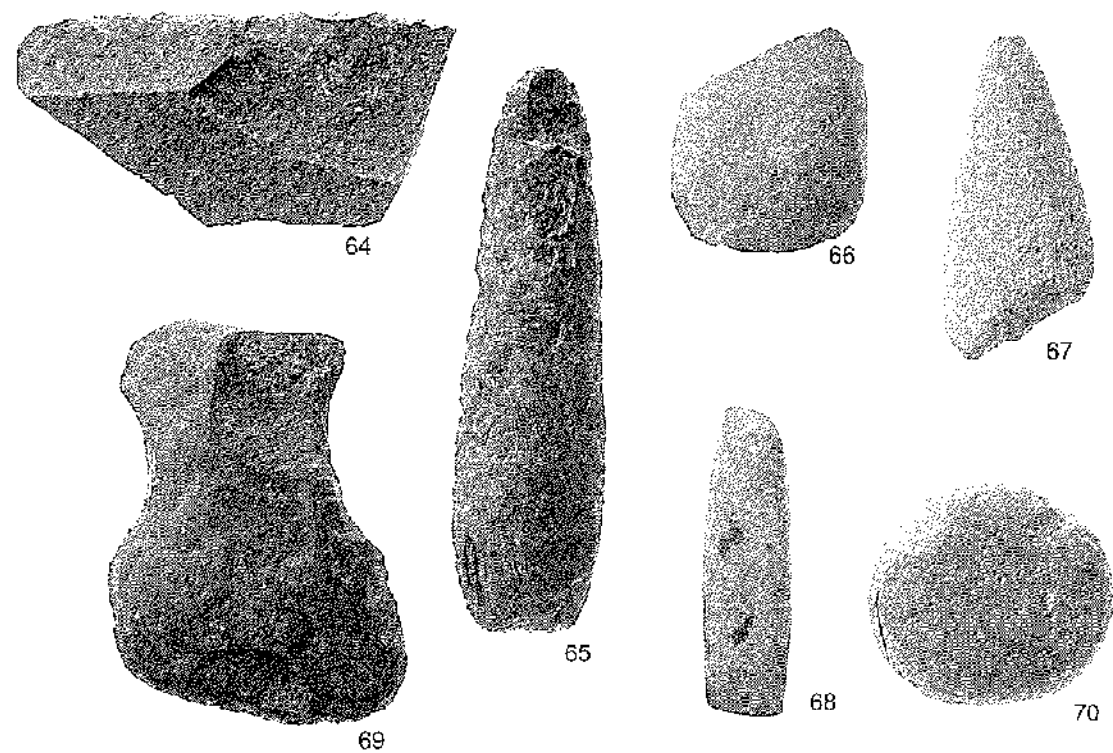
宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(2) X類土器



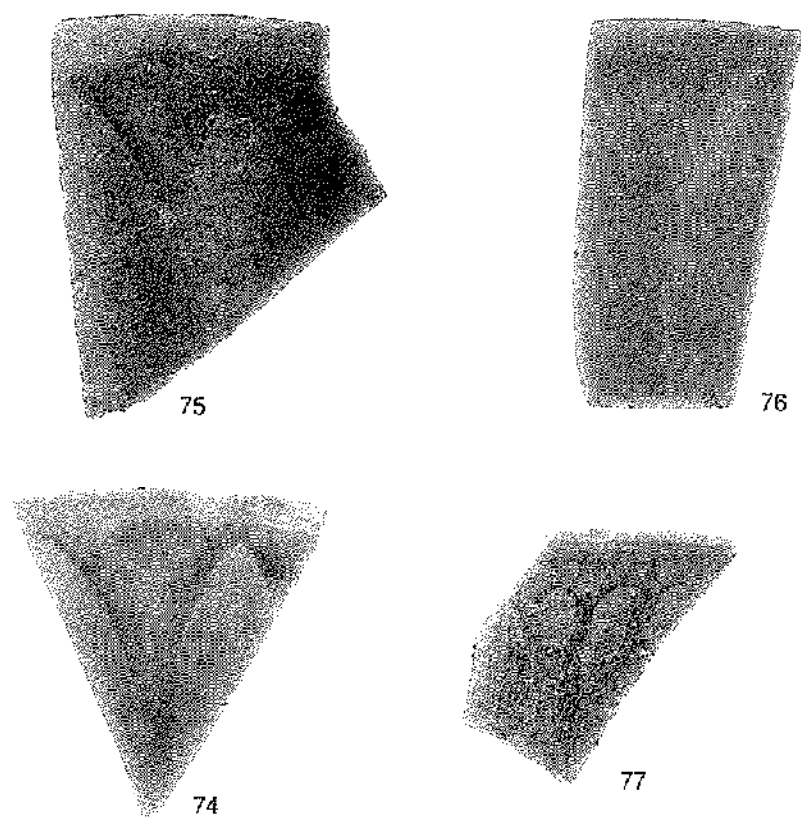
宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(3) XI類土器



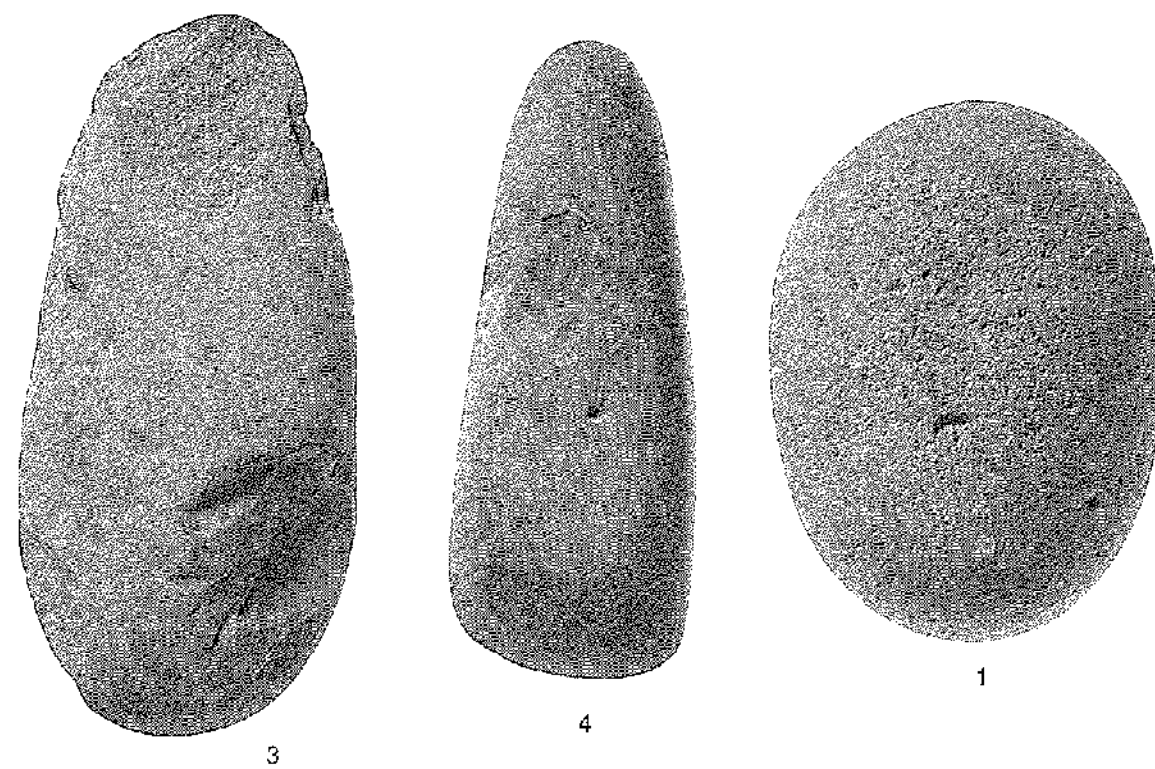
宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(4) XI類土器



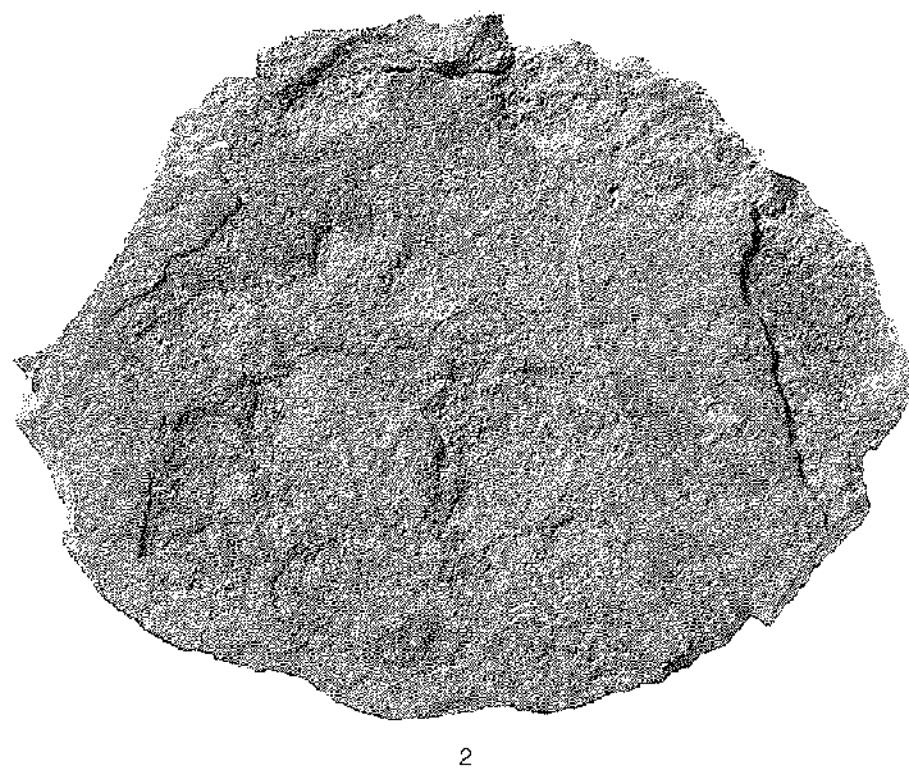
宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(5) 石器



宮ノ前遺跡遺物包含層出土遺物(6) 青磁



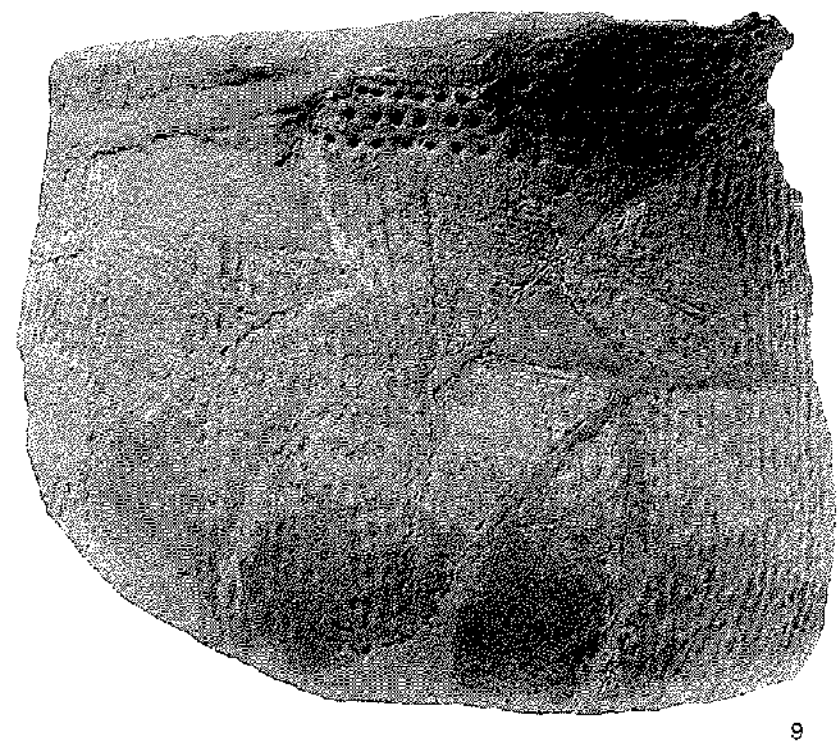
重田遺跡遺構内出土遺物(1) 磨製石斧・磨石



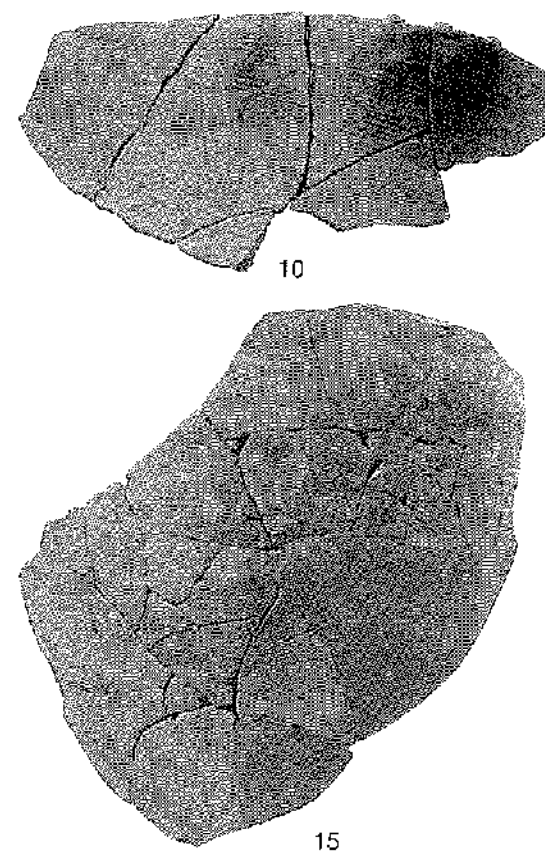
重田遺跡遺構内出土遺物(2) 石皿



重田遺跡遺物包含層出土遺物(1) I類土器



重田遺跡遺物包含層出土遺物(2) II A類土器



重田遺跡遺物包含層出土遺物(3) III A類土器

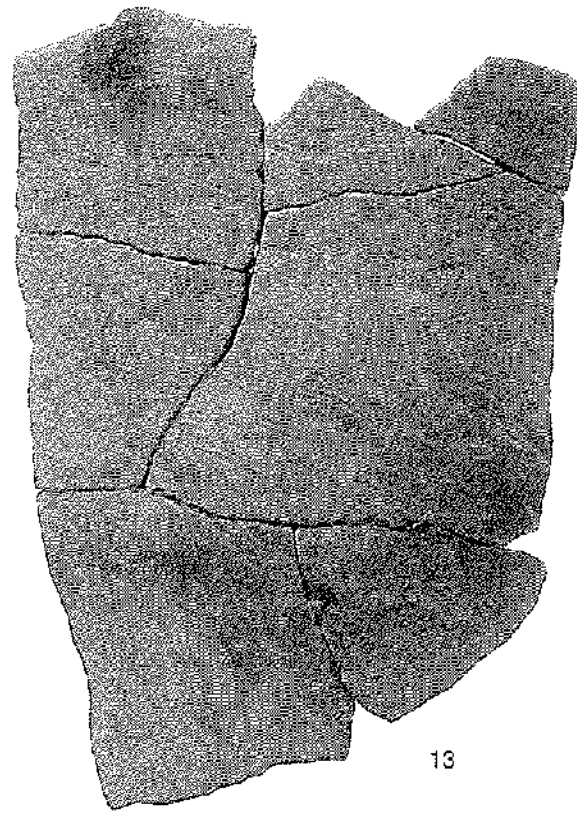


重田遺跡遺物包含層出土遺物(4) III A類土器



12

重田遺跡遺物包含層出土遺物(5) IIIA類土器

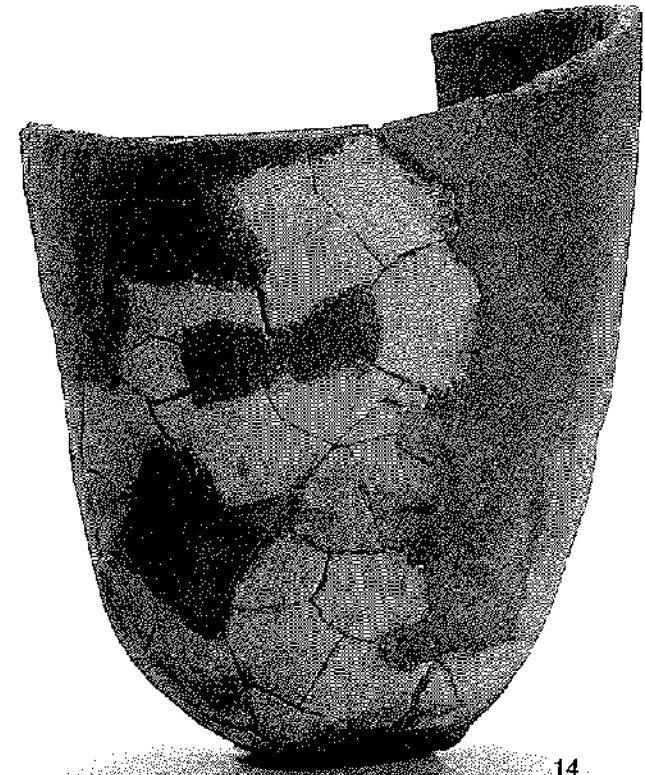


13

重田遺跡遺物包含層出土遺物(6) IIIA類土器

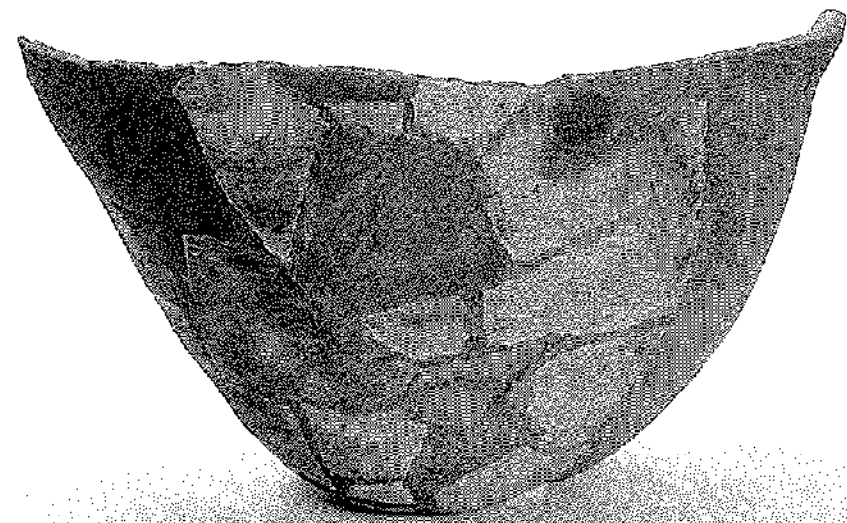


16



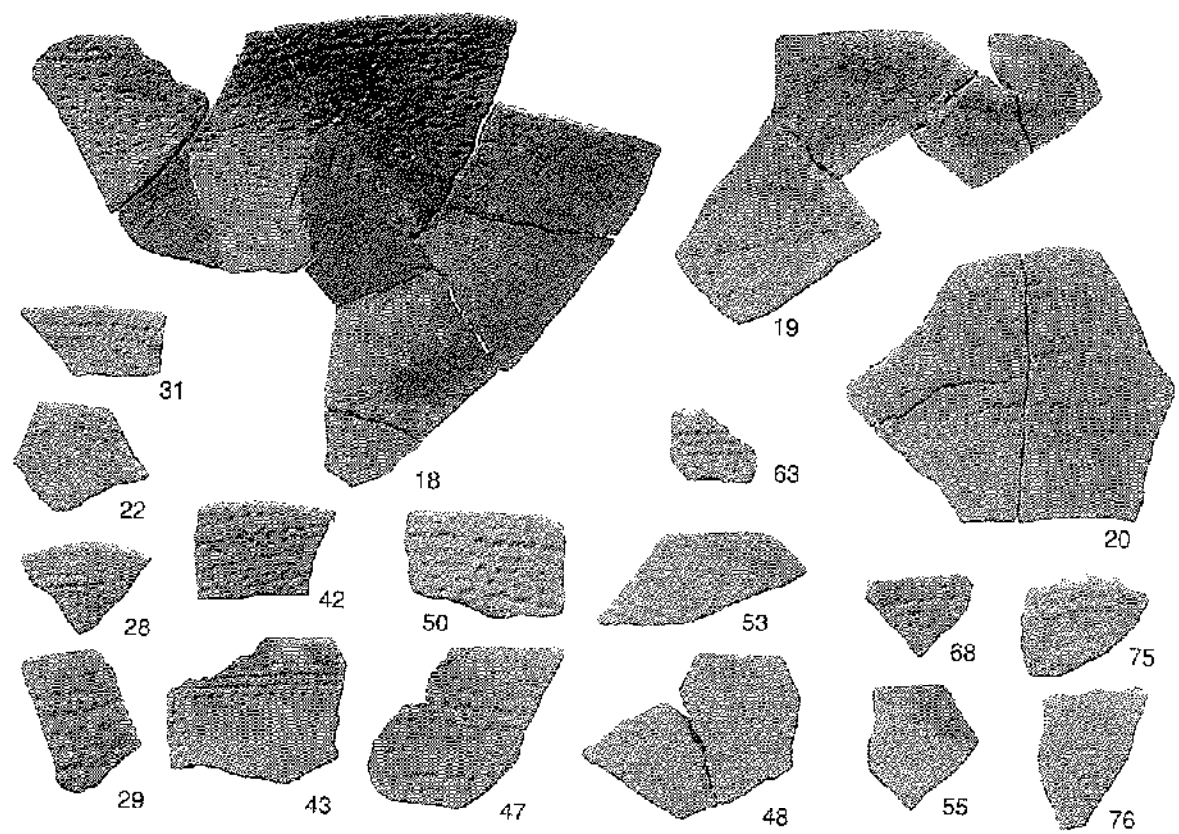
14

重田遺跡遺物包含層出土遺物(7) IIIA類土器

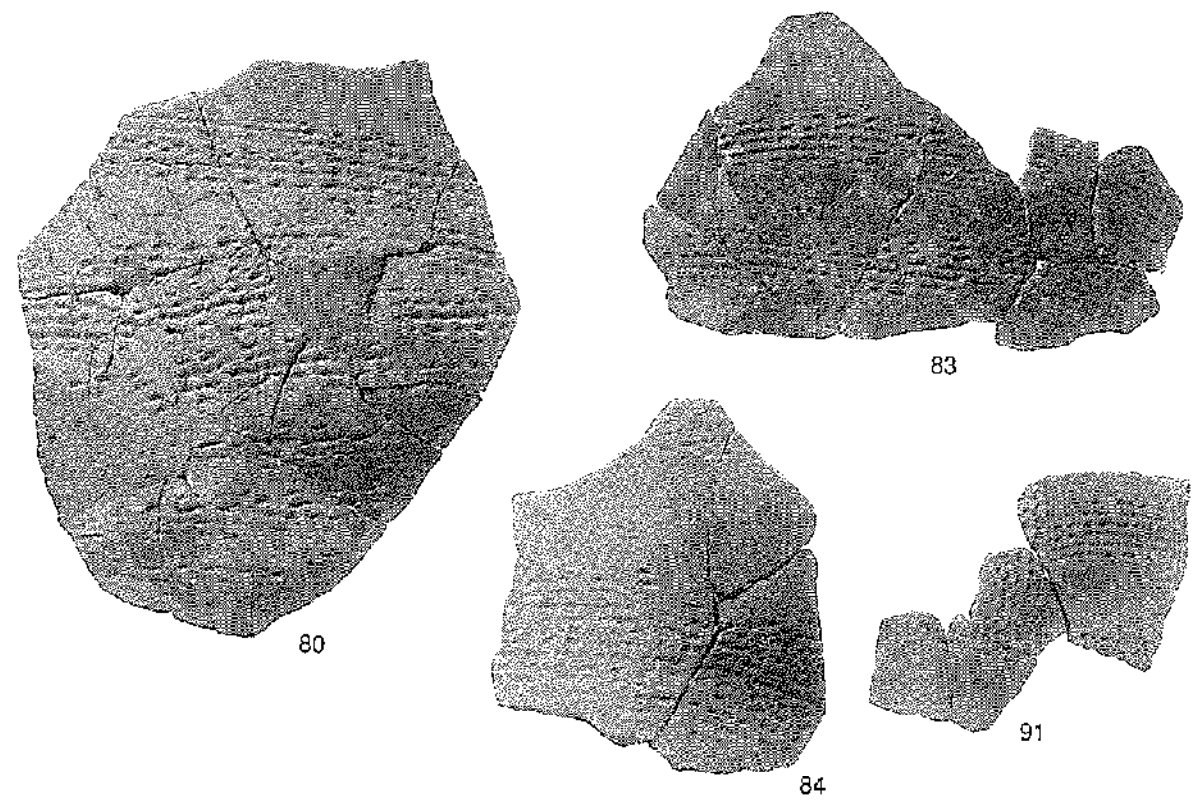


17

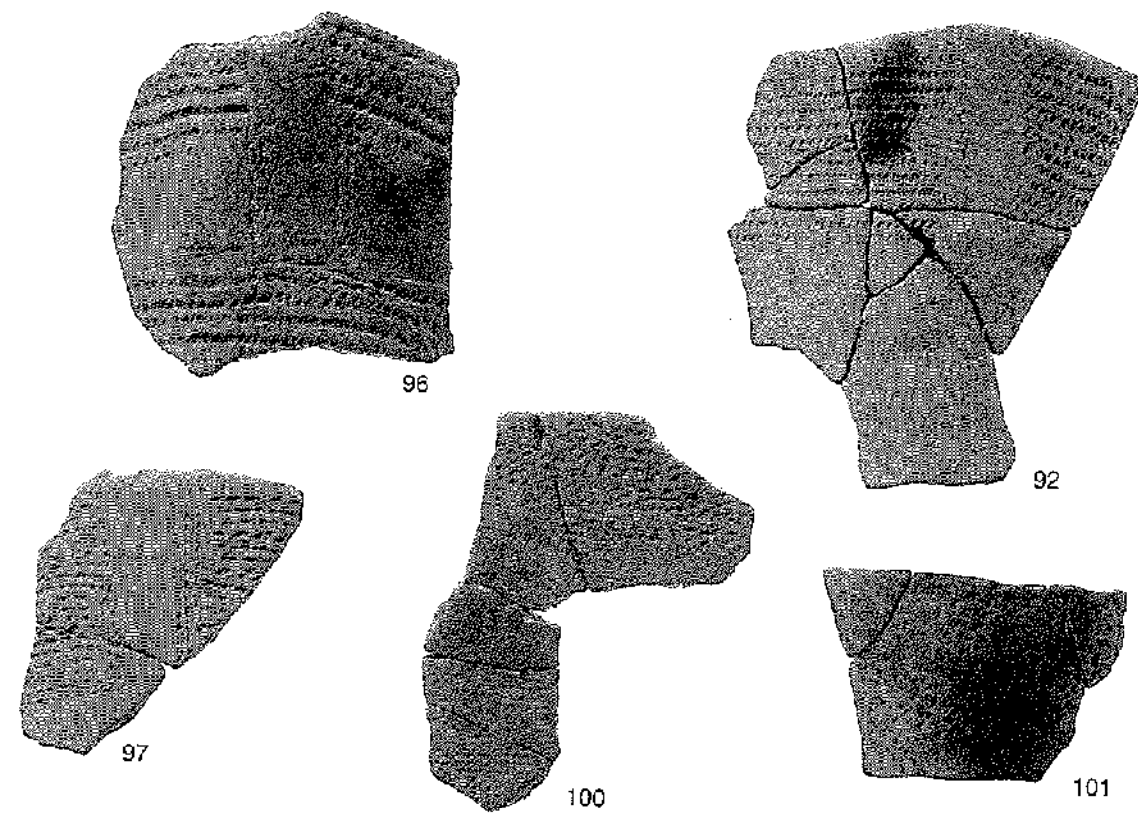
重田遺跡遺物包含層出土遺物(8) IIIA類土器



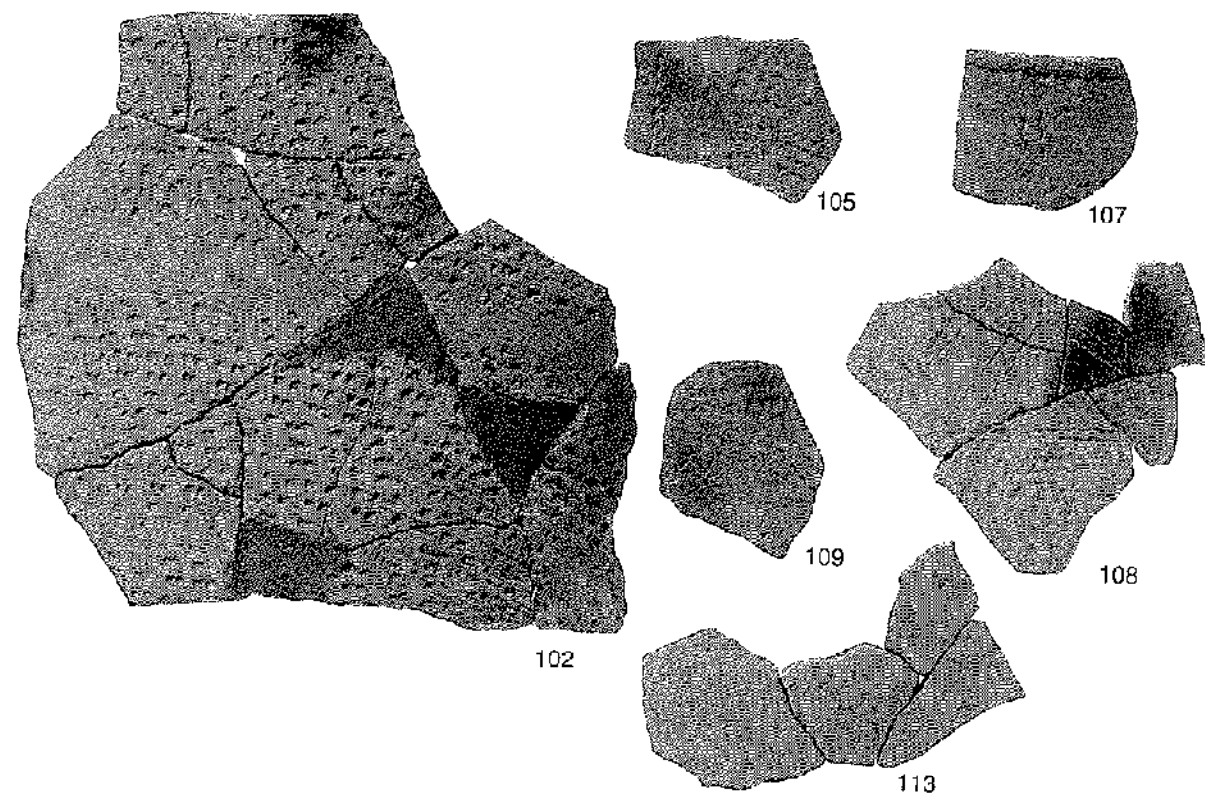
重田遺跡遺物包含層出土遺物(9) II B-a類土器



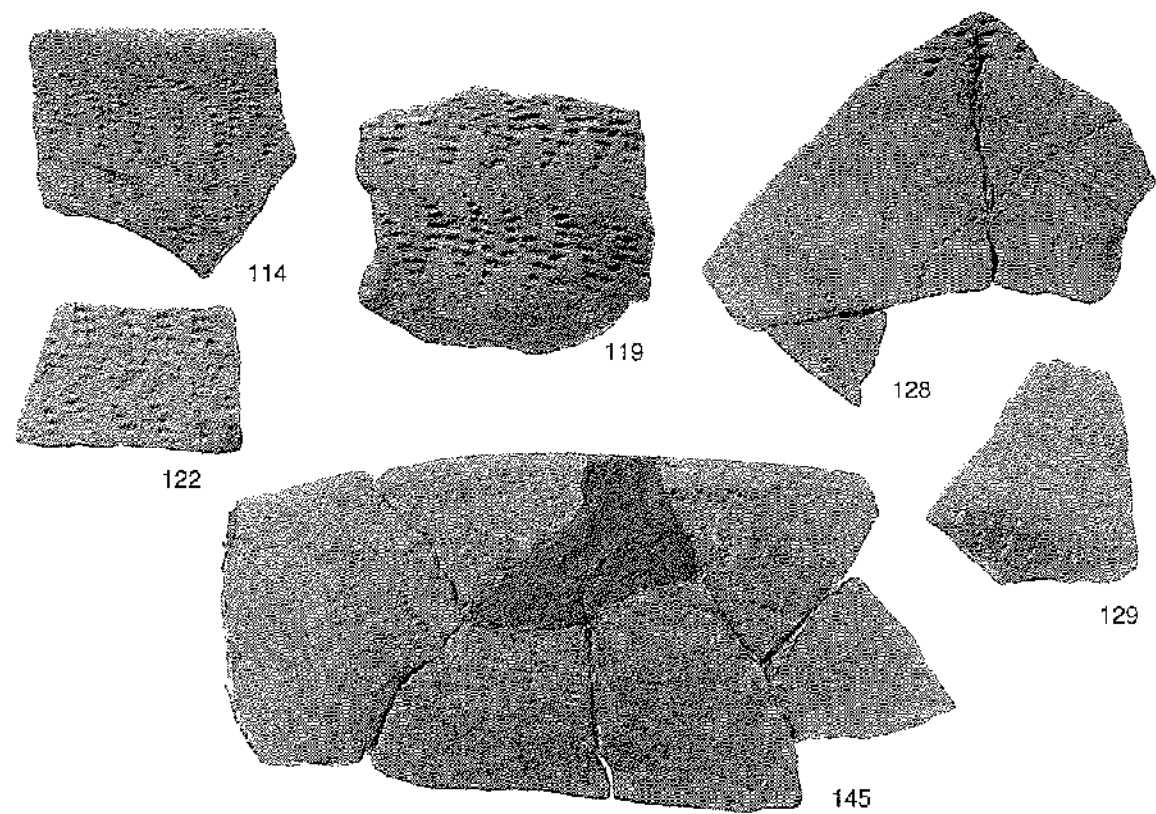
重田遺跡遺物包含層出土遺物(10) II B-a類土器



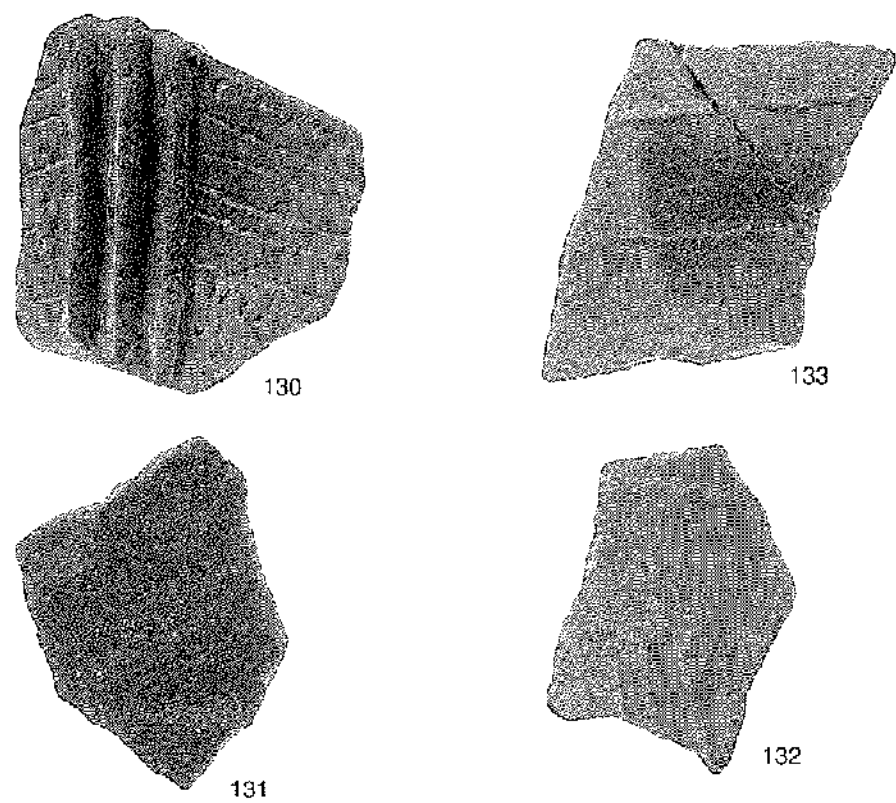
重田遺跡遺物包含層出土遺物(11) II B-b類土器



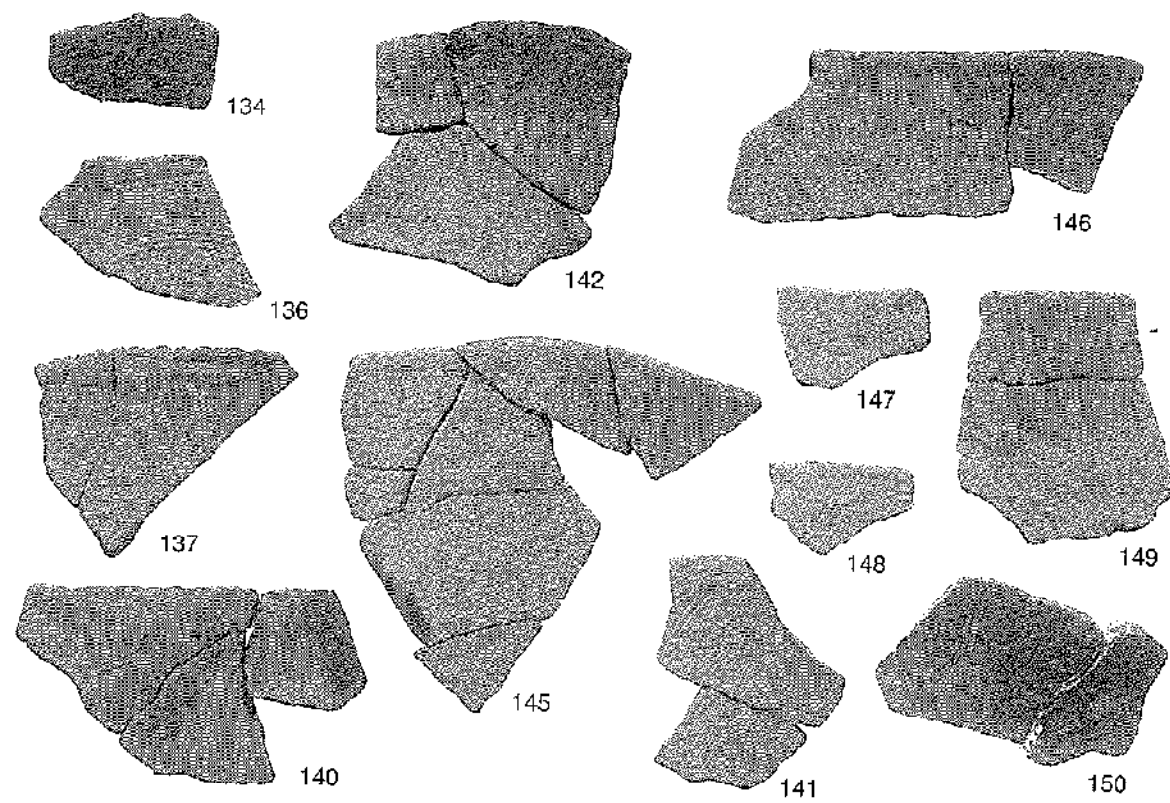
重田遺跡遺物包含層出土遺物(12) II B-b類土器



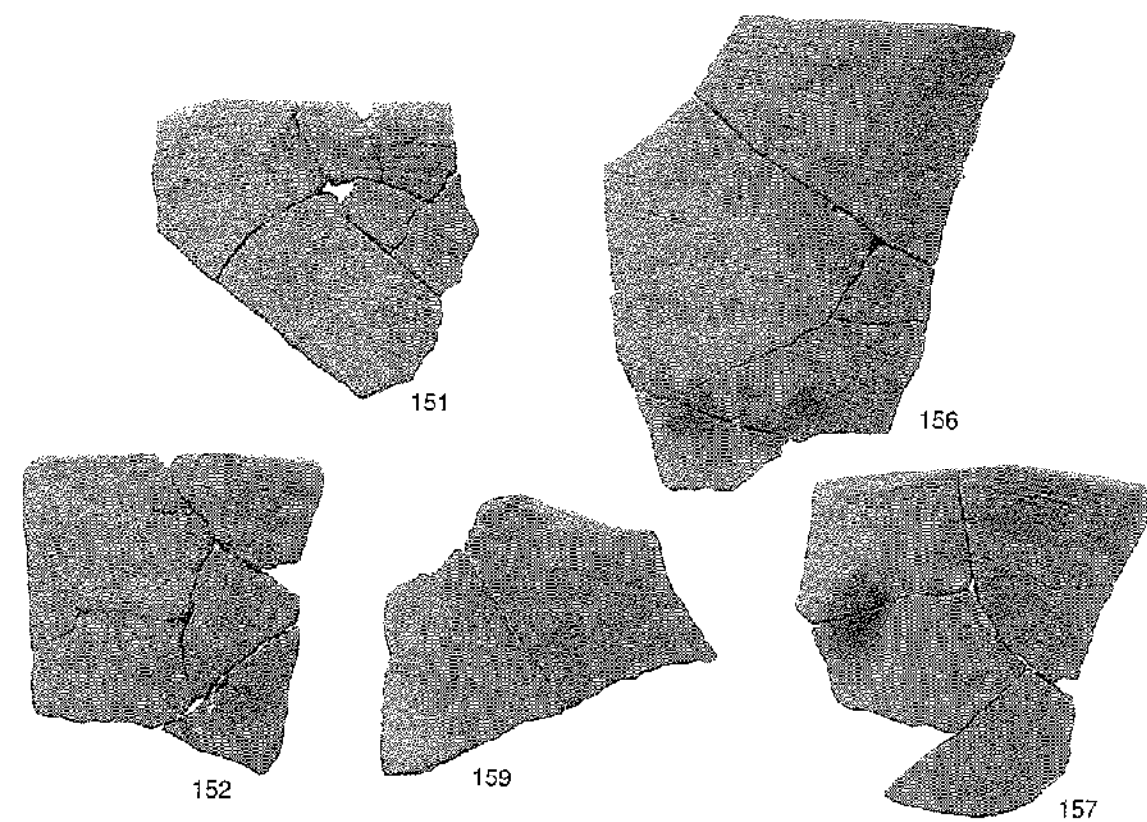
重田遺跡遺物包含層出土遺物(13) II B-c類土器



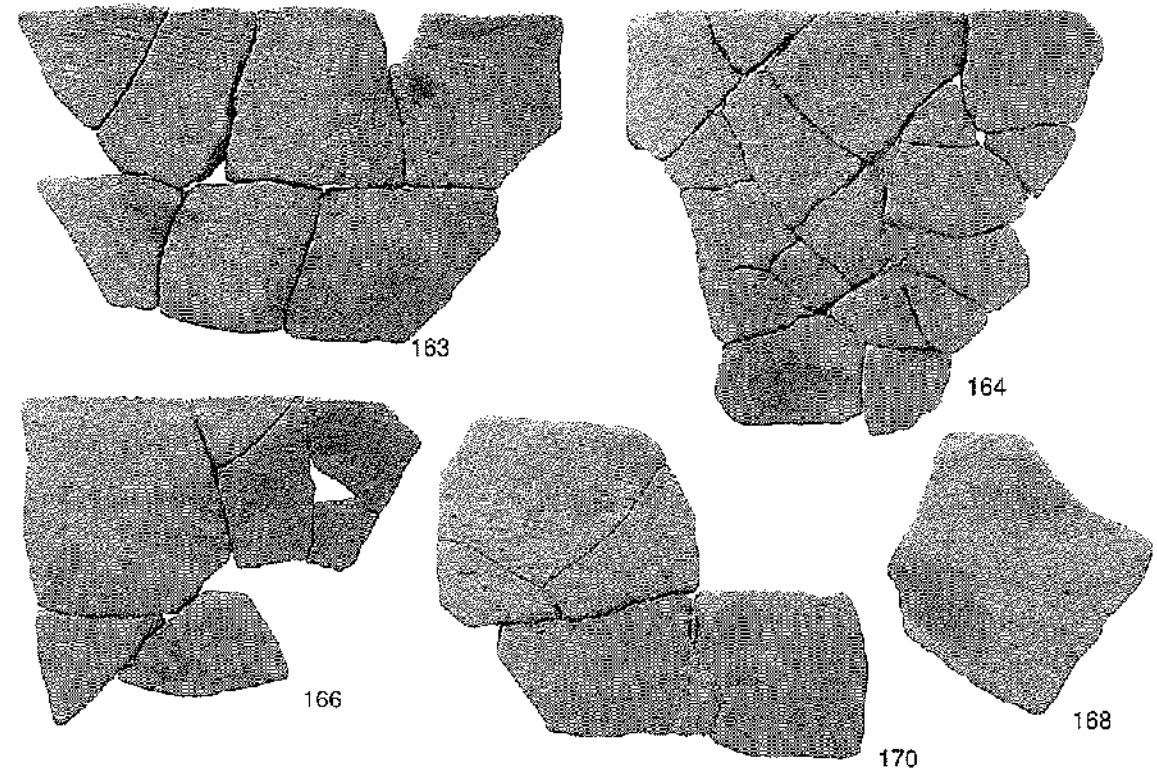
重田遺跡遺物包含層出土遺物(14) II B-d類土器



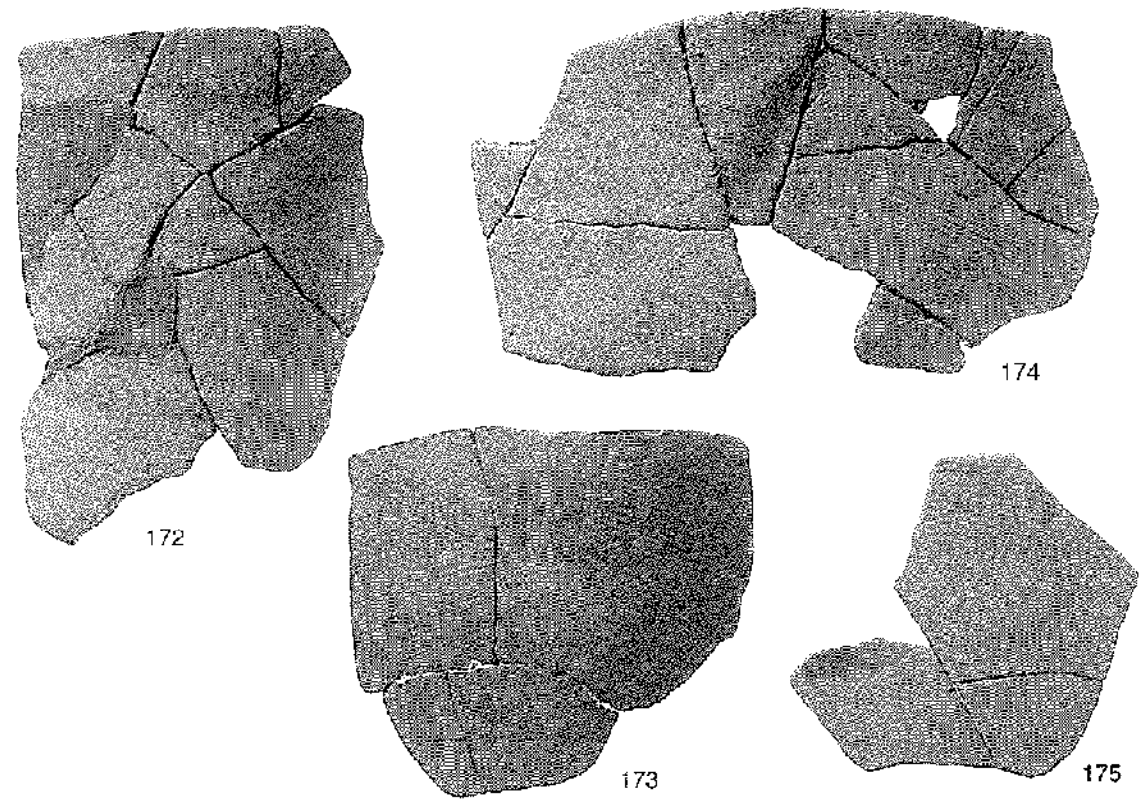
重田遺跡遺物包含層出土遺物(15) III B-a類土器



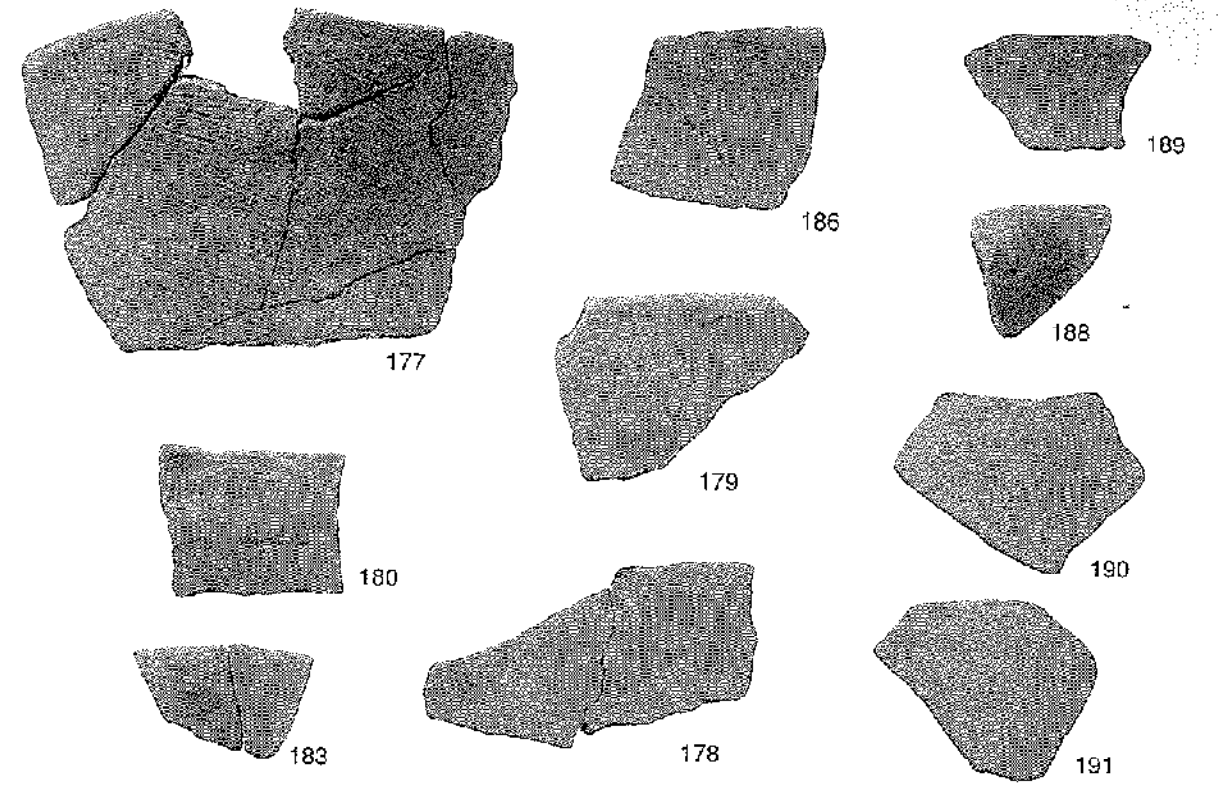
重田遺跡遺物包含層出土遺物(16) II B-1類土器



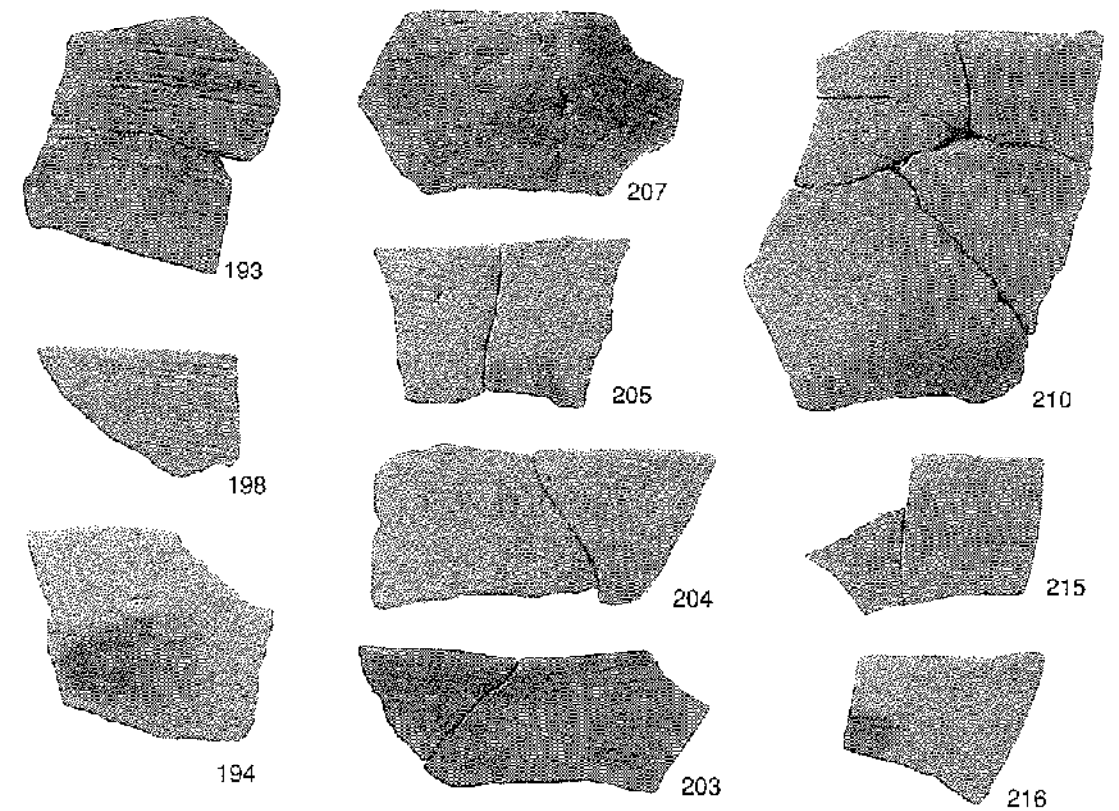
重田遺跡遺物包含層出土遺物(17) III B-1類土器



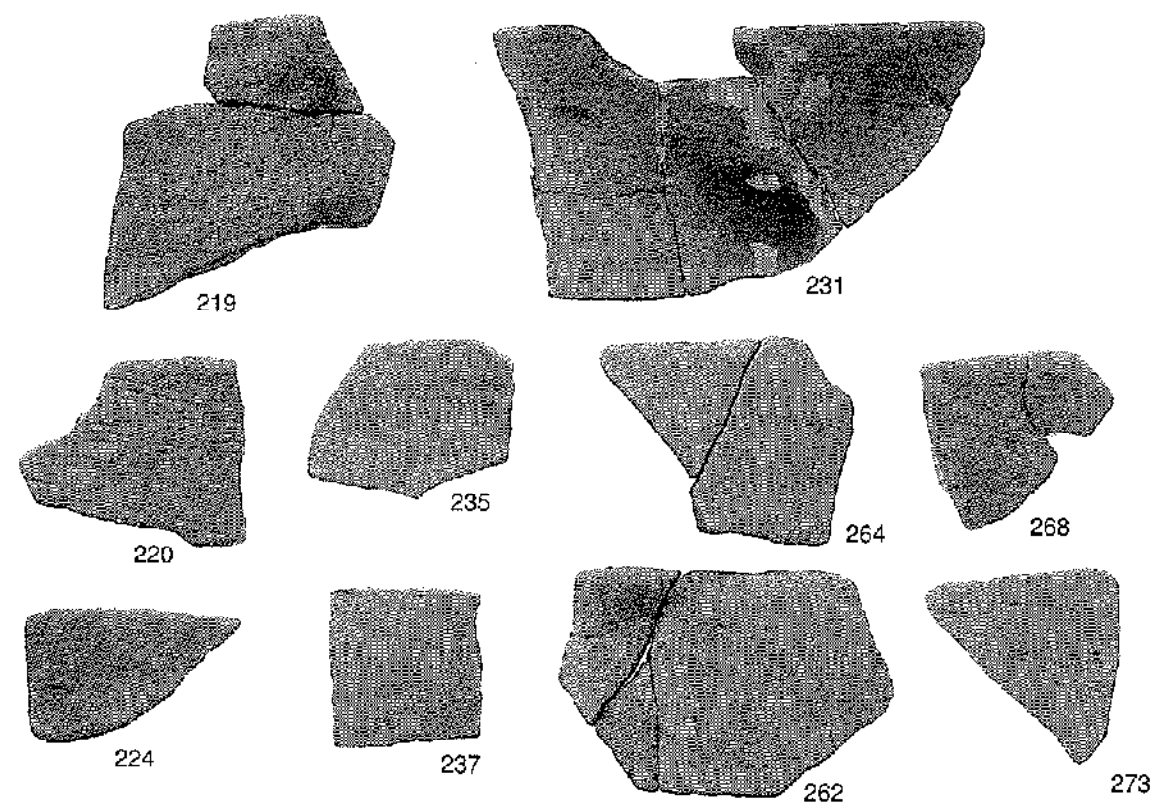
重田遺跡遺物包含層出土遺物(18) III B-1類土器



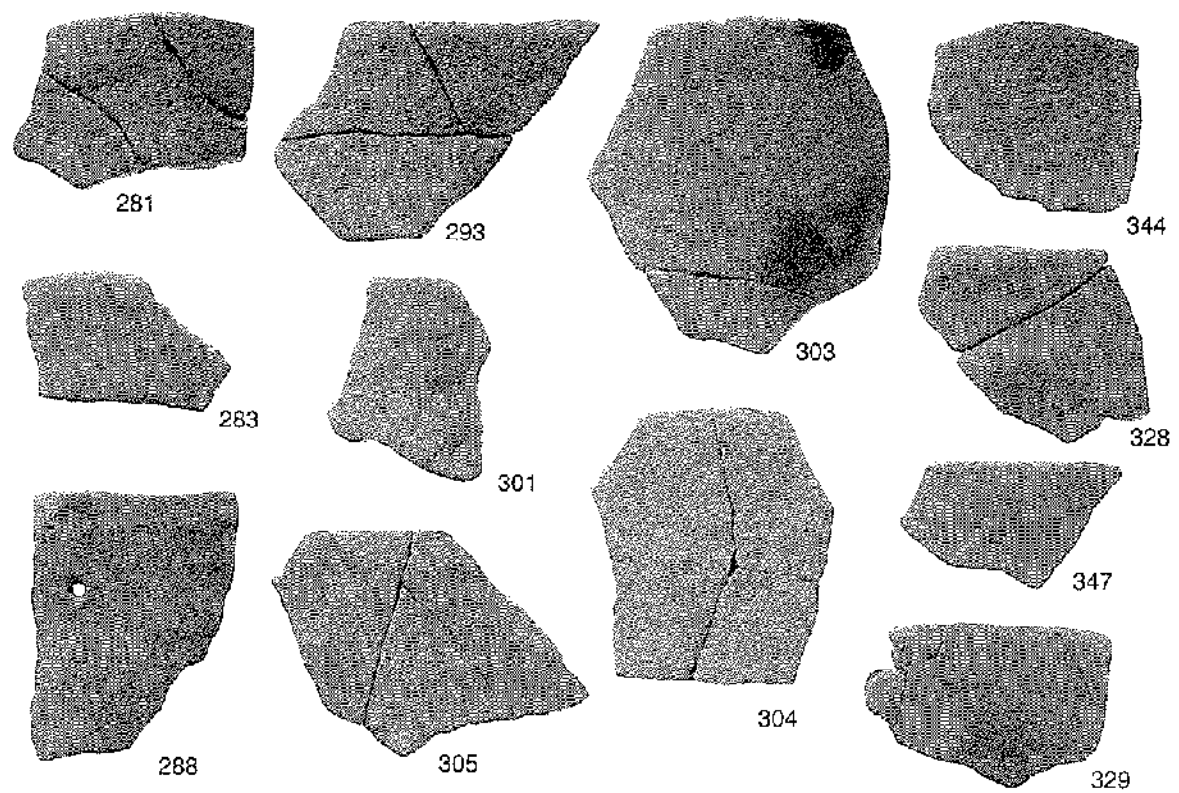
重田遺跡遺物包含層出土遺物(19) III B-2類土器



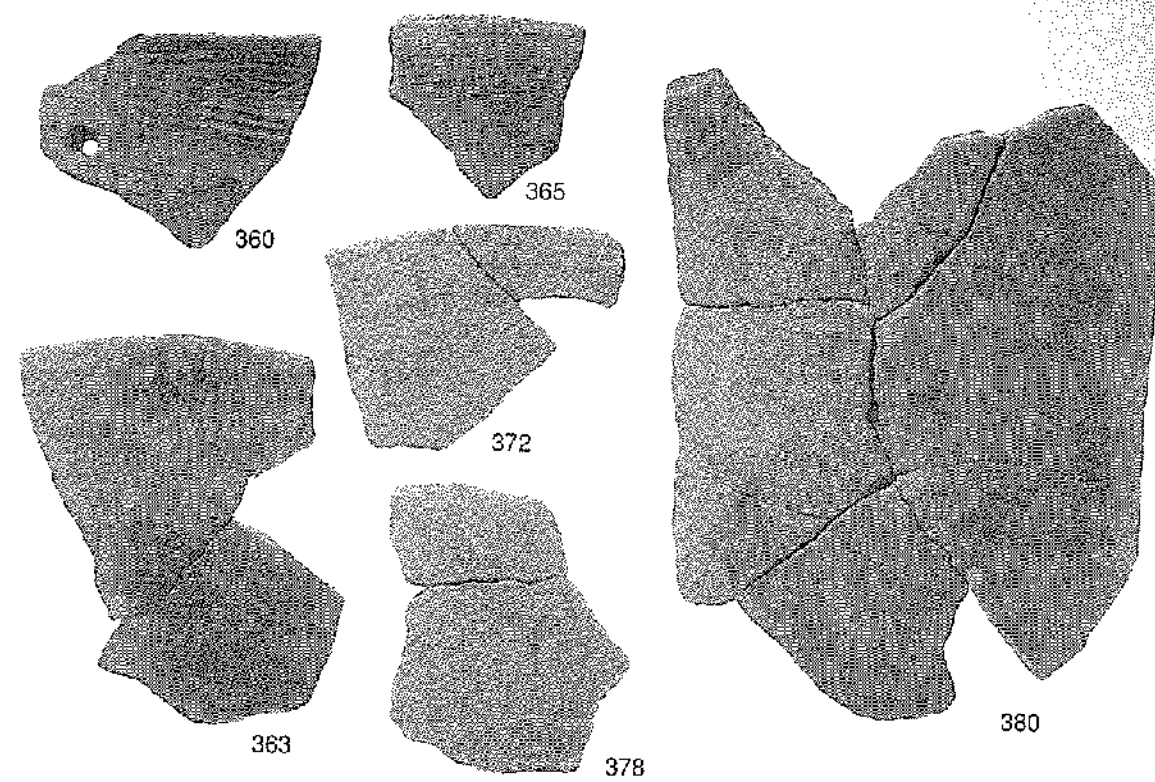
重田遺跡遺物包含層出土遺物(20) III B-2類土器



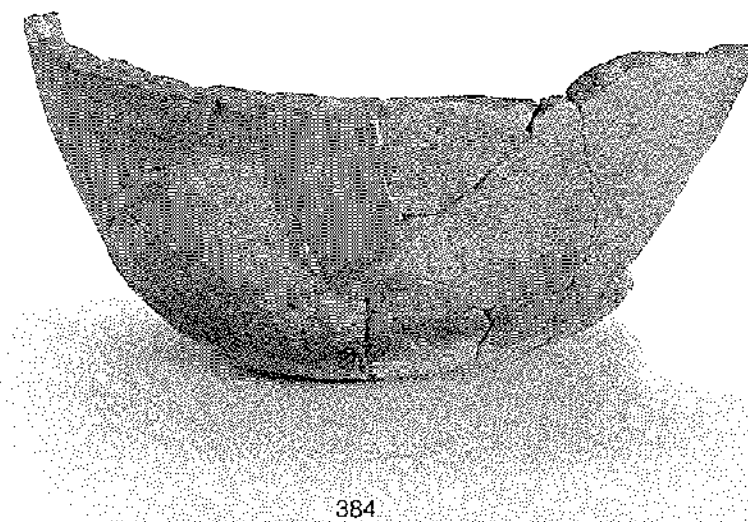
重田遺跡遺物包含層出土遺物(21) III B-2類土器



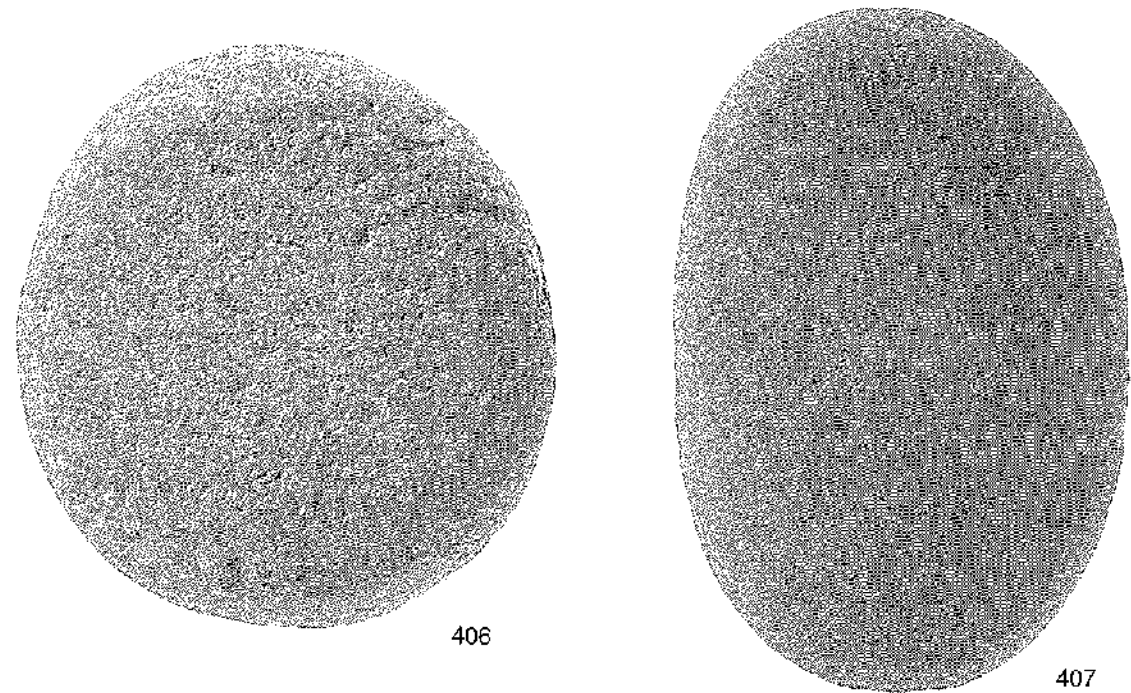
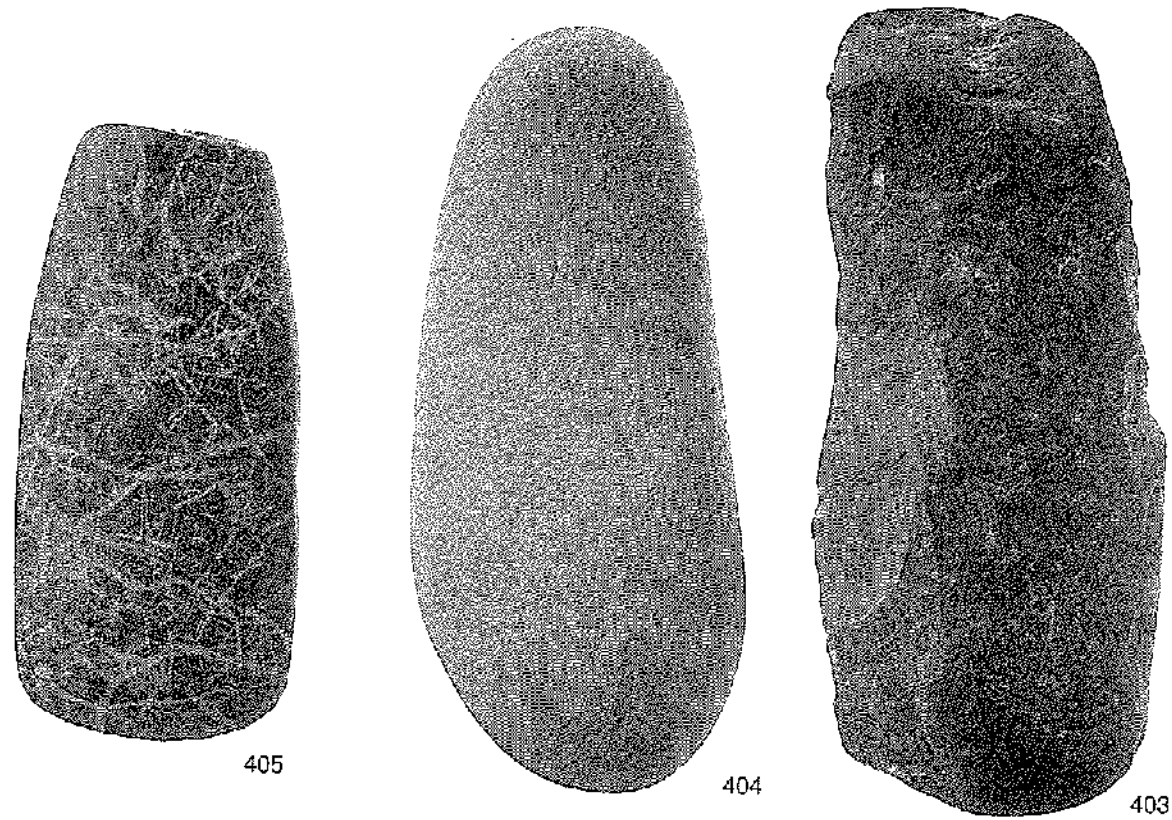
重田遺跡遺物包含層出土遺物(22) III B-2類土器



重田遺跡遺物包含層出土遺物(23) III B-2類土器、III B-3類土器



重田遺跡遺物包含層出土遺物(24) III B-4類土器



重田遺跡遺物包含層出土遺物(25) 磨製石斧・磨石

あ と が き

本遺跡は、これまで大隈半島において類例が決して多いとは言えなかった深浦式系土器が多量に出土した遺跡である。確とした遺構こそ検出されなかったものの、個々の出土遺物は資料性が非常に高く、今後の研究が大いに期待される遺跡である。しかしながら、整理期間の不足や筆者の力量不足から、報告書が十分な内容のものには至らなかったのが遺憾である。

けれども、どうかかこのように報告書としての体裁を保つに至ったのは、ひとえ鹿児島県立埋蔵文化財センター・鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島大学をはじめとする各研究機関・各関係機関、発掘調査及び整理作業協力者をはじめとする各関係各位のご教示・ご協力によるものである。特に、相模伊久雄氏には貴重な指導を賜った。これらの皆様方に感謝の意を表して、結びの言葉とさせていただきます。

垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
 農免農道整備事業垂水南2期区に伴う
 埋蔵文化財発掘調査報告書
宮ノ前遺跡
重田遺跡

発行 2002年3月
 編集 垂水市教育委員会
 鹿児島県垂水市旭町61
 ☎(0994)32-0224
 印刷 株式会社 トライ社
 鹿児島市南林寺町12-6
 ☎(099)226-0815